
フィルラントの少女王

彩遊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フィルラントの少女王

【Nコード】

N6703Q

【作者名】

彩遊

【あらすじ】

天体イウスイーリアの北方、ヤヌアフ大陸にある小国フィルラントが舞台。

不慮の事故により王の崩御という事態に見舞われたフィルラント、その次代王位を継承したのは、弱冠10歳の少女リィエルであった。国家の安寧を目指す少女王リィエルは、幼くも聡明な知性を頼りに幾多の困難を乗り越えていく。

第一話・プロローグ

『プロローグ』

フィルラント王国暦3190年、冬。

天体イウスイーリアの北方、ヤヌアフ大陸の沿岸に位置する通称「学問の聖地」がここフィルラント王国である。冬が長く続き、夏が極端に短いこの国には目立った特産物が無い。代わりに発展したのが”秘術”の研究。

王立学院には毎年多数の外国籍留学生が訪れ、難関の試験をパスした者達は世に通用する秘術学者として巣立っていく、そんな国。道行く人々も高い教育水準に支えられ、規模としては小国ながら田舎臭さを感じられない垢抜けた雰囲気と、それに加えて長い歴史と平穩に裏打ちされた穏やかな空気が漂っている。

降りしきる雪が城下町を染め上げ、この毎年変わらぬ景色にも慣れ親しんだ人々は冷え込んだ街並みにあっても寒そうに、そして活気は失わずに城下の賑わいを保っていた。その賑わいとは例えば今日の昼に食べた新鮮な魚のことであったり、どうしても嵩んでしまいう暖炉の薪の値についてであったり、近隣で起きた恐ろしい事件の話であったり、そしてそれはや諦めのついたこの国の王についてであったり。

王城に近いだけに高価な衣服を身に着ける人々も、そこに配達か何かの仕事で訪れる仕事上の男であっても、パンを焼く街角の職人であっても、路地裏でお恵みを請う哀れな者達までもが同じく思い、同じく白く宙を曇らせた。

その賑わいを真ん中から裂くように、王城の正門が巨大な木の扉をきしませて開いた。堀の向こうの門、まずその中から出てきた二人の兵士を目にし、人々はおや、と目を開いた。彼らが手にしてい

るものが右はホルン、左はラッパだったためである。

すう、と左の兵士が息を吸い込みラッパを高々と掲げる。それは王の外出を知らせる号令だった。

鳴り響くラッパの音と共に城内から響く蹄の音と車輪の音。出てきたのは見事な意匠の装飾が施された一台の馬車と、護衛につく十数名の兵士。

先導する二人の兵士の掲げた王旗は道を示し、道行く人々は足を休めて王の道を空け、礼を送る。そしてその中の、あるいはほぼ一様に皆が己の前に漂うため息の痕跡に気付き、動揺して更に一歩後ずさる光景があった。

珍しく王妃を伴って、あの放蕩王は今日はどこへ行くのやら。そんな声ならぬ声が聞こえた気配すらあって、軍馬に跨る兵士らは居心地の悪いものを感じながら任務をこなしていく。

王の列が過ぎ去った後には再び、そこかしこで聞こえてくるため息の音。列の末尾にあってそれを聞き、心の内でそっと同じく息を吐いたのは若く、そして女性にして親衛隊隊長を務めるシュナ・ミユテス・ルゼ嬢だった。彼女の体を包む秘術の編みこまれた白銀の鎧と剣は、新任に際して王から賜った逸品である。だが彼女は己の地位も、この剣と鎧もまた少しも喜べないまま、任命より一年近くを過ごしている。

王はシャルテ・フィルラント。まだ若くして放蕩に耽り政務を放棄する愚王としてしか名の知られぬ、ある意味においての傑物とされた人物。それは傑出ではなく、傑作という揶揄のみが込められた言葉だったが。ともあれ、いかなる俗物であっても王であることに変わりなく、王族が世襲で選ばれる以上誰も彼に否やを唱えることなどできない。

シュナは生真面目に馬車を見守りながら、もう一つ心の中のため息をこぼした。想うもう一人は王妃、いやあれは王族に並べられる人物ではなくむしろ、そう、妾や愛人のような。慈愛と美貌で王を癒し、しかし政治を知らず。王を疑わず、ただそこにあればよいと

いうだけの、飾り。寵姫とでも言うべきか。決して悪人でないことが最大の救いだろう。

ふう、とシュナの口元が白く霞んでしまった。どきりと胸中を慌てさせ、視線でそれを誰も見なかったことを確認して、安堵のため息を必死に堪える。が、どうやらあの白い霞は息では無かったらしい。体の下で我が愛馬が珍しい、くしゃみのような動きを見せた。その濃い吐息は霜のように白く立ち昇る。冷えてきたらしい。

気象観測官と騎士団秘術士隊の隊士、そして王立学院の学芸員は口をそろえて今年の厳冬ぶりを懸念しているらしい。北に聳える霊峰シュエレー神山の豪雪は麓に及び、牧草地に迷い出た牛の数頭が凍死して見つかったのはつい先日だったか。

馬車が道を曲がり、城下を貫く二本の大通りの一つに入る。今日の行き先はさる貴族の開く晩餐会だが、最近では珍しい普通の晩餐会だと把握している。普通でないものがどういった内容か、女性であるシュナにはそれを思い出すことが苦痛でしかなかった。

つまり、恐らくこれは滅多に外へ出向かない王妃の機嫌取りだ。常日頃柔らかく微笑むあの王妃も、夫にわがままの一つも言いたくなることもあるのだろうか。

馬車の速度が上がった。この大通りの中央はほぼ馬車専用であり、かなり遠くまで続く一直線と車輪揺れを考慮された長大な石畳を馬車で駆け抜けるのは、目抜き通りの華やかさが流れるように窓を飾り、貴族以上の身分の者達の娯楽の一つにもなっていると。同じ貴族であるシュナは武家の出であり、その楽しみとやらに興じたことも、そのつもりも無いが。

上がっていく馬車の速度に合わせてシュナは短く号令を発し隊列を整えると、軽く手綱を走らせて馬を走らせ始めた。

前方に高く、嘶く声。

シュナは一瞬だけ手綱に落としていた目線を急いで戻した。

何が、そう言おうとして目を見開いた。馬車を引く四頭の馬が、御者と牽引する左右の兵士の抑えを振り切って駆け始めたために。

それは何故か、シュナはこれを即刻理解していた。いや、シュナだけではない。

雹が降っていた。通り雨のようなものだろう、たまに雪に混じって大粒の雹が降ることはある。シュエレー神山のもたらす気流が生む、空の気まぐれ。だが、それがよもや今の時に限って。

背を乱打された四頭の馬は驚いたのか、痛みに悶絶したのか、ともあれ大きく蹄を振り上げると次の瞬間には全力で駆け出してしまったのだ。

その場の全員が蒼白になった。御者は馬車を制しきれず速度は更に上がっている。

「追えっ!!」

シュナの命令でやっと、啞然としていた兵士らは馬に鞭を入れた。だが四頭立ての馬車は速い。既に兵士らは取り残されており、暴走した馬車は速度を緩める素振りも見せずそれどころか更に加速して彼らを引き離す。当然、単騎の兵士らの速度を上回るものでなくとも、今から追って追いつけるまでに何十秒を要するのか。

そして次の瞬間、この寒さと雪で凍結した地面が馬車の車輪を捕らえ、その挙動を乱した。絶句するシュナら兵士達。眼前で横滑りし、更に僅かな路面の起伏によって跳ね上がる車体。

全ての光景がゆっくりと、目に焼きついていくようだった。

「陛下!!」

悲鳴に近い叫びだった。

第一話・「リエル・タナック」

『リエル・タナック』

三カ月後。フィルラント王国暦3191年、初春。

国土の西に延びる平原はどこまでも白く、丘陵の起伏と降り止まぬ雪によって果てしなく地平の果てまで続くかのような景色を見せている。周囲に民家は無く、右手に見えるシュエレー神山とたまに雪原に顔を出す灌木、そして標として植樹された等間隔の杉並木だけが道行く者を迷わせずに居させている。

歩く三人の男はどれも疲れた顔で、朝からかけて既に昼下がりで休むことなく足を運んで来たらしいが時折、その歩みが止まりがちになっている。先導する二人は兵士か、帯剣しており後方でぜいぜいと喘ぐいま一人の男は錆びた（とはいえ高価であることは変わらぬ）眼鏡をかけている。医者か、学者か。

「まだ・・・着かない・・・のですか・・・」

「・・・この雪ですからな、先生。レムダットを飛ばせれば良かったのですがね」

「何を言う。この天候で飛竜を飛ばしてみろ、諸共に凍死して落ちるぞ」

「なら、騎鳥は・・・」

「・・・新兵、お前移民から入隊したな？」

「ええ、そうです」

「フィルラントに騎鳥は居ない。西門の守護聖獣アールカインが巨大鳥だから、敬意のため使わんだ」

「なるほど・・・」

二人の背後で眼鏡の男が笑った。

「色々と決まりがあるものですな」

「・・・一応、今のは機密です。公然ですがね」

「なるほどねえ」

「先生も典医免状を持つ医者なら同じくするものもおありでは？」

「まあ、そうですね。もっとも医術の秘密などあってもよろしくは無いと考えているもんですよ」

これには兵士二人が笑った。さもありなんと頷く二人は、丁度一つの丘を乗り越えて足を止めた。僅かに遅れて医者 of 男もそれに追いつく。

「見えましたな」

年かさの兵士が息を吐いて眺める先、黒く広がる雑木林の手前に一軒の小さな家が見て取れた。振り向くとフィルラント城下町は細部を見出せず、雪原に落ちた一枚の巨大な影のようにしか見えない。それほど街から遠い場所になる。

もう一度三人は林に寄り添うようにして建つ家を見た。周囲は平原とはいえ起伏の多い丘陵地で、雪が降れば直ちに道も閉ざされ馬も走らせられない。陸の孤島のような場所だった。が、証言によれば確かにあそこには人が住んでいるらしい。

そう、彼らは探していたのだ。

「教会の名簿に名前の無い子供・・・いると思いますか」

「三ヶ月を費やして全国民を調査した。もはや可能性があるならば名簿に記載のない私生児くらいだ」

国王、シャルテ・フィルラントは若干32歳にして王妃と共に事故のため逝去。放蕩王と呼ばれた国王の死を悼む声は哀れなことに少なかったが、それ以上に懸念の声が大きかった。二人には子がいなかったのだ。

フィルラント王家は代々直系の血筋が王位を受け継ぎ、慎ましくも三千年という長き歴史を支えてきた。これはここフィルラント王国のあるヤヌアフ大陸においては2番目に長く、天体イウスィーリアにおいては歴史上3番目の長さを誇ることになる、稀有な国家としての証であった。軽々に断絶を受け入れるには余りに惜しい。

シャルテ・フィルラントの先代は高齢でシャルテを授かったこと

もあり既に鬼籍に入っており、他に血縁も無い。だが始めは後継者の存在を危ぶむ気配も薄かったのだ。それは何より、シャルテ国王の放蕩ぶりがそうさせた。

まず王国政府の大臣らは、かつて王と関係のあった女性の内から所在の明らかな者全てを訪ね、隠し子の存在があるはずと踏んで彼女らに問うた。だがその考えは外れる。

「陛下との秘め事の際、必ずこうお尋ねになられておりました。月のものはあるか、と」

下品な言葉故に頬を染める彼女らを前に、使いの者と血統を判別する秘術士らは愕然としたという。あれほど政務を放棄し王族としての義務を疎んだと思われた先王も、超えてはならぬ一線だけは守ったのだ。

長い治世を敷く王族の義務として最たるものの一つはやはり世継ぎを残すことにある。それもなるべく家柄や品格というものがあればそれに越したことは無いが、やはり妾腹に後継を依存する場合もある。放蕩で名の知れたシャルテ王であれば何処かにそういった子供があってもおかしくはないと思われていただけに、遺された国民としては彼の最後の意地が嬉しくもあり、かえって有り難迷惑な話でもあった。

居ないものなら仕方あるまいと、政府は人員を動じて教会と協力し、国民であれば必ず登記のあるはずの生誕名簿のリストに沿ってしらみつぶしに探した。が、見つからない。ここにきて焦りを覚えた政府は王の世継ぎに限らず、あるいは過去の王族から枝分かれした血族の存在を疑い、全ての国民に対して調査を義務付けすらしめたのだ。

王も王なら臣や民も似たものだったというべきか、はたまたあの王に感化されていたのか。調査の結果が示されるに至って彼らの焦りはやっと頂点に達した。王族の血統は名簿に記載された、王国三万の民の中からは見つからなかったために。

王の血統はこのフィルラント王国の守護神シュエレーによって保

障されている。故にその判別のための秘術が存在し、偽ることもあり得なければ判別を違えることも無い。

無論、教会の名簿に籍の無い者、例えば浮浪者や孤児などについても徹底的に調査は行われた。だがやはり見つからず、諦めの声すら出始めていた所に一つの情報が入る。曰く、西の国境門に程近い林の近くに、優れた秘術使いの母子が住んでいる。素性は知れず名前も誰も知らないその親子は、しかしここ三ヶ月ほどは姿を見ていない、と。

話の出所は複数で、街外れに住む人々ほど彼女らと出会った、あるいは何かしらの仕事などで関わったことがあるという。ともあれ、調査団は雪降る西の平原に人員を割くことにしたのだった。

「火が点いていないな・・・？」

そうして調べに来たこの家だが、人が生活している気配がどうにも希薄である。門扉の前に部下と医師を残して、年かさの兵士は小さな家の周囲をぐるりと歩いてみることにした。

雪がやや窪んだ一帯は畑か何かだろう。薪が積んであったが、手斧は半ば錆びていた。鶏小屋が一つあったものの、中は空。家は頑丈そうな作りに見えるが、雪かきを行った形跡も無いために、屋根が破損する寸前にも見える。

一見すれば廃墟である。が、年かさの兵士は家の裏であるものを見つけた。

「・・・墓か」

コの字を立てたような形は教会のシンボル。太い木の枝で組まれたそれが雪から突き出していた。地面は雪に埋もれて見えないが、兵士は自然とその場所を迂回して歩いていた。

「・・・」

胸騒ぎを覚え、彼は急いで家の正面に戻る。部下と医師が寒そうに待っていたところに出くわすやいなや声をかけ、正面の扉を塞ぐ雪をどかすべく指示を出した。

「どうしたんです」

「中に誰か居るかもしれん。それもかなりマズい状態で」

道具が無いため、庭を囲む塀板を失敬して雪をどかしていく。背後に控えた医師は持参した鞆を開き、一枚ずつ丁寧に丸められた小さな紙筒を幾つも取り出した。そうこうする内に雪が取り除かれ、扉が動くようになる。

年かさの兵士はノックもせずに扉を開け、中へ入っていった。部下の兵士、医師もそれに続く。

「どなたかおられますか！」

問いかけに返事はない。家の中は真っ暗で、暖炉にも火が灯っていないため酷く寒い。医師は持ってきた紙筒の一つを開くと、小さいがしっかりと石造りの暖炉にまだ薪が残っていることを確認し、それを放り込んだ。

「アル・アंक（燃えよ）」

短い秘術の公式を唱えると、紙に記された秘術の陣公式の紋様が反応して瞬時に炎と高熱を発した。暖炉に火が入り、部屋に暖かな光が満ちる。

「奥にもう二つ部屋がありますな」

寒そうにしながら医師は兵士に告げた。明かりに照らされ、二つの扉が見える。今居る場所は玄関兼台所のようで、暖炉の脇にはかまどと鍋など調理器具が置いてあった。ただし、食料は一切見当たらなかったが。

若い兵士が玄関に近い扉を開けたが、そこは物置だったらしい。

医師も目を通したが、珍しいことに多量の書物や秘術に用いる器具なども保管されていた。

「秘術士・・・？」

「ですかね」

これほど貧しいのに？という思いがその感想には含まれる。これだけの書物や器具、金額に換算すればこの家が庭付きのままもう2、3軒は建つのではないだろうか。

疑問は年かさの兵士の声で掻き消えた。

「おい、君っ！」

隣の部屋に入った兵士が声を上げた。驚いた部下の兵士と医師が駆けつけると、そこはやはり薄暗いがベッドが置いてあることから寝室だと判別できた。

問題は、二つあるベッドの一つに少女が寝ていたことだ。それかなり衰弱している。

「！！」

医師は無言のまま兵士二人を押しつけるように少女の傍らへ動く、布団の中からその細すぎる腕を取り出し脈を取る。

「・・・湯と、明かりを！」

「承知した。おい、鍋に雪を放り込んで火にかけるんだ」

「はいっ！」

「ランプが無い・・・ああ、これか？」

ばたばたと走り出ていった部下とは違い冷静な年かさの兵士は、部屋の壁に設置された四角い箱のようなものを見つけた。秘術を利用した照明器具である。その下部にある文字盤らしきものに触れると、柔らかな光が箱の内部から現れた。

「これはいかん、重度の栄養失調だ」

「どうします」

「固形物は受け付けまい。これを・・・」

医師が鞆から紙の包みを取り出す。やや厚みのあるそれは、濃い緑色の薬草等の塊だった。よく乾燥しており、端からぼろぼろと欠片が落ちてくる。

「半分ほどをコップに入れてぬるま湯でよく溶かしてください」

「わかった。そちらはどうする」

用意のいいことにコップも持参していた医師は、薬草を包みと一緒に兵士に渡すとすぐに次の行動に移っている。取り出したのは小さなガラス瓶に入った、やや赤みがかった液体だった。

「こう衰弱しているは秘術でもどうにもなりません。これは竜の肝油です。これを少量飲ませ、後は体に塗ってやれば体温と血行が維

持できる。が、一刻を争います」

「・・・よし、任せます」

おそらくかなり高価な薬品だろう。年かきの兵士も竜の肝油などというものを見たのは今が初めてだったし、聞いたことも無かった。それを医師は惜しげもなく使っていく。

数滴を飲ませた際、少女は小さく咳き込んだ。その時僅かに、彼女の目が開く。

「・・・・・・・・」

「大丈夫、大丈夫だよ」

医師は優しく声をかけ、無残に痩せ衰えた少女の体に赤い油をすり込む様に塗っていく。少女の体に体温が戻り、赤みと水気がほんの少しだが戻る。

服を着せなおし安静にさせていると、少女は落ち着いたのか薄く目を開き、健気にも力なく小さく微笑んでみせた。どうやら礼を言っているらしい。医師は胸が詰まったような気分で笑みを返す。丁度その時、扉が開いて兵士二人が戻ってきた。大きな鍋と湯気のたつコップを持って。

「さあ、飲んで。苦いけれど元気が出るよ」

コップの中はとろりとした濃緑色の液体で、見た目も匂いもかなりのシロモノである。が、少女はさほど抵抗も無くこれに口をつけ・・・流石に眉をしかめてはいたが、ゆっくりと飲み干した。

「湯にこれを」

医師が取り出したのは固いパンだった。ああ、と得心のいったらしい年かきの兵士も、自前の荷物を開いて同じようなパンを一つ、それと干し肉のようなものを取り出す。

共に携行食料だ。栄養バランスを考えて王立病院直属の工場で製造されるため兵士も医師も同じものを持っていた。そのまま食べることもできるが、こうして水などに溶かして粥のようにすることもできる。見た目や舌触りはシチューに近い。

鍋が出来上がると部屋にほんのりと温かみのある湿気とよい香り

が充満し、少女は空腹を思い出したのか起き上がった。医師と若い兵士がその背を支え、ベッドの上に座らせる。

「遭難時用の装備が役に立つとは」

「備えあれば憂い無しですな。さあ、お飲みなさい。熱いからゆつくりと」

器に取り分けた粥を医師が木のスプーンで一口ずつ少女に与えた。先ほどの薬草スープに比べると塩分や糖分が多いため飢えた体には重かったのだろうか、最初は上手く飲み込めずむせてしまうこともあった。それでもなんとか胃に流し込むようにして食べる内に、少女の肌には明らかに健康な赤みが差し始めた。

「今日はここに泊まりですな」

「はい。調査のほうは明日、あの子が元気になってからにしましょう。今日はもう無理です」

「了解した。して・・・しかし、どのくらい危険だったのです？」

「今が日暮れ時ですか。この時間まで持たなかったかもしれない。それくらいぎりぎりでしたよ」

「そうか・・・それは、間に合って良かった」

若い兵士に暖炉の番を任せ、年かさの兵士と医師は台所の椅子に腰掛けて先ほどの粥を食べながら話した。

少女は腹が満たされて安堵したらしく再び眠りにつき、それを見て安心した一同は日が暮れて雪も降っていることもあって外に出られず、この家で一夜を明かすことにしたのである。

本来受けてきた任務である、少女の血統の調査もある程度の時間彼女が起きたまま拘束せねばならないため体力の消耗を鑑みて今は実行できない。

「・・・ここに、一人で暮らしてるんですかね、あの子」

若い兵士がぼつりと言った。だがその中には哀惜よりも、不思議そうな響きが強く含まれている。

ふむ、とその声に誘われて年かさの兵士と医師も部屋の中を見渡

した。台所には大きな机と、椅子が二つ。食器や外出用のコートも二つずつのものばかり。あの少女以外にも誰かがここに住んでいる、あるいは住んでいた、のは間違いない。

「家の裏に墓が一つあった。誰のものか知らないが、教会の御印は恐らく彼女の手製だ。形が歪だったな」

「一体誰の……親はどうしているんだろうか」

「……追って聞き出しましょう。先生、あの子についてやってくれますか」

「そりゃあもちろんだとも。ああ、だが君らは？」

「我々は交代で火の番をしますよ。ずっとここに居ます。何かあれば声をかけてください」

わかった、と医師は寢室のほうへ移動した。一晚中脈を計ったり容態を診ることになるだろうから、交代で仮眠を取れる兵士よりむしろ医師のほうが過酷な一夜になる。それを考えると頭が下がる。

年かさの兵士は口元をきつと引き締めると、若い兵士に交代の時刻を告げて早々に仮眠を取ることにした。眠くも無い時間から睡眠をとるコツを、若い兵士はまだ体得していないためである。

（あの墓は恐らく……いや、どの道明日になればわかることか）

屋根の雪が落ちる音が聞こえる。彼は机に突っ伏して体の力を抜いた。

明け方、医師は徐々に朦朧としてきた意識をどうにか持ちこたえさせながら、もう何度目かになる脈取りを行った。少女の手首は余りにも細く、しかし確かな鼓動を指先で感じる度にどうにも居たたまれない気分になる。たった一人雪に閉ざされたこんな辺鄙な場所で飢えて死にかけるのは、一体どれほどの孤独と絶望だろうか。

少女は、整った顔立ちをしていた。浅く銅色を帯びた金色の髪は肩まであるが、くせ毛なのかふわふわと肩口でカーブを描き踊っている。肌は多少陽に焼けているが子供らしいふっくらとした滑らか

さがある。きちんと食事を取り体格が戻ればきつとかなりの美少女になるだろう。まるで過保護に育てられた貴族の娘のような・・・」

「・・・似て、いなくもないが」
あの放蕩王に。少なくとも髪の色はほぼ同じ。前王は赤みの無い爽やかな金髪を持っていたが。

「・・・ん・・・」

少女が身じろぎをして、小さく息を吐いた。目が覚めてしまったか。重そうに瞼が上がり、濁りの無い美しいグリーンの瞳が医師を見つめた。

唇が僅かに動き、かすれた吐息が音をたてる。少し待ちなさい、
と言い置いて医師は傍らの机に置かれた水差しからコップに昨晚沸かした白湯の残りを注いでやる。室温ほどに冷めたとはいえ、かなり冷たい水で少女は喉を潤した。

「・・・あ・・・」

「事情があつてね。城の使いとして来た。私は医者だ、安心していい」

「・・・」

少女は何かを考え、目を一度伏せた。

「わたし・・・お客様におもてなしもできず、申し訳ありません。
今お茶を淹れますので・・・」

医師は驚いた。病人も同然に痩せ細った子供が何を言うのか。

「そんなことはない。今は体が持ち直すまでゆっくり休むんだ。後で話をしたいが、まだ朝早い。もう少し眠っていなさい、いいね？」

「・・・はい」

まだ何か言いたげだったが、言うとおりの少女は目を閉じた。いい子だ、と呟いて医師は部屋を出る。若い兵士が机で寝息をたて、年かさの兵士は暖炉の前で薪の火をじっと見つめていた。

「一度目が覚めたようですね」

「ええ」

医師も暖炉前の椅子に腰掛け、両手をかざした。じわりと温かな

空気が両手を包む。

「客人をもてなせず申し訳ないと言われました」

「なん・・・そりゃあ、驚きですな」

「よほど育ちがいいのか、教育がいいのか。一端の貴族の令嬢のようだと」

「・・・・・・・・金髪でしたな」

「・・・・・・・・ええ」

よもや、と思えもする。まるでおとぎ話にある亡国の王女のようにだ。

「日が昇ったら食事を取らせましょう。その際に話などしてみるのも」

「そうします。そうそう、先ほど少しばかり外に出てみましたよ。雪は止んどりました。で、これを」

そう言って彼は麻の袋を開いて見せた。中からは小ぶりだがよく太ったウサギが二羽と、樹の幹に生えるキノコ。

「狩りを？この雪の中？」

「出は北部の農村でしてな。雪中の狩猟なら子供の時分から。今でもたまにやっとなるんですがね」

「大したものですよ。なら、今の内に捌いてしましましょう。パンの残りと合わせてシチューにでも」

「いいですな」

やはり滋養を摂るなら新鮮な食材と温かい料理に限る。あの薄いシチューでは足りまいと気を回したのだろう。兵士の行動力に医師は目を見張る思いだった。年齢ならそう変わらぬ、壮年の二人。

「名を、まだ伺っておりませんで。私は・・・ああ、そちらはご存知でしたな」

「ははは、そうですなペレッサ先生。自分はゼルガ・ハバト、弓隊五十人長です。あっちの若いのがリュゲル剣隊士」

「なんと！」

フィルラント王国軍の部隊編成は十人長、五十人長、百人長、千

人長を部隊のまとめ役に置くが、五十人長とはそれなりに実力を認められた者が就くことが多い。貴族が多いのはそれより上、百人長などになる。それはともかく、ペレッサ医師の持つ典医免状は城内組織においてそれなりの地位を確保するものでもあり、兵団で言えばまさしく五十人長と並ぶ。

「それは奇遇。言ってくださればいいものを」

「まあ、言うほどでも無いと思ったもので。さあ、それよりウサギを料理してしましましょう」

小皺の目立ち始めた男二人は談笑を交え、作業にとりかかった。若い兵士、リュゲル剣隊士がその気配に起き上がり手伝おうと立ち上がる。陽光が窓から差し込み始める時刻のことだった。

ベッドに起き上がった少女は、年齢を10歳だと言った。同年代の少女と比べても、恐らく彼女は小柄なほうだろう。少なくとも訪れた男三人は7、8歳ほどだとすら見ていたため、やや驚きがあった。

「弱っていたところを助けてくださって、本当にありがとうございます」

丁寧な指を揃えてお辞儀する少女の態度はむしろそれなりの教育を積み終えた一角の淑女にも思えたものだが。

「持ち直して本当に良かった。峠は越えたね」

医師の言葉に、少女はもう一度恐縮したように頭を下げた。

「本当に、何とお礼を申せばいいか・・・」

それを聞いてますます、彼らには少女の年齢が分からなくなる。

少なくとも彼らの知る10歳の少女で、たった二言とはいえこれほど礼儀作法の習熟を覗かせる者がいない。

「ここに一人で？ 親か兄弟は」

「いえ、あのう・・・はい。今は」

「・・・・・・今は、とは」

兵士ゼルガは既に察しつつも、任務の一環として質問するしかない

かった。

「一人、母が。三ヶ月前に死んで、それからわたし一人なんです」
伏し目がちに話す少女の声には湿り気があった。たった三ヶ月で、唯一の肉親を亡くした10歳の少女がとても気持ちの整理がついているとは思えない。ゼルガはそれ以上の追及をせず、そうか、一言漏らすのみだった。

「あとう、お城の使いとお聞きしました。どういうご用件でしょうか？その・・・見ての通りですから、税金を納めよというのであれば、隣の部屋のもので代えていただければ・・・」

「い、いや！そういうことではない。そもそも孤児であれば税金は免除されるはずだ」

「そうですか。よかった」

「・・・・・・・・・・」

男たちは目を合わせた。

「すまないが、名前を聞かせてもらえるだろうか。君と、君のご両親の名も」

少女は再び、今度は少しだけ目を伏せたがすぐに顔を上げた。

「わたしはリエルです。リエル・タナック。母はミュシエ・タナックです。父は知りません。母姓が無いのも聞かされていないので、よくわかりません」

「タナック・・・？」

反応したのは医師だった。

「ずっとここで？」

「はい。わたしが生まれてからはずっとここに住んでいたと、母が。母も孤児で、わたしが生まれる前は王立学院の寮で奨学金を受けて生活していたそうです。父とはそこで出会ったそうですけど・・・」

今から10、または11年前といえば、シャルテ王は21、2歳になる。当時彼は王立学院の修士検定試験に単位が届かず、留年中だったはずだ。卒業時年齢は23歳と記録がある。なお、これはむしろ一般的な学院卒業生の中では比較的普通か、やや早く卒業でき

たことになる。入学も卒業も難度が高く、その後学芸員として残留する者となれば初期入学生の一割を遥かに下回る。途中退学者のほうが卒業生より多いくらいだ。あのシャルテ王は、決して愚鈍な王ではなかった。

そして医師と、兵士ゼルガも思い出す名前があった。

「十年前・・・タナック・・・？」

「ミュシェ・タナック・・・ああ、やはり覚えがある！学院史上最高の頭脳と謳われた才媛だ。いつからか名を聞かなくなったが、こんな所に居たのか・・・」

「では、シャルテ王とは同期の・・・」

「そうなりますな」

怪訝そうな顔で見上げてくる少女。その手を取り、医師と兵士はここに來た理由を告げた。

「三ヶ月前、国王陛下が崩御なされたことを知っているかい？」

「え・・・いいえ、そうなのですか」

「そう。それで、困ったことに陛下には御世継ぎがいらっしゃらなかった。だがその、陛下は方々に愛し合った女性が多くいてね、それでどこかに陛下の血を引くお子がいるのでは、と探しているのだよ」

「はあ」

「これから君に秘術を用いて、その血統を調べたい。よいかね？」

少女、リエルは状況をよく飲み込めていないらしい。つまりどういうことなんだろう？と首を傾げるその姿。賢そうに見えて、俗世の些事に疎いとはまるで修験者のような子供だな、とゼルガは内心にて一人ごちた。

「隊長、ミュシェ・タナックとは？」

リュゲル隊士の問いは素朴ながら当然のものだった。振り返ってゼルガは当時を思い出すようにしながら答える。

「知らなくて当然だが、当時・・・10年ほど前、王立学院にとんでもない天才がいると話題になったことがある。入学は18歳の成

人を過ぎることも珍しくない難易度の試験を弱冠15歳で通過し、在学中既に知識量では教授の面々ですら足元にも及ばず、教育過程を早々に切り上げて学芸員並みの待遇で秘術の研究に参加していた、そういう女性だ」

「は・・・はあ。とんでもない人なんですわね」

「だが入学から3年後、彼女は卒業検定試験を受け、その後学芸員になる道を捨てて姿を消した。入学試験も卒業試験も首席合格だったそうだよ。そんな女性が何故唐突に、それも前途ある将来を捨ててしまったのかが不思議でならなかった」

「・・・あ、まさか・・・」

やっとその可能性に気付いたリュゲルに、ゼルガはまだ言うな。と目で制した。まだ結果は出ていない。

ペレッサ医師はリエルの手に一枚の紙片を持たせた。秘術の公式を陣の紋様で記した符であり、この場合これから用いる術を簡略化するための小道具として使用する。そしてもう一つ、鞆から取り出したのは小さなガラスの瓶に入った何かの灰である。これも同じくリエルの手に持たせる。紙片は左手、瓶は右手に。

「成分の検出を行う術に似ていますね」

「・・・よく、知ってるね。誰から？」

「母から・・・母は、色んなことを教えてくれましたから。秘術や、それ以外にもお勉強を」

「そうか・・・」

類似する術はあれど、今回の秘術を用いるのはたった一つの状況しかあり得ない。人間が己の根拠を確かめ安堵すべく神々から授かった術は、ある暗号的な改変ともう一つ、王の体の一部（今ここでは王の遺灰）を用いてその血統の所在を識別するためだけに機能する。茶毘に付された王の体はこの調査のために、遺灰だけは集めて分配された。

ペレッサ医師の口から秘術の公式に用いる言語が流れる。万物それぞれに固有の、原初の名が。それら組み合わせをもって秘術の公

式とし、術の完成をもって効果を発揮する。

リエルの手の中で紙片が熱を帯びたようだった。持てない程ではないが、リエルは神妙な面持ちでそれを見つめた。

「熱くなった？」

「はい、少し」

「・・・これを。右手を出して」

「はい」

医師の指示に従い、リエルは右手を差し出す。その手首に、瓶の蓋を開け少量の灰を落とす。

ぴくん、とリエルの体が跳ねた。

「まだ、そのまま」

見た目はただの灰にしか見えず、ただこの光景を眺めているだけの兵士二人には何が起こっているのかわからない。

ペレッサ医師はリエルの右手首の灰に自分の指を押し付け、手のひらの中央へまっすぐ白い線を引いた。更にリエルが僅かに呻く。左手に持った紙片を思わず握り潰し、くしゃりと音がした。

そのままの体勢で、医師は首に提げた教会のシンボルを外すとリエルの右手に、灰に重ねて持たせた。

「イラ・メアロ・セス・カフ・シン（神の名において祖を明らかにすべし）」

調査を始めて三ヶ月。医師も、兵士らもこの秘術の公式を何度耳にしたことか。その度に落胆し、焦りを募らせた。もう見つからないものと諦めていたのだ。

その眼前で、リエルの肌に引かれた灰の一線が血のように赤く染まった。リエルはそれが熱湯であるかのように軽く悲鳴を上げ、呻いた。

医師と、兵士らの驚愕はそれどころではなかったが。

「・・・これは」

丁寧に赤い灰を布で拭い取ったペレッサ医師は、目の前で起きた現象が何を意味するのか知っていて、だが信じられないという顔を

していた。

「……リエル、聞いてもいいだろうか」

「は、はい」

灰が取れて熱さも無くなった手を不思議そうに見ながら、リエルは急に怖い顔を始めた医師にたじろぐ。

「君の母君が亡くなった日、その日にもしかして、雹が降らなかったかね。時刻は昼より少し前、雪も降っていた」

リエルは顔を上げ……そして、思わず涙を一粒落として下を向いた。

「……はい。どうして御存知なのかわかりませんが、丁度その時に母は……息を引き取りました」

「……」

すまない、と医師はリエルの手を握る。彼女はこれまでにあくまで理性的な態度を見せたが、それでも今は年相応に感情の起伏も見せた。涙が溢れ始め、止まらない。

「雪が降っていて、あまり外に出られなかったんです。吹雪になると帰り道が分からなくなるから。お薬を買うお金が無かったから薬草を摘みに行くはずだったんです。裏の林は奥まで行くと沢があつて、風邪にも効く草が生えているから。お母さんは無理をしないでいいと言ってたけど、もう起き上がることもできなくて。パンを買うお金もほとんど残ってなくて、木の実とキノコを食べていたんです。でもお母さんは、どんどん痩せていった」

涙と一緒に言葉も溢れた。三か月分の孤独と悲しみを乗せた言葉が。

「雪が、降り止まなくて。でもお母さんは風邪をひいてて、だからせめて何か食べさせてあげたくて。でも雹が降ってきて、そのせいで外に、出られなくて……雹が、どうして……そしたらお母さんが、おいでって、言って……頭を撫でてくれて、それで……それで……」

もう、それ以上言葉が出なかった。幼い嗚咽に肩を震わせ、ぼろ

ぼろと涙をこぼして泣いていた。

兵士らは肅然とし、ペレッサ医師も同情に目頭を熱くして少女を見守った。王国の目の行き届かぬ場所に、こんな不幸があるものと理解した。少女の母がこんな場所に居を構えたのは恐らく理由あつてのこと。それほど賢い人物が何もこんな不便な場所に暮らす必要性が他にあるまい。だが、それ故の悲劇だった。

そしてそれは運命でもあった。

まずゼルガ・ハバト五十人長がベッドの傍らに膝を着き、リュゲル隊士もそれに続いた。ペレッサ医師が丁寧に術の道具を片付け、それから兵士らと同じように、こちらは両膝を着いて拝礼する。慣例に従つて。

少女は三人の大人の様子に気付き、まだ流れる涙をそのままに怪訝そうに首を傾げた。何故この人達は自分に対して礼を送るのだろうか、と。震える唇が開くより前に、ペレッサ医師が口を開いた。

「血統は明らかになりました。フィルラント国王、リエル・タナック・フィルラント女王陛下におかれましては、登城の後に旧来の義務に従い、神託をお受けになれますよう王立議会が計られています。後日戴冠の儀を持ちまして陛下は正式にこのフィルラントの新王として王位を継承なされますよう御承知くださいませ」

「・・・・・・わたしが、何です？」

同じ日、ほぼ同じ時刻に全く別の場所で両親を亡くした少女。この子の肩にこの国はどれほどの重さになるだろう。ペレッサ医師の口から伝えるには重すぎた。息を吐ききってしまうようにしなければ言葉は出なかった。

引き継ぐようにしてゼルガが顔を上げた。

「貴女が、このフィルラントの、次の王です。リエル女王陛下となられるのです。ご理解を、どうか」

ゆっくりと分かりやすく、咀嚼させるように。

流石に今度は理解できたのだろう。ぽかん、とリエルは涙も止めて口を開けた。ゆっくりと首を回して、自分に礼拝する三者を見

下ろす。冗談や嘘ではなさそうだった。

そうしてしばらくリエルは口も目も閉ざし、ベッドの布を掴んで何かを耐えるように黙り込んだ。

次に彼女が言葉を発するまで、誰も何も言わなかった。

「……………わたしのお父さんも、亡くなってしまわれたんですねえ」

はっ、とペレッサ医師、ゼルガ、リュゲルの三名は顔を上げた。

だが三人が何か言う前に、リエルは言葉を繋いだ。

「確かに、承りました。お沙汰が下るまで待てばよろしいでしょうか。伝えてくださり、ありがとうございます」

彼女が見せたのは笑顔だった。柔らかい、だがどこか寂しげな、何かを諦めたような笑顔。母を失い、見知らぬとはいえ残る肉親の父も亡くし、代わりに得たものがこの王国の全てとは皮肉だろう。だがこの10歳の少女は、己の運命を受け入れたらしい。それがどれほど難しい行為か、想像さえ必要あるまい。

「……………今から城へ報告に向かいます。ペレッサ先生、リュゲル隊士はここで新王陛下のご看病と警護を」

ゼルガは言い残し、玄関へ向かう。入り口の戸を開けようとして、ふと立ち止まって振り返った。

「これからは、この国の全てが貴女の家族です。どうか貴女の孤独が癒されんことを」

「あ……………はい」

言葉を一度切って、出て行こうとするゼルガの背に言葉をかけた。「お心遣いに感謝します。ありがとうございます、優しいおじさま」

第一話・「登城」

『登城』

先王シャルテの子、リエル発見の報に王城の官はもとより城下の人々も等しく歓喜した。幼い新王の身柄は直ちに保護され、城内にて看病を受ける。その少女の御歳が10になると聞き、皆は困惑したという。その少女は先王が戴冠するより前に生まれていたから。それでも、王家の血が絶えずに済んだことは国民の安堵を招き、王国政府もまたその少女を迎えるべく体制を整えることにした。

リエルが保護されてから2日。彼女の健康状態に問題なしとの判断が下され、この三ヶ月清掃の時にしか開放されなかった玉座の間が扉を開くこととなった。謁見の間の奥にあるその部屋は、国府の重臣か王の身边に侍る者、そして王しか入室を許されず、謁見の間に比して幾分地味ながら建国三千年もの間装飾を一切変更することなく僅かな補修のみで維持されてきた部屋は、ただ王と重臣らが内々に対話する場合のみに使用されてきた。

歴史を感じさせながらもかび臭さの無い廊下を、リエルは護衛だと言う二人の女性に付き添われて歩いていた。髪を短く整え軽甲冑を身に着けたほうはシュナ、厚手の黒いドレスに飾り気の少ないエプロンをかけた女性がレア、と名乗ったが、ちつとも共通性の無い外見をしながら鉄面皮じみた生真面目そうな表情がよく似ている。リエルは最初、二人を姉妹か何かだと思ったくらいである。

「あの・・・これからどちらへ？」

侍従達の手によって着飾ったリエルは歳相応の幼さを見せながら王族の気品を際立たせるようにと腐心した者達の努力の甲斐あって見事に愛らしく、これを馬子にもなどと言えば間違いない天罰が下るであろう仕上がりとなった。着慣れないドレス姿にリエル自身は少女らしい喜び半分、戸惑い半分であったが。

「はい。これからリエル陛下には玉座の間にて、宰相以下大臣らとの謁見をなさっていただきます。皆の顔と名前を知り、陛下の下にあって国権の一端を担う者達ですので、これからの陛下のお仕事を学ぶ最初の行事ともなりますね」

リエルの手を引く侍従長のレアが、きりりと引き締まった眉を少しも緩めることなく、それ故に不自然なまでに優しげな声音で傍らの少女へと説明を行った。あまりに不自然だったので、リエルはおろかその隣を歩く親衛隊隊長のシュナまでもが思わずレアの顔を凝視したほどである。

「・・・・・・・・わ、かりました」

「はい」

隣のシュナが呆れたようにため息をついたような気がして、リエルはそちらの顔も見た。と、その時レアがリエルの手を離し、そつと背に手をまわした。いつの間にか目の前には古びた木の扉がある。

「着きました。扉を開けたら臣下らが控えておりますので、まず玉座に座るまではお言葉を発しなさいませぬように。玉座に座ったら、面を上げよとお命じくください。そこからは私どもが進行を補助いたします」

「はい」

「緊張しておいですか？」

「え・・・・いいえ、シュナさん。大丈夫です」

ふ、とシュナが笑った。微笑とはいえ毅然とした顔立ちからは想像できない子供のような明るい笑みに、今度はレアが、リエルを交えて彼女の顔を凝視した。

「では、行きましょう」

シュナの合図に、扉の向こうに控えていた兵士がゆっくりとその取っ手を引いた。

まず、「広い部屋だな」とリエルは思った。自分が生まれ育った家が六つは入るだろうか。まだ城内を詳しく見て回ってもいない

彼女は、これ以上の大きさの部屋も数多くあることを知らない。が、ともあれリエルは目の前に膝を着けてかしこまる老若男女を一瞬見落とすほど、驚嘆したふうだった。無論、同じような眼差しで彼女を見たことも付け加える。

「こ、こんにちは」

後ろでシュナのため息が聞こえたような気がして、リエルはしまったと思った。扉の前でつい先ほど言われたことをもう失念してしまっただけらしい。

目の前の大人達が深々と頭を下げたまま微笑んだ気配があった。それでリエルは少しばかり安堵し、レアに背を促されて歩いていく。荘厳な、派手では無くとも巨大な歴史の蓄積を一目で覚えるその玉座へと。その圧力を感じてリエルはやや戸惑った。大丈夫かな、と口の中で呟いて。

玉座の前に立ち、じっとそれを見つめ、息を吸う。シュナとレアの怪訝そうな視線を受けたが意にも介さず。そっと手すりに触れてみて、目を閉じた。

「………すごい。こんなに深いものは、初めてだわ」

「陛下？」

シュナがリエルの様子を伺い、そっと話しかけた。リエルはいま少しばかりそのまま目を閉じていたが、やがてゆっくりと瞼を持ち上げ、振り返った。そして腰を降ろし、深く玉座に身を預ける。「どうぞ、面をお上げくださいませ」

春の野山に咲く小さな花のように、可憐でありながら凜と響く少女の声が広間に響き渡った。それがリエルの意図せずして放たれた言葉だったか、だが既に堂々とした彼女の態度がそれまでの弱々しげな少女とは一変しており、むしろ彼女自身にもこの落ち着きの理由が分からないために、相まって座した歴々には気迫と映った。

少女は既に王の風格を僅かにも、だが確かに備えておられる。それが彼らの共通の感想となって面に現れ、一斉に上がる顔には一樣に感慨深さとも取れる感情が浮かんでいた。ときにそれは、困惑と

も見える表情でもあったが。

「侍従長レア・サニ・コーツハインより皆様方へ前もって申し上げます。リエル女王陛下におかれましては先日のご登城以来日も浅く、お加減も万全とは参りません。本日の謁見及びお歴々のお目見えは待望とは承知ながら、陛下の体調責任を預かる身として手短な進行に期待する所存でございます。・・・では、親衛隊隊長」

頷き、シュナが繋ぐ。

「宰相、ハンネル・オードネイ閣下。ご挨拶を」

立ち上がったのはリエルの目の前、人々の最前列に座っていた初老の男性。柔和な雰囲気を湛え、渋い赤色の官服をよく着こなした御仁である。小柄な男だが恰幅はそこに良く、たくわえた髭もあり貫禄がある。

「お初にお目にかかります。宰相、ハンネル・オードネイと申します。陛下におかれましてはこれから先、王国の政務一般を執り行うため、私めがその全般の補佐として付き従うこととなります。以降お見知りおきを」

リエルはそれを聞き、ハンネル宰相が礼を行った直後に思わず口を開いた。

「宰相さま？まあ、とてもお偉いお方なのですか」

ハンネル以下、一同はこれに対し噴き出すところだった。

「ええ、リエル様。一応この王国、及びこの城内では貴女様の次に多く国権への関与を許された身ですよ」

「あ・・・そうでした。すみません、まだ慣れなくて」

「いいえ、よいのです。リエル様のご事情を鑑みれば当然のこと。急ぐことなくゆっくりと、学んで行きましょう」

「はい、ありがとうございます」

まだ何か言いたそうにしているリエルを慮ったのは偏に年齢と共に積み重ねた経験によるところがあろう。ハンネルは少女の困惑の理由が解からないでも無いために、柔らかい口調で促した。

「どうぞ、陛下。このハンネルめにお答えできることなら何なりと

お尋ねください。私の職務でもあります故」

「・・・あの、では、宰相さま」

「宰相、または名前で。陛下は我々に敬称を用いてはなりませんよ」

「あ、はい。ではハンネルさ・・・ハンネル宰相」

「はい」

「・・・わたしは、本当に王様なんでしょうか。そう言われて数日
が経ちましたが、実感がないんです」

ふむ、とハンネルは髭を揉む様に弄りしばし言葉を探った。

「・・・医師の、秘術による判断が御座いましたな？」

「はい、ありました」

「王の遺灰は赤く染まったでしょう？」

「はい・・・あれは王様の遺灰だったんですか？」

「おや、ご存知なかったか。少々恐ろしげな響きもありますが・・・
そうですね、あの秘術は神々が人間に託された特別なもの。一般に
知られるものではないので、信憑性を疑う陛下の気持ちもお察しし
ます」

「そうですね、似た術は知ってますが、あの術は知りませんでした」
「ほう、お詳しそうだ。ではご理解頂けるでしょうか。あの秘術に
よる判別は絶対に疑いようがなく、正確なものです。赤く染まった
灰は血統の繋がりを示すもの。そして、各国家の王族に対してのみ
あの術は機能する。国家の支柱を明らかにし安堵していたという、
人間の業ですな。それを神々は受けて、秘術としてお与えくださっ
たとか」

いっそ理論的な説明を用いたのはハンネルの判断だったが、リイ
エルはそれで十分満足のいく回答と納得したらしい。それまでのど
こかにあった不安は幾分か和らぎ、ほっとしたように笑んだ。

「お答えに感謝します、ハンネル宰相」

「恐悦至極に存じます」

ハンネルはそのまま座らず、一段高い玉座の隣に立つシュナの更
に横まで歩くと、その場に並んだ。どうやら彼も司会としてこの場

に参加する予定だったらしい。

「宰相閣下はなお、フィルラント王国軍軍団長も兼任しておられます。次に、騎士団長セイル・フォガリ閣下」

立ち上がった長身の男性。控えめに客観視しても美男子と形容し得る容貌を持つ騎士に、リエルは少しばかりの感嘆の息を漏らした。

「拝謁を至上の喜びと存じます、女王陛下。このセイル・フォガリ、今日この日より貴女様の騎士としてこの剣を捧げましょう。どうかお受けになって頂けますか」

ざわり、と場がどよめいた。

「ご自重を、フォガリ騎士団長。今日はただのお目見えです。機会は皆等しく、後日設けられましょう」

リエルは大人達の紛糾の意味がよく分からず、傍らのレアを見上げた。が、彼女は無表情の内に明らかな怒気を漲らせて正面をきつと見据えている。なんとなくそのまま口を開けず、リエルもまた前を向き直った。が、当のフォガリ騎士団長なる美青年は煌びやかな笑みをリエルに向けてくる。何か、どこか、それは恫喝めいた微笑みだとリエルは感じた。

「……騎士団長さん、ええと……フォガリ騎士団長」

「はいっ、陛下」

何を、とシュナが言いかけてリエルはゆるりと目線で制した。

この場を任せてほしい、と。

「わたしは、薪が割れなかったんです」

「……薪、ですか？」

「はい、薪です」

急に何を言い出すのだろうかとセイル・フォガリはきよとした。それは他の一同もだったが、ハンネルだけが何かを掴んだらしく感心したようにこの状況を眺めていた。

「知識としては、剣を捧げるという行為を知っています。わたしが騎士団長の剣を受けて、これを両肩にあてて忠誠と信頼を結ぶ行為、

ですよね？」

「ええ、よくご存知で」

「では、それは今は無理です」

申し訳なさそうにリエルは眉尻を下げた。目を丸くするフォガリ騎士団長は「は？」とだけ言葉を発し、ハンネル、シュナ、レアは（後ろ二人は表情こそ乏しいが）どこか得心がいったような顔をする。

「母が亡くなる前、薪割りには母がやってくれました。わたしも手伝おうとしたことがあったんですけど、何度やってもできなかったんです。わたしが小さいからだ、母は言っていました。でも十歳になっても、わたしはあんまりお外で運動をしてなかったせいで、薪割りができなかったんです」

リエルの事情は既にこの場の全員が知っている。どこからか息を呑む音が聞こえた。

「母が倒れて、薪が足りなくなったんです。でもわたしは何度試しても薪が割れなくて、お部屋はずっと寒かったんです。木の枝を拾ってきて使いました。でも、ちゃんと乾燥させた薪じゃないと煙がすごいんですよ。だからあんまりそれもできませんでした」

「……」

何を言わんとしているのか、リエルがずっと申し訳なさそうな表情をしているためフォガリ騎士団長もすぐに察した。

「騎士団長の言う儀式は、わたしの細腕でもできるでしょうか。薪割りの鉋は小さかったけど、それでもわたしには重かったんです。ごめんなさい、わたしは……」

「い、いえ陛下！ よろしいのです！！」

「あの……」

「差し出がましい事を言いました。どうかお許しを！」

「……ごめんなさい、騎士団長」

儀剣は、王が臣下への信頼を示す際に用いられる細剣である。それは女王が居る場合でも容易に使えるように軽く、また刃を鈍く作

ってあるもの。本来捧げられた剣に代わって、儀礼の場においてはこれを用いることが多い。が、果たしてこの小柄な少女に持ち上げられるものだろうか。人の手を借りてなら可能かもしれないが、それで王の信は示せるのか。リエルはそれを言った。

フォガリ騎士団長は軽薄そうな笑みを引っ込め、恥じ入って膝を降ろし面を伏せた。危うくこの幼い女王陛下を辱める間抜けぶりを晒すところで、彼は自分の立場を思い出し同時に、この小さな女王陛下の聡明を悟ったらしい。赤面して滂沱の如く冷や汗を流し、黙り込んでしまった。

「では次へ。外務長官ウィバル・ランデミス閣下」

淡々と続けるシュナの声は、冷淡さと僅かに楽しげな響きを持っていた。

「宰相、ハンネル・オードネイ。憲兵隊隊長さん、ゲルミュラ・パラシエ。外務長官、ウィバル・ランデミス。財務長官・・・」

「ペリユーク・ヤカラボ閣下」

「はい。ええと、法務大臣さんがベゼー・ルパジャニ。騎士団長セイル・フォガリ。王立学院院长、ヒーム・エンデル。貴族院長、デンジ・・・」

「デンジ・イオルム・メイテ伯爵閣下」

「でした。教会の司祭長さんが、カテユ・マリアツキナ。国土大臣の・・・えつとビーレッテ・パストウ・ラタレイ。それからええと、王立病院長シャン・・・シャ نداイン・ハルザッハ。で、裁判所長のマルッカ」

「マルッカ」

「あはい。マルッカ・・・エルヘザーク？」

「はい、よくできました」

「それから侍従長のレア・サニ・コーツハインと、親衛隊隊長のシュナ・ミュテス・ルゼですね」

シュナは微笑んでもう一度、よくできました、と言った。

「あんまりたくさんなので覚えきれませんでした・・・宰相補佐官さんや副騎士団長さんはお名前は何と？」

「いえいえ、急に覚えずともよいですよ。今日のところはお目見え、名前と顔を一通り見て、これからお役目を通して覚えていただければ」

玉座の間での臣下らとの顔合わせを終えて、リエルの私室の一つとなった執務室にて。リエルらは先に退出したのでまだ玉座の間にはハンネル宰相以下の官達が残っており雑談などしているだろうが、そこに触れてやらずにいるのは城内の慣習と言えよう。

「今日お会いしたのは主要な方々のみ。副官以下の面々とは王立議會を通してまた会うことになりましたよ」

「こんなに人がいないと国のお仕事はできないんですねえ」
「もちろんですとも」

現在城内仕えの官名簿を見返すリエルは傍らに控えるシュナに頼りながら頭の中で今日会った人々の名前と顔を一致させようと苦心していた。今日の公務はこれで終わりということなので、リエル自身が時間を有意義に使いたいと考えてのことである。この後は休憩を挟んで城内の案内も予定してある。

「失礼いたします。お茶をお持ちしました」

「ありがとうございます、レアさん」

さん、は要らないと何度か言ったのだがどうしてもこうなってしまうので、シュナとレアは訂正を諦めることにした。リエルの礼儀正しさは母親に学んだようだが、杓子定規すぎるくらいがあり柔軟性に欠ける。それもまだ幼いためだろうと考え直し、なにより愛らしくて良いと二人は判断している。

「お砂糖は幾つ入れましょうか？」

「え？えっと・・・どのくらい入れるものなのでしょう？」

紅茶を用意するレアに、リエルは戸惑った。ふとシュナもレアも気付く。北国のフィルラントでは栽培できない紅茶は高級品で、庶民が日常的に飲用するものではない。一般庶民が飲む茶とは、あ

る花を葉と茎ごと乾燥、発酵させたもので淹れる葉茶というものになる。これは甘味が元々含まれているため、砂糖を必要としない。「では二つと、ミルクも入れましょう。葉茶は体が温まって眠くなるお茶ですが、紅茶は目が覚めます。ご公務の際に飲むお茶とお思ってください」

「へえ・・・」

柔らかく背を暖めるソファに深く腰掛け、温かいミルクティーを飲む。レアは更に茶菓子としてクッキーも用意しており、リエルは夢みたい、と口の中で呟いた。

「・・・あんまり味がしないお茶ですね？」

「うふふ、いい陛下。紅茶は香りを飲むお茶です」

「香りを？・・・あ、本当。いい匂いです」

なるほど、と両手で持ったカップを見つめてその香りを嗅ぐ姿が子犬のように見えて、レアは一層目を細めた。その眼差しの中で、リエルはふう、と息を吐いて遠くを見つめる。

「・・・本当に、色んなことが急に変わってしまいました」

「お辛いですか？」

「いいえ。必要とされるのは嬉しいです。どこかに居場所が持てるのは素敵なことですから」

「・・・分かります」

痛みが見えた。リエルの表情はどこまでも健気で、高い知性を窺わせる。早熟な聡明さと未熟な体を持つ少女は、既に大人顔負けの人生観を持つに至っているらしい。それ故に、ある意味で子供じみた感情の発露が上手くない。これはもう生来の苦労性としか表現できないな、とシュナは心の中でため息を吐いた。その顔を見てレアが苦笑するのも構わず。

そんなシュナの心中をよそに、リエルは大きめのクッキーを口から離すタイミングが分からなくなったらしく、リスのようにクッキーをほお張り一所懸命に飲み込んでいた。それを見て思わずシュナとレアは肩を震わせ噴き出しそうになってしまい、直後に慌てて

レアが紅茶を息で冷まして飲ませるといふ騒動もあつて。

一段落して、さてそれでは城内探検にでも、という時になる。

「あ、そうです。お友達に連絡を取りたいのですが・・・だめでしょうか」

リエルが尋ねたが、シュナは渋めの表情をとった。

「さてどうでしょう。手紙などを託してくださいれば届けますが・・・火急の用事がありでしょうか？」

「いいえ、ただ挨拶をと思ったのですけど。お手紙は・・・ううん、あの方はお手紙はちよつとだめでしょうか」

どういう友人なのだろう、とシュナは想像してしまう。とはいえリエルもあまり深刻そうな顔をしていないので、これをやんわりと説得することにした。

「しばらく、状況が落ち着いてから機を見て計らいましょう。それまでにご辛抱くださいませ。陛下のお体のことも御座いますし、来客を受け入れられる用意も整っておりますので」

「ああ、そうですよねえ。ごめんなさい、無理を言つて」

氣遣うようなリエルに、シュナは慌てた。

「滅相も無い。陛下のお頼みごととあらば、何にも優先するもの。今は時期が悪いというだけのことです。お詫びするならこちらからでしょう」

リエルの控え目な態度は好ましくもあり、シュナにとってはいっそ子供らしく我が儘に振舞つて欲しいと思わせるものでもあった。「そうですか。ありがとう、シュナさん」

だがこの素直さもリエルの特徴とする性格であろう。言葉を重ねるたびにシュナは、レアもだが、この小さな女王陛下を愛らしく好ましいと感じるようになっていった。それ故に、その幼さを不安にも思うのだが。

よいしょ、と床に着かない足を椅子から降ろして立つリエルは、さほど小柄でもないレアの腰あたりまでしか身長が無い。その小さ

な陛下の背後に回り、防寒着を羽織らせる。城内とはいえ廊下などはかなり寒いのだ。

「では、まずどちらから参りましょうか」

「ご公務に関する場所からでよいのでは？」

「まあ、シュナ。せっかくだから陛下も楽しいほうがいいでしょう？」

「え・・・そういうものかな？ 議会場くらいは見ておいたほうがいいと思うけれど」

「ああそうですね。うーん・・・」

「そろそろ宰相閣下らも引き上げていらっしゃる頃だ。議会場、謁見の間とまずは案内しておきたい」

「そうですね・・・陛下はどこか、行きたい場所はおありですか？」

シュナとレアの会話を興味深そうに観察していたリエルは尋ねられて、ぱっと明るい顔をした。

「尖塔へ。外からいつも見ていたんです。あの高い塔に登ってみたいと」

「尖塔ですか。いいですね、私も登ったことが無いので、是非行きましょう。見張り番に直接挨拶をするのもたまにはよいものでしょうし」

シュナも無邪気さを垣間見せる一方で、レアはさっと暗い顔になった。

「せ・・・尖塔ですか。高い所ですけど、だ、大丈夫でしょうか」

「・・・陛下、覚えておくとよいでしょう。レアは家の二階から地面を見下ろすのも泣き叫んで拒否するほどの高所恐怖症です。叱られたりして逃げたくなったら高い所へお逃げください」

「それはいいことを聞きました！」

「シュナ！？陛下も、お止めくださいまし！」

青ざめたままのレアに、リエルはすまなさそうにしながらも笑みを崩さずごめんなさい、と言う。シュナも硬い表情を破顔させているので思わずレアも息を付いて本当にもう、と腰に手を当てた。

そのまま執務室を出て、まずは謁見の間へ向かったのが昼下がり。赤みが差し始めた陽光が城内を程よく照らし、寒々とした空気もほんのりと柔らかく感じられる時間帯になっていた。

「でもレアさん、高いところが苦手なのによくここでお勤めが続きましたね。丘の上ですし、お城も大きいから、ここもそれなりに高い場所のはずなのに」

フィラント王国は王城を中心に東西南北にそれぞれ特徴を持つ市街を広げる。中心にある城は高い城壁に囲まれたなだらかな丘の上に建造されており、城の東西にある高い尖塔に登らずともその辺りの窓から外を眺めれば、南は海、東は国境線のある川と湖、西も国境の長大な壁、北は農牧地帯がほぼ全体まで一望できる。北のシユエレー神山から吹き降ろす冷たい風を城内に通し難くするための、敢えてこれほど縦に長い構造になったらしい。事実、上空を流れる風が吹き込むことはあっても北の強い吹き降ろしは城のある丘で割れて南に流れるため、北側の窓辺に立っても強風に身を冷やすことは無い。

レアはリエルの手を引きながら過去を思い出し、少しげんなりとした顔になった。

「窓に立たなければいいのですよ。外を見ないようにお勤めするのは苦勞しますが・・・」

「私より以前から城仕えなのにか。すごいな」

感心したのか呆れたのか、シユナの顔は判断が付かない。

「18歳でお城に来て9年。流石にそろそろ結婚をと思いますけど、嫁ぎ遅れだし、二階に窓の無い家のある殿方なんてどこを探しても見つかりませんし・・・あらいやだわ。申し訳ありません、俗っぽい話で」

「27歳だったのですか。随分お若く見えました」

「私もだ。年下だと思っていた」

謁見の間の扉が目の前に現れた。執務室から出てここまで、やけに道は複雑だったようにリエルは感じた。今歩いた道を少し振り

返っても、先ほど曲がった角の奥など見えはしない。

「・・・・・・・・・・」

シュナに先導されてリエルがもう一つの玉座の前に立つ。地味ながら重々しい迫力を湛えていた玉座の間の席とは対照的な、洗練された優美な派手さを持つ玉座。座面と背もたれは無地に近い。きつとここに座る者によってこの玉座は性格を大きく違って見せるのだろう。優れた意匠に、美術には疎いリエルやシュナでも感嘆のため息を漏らした。

「あの、シュナ？・・・は、お幾つなのですか？」

「え、うん？私か。再来月で24になるが」

「わたしは少し前に10歳になりました」

リエルも嬉しそうに言うので逆に、レアはよよと泣き真似を挟んで悔しそうにしてみせるしかなかった。流石のシュナも心中を察する。

「と・・・歳からすればレアの外見はまだ十代でも通用するほどだと思うし、器量も良いし・・・なあ？」

「・・・・・・・・・・ちなみに聞きますけど、私何歳くらいに見えるんです？」

何故この人はこれほどショックを受けて涙目で恨めしそうな顔面を私に近づけてくるのだろうか、とシュナは激しく当惑する一方でリエルはやはり額面どおりに言葉を受け止めているらしくさほど深刻そうな表情でもなくむしろ謎掛けの回答を楽しむような表情をしており、いやここは正直に答えてあげるべきなのだろうと結論した。

「じ、じゅうきゅう、にじゅうくらい・・・」

「20歳くらいかと思いました。お母さんも見た目は若いのよって言ってて、でもお母さんよりお若く見えますよ」

「本当ですか!？」

一応、城内の各所には警備の兵士が配置している。もちろんこの謁見の間にも。来客を迎える部屋だけに比較的見晴らしがよく入り

口も大きい部屋だけに、声もよく響いた。そのせいであるのは間違いない。この場の警備兵を務める二人の男性が扉の前で直立したまま、明確にそわそわしていた。酷な仕事だ。

「・・・・・・・・。はあ、安心しました」

「それはよかったです」

裏表なく喜ぶリエルの頭上、レアがちらりとシュナの顔を見て、シュナが頷いた。

「こほん。さて、では議会場に向かいましょう。ここからだ執務室の反対側になりますので、少し歩きます。お疲れではありませんか？」

「大丈夫です。腕力はありませんけど、歩くのは得意ですよ」

さもありなん。あの僻地に暮らしていれば脚力だけは嫌でも身に付くだろうなあ、などとシュナもレアも感慨にふけた。一目見たところではわからないが、先刻の着替えの際などに目に入ったリエルの体は筋肉が薄く痩せて全体が細い印象を受けたが、立ち姿はしっかりしているし、ふくらはぎも子供にしてはかなり丸みがある。よほど日常的に歩き回っていたのだろうとは想像に難くなかった。

その軽やかな歩みで謁見の間を出て、先ほどとはまた違う順路で城内を行く。途中何度か角を曲がり階段を昇って降りて。流石にリエルもなるほど、と感じた。

「道が複雑なのは、防犯のためですか」

この質問には城内の警備総責任者であるシュナが答える。

「よくお気づきですね、そうです。・・・・・・・・慣れるまでは決して一人で城内を歩き回ってはいけませんよ？よく観察しないと気付きませんが、この」

シュナの手が石造りの壁面に触れる。何度も重ね塗りされた漆喰の壁は時代を追うごとに改良された素材に置き換わることで内部は年輪のようになっていくだろう。その表面には、どうしても発生する塗りのムラを逆を利用してぼんやりと陰影で浮かび上がる抽象的な模様が描かれている。

「・・・この壁です。この薄模様、よく計算して塗られるよう研究されており、別の場所でも同じような形状の通路にはほぼ完全に同じ模様が描かれています。そのためあてもなく廊下を歩くと、現在地を見失って容易に道に迷ってしまう。私も城仕えになって半年ほどは城内の地図が手放せませんでした」

「へえ・・・」

確かに、今歩いている廊下もどこかで通ったような気がする。注意して歩かなければとシュナは言ったが、むしろ周囲を見ながら歩けばこそ道に迷うのではなからうか。結局は慣れと経験だろうとリエルは納得した。

「謁見用の玉座、綺麗でしたねえ」

「ええ。一部に象牙という素材があるため、現在では同じものを再現することは不可能だそうです。石造りの部分ならシュエレー神のお許しを頂いてなら、鉦山からいくらでも採れるのですけど」

「絶滅してしまった動物ですね、象さん・・・どんな動物だったんでしょう。言葉だけだと姿は想像するしかないですね」

「え？・・・ええ、そうですね。・・・まあ、もしかしたら聖獣に聞けば分かるのかもしれませんが」

「聖獣。そっか・・・アールカインさんは知ってるんでしょうか」

「どうでしょう。建国時から護国の聖獣の契約を交わしたお方ですから」

西の国境を守護する巨大鳥アールカインを何故かやけに親しげな呼び方で表したのも、リエルだから、ということと説明がつく。しかし、なるほど自身の言葉ながら守護聖獣との意思疎通や情報交換を行う者は無かったのだろうか。セス教と国家と聖獣に共通の摂理においてそれは”忌避される”であって”認められない”ではなかったはずだ。

リエルが歩きながら目線を巡らせるので、シュナとレアもそれにつられた。見えるものは通り過ぎる部屋の扉。描かれた精緻な模様は製作を請け負った職人らの遊び心も相まって、動物、人、風景、

建物などが賑やかに彫り込まれている。

「一つ一つ違うのですね。すごい」

実はこの扉の数々も全く同じ装飾のものが複数あり防犯と城内の迷宮化に一役買っているのだが、今更くどくど説明する必要もないだろう。

そうしてやっと辿り着いた王立議会場。今しがた歩いてきた道は城内に住む者が使うもので、城外から来る場合は専用の通路があるらしい。ならそれを使えばよかったのでは、とリエルは尋ねたが、その場合は一度城の外まで出て庭を歩かなければならないのだとか。いくらなんでもそれは遠い。

「円卓なのですね」

「ええ。そして陛下はあちらの椅子で、議員の面々を見下ろしながら参加します。陛下から見て正面の席が宰相閣下のもですね。宰相は議長でもありますから」

「はあ」

広大なすり鉢上の部屋の中央に巨大な円卓があり、部屋の奥、つまり今リエル達が入ってきた扉の横には一段高く設置された、これもまた雰囲気の違い玉座があった。やたら地味で、艶やかな漆塗りの木の椅子。だがリエルはこの椅子を見て、一目で気に入った。余計な装飾を排除しひたすら事務的に徹する。それは”怠るなかれ”という戒めの言葉を物言わず主張しているようだったから。

リエルはそのまま歩いて、部屋の壁に沿って並ぶ二段の席と机をぐるりと辿った。これらは書記官を始めとした低等級議員が座るものらしい。シュナとレアはここに座ったことがないと話した。

「私は一足飛びで親衛隊を任されましたから・・・下からは疎んじられ上からは青二才扱いされ、ありがた迷惑でしたね。しかし、最近では何も言われなくなりましたよ」

「そもそも侍従長より下のメイドや執事達は会議中、ここに立ち入りできません。私も私ですけど、侍従長になって初めてここで会議に参加することを知りましたからね。メイドは噂好きなものですし、

まあ、長の一人くらいが参加する程度で丁度いいのは間違いないでしょう」

議員、とはつまり王国政府の中枢を担う臣を筆頭とした人々を指す。当然、親衛隊隊長、侍従長も上級議員として数えられる役職である。議員というには二人は若すぎるような気もするが、シュナの言うように最近では不満を聞かなくなったというのなら、二人とも政治に関してもそれなりに優秀なのだろう。

リエルは何か巨大なものを間近に見るように議会場の中央を見つめ、黙り込んだ。

「・・・不安ですか？ご自身もこの場所で会議に参加することがはた、とリエルの目がシュナを見つめる。そして見透かされたことに気付いて恥ずかしそうに苦笑した。

「わかつちやいましたか？」

「ええ。私も・・・レアもそうでしたから。急に周囲が変わったという点においては、私達は陛下と似ているとも言えましょう。あまり大それたことは言えませんが」

レアが「あゝ・・・」と何かを思い出したのかうんざりしたような笑っているような、一種の苦笑を顔に浮かべていた。気苦労はあったのだろう。けれど、悪くないものだったのだろう。

「幸いにしてハンネル宰相閣下は面倒見のよいお方です。私達もかなり助けられましたから。陛下もまず、頼れる臣下が居なければ彼を頼りにしてみてはいかがかと」

言葉尻に付け足すようにシュナは少し、硬質な態度を覗かせた。それが意味するものをリエルはまだ察せず、ただ言葉通りに受け取った。

「そうしてみます。ありがとう、シュナさん」

リエルとシュナ、二人してにつこりと微笑み合う。そしてリエルがはたと気付いて付け加えた。

「でもシュナさん、レアさん。わたしはお二人のことも頼りにしますよ」

例えば姉のように。

シュナとレアは自分達がまだこの城内では未熟者であることを自覚している。しかしこの小さな女王陛下はそれに輪を掛けて何も知らないのだ。非常に利口ではあるらしい、が、規範とはいかなくとも支え、先導者、そういった存在が彼女には必要である。

教えを請われて解答を示すには知識と経験が要る。宰相ハンネル・オードネイは60歳に届くが、城仕えは30年を超えているという。何人も先の先輩に学び、何人もその後輩に教えて自身の能力を磐石なものとしたのだろう。論戦で彼に敵う者は他国にもそうそう居ないと言われる。その彼の口癖が「教える身になって初めて知識は意味を持つ」だった。

ハンネル宰相は四六時中この城内に居るわけではない。彼が指針を示してくれても、リエルを間近で導けるのは傍仕えするシュナとレアだけなのだ。二人はリエルの言葉を喜ばしく、誇らしく思う一方で心身を引き締めていた。

「光栄です、陛下」

「私も。お言葉を励みにさせていただきますわ」

リエルが照れたように笑う。

「・・・定例会期は来月の頭から。陛下の戴冠式など行事も控えておりますので、少しずつでも準備をしていきましょう」

「はい。がんばります」

「よいお返事です。さて・・・ではお待ちかねの尖塔登りといきますか」

「はいっ！」

シュナとリエルはレアを見る。果たして期待通りの彼女がそこに居た。

「・・・・・・・・はい。行きます」

リエルの笑顔を絶やさぬように。シュナもレアも、それが今の務め。心から楽しそうに笑うリエルの手を取って、議会場を後にした。

尖塔は城の東西に位置し、城内から階段を使って頂上の見張り台に繋がっている。平時そこには見張り番が常駐し、東西の国境をひたすら監視するために用いられる。そのため常駐する兵士は例外なく視力の飛びぬけて優れた者が王国軍の中から抜擢され着任している。それなりに過酷な任務であるため、給金など手当での面で優遇される職務と言われる。

リエル達一行は東側の塔へとやって来た。長大な階段を昇ったが、やはりリエルは平気そうにしている。

「高い・・・高い・・・」

「わぁ、すごい眺めですねえ！」

レアがリエルの手を引いているのか、リエルがレアの手を引いているのか。どちらにせよリエルの手を握ったままうずくまっで震えるレアを呆れたように笑い、シュナは見張り番の兵士に一礼した。

「お役目ご苦労。しばらく邪魔をするが、見逃してくれ」

「いえ、光栄です！どうぞごゆっくり、お心ゆくまで！」

「ふふ、寒いからあまり長いはさせられないけれど」

「そ、そうでしたね・・・」

元は弓隊士だと男の兵士は言った。訓練中に足を負傷したこと、視力が優れていること。合わせて隊長に推薦されてこの場所に着任したらしい。

「どちらの部隊に？」

「4番弓術部隊でした。隊長が五十人長だったので鍛えられましたよ」

「叩き上げか。なら、能力一切は問題ないのだな」

「そう自負しております」

冗談めいたところの無い兵士の言葉に感心し、肩を叩いてシュナは彼を賞賛した。美女と名高い親衛隊隊長に近しくしてもらったことを感激したのか頬を紅潮させ、感極まった声で礼を返した。

一方のリエル。なかなかレアが顔を上げないので困ったように笑った。

「ほらレアさん。いい景色です。見ないともったいないですよ」

「いいえ陛下、どうか、どうかご堪忍を。本当に私・・・駄目なんです、高いところ」

「そうですか・・・」

残念ですね、と横に近づいてきたシュナに目で語った。彼女もまた同じ表情を作り、二人してこの雄大な景色を眺める。

まず近くに見えたのが城のある丘の麓、堀に沿って作られた円形の城壁と、その内側に立ち並ぶ建物の群れ。あれは半数ほどが官舎であり、議員の宿泊の他に城内で仕事をする人々が仮住まいとして居住する場所らしい。

南に伸びるなだらかな斜面。さらに遠くには小さく街と、そして海が広がる。雲の動きが速い。また雪が降るのだろうかと天を仰いだ。

西のリエルの実家はここからは見えない。山から流れるように落ちて広がる森林地帯が平原と丘陵をまだらに黒く染めているためだ。ただその向こう、国境を形成する長大な壁が山と海を繋いで平原を分断しているのは見える。あの壁の中央には台座と屋根があり、巨大鳥アールカインが住まう場所としても機能している。

東の国境には壁が無く、代わりにシュエレー神山から流れる川が草原を切り取り、一部盆地状になって湖を形成する。さらに川は海まで流れ、これを東の国境線としている。あの湖には東の守護聖獣、水龍クシャタラナトが住んでおり東への睨みを利かせているため、湖と川の上流で漁をすることは禁じられている。

そして北。シュエレー神山は一面の雪化粧で覆われ、今は暮れ始めた陽光を浴びて茜色に染め上がっている。あの照り返しが強く、城の北側は日照に困るところか、冬でも日焼けすることがあるらしい。その強い日差しを受けての労働を強いられる農業従事者はこの北側、シュエレー神山の麓まで家と農牧地を広げているが今は雪に

閉ざされ、休耕期とのこと。あの雪の中でほとんど外出もせず辛抱強く春を待つのだとか。

目線を上げると、シュエレー神山の急な斜面のそこかしこに水平に伸びる黒い線が見えた。聞けば雪崩用の防壁だとか。複数を点在させることで雪崩の勢いを弱め、麓まで雪が届かぬように配置されているらしい。この百年近く、雪崩が麓まで流れてきたことは無いのだとシュナは言う。

「……百年も？」

「ええ。何度も補修、増築を重ねていますから壊れることもありま
せんし」

「……今年の冬は、雪崩は？」

「いえ、今の所観測されていませんね。……でしょう？」

監視兵は急に問われてしどろもどろになってしまった。

「は、はい！今季の冬はまだ一度も雪崩は発生していません！」

リエルは何かを考え、黙り込んだ。目線はシュエレー神山の斜面に釘付けのままである。

「……何か？陛下、どうされました？」

「……いえ」

風が少し強く吹き始めてもリエルはそのままだった。やがて日の光が急に遮られ、空から重くのしかかるような空気が落ちてくる。気温も急激に下がり始め、監視兵が見張り台に設置してある木箱から毛布のような厚手の布を取り出した。

「防寒着です。これから雪になるでしょうから、このままこちらにいらっしゃるのであれば、どうかこれを」

差し出された布を掴もうとしてリエルは逡巡し、やがて小さく首を振った。

「いいえ、ありがとう。もう降りることにします。お仕事だったのにご迷惑をおかけしました」

折り目正しく礼をするので監視兵は慌てて頭を下げた。一国の主となったリエルに頭を下げられては、一兵卒でしかないこの男性

はたまったものではないだろう。シュナは苦い笑みを浮かべてリエルの手を取り、その後ろのレアは引きずられるようにして見張り台を降り始めた。

「・・・シュナさん、気象の記録管理は王立学院で行っているのですよね？」

「え？ はい、そうですか？」

長い階段を降りながらリエルは聞いた。やはり何か考え事をしている風なので、シュナは誤ってリエルが階段を踏み外さないように強く彼女の手を握る。

「城内に資料はありますか？」

「さあ・・・資料室には書物以外にも王国史などが編纂されて保管してあるそうですが」

武官らしい言葉である。軍務関係者で資料室を頻繁に利用するのは、軍団長も兼任するハンネル宰相閣下くらいだったとシュナは記憶している。

「・・・では、王立学院に依頼して気象記録と、災害記録、あと、城内にあればですが公共工事の記録も。明日までに執務室に届けて頂けるようお願いしてよいでしょうか？」

本当にこの少女は10歳なのだろうか、とシュナは一瞬本気でわからなくなったが、すぐに彼女の母親が一部で名を馳せた学院の神童であったことを思い出した。どれほどの教育を施されたのだろう、それを思い身震いしながら。

「わかりました。先ほど気にしておられた、雪崩に関するものですね？」

「そうです。古いものも、どれだけ多くなっても構わないです。可能な限り集めて持ってきてください」

「・・・了解しました」

古い記録、公文書は保存する媒体、つまり紙や木の板、石版などでは物質自体の劣化によって内容が消失してしまう場合がある。歴史ある国の数少ない弊害と言えることだが、これを防ぐため秘術に

よって素材の劣化を防ぐ手段は遙か昔に開発された。が、これによって蓄積された太古の記録は今も現存しており、公文書を始め各種記録文書は膨大すぎる量になってしまっている。今、リエルによって指定されたものだけでどれほどの量になることか。そしてそれをリエルが一人で全てに目を通せるのだろうか？ シュナは不思議に思いながらも、王命とあっては聞かないわけにはいかない。

「この後に指示しておきましょう。ご指定のものを全て、でよろしいのですか？」

「はい。一度に全部持つてきてください。執務室に入りきらなかったらどこか広い場所を借りましょう」

「は、はい」

本気で言っていることが分かりシュナは混乱した。一体どうやって・・・？

階段を降りた頃にはもう、外は完全な雪模様になっていた。そこかしこでメイド達が木窓を閉め城内の灯りに火をつけていくのが見える。レアは仕事ができたらしく、ここで申し訳なさそうにどこかへ行ってしまった。そろそろ夜がくる。冬の夜ほど用意の必要な時間帯もあるまい。

シュナに手を引かれて歩く内に、リエルはどうやら執務室か寝室にそのまま戻るわけではなさそうだと気付いた。

「シュナさん、どこに行くの？」

「さあ、どこでしょう」

いたずらっぽくシュナが言うので、リエルも面白がって黙っていることにした。

道順から察するに中庭の方面らしい。まだ庭の散策はしていないので楽しみだが、時間も今からでは薄暗くなってしまうだろう。何か他に目的があるのかな、と一層楽しみを募らせる。

中庭に出るには正門から直通の廊下まで出て、そこから交差する大きな廊下を突っ切りテラスに出る必要がある。今二人が来たのは

西側のテラスだった。春はここで茶会などを楽しむのだろう、美しい庭園を見渡せる場所である。そこで二人は衛兵から防寒着を手渡され、厚着しているというのにその上から更に厚手の布を羽織った。流石に重く感じて、リエルはシュナにしな垂れるようにして歩く。そうして着いた場所には一本の小さな櫟の木が生えていた。細い幹だが風にも揺れず、広く枝を伸ばして雪を葉に代えて乗せている、そんな木。その下に真新しい墓標があった。

「……………正室ではないため王族の墓所には迎えられず、申し訳ありません。ですが、ここであれば陛下もいつでも来られるだろうと相談し、決まりました。葬儀は陛下ご自身で済ませておいでのようですが、お望みならもう一度教会に依頼することも可能です」

墓碑銘には「ミュシェ・タナック」と。碑文は無い。リエルが以前作った教会のシンボルにも何も彫らなかった。言葉ならいくらでも遺していつてくれたから。

ここに来た時、遺骨は持ってこれなかった。埋葬したままだうすればよいのかリエルは考えていたが、こんなに遠く離れてしまっでは何もできないと諦めていた。思い出が心に残ればいい。偶像是不要、と。

でも、それでも、リエルは涙を流し始めていた。

「……………ありがとう、シュナさん」

「……………いえ」

ミュシェ・タナックの墓所の移転には多々意見があり紆余曲折あったが、結局城内に移すことに決まった。王族の墓所は城内地下の霊廟になるが、ここに先王シャルテは埋葬されている。せめてあの寂しい家よりは、かつて愛した者同士、そして娘と近い場所に居たいだろう、と。

リエルはしゃくり上げながら何度もシュナにありがとうと言い、ミュシェの墓標の前に跪いた。寒さに悴み始めた赤らむ手で墓石を抱き寄せ、母を呼ぶ。

どうしていつてしまったの、おかあさん。そう、何度も。

第一話・「疑心」

『疑心』

週が明けるとにわかに城内が慌しい空気に染まり始めた。来月の戴冠式、王国議会の準備のためリエルが着るドレスや正装の用意、兵士らの配置確認で何人もの人々が外部から入城するためだ。これ以外にも、リエルと臣下達の懇談なども頻繁に行われた。それはリエルに王としての在り方を専門職の官の目線から説明するためであり、リエルが彼らの仕事内容を把握するためでもあった。

王と内々に面会するためのサロンなどというものがあることに驚いたリエルは、レアの出してくれた茶と菓子をいただきながら臣下達の話に聞いていった。ほとんど彼女はただ座っているだけで、臣下が勝手に話すばかりだった。

セイル・フォガリ騎士団長のナルシズムを交えた親愛の証明などというよくわからない演説を聴き終え、彼がにこやかに退出してからリエルは息をつく。

「今日は、後はどなたがいらっしゃるのでしょうか」

レアがこれに答える。親衛隊隊長のシュナは城内作業の指揮のためここには居られない。レアも本来は忙しく手を離せる状況ではなかったのだが、リエルの警護が誰も居ないのは問題なので仕事の一部を保留してまでここに居る。

「財務長官のペリユーク・ヤカラボ閣下ですわ」

「ああ、あの」

あの、というのは先日の謁見の際の事である。セイル・フォガリの一件も冷めやらぬ内にこのペリユーク・ヤカラボという初老の男性は、一札の直後に「贈り物はどれほどご用意すればよろしいでしょうか?」と、いきなり揉み手を始めたのである。場が騒然としたのは言うまでもない。結局は宰相ハンネルの冷ややかな説得ですご

すぐと引き上げていたが。

思い出して、レアは暗澹とした気分になる。あの財務長官が”内職”に精を出しているのは明白であり、先王は彼が引き連れてくる美女や贈答品でごまかされ、放任してしまっていたことは今も大臣らを病んだ道へ誘う源だ。なまじこの財務長官が頭脳においては有能なので工作は表に浮上して来ず、巧妙に帳簿は改変されているらしい。どれほどの専横があるのだろうか。レアの立場ではそこに目が届かない。

「今日は何を言ってくるのやら。十分にご注意くださいませ、陛下」
「は、はい」

レアの淹れた紅茶で喉を潤していると、ドアが叩かれた。どうぞ、とレアが通す。

「騎士団長は今日も騒がしい男ですなあ。ああ、これは陛下、ご機嫌麗しく」

「はい、財務長官。よくいらっしゃいました」

教わった通りの言葉で初老の男は迎え入れられた。後退しつつある前髪と額がやけに光沢を持っていて、脂ぎった皮膚が歳を紛らわしくさせており、それらを包む衣服は官服ではなく、高価な生地で作られた派手なもの。どこことなく大臣、というよりは豪商、商人のほうを通りそうな男である。事実、商人の出から官位を得て議員まで昇りつめた人物らしい。

ペリユークはレアが椅子を引くのも待たず勝手にリィエルの正面の席に腰掛けてしまった。これにはレアもむっとした表情だったが、それでも丁寧にお茶の用意だけは欠かさなかった。

「さて・・・まず陛下には財務庁の職務を知って頂くということですがね。ええと、さてどう説明したものでしょうなあ」

瞳だけが小さく、草食獣のようにも見える容貌で上目遣いにリィエルの顔を窺うペリユーク。

「かいつまんで要点を教えて頂ければ。わたしも一応お勉強はしましたので、後ほど質問などさせていただきますよ」

「左様で。ははあ、やはり陛下は聡明でいらっしゃる。要点……ふうむ、要点ですな。まあ、聡明な陛下には私の職務を今更詳しく説明する必要もあるとは思いませんが」

レアが片眉をぴくりと跳ね上げた。

「一言で言えば、国庫の管理ということです。つまり金銭の管理。国庫の残高を常に把握し、年度ごとに各庁、部署の要求する予算を微調整し、支払う。その際に詳細な金額の使途を記録する。これら記録を元に工業事業費など細々とした予算を再検討し、民間の職人連と交渉する。さらに掻い摘んで言いますと、要は政府の財布係です」

「分かりやすいです。それと……わたしはここに来て日も浅いので、とりあえず出来ることから思いました」

「はあ」

「これまでの出納記録など、ペリユーク長官の業務内容についても一通り調べておきました。わたしのような子供にこう言われるのはお嫌かもしれませんが、とても優秀な方のように思えます。議事録も読みました。適度に適切な発言を行い、年度ごとの予算編成に不可欠、と宰相のお墨付きもありましたよ」

「そ、それは……光栄ですな。宰相閣下も……そうか……ははは」

ひとしきり喜んでから、今起こっている事態の異常性にペリユークは気付き始めた。

「……読んだ、ですと？ あれだけ膨大な量の資料を、全て？」

「はい」

「……」

冗談を言っているようには見えない。静かに付き従うレアも、何もおかしいことは無いと言うように黙っている。

こめかみに冷たい汗が流れた。聡明？ いいや、この子供はそんな言葉で片付けられない気がする。

「驚きましたな、まさかそれほど・・・」

「それで、ペリユーク財務長官。お聞きしたいことがあるのですが」「ど、どうぞ」

ペリユークの言葉を遮るリエルの言葉はいつも通り、柔らかなく穏やかな口調。だが傍らに立つレアにも、どこか冷たいものが含まれているように聞こえた。

「全てを語ると時間が足りませんので、とりあえず出納簿の一部についてです。備品購入用予算と納品目録、これらの端々に食い違いがあるようなのですが、ご存知でしたか？納品されていない品物が多々あるのです」

リエルの知性を目の当たりにして動揺していたペリユークは、この質問を聞くや急に余裕のある態度を見せた。慌てる様子は微塵も無い。

「お気づきでしたか！いやあ、あれだけの備品ですからなあ。先王時代のものでしょう？人員補充を要請したのですが聞き届けられず、少ない人数でやり繰りした結果ですよ。いやあ面目ないことです」「・・・どういうことでしょう？」

「なあに簡単なこと。単なる小さな誤記入などの累積ですよ。何しろ忙しいものでしてな、我が部署は。無論、納品側に問題が無かったとは言えませんが、我々がそれを逐一指摘するのも酷でしょう。彼ら皆、真面目に努力しているのです」

「そうでしたか。わたしの一存で決めてよいものかは分かりませんが、人員については検討しましょう」

「ははーっ、ありがたく存じます」

ペリユークが笑いながらおどけたような口調で返すが、相変わらず微笑を絶やさないリエルは分からないとしても、当人であるペリユーク自身とレアの目は全く笑っていなかった。

僭越ながら、とレアが口を挟む。リエルはやや驚いた風だが、これを止めなかった。

「なるほど財務長官は予算決議には熱心でおられますが、他の会期

中、通常議会においてはどうも”居眠り”が多いと常々思っておりましたが。相違御座いませんか？」

かつ、と踏み出した靴の音が鋭く、リエルはレアがこれから怒鳴り声を上げるものだと思感した。が、聞こえてきたのはあの鉄面皮の猫なで声だ。これを聞いてリエルは軽い電流を流されたように背筋を小さく震わせた。

対するペリユークはレアの顔をちらりと見たが、すぐに視線をリエルに戻したのみ。

「いやあ・・・はは。議員とは難しいものでしてな、足をただ動かして働けばよいものではない。頭を働かせるのです。頭脳労働はそれはもう疲れる。聡明な陛下にならお分かりでは？なにぶん私はこの通り、お恥ずかしいことながら不摂生でしてな。腹回りがたるんで仕方が無い。自分に腹が立つというものですよ、はっは」

笑うペリユーク・ヤカラボ。だがその瞳は全く笑っておらず、リエルも見えていない。空中に用意された見えない台本を読んでいるような雰囲気だった。

「特に私は一介の商人上がりということもあります。成り上がりの議員が優秀な他のお歴々に並ばんと欲するなら、当然人一倍の努力を強いられるものです。それが崇めて無様を晒すことも多く、真にお恥ずかしい限り」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レアは、ただ黙っていた。中身にレアに対する侮辱を込めたペリユークの言葉だったが、彼女がいつもの鉄面皮のまま何も言い返そうとしないためリエルはやや焦る。

だが、その意は汲み取っていた。

「閣下のお言葉に感服致します。わたしも先日までは国民の一人でしたから、この先色々ご教授願えとうれしいです」

「左様ですか！いやあ、それは光栄の極み！是非、陛下のお力になれるよう奮起する所存ですぞ」

「期待していますね」

そう言ってリエルは手を差し出した。握手を求めて。

「！！」

レアがやや過剰に反応したが、リエルはいつも通り微笑を絶やさず、ペリユークの前に掌を持ち上げている。

「こ、これはこれは・・・」

僭越ながら、とペリユークはその小さな手を軽く握り、儀礼的に簡素な握手を交わした。リエルの表情はこの瞬間から、レアにもほとんど分からない程度の翳りを見せた。

「では、また」

「はい陛下。楽しい一時でしたな、ははは！」

ペリユークが鷹揚な態度で部屋を出るまで、レアは何も言わなかった。リエルも何も言わない。二人はただサロンの置物のように、静かに佇んでいるのみ。

やがて外の廊下を歩く足音も聞こえなくなって、リエルは軽く息を吐いた。

「レアさん、この後にはもう面会はありませんよね？」

「・・・はい。午後はドレスの試着を少しばかり行って、それからはお休みになって結構です」

「そうですか」

レアがペリユークに出した茶と菓子を片付ける音だけがしばし室内に響く。二人とも言葉を発しないまま、しかし言いたい事は共通しているように思えた。

「・・・レアさん」

「はい、陛下」

「時間の許す限りでいいのですが、シュナさん、ハンネル宰相と一緒にペリユーク財務長官の身边を調べてください。特に財務庁の、全ての金銭の動きをこの五年分でいいです」

やはりリエルは気付いた。レアは軽い興奮を覚える。この小さな陛下の聡明さは本物だ。

とはいえ財務庁の出納記録五年分とは手に余る量だ。リエルは

先日かき集めた様々な資料をたった二日ほどで本当に全て目を通してしまったらしく、一体どんな手品を用いたのか不思議でならなかった。

だが、王命は絶対だ。

「承知いたしました。少々お時間を頂く事になります。それと、多少人を使うことにも」

「はい、構いません」

「次の王立議会に間に合えばよろしいので？」

「そうです。さすがレアさんですね、頼もしいです」

「お褒めに預かり光栄です」

既にレアはリエルの信頼を得ていた。レア、そしてシュナもリエルに対して誠実であれ、忠実たらんと心に決めてしまっている。せめてこの二人くらいは、リエルの味方がいてよかったとレアは思う。

官の腐敗はある。どんな時代でもどんな王朝でもそれは避けられない、ある意味自然現象じみたものだが、先王シャルテの代にその腐敗は急激に拡大してしまった。だがそれは当然だろう。先王は政務を半ば放棄した。つまり、議員らに全てを丸投げしてしまっていたのだから。手綱を取り払われ権力を浮遊させた彼らは、めいめいの領分で好き勝手に振舞うようになってしまった。

だがそれらは、国家を運営していく上で急いで切除しなければならぬほどの腐敗にはならなかった。彼らは一樣に狡猾であり、本来課せられた職務もそれなりにこなしていたために。当然、だからといって許されるわけではない。横領罪はフィラント王国の法律では少なくとも私財の没収、官位の剥奪、一定年数の謹慎が罰則となり、最悪で極刑もあり得る。その法律の下にありながらも、彼らは見た目は慎ましやかに甘い汁を吸い続けている。

レアがこの事実に気付いたのは侍従長に任命されてからだった。先王の代に異動を受け入れてからは若いながらも懸命にその職責を全うしてきたが、それ故にこの歪みはすぐに目に付いた。今では恐

らく”内職”をしていない議員のほうが少ないのではないだろうか。やっていないと確実に言えるのは自分とシュナ、そしてそんなものを必要としないハンネル宰相とマリアツキナ司祭長くらいか。シュナとレアについては、ただ実直であるからというだけ。もしも心が揺らげば悪癖に染まる可能性は否めない。一方で宰相は高齢であることと、あの地位に辿り着くまでに得た様々な利権で十分に私益は得られている。むしろ彼の場合はとにかく仕事をしていたいという特異な人物なので、金銭は不要とすら公言しているが。

司祭長はその地位故に否定が容易である。セス教の司祭長とは国神の認定を受けた人物であり、いかな私欲にも揺らいではならないと定められている。この戒律を破れば、官位を証明する教会の「鉄の名簿」と呼ばれる金属板に記された名前が消えて失せるそうだ。これはその教会ごとに所属する神官の名を記録されるもので、神々が教会の設置にあたって必ず一つは与えるらしい。これを見て彼らは自分が潔白であることを知り、日々その身を引き締めていける。

「・・・陛下、国というものは・・・」

「レアさん、いいんです。分かっているつもりです・・・・・・・・こんな子供が、と言われるでしょうけど」

「そんなことはありませんよ。陛下の聡明さには私どもも感服しておりました」

払拭は可能だろうか？可否を問うなら、当然”可”になる。一時ではあれど、外科的な手段を用いるならば。つまり強引に汚職者らを武力などを用いて排斥することはできる。だが、その後訪れるのは彼らが保持していた利権と職務の崩壊であり、瞬時に国府は機能を停止するだろう。代役を立ててからという考え方も出来るが、正常な引継ぎも無く国権の半数以上をすぐに機能させられるとは到底思えない。何か上策が必要なのだ。

「ありがとう、レアさん」

「さあ、ともかくお部屋に戻りましょう。ドレスを試してお湯浴みでもなさって、おいしいご飯を食べて明日に備えるんです。明日も

面会はございますから」

「そうでしたね。明日はどなたがいらっしゃるのですか？」

「王立学院院長のヒーム・エンデル氏です。お母上の事など聞ける機会かもしれませんね」

「それは嬉しいです。エンデル院長は先日以来、初めて来るのでしたね」

「はい。なにぶんお忙しい方ですから」

会った事も無い父は何を遺したのだろう。遺産はリエルを王にしたが、その先は平坦なだけの道ではなかった。幸いにして彼女は亡き母から受け継いだ知恵を持ち対処できているが、所詮10歳の少女にどこまで出来るものだろうか。

サロンの窓は南向きだった。窓の外を見れば街並みと平原と海が一望できたが、今の関心事はこの方角には無い。雪に霞んだ景色を眺め、リエルは口を硬く引き締めた。

彼女は既に選んでこの場に居る以上、諦めたいとも思わない。精一杯やれることをやろう。リエルはそう考えた。

その日も雪は多く降った。今やシュエレー神山の峻峰は一切の山肌を隠し、ひたすらに純白のみを敷き詰めた巨大な壁となっていた。が、それを見て人々は「今年は雪が多いな」程度にしか考えなかったという。

翌日、朝食を終えたリエルはレアも引き連れず一人で城内を散策していた。ヒーム・エンデルとの面会にはまだ時間があることだし、レア達は何かしらにつけて忙しそうなので「必ず衛士の目が届く場所に居ます」と告げた上で許しをもらったのだ。真面目なリエルがこの約束を破る事は無いと判断した上であり、無論リエルも約束は破らない。

「おはようございます」

警備兵らに声を掛けては軽い足取りで歩くリエル。そのふわふ

わと跳ね回るような姿はどこか幻想的な存在にも見え、その後姿を見送る兵士らの顔を緩ませた。

やって来た場所は母の墓所。遠目に兵士が見守っているが気にせず、墓石の前にしゃがみこんだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

綺麗に手入れが行き届いている。誰かが小まめに掃除してくれているらしい。

「・・・・・・・・お母さんは言っていましたね。本当にやるべきことを見つけたら力を惜しんではいけない。恐れず諦めず逃げ出さずに全身全霊を注ぎなさい、と」

目を閉じて黙祷を捧げる。母の言葉はこの胸に、脳裏に全て刻まれている。心はいつも共にある。

リエルは立ち上がり、スカートの裾に付いた土を払い落とした。いつの間にか近くに女性兵士が来ており、手に付いた土を拭うタオルを差し出してくれた。リエルが手を拭き終えるまで待ってから彼女はタオルを回収すると、物も言わず一礼してまた遠くから見守ってくれる。

礼儀正しく、かつて母に教わったように女性兵士に礼を言う、リエルは再び城内へ戻った。次に向かったのは執務室である。

扉の前に立っていた警備兵にしばらく誰も入れないでください、と言い置いてリエルは執務室に籠った。時刻はまだ昼にもなっていない。ヒーム・エンデルが来るのは昼過ぎだから、まだまだ時間はある。

リエルはかつての自宅から引き上げてもらった私物を大きな棚を用意してもらい、そこに詰め込んでいた。その中から数冊の分厚い本を取り出す。

「・・・・・・・・防壁なんていらぬのに、お母さんたら。ええと、暗号表は・・・・」

一冊には語学辞書のように単語と対応する言葉、あるいは文章の組み合わせとそれがどう意味を曲解するのか、などが全て直筆で記

されていた。著者名はおざなりながら、ミュシエ・タナックとある。一冊には膨大な量の文章が一切途切れること無く延々と書き綴られていた。句読点すらない文章は1000ページを超えて続いており、巻末にはそっけなく、ミュシエ・タナックと記されている。

残る3、4冊は全て秘術の教本だった。ミュシエ・タナックが王立学院を卒業した際に持ち帰ったものである。紙は製造が難しいためここにあるだけでかなりの貴重品になるのだが、本来門外不出の王立学院の教本とあれば輪を掛けて貴重品だろうに、これは所々虫食いがあり、手垢で汚れて読み古されている。リエルが幼い頃から受けた教育は、この教本を理解する所から始まった。今や懐かしい記憶である。

秘術。このイウスイーリアという世界に住まう者達に与えられた発展した技術がそれである。太古には奇跡、中世には魔術、呪術、法術などと呼ばれた超自然的テクノロジー。扱うには膨大な知識と素質が必要とされるため、ほとんどは学問として習得される。そこには数学、言語、生物学、科学、気象、哲学的分野を内包しているため総合学問という見方もできるが、つまりこのフィルラント王国が学問の聖地として名高いのは、秘術の聖地としてという意味に同義となる。

この秘術というものはありとあらゆる現象を代用する技術で、簡単なものは小さな火を点けたり、大気中の水分を凝縮させて水を作ったりというものになる。より複雑なものになると、物理的な機構とも組み合わせて大規模な機械を作成したり、天候の一部を制御する術まで存在する。

「雪を溶かす・・・雪・・・大熱量で瞬時に水蒸気にするのがいいかな。でも、雨で洪水になっちゃう。ううん、なら風も同時に制御して・・・」

ページをめくり、横に置いたもう一冊の辞書のような本と見比べながら読み進めていく。句読点の無い本はその全てが暗号になっており、特定の場所にある特定の単語を一つの文章の区切りとしてい

る。その項目数はページ数の三倍ほどになるだろうか。とても子供が気軽に読めるものではないが、リエルは慣れた様子で次々と目を走らせる。

時折リエルは暗号書から目を離さないうまま、手をそつと秘術の教本に触れて軽く目を閉じた。それが何を意味する行動なのか客観的に知るのは不可能だが、往々にしてその動作の直後には何かを閃いたように暗号書のページを飛ばしてめくったり、手元に用意した紙束に羽ペンで複雑な紋様や文字列を記述したりもしていた。

「困ったわ。風・・・山からの吹き降ろしを利用して・・・でもシユエレー神の領域だわ。ううん、それでも雪と一緒に落ちて来る大気を巻き上げるなら・・・いえ、やっぱりだめ。それだけの上昇気流だと公式が・・・」

再びページをめくり、目を閉じ、紋様を記す。これは秘術の公式を組み立てているのだ。秘術は万物の持つ真の名前を基礎として原始的な文法に当てはめるところから始まる。これを術として実行するのは個人の資質だ。霊力という力は誰でも持っているもので、個人差はあるがこれが術を行使する際の代償となる。

公式を霊力で起動させる。これが秘術を端的に説明したもの。実際は遥かに複雑な処理を必要とするのだが。

「・・・お母さんの公式だと古いのかなあ。学院長先生が来たら聞いてみようかしら」

少なくとも10歳で秘術を学ぶ者など前例が無い。リエルはこの違和感ある光景の一部になっていることを不自然などとは感じていないのが最大の不自然だった。

「・・・だめね。わたし一人だとうしようも無いわ」

ぱたん、と本を閉じた。仕上げとばかりに一枚の紙を取り、円形の複雑な紋様を書き込んだ。身に纏う部屋着に羽ペンからインクが飛んで黒い染みを作るのも構わない。

「できたあ」

書きあがった紙を乾かしていると、部屋の扉がコンコンと音を鳴

らした。

「はぁーい」

「失礼します。お着替えの用意ができました」

「はい、いま行きます」

紙片は丁寧に巻いて筒状にする。何か入れるものを探したが見つからず、仕方なくそのまま綴じ紐で縛って持つて行くことにした。迎えに現れたのはメイドの一人。レアの部下で、名前はサエラ。

「あら陛下、お持ち物があれば預かりますけど」

「そうですか？ じゃあお願いします」

「はい確かに。学院長様がいらしたらお返しすればいいですかね」

「はい、そうして下されば」

「承知しましたー」

やけに気安いこの少女。少女と言えるだろう、生まれつきの栗色のくせ毛を頓着することなく暴れさせた快活なその少女は、年齢はまだ十代半ばを過ぎたくらいらしい。仕事はともかく余りにもお偉方に対する態度がなっていないので、いっそ陛下付きの専属メイドにすればリエルも話し相手が出来るだろう、とレアの指示でこうなった。出会って数日だが、実際に二人は特に気負うものも無い関係構築しているようである。

「サエラさん」

「サエラですー。さんは要りませんよ陛下」

「じゃあサエラ・・・あの、じゃあわたしも陛下とは・・・」

「じゃあリエル様ですね。何でしようリエル様」

「その、サエラはお城で働くのは楽しいですか？」

「楽しいですよ？」

余りにも迷いの無い即答だったので質問したリエルが言葉に詰まってしまった。サエラは真実楽しそうにリエルの手を引きながら次の質問を待っている。

「母さんがこのメイドだったんですけどねー。この前の先王様の事故の時に馬車に乗ってたんですけど、一緒に巻き込まれちゃって」

「え………」

「命は無事だったんですけどね。足を大怪我しちゃって、もう働けなくなっちゃったもんだから代わりに私がって頼み込んでやっとこさこの前からここで働かせてもらえることになったんで……どうしましたリエル様？」

「い、いえ。その……ごめんなさい」

辛そうに俯くリエルを怪訝な表情で眺め、サエラはその肩を強く掴むように叩いた。

「なあーに言ってるんです！リエル様が謝ることじゃないでしょう。逆に私の母さんがリエル様に謝らなくちゃいけないじゃないですか、それじゃ」

「そういうものですか」

「そういうものですよ。あ、働き始めたのがこの前だからって心配しないでくださいね。子供の頃から母さんの手伝いでよくお城の中を走り回ってましたんで、そこの新人メイドよりはいい働きしますよ私」

「ふふふ、そうですね。サエラはお城の中に詳しいのでびっくりです」

これも事実である。先日シュナとレアに城内を案内されたが、サエラはあの二人よりも城内の細部に詳しい様子だった。下手をするとな城内にいる誰よりも詳しいのではないだろうか。

面会用の衣装に着替えるため、数人がかりでメイド達が手伝った。サエラは着替えの手伝いはせず、持ち物の点検など細々したところをやっていたが、リエルが衣装替えをするたびに「かわいいですねー！」や「似合ってますねー！」などとはしゃぐので、仕舞いには笑いながらも年上のメイド達に追い出されてしまった。

「あの子は仕事は出来るんですけどねえ」

「本当に、陛下に対してもあんまり不躰だって侍従長にも言ったんですけど。まあいい子なんで……」

長く城内に仕えた彼女らとしては、同じく長く成長を見てきたサ

エラがかわいいのだろう。概ね庇うような態度を見せていた。

「わかっていますよ。サエラとはわたしも仲良くしてたいです」

「まあ、陛下にそう言っていただけ」と

着替えを済ませた頃、外にいたサエラが部屋に入ってきた。リエルの姿を見て「あら可愛い」と言うので、リエルは周りのメイド共々噴き出してしまった。

「なんです皆して。それじゃリエル様行きましょうか。丁度学院長様もお着きになったそうですよ」

「そうですか」

レアが居ない時には大抵このサエラがリエルのお供をしている。基本的に借りてきた猫のように大人しいリエルとは正反対の性格だが、なんだかんだで彼女が騒がしくしているのは見ていて楽しいものだった。

「侍従長も来られたら良かったんですけどねえ。あの人若いもんだから早く皆に認められなくちゃって自分からたくさん仕事を引き受けちゃって。難儀な人ですね」

「そ・・・そうなの？」

「あ、内緒ですよ。私がこんなこと言ってたって」

「はい、内緒にします」

二人して笑い合いながら廊下を歩く。サエラに手を引かれているので最初は気に留めなかったが、サエラには城内の複雑な構造も目くらましの模様も通用しないらしく、まったく迷うことなくスイスイと歩いていた。そのためリエルは感心してサエラを見上げながら歩いていった。

「お、レアさんです。じゃなかった侍従長ですよリエル様」

「はい」

「ここからは侍従長にお任せですね」

サエラが親しげにリエルと手を繋ぎ話しかけているので、レアは呆れたような顔をしていた。

「あなたはここじゃ先輩だけど、本当に礼儀は学ばなかったのねえ」

「でへへー。礼儀の方も侍従長にお任せしますよ」

面白いこと言う、とリエルは再びサエラを感心したように見た。視線に気付いたのかサエラはリエルに笑いかけ、また気安い調子を見せてリエルを見送った。

「それでは私はここで。あそうそう、これ返しておきます」

例の紙筒を受け取るリエル。サエラはその頭を軽く撫で、レアが睨むので舌を出して退散していった。

「面白いひとですねえ、サエラは」

「少々面白すぎるくらいはありますが・・・まあ、有能ですから。私が引退するようなことがあれば次の侍従長は彼女に任せることになりましょうし」

「そうなのですか、すごいです」

今度はレアに手を引かれ、連日通い慣れつつある面会用のサロンへ向かった。レアがリエルの持つ紙筒を気にしたが、リエルはどのみち学院長との面談時に話すから、と説明するのみ。

時々リエルは窓の無い方角へ首を巡らせた。北へ。

「先日以来ですか。間近で見えるほど、なるほどよく似ている。母上にも、お父上にも」

ヒーム・エンデル王立学院長。老齢ながら先見の持ち主として三十余年の間も学院を纏め上げる人物である。既に七十代を超えているが、見た目より遥かに若々しいとレアは感じ、リエルは母を知る人物に喜んだ。

面会はまず挨拶的な会話から始まり、リエルは其中でこのエンデル氏がどれほど秘術に堪能であるのかを探った。

「セス教の教義、いえ神話にありますな。始め天は塗りつぶされ、次にセスなる者ありき」

「天使様の公式ですね。人間には与えられなかった法則。兄弟は太陽神オルヤを中心に戴き星々の中核たるイウスイーリアを作った。かくて兄弟は長女ハウリュエターと次男バンリュューヤに夜を預け、

大海はカンジャラに任された」

「所詮人間に手の届く範疇ではありませんな。地上に下された物質万象を介するのみが秘術」

「……と、思いでした。そうですね？」

「……ですな。陛下のお母上……ミュシエ・タナックが示した。いや、或いは遙か神代には存在したのかもしれませんが」

レアには最早二人の会話の内容がわからず、ただ飲み物の用意をし、傍に控えるばかりだった。一つ気付いたことがあるとすれば、それはエンデル学院院长がリエルの知識を目の当たりにしてもあまり驚いていない、という点だろう。

「しかし、ならば陛下はもしやあれを託されて……？」

鋭い雰囲気を持ちながらどこかにユーモラスなものを隠し持つ。エンデル学院院长を知る人物は皆こう言うが、今この場での彼はどこか堅苦しい態度を見せていた。例えば、学徒に講義をぶつ教授のような。

「……あれ、とは」

「……よろしい、そのお答えで十分です。私はタナック君が卒業する際に直接相談を受けましたからな、あれの内容はともかく存在だけは知らされてますよ」

「そうですか。なら、先生を信頼することにします」

「はは、これは手厳しいことだ」

愉快そうに笑うエンデルに、リエルは黙ったままあの紙筒を手渡した。エンデルは興味深そうにこれを開き、描かれた模様を眺める。老齢ながら視力に衰えは無いらしい。

「……公式陣ですが、さて見覚えは無い。これをどちらで？」

「先ほどわたしが作ったんです。母の知識を使って」

「……作っ……は!？」

エンデルはもう一度この模様を見た。教本に載っているものどころか専門の研究機関で扱う公式よりも複雑でありながら高い完成度

の公式。常識で考えれば年端の行かぬ少女がこれを作ったなどと信じられるものではない。

だが思い出すのは在りし日のミュシェ・タナックである。あの才能、あの知識が確実に受け継がれたというのなら不思議なことではない。ただ信じられないだけで。

「これを、陛下が？」

「はい。一部暗号のまま公式にしますので読めないと思いますけど、ほぼそのまま実行できます」

「……タナック君の知識を、と言いましたな」

「はい」

「……これは気象操作か？ここは精霊、で支えて接続と。受動詞なのですね？」

「起動形式は。すごいです、解説できたのですか？」

「うん？いえ周辺の単語から推測しました。ふふ、あの子らしい。暗号化が適当ですな、どうやら。修正すべきです」

「量が多いけど、検討してみます」

「……神々の存在を仮定した術、ですか？」

「はい、あくまで仮定ですね。現実には天文学も混じってます」

「実在の超越種を公式には取り入れられなかったと？」

「いえ、そうではないみたいです。対価を抑えるためのレプリカです、これは」

「ああこの公式は、陛下が編んだものでしたな。そうか……」

「同じ形式でオリジナルが作れます。でも、そっちは母が組んだので門外不出です」

「はっはは、そうですね……秘密にしておくべきだ」

レアが混乱している。二人とも時として主語などを省略して話しているためだろう。

「しかし、これで何を？というより起動するには相応の代償が必要ですが、これはどうするのです。規模を察するに陛下が一人で使

うのは、失礼ながら少々・・・」

「え、そうですか？ たぶんぎりぎりですけど使えますよ、わたし」

「・・・そ、それはまた。なるほど、タナック君の娘であり、フィルラント王家の血か・・・」

ヒーム・エンデルが納得したようなので、リエルは立ち上がって彼を招いた。

「レアさん、尖塔に行きます」

「あ、承知しました。・・・え、尖塔・・・いえ、今外套をお持ちしますので少々お待ちを」

現役で教授も務める学院長、という想像もつこう。エンデルは尖塔の階段で体力の限界に達し、見た目若々しいとはいえ流石に生命に危険を及ぼしているのではないか、という荒い呼吸をしながらリエルに引き連れられた。レアが手を貸してくれたため何とか塔の頂上まで来れたが、その時にはもう完全にへばってしまい、汗だくで見張り台の床に座りこんでしまった。

「はっ・・・はあっ・・・で、陛下・・・見せたい、ものとは・・・」

「あれです」

「し、少々・・・はあっ・・・お待ちを・・・げほっ・・・」

レアがひたすら見張り台の床を眺めている隣で常駐の兵士が苦笑していた。せっかくなにかいい景色なのに、とリエルと二言三言の言葉を交わしている。

やっこの思いで立ち上がったエンデルは、リエルの指差す方角、北を見た。雄大なシュエレー神山の峻峰が一望できるこの場所に来るのは初めてだったが、なるほど素晴らしい景色だ。

「下からだとはわからなかったんです。角度の問題でした。ここからならわかります。・・・わかりますか？」

「さて・・・」

エンデルの目にシュエレー神山の山肌は最初いつも通り、冬の見

慣れた風景に見えた。深く降り積もった雪の肌と、雪崩の勢いを弱めるために何重にも設置された防壁。その防壁に沿う、地盤を固めるための植樹。

壁の上には雪が既に多量に積もっており、それが作る影が山肌にある種面白い陰影を彫りこんでいる。

「これがどう・・・」

どうしたというのか。そう言おうとして、エンデルは何か違和感を覚えた。

「・・・・・・・・・・？」

リエルも山肌をじっと見つめている。誰よりも真剣な表情で。

「・・・・・・・・・・まさか、陛下・・・・・・・・・・」

「資料を集めてもらいました。雪崩を見たことはおありです？」

「以前に・・・・・・・・・・いえ、そういえばここ数年は・・・・・・・・・・」

「この五年、一度も雪崩が起きていません。どんな小さな規模のものも。地盤に食い込んだ雪が地熱を奪い、万年雪になって一年中融けずに残った箇所もあるようです」

「五年も？」

「雪解け水は麓の水路に流れ込んで川に合流するのですが、本来この時期にはもう川の増水が始まっていてもおかしくないはずですが、でも水路にほとんど水は無く、それどころか雪が詰まって凍りついたままの場所もあるとか」

エンデルは手を笠にして再び目を凝らし山肌を観察した。なるほど、防壁の上に降り積もった雪が小山のようになり、今にも溢れだしそうに見える。だが問題はその見た目ではない。

「雪量は人の背丈を超えておりますな。雪の中はほとんどが氷の塊と見るべきか」

「調査に向かわせようにも道が埋まって山に入れません。シュエレー神殿の昇山者も昨年は入山を諦めたみたいです」

「・・・・・・・・・・気象観測官を呼ぶべきです。専門家に意見をもらって対策を打たねば大変なことになります」

「騎士団と王国軍の秘術士隊にも要請するつもりです」

「宰相はこれを？」

「まだ知りません。たぶん、見せてもお分かり頂けないと思って」

「でしような。私でもここに来て言われるまで気付かなかった。そもそも、教会の予言に載っていない」

「……予言？」

リィエルでも知らないことがあることに、彼女以上に周りの者達が驚いた。そういえばこれはごく一部の関係者しか知らないことだったか。

「そうか戴冠式もまだでしたかな。いいですか、教会は年の初めにその一年の大まかな出来事を神託として受け取り記録しています。政府はこれを参考に年中行事を決定します。予言された内容は確実に実現しますが、あまり具体的なものではありません。ですから教会と学院はこの内容に具体性を与える機関があり……」

リィエルの表情を見てエンデルは言葉を切った。青ざめ、打ちのめされたような表情を。

エンデル、レア、監視兵までもが気付いた。彼女の両親のことだ。

「……あ、あの……先王、シャルテ王の死は、予言されて……？」

「……いませんでした。だから皆焦った。王の事故、くらいなら予言されていてもおかしくなさそうだったものを、それすら無かった。それに……あの雪も」

王の死が、あるいはその命の危機が予め分かっていたれば前もって後継者を探す動きはあっただろう。そうであればリィエルとその母ミュシエがあんな目に遭うことも無かったかもしれない。

かも、しない。それだけではある。

「陛下、お氣を確かに。そもそも予言は人の死を明確に示してくれない。それは運命だからです。命の運命の先を示すことは、ある意味運命を捻じ曲げる行為です。お分かりですか、神々もその部分には触れずにいてくれる」

「・・・・・・・・分かります。ごめんなさい」

「謝る必要など・・・・！」

しばらく沈んだ表情をしていたリエルを見守る一同。やがて彼女は辛そうな表情のまま、それでもきっぱりと口を開いた。

「大臣達を集めてください、臨時会議を開きます。先ほどの通り王国軍にも伝えてください。レアさん、いいですか」

「はい・・・承知致しました」

「学院長先生、気象観測局への連絡をお願いしますか」

「もちろんですとも。というか、ウチの隣の建物だ」

「いつかお伺いしてみたいです」

「是非に。学生としてでも、教授としてでも」

やっとリエルが微笑んだので、レアは息を吐いた。が、まだレアには何が起こっているのか明確に理解できていない。予想はついていても。だから尋ねた。

「陛下、その前にお聞きします。何が起ころうとしているのですか？」

リエルは振り返り、決然と答えた。

「雪崩が起きます。凍結した雪が防壁を突破し、山腹の地盤ごと滑落してきます。大規模な土砂崩れなので、未然に防げなければ下手をすると城下の半分が海まで削られることになります」

「なん、ですって？」

「陛下の見通しではまだ楽観的です。いいですか侍従長、あの山肌が地盤ごと崩落すれば、まず農地は全て埋まり、雪と混ざって液状化した土砂が城下まで到達します。北部の街で一時的に勢いが弱まっても次々に流れ込む土砂が押すため勢いは止まりません。流れ込む土砂が王城の丘で東西に分かれ、いえ跳ね上がり、津波のようになっって市街を埋め尽くします」

「そんな！」

「シュエレー神山の神殿は山岳の奥・・・なるほど、神殿に影響の無い外輪山だからシュエレー神の神託は降りなかったのですな。い

や、仮に影響があってもご自身で手を打ったでしょう。シュエレー神は氷雪と試練の女神。昇山して神職に認められるのは他国の神々にも増して栄誉だと言われる存在ですから・・・そうか、我々はこれを試練として乗り越えなくてはならないわけだ」

レアはやつと事態を悟り、急ぎ先ほどの指示を完遂すべく階段を駆け降りていった。監視兵も真っ青になっていたが、リエルは彼にいつも通り職務を果たしてください、と言い置いた。

「連絡をつけた後は公式の作成をお手伝いします。よろしいですか」「そうしてくれると心強いです。ありがとうございます、学院長先生」

リエルはまだ戴冠式すら終えていない、つまり正式な王ではない。にもかかわらずこの城に來た途端、問題は山積し始めた。シュエレー神山の件と、臣下の間に蔓延する不正。どちらも表面化していなかったが、リエルは天性の知性をもってこれらに気付いた。ならば、やはり彼女は試されている。

エンデルはぐくりと喉を鳴らした。もしこの推測が本当なら、リエル・タナック・フィルラントは神々にその存在を期待された王だということになる。だから敢えて彼女の前の障害を取り除かず、助言を与えるべき戴冠の儀にも間に合わないこの時期に問題を浮上させたのだ。それが神々の手によるものか、単なる自然現象と偶然を利用したのかは誰にも判断できないことだが、どちらにせよ国家元首たる地位を与えられたリエルはこれに立ち向かう以外の選択肢が無い。知っていてこれを見過ごすならば、自らも国民も国土の半分以上を奪われるだけだ。

何故ミュシエ・タナックは死なねばならなかった。リエル一人だけでなく彼女が存命であれば、あの学院創立史上最高峰を謳われた頭脳でリエルの助けになっただろうに。

悔やんでも詮無いことだが、エンデルはリエルが余りにも気の毒だった。年端も行かぬ少女に、それが例え一国の王と認定された者であったとしても、これだけの責務を押し付けてよいものか。誰

かが彼女を助けてやらねば。

エンデルもまた決意した。この少女王の力になろうと。

「・・・ミュシェ・タナックがどのような経緯で学院を去ったかは
お聞きですか」

「はい・・・あ、少しは。使ってはならない術を作ってしまった、
ですよ」

「そう、彼女は禁術を作成した。いや禁忌ではないが、彼女の言った術が実現するならばそれは、人間の世にある限り必ず破滅を招く。それほどに強力な術の数々です。彼女はその存在を隠蔽するため身を隠さざるを得なかった。当時は少々他国ともキナ臭い情勢でしたからな・・・まあ杞憂でしたが」

遠い目をしながら階段を歩くが、考え事をしながら歩くのに慣れているのだろう。エンデルは手すりも使わない。

「今にして思えば、陛下を身ごもったのも理由の一つでしょう。タナック君と先王の関係は誰も知らず、先王も身分を隠していたがあのミュシェ・タナックだ。隠し通せるわけがない。故に、王族の面子に傷を付けまいと配慮した、か」

「・・・そうですか」

「あれをしてまさに鬼才と言うべきか。彼女が自筆した公式の記述を・・・本の形でしたが、お持ちですな？そう、それでよろしい。で・・・あれを見た時は驚愕したものだ。在り得ないと思っていた公式の全てが、暗号化されていたとはいえそこにあったのだから」

「はあ」

エンデルはいつしか目を輝かせていた。十年前のあの日に覚えた知的興奮は忘れようもない。革命だと確信したし、同時に恐るべき危険性を孕んでいるものであるとも直感した。だが、それ故の興奮危険であるを知ってなおその先を見たいと願う学者らしい欲求があった。

「物理法則の支配こそが秘術の基本であり真理。だが神々は我々が分をわきまえるよう霊力という枠を示された。どれだけの才覚を生

まれ持とうと、一般に我々の霊力は聖獣や天使の足元にも及ばない。タナック君はどうやら常人と比較して遥かにその枠が巨大だったし、陛下もそうらしい。だから私は彼女を支援した」

「………」

「タナック君は聡明でした。独力でも大抵のことはできたし、かの術のこともほぼ単独で対処できただろう。今も生きていればどれほどの秘術学者になっていたか……」

エンデルは階段を降りる足を休ませ、振り返るとリエルの目をひたと見据えた。

「陛下を見れば分かる。彼女は良き母親でもあったようだ。その知識は受け継がれたのなら、私は今日以降全霊をもって陛下を助けましょう。それが私の大願です」

「……はい、ありがとうございます、学院長先生」

第一話・「王として」

『王として』

すぐに、とリエルは指示していたが実際に会議が開かれたのはそれから三日後だった。先日の謁見の際に出席していた面々は揃ったが、半数近くの者が何やら気乗りしない表情である。

まずリエルは状況を説明した。シュエレー神山が大規模な雪崩と崩落を起こす可能性が高い、と。

『シュエレー神山の状態は例年通り変わりなく、問題ない』

会議の多数派を占めた意見がこれである。リエルは驚き、焦って説明を続けた。

「次に雪崩が起きれば防壁も役に立ちません。いえ、防壁もろとも崩れ落ちるのでより危険が増します。一刻の猶予もないのです。対処を打たなければ」

懸念する声もあるにはあった。状況を理解しているヒーム・エンデル王立学院長や雪崩が起きないのを懸念していた国土大臣ビーレツテ・パストウ・ラトレイ女史がそれにあたる。特にラトレイ大臣は驚愕し、早急に対応をと声高に言うのだがどうしても場の空気は渋い。

宰相ハンネル・オードネイが納得しなかったのも大きかった。彼は優れた政治家であり頭も柔らかいほうだが、実際に塔の上から眺めても例年通りの山肌と同じにしか見えないというのだ。彼をあてにもしていただけに、リエルは愕然としていた。

来月から始まる王立議会、そしてリエルの戴冠式のことでは頭が一杯だったのだ。特に議会では法案の改正や各庁の予算も決定されるだけに、政治家である彼らとしてはどうしても手を抜けない。ハンネル宰相は逆で、実際に見てしまった結果として「問題なし」という方向に考えが固まってしまった。これはもうどうしよう

もない。

学術的な分野に説明内容が偏ったのもまずかった。臣下の多くは秘術学を専門として学んだことが無いため、ある一定以上の知識を要求されても理解できないのだ。それに気付いたリエルが上手く説明しようとしたが、彼女には噛み砕いて彼らに教えるだけの応用力が足りなかった。むしろ余計混乱した者もいただろう。

「陛下、どうしても気になるというのであれば我々が調査を手配しておきますので、どうか来月の行事に集中していただければ・・・」
これと言ったのはペリユーク・ヤカラボ財務長官である。同様のことを騎士団長セイル・フォガリが口にしたが、こちらは調査団を編成し派遣するのが軍部の仕事になるためだろう。内心の「そんな仕事はどうでもいい」という考えが透けて見えるようで、リエルの隣に立つシュナは無表情のまま心中で怒りを膨らませていた。

結局、彼らは定例行事以外に関心を持たないのである。やるべきことだけをやり、税金から給料をもらい、どうせならこの権力を少々応用してほんのちよっぴり小遣いを稼ぎたい。大半の臣がこの文面に相当してしまっていた。

「陛下のたつての希望だというのに、何故聞き届けようとしらないのです！」

シュナの強い口調にも彼らは微妙な反応だった。薄くせせら笑う者すらあった。

激昂しかけたシュナをリエルが「待つて」と呟いて止めなければこの場で抜剣していたかもしれない。それほど大臣らの態度は目に余った。

「・・・・・・では騎士団長、わたしに兵隊を貸してください。秘術士隊を中心に百名ほどを」

誰かが「私情である」と言った。呟く程度の声だったが、リエルの言葉の直後で場が静まっていたため議場に響いてしまったのだろう。シュナが再び齒軋りし、議員らもこの発言にはいい顔をしなかった。

「滅多なことは言わぬように。次に似た発言があれば査問も辞さない」

じろりとハネル宰相が睨むので、皆は口をつぐんだ。が、リエルの要望はまだ一つも通っていない。

「それは・・・王命であれば隊を編成致しますが、先ほどの不遜な言葉に倣うのもいかがとは存じ上げるとも、やはり私には納得のいかないもので・・・であれば隊士を出すのも・・・その」

フォガリ騎士団長も齒切れ悪く。リエルはそろそろ途方に暮れそうだった。謁見の日、面会の時にはあれほど忠義を自ら示さんと主張し仕事ぶりについても懇切丁寧に説明してきた彼らが、今や別人のようだ。

気象観測官と秘術隊士の報告はほぼリエルの主張と同じで、対策すべしという意見が全てだった。にも関わらず、今回の件の全ての出所がリエルだったというだけで、その信憑性はいかがなものか、と判定されてしまった。それは「たかだか10歳の少女の主張が信頼できるものか」という不信の証明に他ならない。

先王を見て王に憂いたか、リエルを見て未熟と判断したか、あるいはその両方か。リエル・タナック・フィルラントという名はこの場においてほとんど飾り以上の意味合いを持たなかったのだ。

今ここでやっとリエルはその事実に気付き、青ざめた。ならば彼らは自分を王と祭り上げてどうしようというのか。彼らが欲しかったのは王座に納まる置物だったのか。リエルという少女はこの場にあつて不要に近いのではないか。

与えられた居場所が自分を拒絶した。

「・・・・・・で、では・・・宰相、騎士団長、親衛隊長、お願いします。わたしの指揮で動かせる兵隊の人をいくら都合していただけますか。ほんの少しでかまいません、後は・・・わたしがやります」

窮して発した言葉は余りに卑屈だった。流石に一人の少女を大人の大人達が寄ってたかつて虐めているように思え、一様に息を詰まら

せる気配がある。だが、ここで空気を読まない者もやはり居る。

「陛下は王位を軽んじておいででないか。私物化して許されるものでないことぐらいお解かりでしょう。とてもではありませんが陛下のお願いとやらには賛成し難いですな」

ペリユーク・ヤカラボだった。リエルは反論しようとしたが、彼の言葉がこの場では圧倒的に支持を受けるものであることが明白であるため、開きかけた唇は閉ざされてしまった。

更にリエルに追い討ちをかけたのは、あろうにハンネル宰相がこれに追従したことである。

「まあ、財務長官ほどに言うつもりはありませんが、時期が時期です。調査は派遣するのですから、それで良しとしてはいただけますまいか？」

レアとシュナが玉座の左右で顔から血の気を失せさせ、真っ青になった。ハンネル宰相を頼れとつい先日言い含めたのは他ならぬ自分達ではないか。ならばこの諫言はレアとシュナが言ったものに等しい。頼りにされる身にあつてこの言葉がどういう意味を持つのかを瞬時に理解し、二人は慌ててリエルを見た。が、もう遅かった。「……………わかりました。では、わたしからはもう何もありません」

ハンネル宰相としては公平かつ中立的な立場と意見を貫いたに過ぎない。だが、それが徒となった。

もうリエルは誰も見なかった。そのまま静かに玉座を降り、誰の手も借りず退出してしまった。レアがその後を追って議会場を出たが、シュナは呆然と立ち尽くしているのみ。背後では「やれやれ」だとか「やはり若すぎるな」という言葉が聞こえているが、咎める言葉は無かった。

ヒーム・エンデルとシュナ・ミュテス・ルゼだけが絶望にも似た表情を浮かべて立ち尽くしていた。他の議員が全て退出し、静かになってやっと二人は目を合わせた。

「ど……………どうしましょう、学院長」

「……………親衛隊長は動かせる兵を集めてください。私は伝手を辿って出来る限り人員を用意します」

「横槍が入るでしょう。陛下の責任に転嫁されるかもしれない!」

「……止むを得まい。何よりも対策の実行が優先するのです。失敗すれば我々も死ぬのですからな」

「そう……ですが」

最大の懸念はそれではない。

「……………へ、陛下は私達を頼ってくれるでしょうか?」

「親衛隊長……………」

エンデルにも言葉は無かった。あのハンネル宰相の言葉があった瞬間、リエルは確実に様々なものを諦めた。そういうふうには見えなかった。少なくともエンデルには、リエルの表情からそうとしか読み取れなかった。

たった10歳の少女が何もかも無くし、押し付けられ、また奪われた。

我々は何をしている。一人の少女を王国という巨大な舞台の上に放り出して放置したようなものだ。哀れなことに、リエルという少女は舞台上で舞う方法だけは知ってしまった。台本が無いだけに余計それは滑稽だった。

「ともかく、私は陛下と話をします。学院長はするように手配をお願いします」

「了解した。陛下のことを頼みます、親衛隊長」

言われるまでも無い。笑みでそう語ってシユナは颯爽と部屋を後にした。空元気のように見えたが、エンデルはそれでもシユナを見直した。若さ故か、落ち込んでいるばかりではない。打たれ強さはあるようだ。

あの少女の信頼を取り戻さねば。まずはそう誓い、エンデルも部屋を後にした。

リエルがとぼとぼと、余りにも寂しそうな後姿で歩くのでレア

はかける言葉を見失い、表情を硬直させたままその後ろに付き従うしかなかった。こんな時に何を言えいいのか。自分は働いてさえいれば気が紛れ、嫌なことを考えずに済むのだがリエルは「働くな」と言われたようなものだ。

何度かリエルは歩みを緩めて中庭へ向かいたような素振りを見せた。母の墓所へ行きたいのだろう。だが、今それをして何になるのか。それを分かっている。無為に生きていられない、リエルらしい苦労性が滲み出ている。だがその度に首を小さく振り、執務室へと向かうらしい。やはり彼女はまだ諦めていない。

そうして無言のまま執務室の前まで来た時、扉を開けてひょっこりとサエラが顔を出した。

「ありゃリエル様。丁度今掃除が終わって・・・って、どうしたんです暗い顔で」

「サエラ・・・」

リエルは継るような面持ちでサエラを見たが、すぐに顔を下げてしまった。怪訝に思ったサエラがレアを見て、どうやら何か察したらしい。

「はっはあ、さては会議で何か言われましたね。そうでしょう？」

「・・・」

「分かりますよ言わなくても。侍従長も侍従長になった時の会議だか何かで同じような顔してたことがありますからね！」

「・・・え？」

「ちょっと、サエラ」

意表をつかれてレアがサエラに詰め寄る。リエルが顔を上げて見ている。

「あの時は何でしたっけ、えーと・・・そうそう、まだ侍従長なり立てで生意気言うなどかなんとか・・・うわあ侍従長そんな怖い顔しなくても」

「・・・そ、そうなの？レアさん」

リエルに問われては答えないわけにはいかない。レアはぷるぷ

ると小刻みに体を震わせていたが、キツとサエラを睨み据えると観念したようにため息をついた。

「ええ、そういうこともありました。昔のことです」

「あの時は大変だったんですよ。ねちねち八つ当たりするもんだから他のメイド達も雰囲気悪くて、新人が二人止めましたね、あれで」

「…….そ、そんなことが」

「言わないでちょうだいサエラ。忘れたいことなのよ」

サエラはからからと豪快に笑い飛ばしてみせた。レアは変わらずむすつとしていたが、リエルはほんの少しだけ面白そうな顔になっている。

「んで、リエル様は何があったんですか？」

「そ、それは…….」

もごもごとリエルが口ごもっていると、サエラは眉間に指を当ててしばらく唸り声を出し、リエルの肩に手を置いて口を開いた。「どうせ大したことじゃないんです、そんなの。リエル様より偉い人なんていないんだから、好きに振舞っていいですよ。だから悩みなんかも溜め込まないで、ばーつと当たり散らしゃいいんです。ほら、どうぞ！」

「どうぞって言われても、そのう……」

「言わなきゃリエル様のこともつかい陛下って呼ぶようにしますよ！ 凄い嫌ですけど」

「それは…….それはわたしも嫌です。名前で呼んでください……」

レアはサエラの持ち前の感性に感心していた。これは自分には真似できない。

「でしょうねえ。私もリエル様に今更サエラさんなんて呼ばれたら不敬罪覚悟できついゲンコツお見舞いしますよ、その可愛らしい頭に」

「そ、それも嫌です」

「ああ、親衛隊長さんが来ましたよ。ついでだからシュナさんの過去も暴露しますか」

考え事をしていたのか険しい表情だったシュナがいつの間にかレアの背後まで来ていたが、サエラの大声でこんなことを言われて黙ってはいられない。はっと顔を上げると、慌てて怒鳴り始めた。

「サエラ！お前、何を・・・！！」

「言いなさいサエラ。私も聞きたいです」

「レア！？や、止めなさい！」

「ええと、傑作なのはあれですね。シュナさんが地図を失くして・・・」

「うわああーっ！やめろ！やめろ！馬鹿やめろサエラ！！」

いつもの無表情をどこかに忘れて来たかのように耳まで真っ赤に染め上げてサエラに掴みかかるシュナ。見たことの無い親衛隊長の醜態にレアは啞然とし、リエルも呆氣に取られていた。

「一体何があったというの・・・」

「聞くな！陛下も聞かないでください！」

「は、はあ。そこまで言うなら聞きません」

「サエラ、お前が不敬罪を恐れないように私はお前の口を封じるためなら如何なる手段も辞さん！分かったか！？」

「そこまで言いますか。は、はい分かりました」

いつの間にかシュナは腰の剣を半ばまで抜いていた。余りの早業にレアもリエルもシュナが手を剣の柄にかけたことにも気付かず、サエラは予想以上の反応に恐怖で引きつった顔をしていた。

「・・・とんだ所をお見せしました。申し訳ありません、陛下」

「い、いえ」

騒ぎを聞きつけた衛士が遠くから顔を覗かせるので、とりあえず部屋へ、と一行はリエルの執務室に入った。

シュナとレアはサエラの一件で頭を抱えていたが、リエルの気が紛れたこともあって気を取り直すことにしらしい。レアなどは眉

をひそめてはいたが、感謝の意を込めてサエラの肩を叩いていた。

「それで、陛下。親衛隊からは必ず兵を出します。学院長も協力を惜しまぬと」

「それは・・・ありがたいのですけど、土木工事のできる兵隊さんが居てくれたらと思つてて・・・」

「足しにはなりましょう。いざとなれば部下に命じて直接隊士を説得させることもできます。会議で同意を得られなかったとはいえ、状況を考えると形振り構つてはいられない、でしょう？」

「・・・そうです。ありがとう、シュナさん」

リエルの悩みの内容が聞きたいサエラが興味深そうに聞き耳を立てるのも構わず、シュナとリエルは話し込んだ。シュナは内心でリエルが普通に話してくれるので喜んでいたが。

「とりあえず必要なのは、大きな公式陣と水路です」

「水路？」

「はい。術で大きな炎を出して雪と氷を溶かして、無理やり小規模の雪崩を起こさせます。その際に多量の水が出来るので、これが街に流れ込まないように水路が要るんです」

「わかりました。手配します」

「あ、これを」

そう言つてリエルが取り出したのは大きめの羊皮紙に描かれた図面だった。詳細な土木工事の図面を見て、シュナはまさかと思う。

「こ、これも陛下が？」

「はい、昨晚描きました。この辺りの地形図が資料室にあったので簡単でした。この通りに水路を掘ればいいはずです。印をつけてあるものは必須で、それ以外は間に合わなければ作らなくても構いません」

よく見ると図面に引かれた水路のラインの幾つかにはバツ印が付けられている。シンプルで分かりやすいが、やはり驚きは隠せない。水路の詳細には深さの指定や必要人員の試算まで記してあるのだ。

「流石ですね・・・」

「小規模の土砂崩れが発生する可能性が高いのですが、これは術で防壁を作って防ぎます。ですから土石流を逃がすための大きめの水路もそこに記してあります。これは絶対に作ってください、お願いします」

「承知しました」

リエルは一枚の模様が描かれた紙を取り出した。シュナも秘術の知識は乏しいため、描かれたものは理解できない。

「学院長先生とも相談しますけど、そこに描いた部分は公式の共通部分なので大丈夫です。少なくともその陣が引かれていれば術が使えますから」

「は、はい」

「工事の部分は以上です。後は、秘術隊士の方が居れば居るほど良いのですが・・・」

「・・・そこは、なんとか騎士団を説得してみましょう」

「ごめんなさい、たくさん仕事を押し付けて」

「お気になさらず。軽いものですよ」

指示を聞き終えたシュナが早速この手配を行うべく、執務室を後にした。次はレアだ。

「目録を読んだのですが、レアさん、このお城の宝物庫には一角馬の角があるのですか？」

「ええ、あるはずです。直接見たことはございませんが」

「出してもらえるでしょうか？」

「陛下の御物ですので、陛下のサインがあれば基本的にどうなさろうと自由です。ただ・・・」

「・・・」

急に口を閉ざしたレアが何を言いたいのかは分かっている。高価な品物、二つと無い宝が収められた宝物庫を開き、その一つを持ち出そうとすれば必ず他の大臣らが文句を付けてくるだろう。

「手は打っておきましょう。見せびらかさなければ口さがない者も出ないでしょうし」

「では、お願いします・・・これくらいでしょうか、最低限の準備は」

黙っていたサエラが口を開いた。何が起ころうとしているのか、彼女も察したらしい。いつに無く真剣な顔をしており、リエルの目をひたと見つめた。

「・・・大雪崩が起ころんですね？」

「それを防ぐんです。みんなが無事でいられるよう、わたしもがんばりますよ」

「・・・・・・・・・・リエル様」

サエラはレアを見た。悔しそうな目で。

「サエラ、あなたは陛下のお付きとして、ね」

「・・・はい」

殊勝な態度だったので、レアは目を細めてサエラを見つめ返した。レアはサエラが幼い頃から、サエラはレアがこの城で働き始めた時から仲だ。互いのことはよく分かっている。

サエラに後を任せ、レアも部屋を出た。宝物を持って来るだけでは済まない。彼女もリエルの言外を把握し、動こうとしている。リエルがそれを意図したかは別として。

これから彼女らがやろうとしていることは、他の臣下の意思を完全に無視したものだ。反発があることは絶対に覚悟しなければならぬ。だが、反発があろうがなかろうがやらねばならない。母が遺した励ましの言葉に従って、力を惜しまず恐れることなく、諦めず、逃げ出さず、全身全霊を尽くして。

その翌日から、城の北方では予定に無い兵士達の行動が見られるようになった。防寒着を着こんでいるため所属は分からないが、農夫や民間の工夫も交えて広い区域で何か作業をしている。そのほとんどが農牧地帯の雪を掻き分け、地面に溝を掘る工事に見えた。が、その他に広大な平原部分を占有して降り積もった雪をどかし、地面に杭を打ち込んだり浅い線を引いていたり、一見して統一性の

無い作業に見えるものだった。

彼らは黙々と作業を続け、時として極寒の雪降る夜を通してまでそれは続けられた。事情を知らない者がふと尋ねたりすると、一樣に彼らは明らかに焦り殺氣立った必死の顔を見せ「この付近に住む者なら、できるだけ南方に退避したほうがいいだろう。騒ぎが起きると絶対に怪我人が出るから、この忠告を忘れず他の者にもそれとなく伝えてくれ」と言うのだ。しかし北方に住む農民らは、これで十分だった。長年この地で、この大地と山と気候を相手に仕事をし生きてきたのだ。そろそろあの山は危ないのではないか、と心のどこかで感じ取っていた。

一週間後には北部農牧地帯に住んでいた民は全て南部に移動し、姿を消していた。

「これはどういうことですか」

「どういう、とは？ お話が解かりかねます」

「白々しい・・・！ 我々の目を節穴とでもお思いか、親衛隊長」

「言いたくは無いが、だからこそ我々も行動しているのです、財務長官」

「なんだと！」

既に来週に迫る王立議会の開催日を目前に、シュナとペリユークは城内の通路で激しく火花を散らせていた。

流石に一週間も経てばリエル女王が腹心と共に兵を使って何かやっているという話は公然のものとなっており、不満を唱える声もあちこちで聞こえて来る頃になっていたのだ。

「王としてなさるべき第一のことをお忘れなのだ、あの方は！ 何故お止めしないのか、仮にも親衛隊長が！」

「仮にもとは心外な。私は親衛隊を任されたその日から、己の職責を弁えなかったことなどない」

「・・・！！」

シュナは冷ややかな目でペリユークを見た。今やシュナにとって

リエルの予測は疑いようもないものだ。先日、工事中の部下からの報告で「防雪壁の一部が破損。雪崩は発生しなかったが、植樹が根元から倒れる」という事故が起きていたことを知らされた。いくらなんでもこれは異様だろう。雪を防ぐはずの壁は鉄芯を埋め込んだもので、地下深くまで差し込まれている。簡単に破損するものではないし、倒木まであったのに雪は落ちてこなかった。雪中で巨大な氷が形成され、重量に耐えかねたために防壁は折れたのだ。

それとなくだが、ペリュークにも何度も説明はしてある。だが彼は一向に話を理解しない。それどころか近日に迫った重要な行事に執心であり、これに専念せよとシュナとレアはおろかりィエルにまで強く言ってくる。レアは既にうんざりしたようで、露骨にペリュークらを避けるように城内の目立たぬ順路を使って歩き回っている。会わないで済む道があるのならとシュナもこれを教わりたがったが、常日頃城内を歩き回っていないと道を覚えられない、として拒否された。おかげで今ではペリューク始めリエルに否定的な意見の受け役はシュナが一手に引き受けるはめになっている。

「何が言いたいのか！　こうして面と向かっているのだから、含まず言えばよろしからう！」

「……失礼ながら、財務長官殿におかれましてはどうやら被害妄想が過ぎるのではありませんか？」

「何だとおっ!？」

ハンネル宰相はあくまで中立を通すらしい。是非を問う議論には参加せず、最初こそリエルを抑える意見も出たが今では黙認状態にある。これは非常にありがたい。少なくとも宰相はリエル女王に完全に否定的ではないというだけで、他の大臣らへの牽制になっているからだ。

とはいえ、一方で発生しているシュナとペリュークの激しい確執についてまで黙認しなくてもいいだろうに、と若い議員の面々はうんざりしていた。こう毎日のように城内で気焰を吐かれては自分達

の所在がどうにも薄くなってしまう。同調すべきペリユークも相変わらず空気を読まずに感情的になるので、元々リエルに反対だった者達も付き合いきれないとばかりに好き勝手に振舞ったり、もう支離滅裂だった。

「貴公の言動は目に余る！王立議会では査問も覚悟しておくことだな！」

「恫喝とは文官らしくないことを。別に正々堂々正面からおいでにならずともよいですよ」

「ああ言えばこう言う・・・！！」

「査問・・・査問ですか。よいでしょう、次の王立議会が楽しみです」

「その言葉忘れぬことだ！」

双方捨て台詞を残して決別。これをほぼ毎日やっているのだから彼らもよく飽きないものだ。

シュナは親衛隊隊長として与えられた執務室に向かった。広い部屋ではないが、あそこが今一番くつろいでいられる。とりあえず王立議会に向けての準備があるのはシュナも同じだし、最低限の用意が無ければ部下の給料も賄えなくなる。それにそろそろ工事が終わる。突貫だったが農夫らが協力的で、思いのほか計画は早く進んだようだ。

あてがわれた部屋はリエルの執務室の丁度真下にある。居住性も装飾も乏しい事務的な部屋は、リエルをして「お仕事がはかどりそうですね」と言わしめたが、事実この部屋の際の無い空気はシュナの堅苦しい性格に合っていた。ささくれ立った今の気分を落ち着けるには向かないが、ベクトルを変えてやることはできる。

シュナが部下に命じ、自身も歩き回って騎士団の兵士を勧誘したリストに目を通す。紙束にしてやっと五十枚を超えたが、肝心の秘術隊士はまだ二十人程しか集まらない。

「そんなにあの団長が怖いものか・・・？」

騎士団の職務を一時放棄して親衛隊に、ひいては陛下に協力して

ほしい。こう言われて協力しない者のほうが普通は少ないだろうに、彼らは妙に拒みがちだった。特に多いのが「団長を裏切れない」という意見だ。

セイル・フォガリ騎士団長は自他共に認めるナルシストだが、そもそもどういう来歴なのかシュナは知らない。外見年齢は異様に若く見え、青年と言っても通じるが実際は40代に近かったはずだ。むしろ若い頃の彼はどれほどの美貌の持ち主だったのか、想像すると寒気すら覚える。

騎士としての腕は悪くないと聞いた。外見に反して壮年に差し掛かっているらしいが、その年齢でも団長位には早いというのが普通の考えだろう。それはシュナもだが、彼女の場合はまた特殊である。ともあれ、地位に相応しいものがあると思うのが自然であり、そこそが彼の部下の忠義を磐石たらしめているのか。シュナには今一つ分からなかった。

「・・・仕方が無い。残りは学院長殿に任せるか」

シュナは執務机の引き出しを開け、忍ばせてあった酒瓶を出した。中身は麦から作った火酒である。それを同じく引き出しの中にあっただショットグラスに少量注ぐと、勢いよく飲み干してしまった。その一杯だけで、瓶は再び引き出しの奥に戻される。

城内でも場所によっては氷点下を下回るこの北国で、臣下でも執務中の飲酒は咎められてはいない。むしろ体を温める行為として、適量であれば推奨されることもある。シュナの場合はそれが問題なのではない。

「・・・いやいや、まだ執務中だぞ」

酒豪だからだ。こうして引き出しの奥にしまい込んで自らを律しなければこの瓶一本程度、即座に飲み干してしまう。流石に酩酊してしまつては処罰は免れない。

名残惜しそうな右手をぴしゃりと打って、シュナは書類を携えて立ち上がった。リエルへの報告へ行かねば。

部屋の外に出るとサエラが居た。

「…………どこにでも居るなあ、サエラは」

「へっへん、お城の中で鬼ごっこでもしてみます？絶対負けないですよ」

「それはおっかないな。で……用は」

「あらせつかち。ってお酒の匂い。また飲みすぎてないでしょーね」
「……お前には勝てる気がしないな」

一体サエラは城内の者達の弱みをどれだけ握っているのか。サエラに悪意が無いのが救いだろう。

シュナとサエラは連れ立って部屋を出ると、サエラの先導に従って人目の少ない通路を歩いた。こういう時彼女の経験は非常に便利である。

「やっぱリエル様思いつめてるみたいですねー。私達にも内緒で何かやろうとしてるみたいです」

「そうか……」

「……止めなくていいんですか？」

「いざとなれば。だけど陛下が何をなさろうと、私はそれを手助けするだけだ」

「そりゃあそうですね。ああ、そうだこれこれ、忘れてた」

サエラが手渡した数枚の書類には、先日リエルが作った秘術の公式と似た模様や、様々な指示が記されていた。

「…………ふむ、この通りにすればいいのだな？」

「そう言っていました。学院長と二人で根つめて頭ひねってましたからねえ。今はちよっとお昼寝させてますよ」

「そうか。わざわざすまん」

「はいはい。それじゃ私はリエル様に子守唄でも披露してきます」
「……………ほどほどにな」

昼寝なら仕方が無い。集めた隊士のリストは保留し、シュナは指示書に素早く目を通した。なるほどさっぱりわからないが、ともかくやるしかない。

シュナは外套を羽織ると、城の外へ向かった。厩舎から馬を一頭借りて北部市街へ出たのは昼を回った頃だが、曇天が続いているため正確に時間が測り辛い。

北部市街は土族街である。軍人の名門などはほとんどこの北部に集中して居を構えており、軍部の兵舎なども大半が北部に設置されている。広い土地が確保できるため演習をやりやすいから、というのが最たる理由だが、更に北部に住む農民らとはあまり折り合いが取れていないのも旧来の事実であった。とはいえ長い歴史の中で双方ともこうやって共存しているのだから、ある意味折り合いは取れているのだろうか。

シュナもこの北部の出身である。綺麗に区画整備が施された街並みを馬で駆け抜けるのも幼い頃から数えて何度目になるだろうか。昔はお転婆でよく父に叱り飛ばされた。

石畳の街並みが途切れ、黒土と雪の道に入る。春になれば緑鮮やかな草原の道も、まだ雪に閉ざされたままだ。

重い馬の足音を聞きながら走る内に、前方から別の馬が走り寄って来るのが見えた。乗っているのは兵士か。

シュナは胸騒ぎを覚えた。何故あの兵士はあんなに馬を飛ばすのだ、必死な形相で。工事はじきに終わるはずだ。喜ばしいことではないのか。

「親衛隊長ーっ!!」

兵士が叫んだ。シュナは馬を止め、彼を出迎える。

「どうした!」

「大変です、陣が!」

「!!」

また、雪が降り始める。

「……ここまで、やるのか」

シュナは完成間近だったはずの巨大な秘術の公式陣を前に呆然とした。

街の一区画にも匹敵する巨大な陣は、ほぼ完全な真円を基準に作られる。これほど巨大なものは大抵が軍事目的の術になるが、ともかくその作成は極めて難しいものとされる。円の中心点を決め、同一半径に杭を打ち込み、乱れなく線を引き、内部に複雑な模様を描き込み、それらが公式として成立するよう白砂を用いて線を明確にし、雪や風で線が消えないように枯れ草などで保護する。前回リエルに指示されたものを作るだけでも今日まで、約一週間を費やした。水路の作業との並行だったが、この難解な図面を正確に地面に再現するのは至難の業で、予定より遅れた程なのに。

陣が、壊されていた。

「朝になって作業に入ろうとした時にはもうこの有様で・・・工夫らを動員して復元していますが・・・」

「馬鹿な・・・」

杭は引き抜かれ、白砂はめちやくちやに乱され、無駄な線が書き足され、無意味な場所に穴が掘られ。

これでは公式として全く機能しないではないか。

「・・・・・・・・誰か、これをやった者は」

「不明です。昨晚、雪が降った間にやられたようで・・・」

明確な妨害行為だ。恐らくあのペリユーク辺りか、誰かが兵を動かしたのだろう。騎士団長は知っているのか。宰相はどうなのだろう。二人に問い詰めなければならない。

シュナは言葉を失い、しばし呆然としていた。余りの事態に頭が追いついてこない。隣で先ほどの兵士が何か言っているが、それすら耳に入ってこなかった。

どうする。どうすればいい。山肌の雪はいつまで保つ。

秘術のほんの基礎くらいなら知識はある。陣公式は秘術を発動する手順を大幅に簡略化するためのもので、特に複数人数で同一の術を行使する場合に効果を発揮する。公式の長文を読み上げる作業を加えると、いかな訓練を積んだ秘術隊士であろうと詠唱にズレが生じ、公式が正常に機能しなくなるからだ。だから集団で一つの術を

用いる場合はほぼ必ずこのような巨大な公式を陣として作成する。

陣は一度作ってしまえばそれでよかった。保護さえ出来ていけば線は雪の下でも機能するため、放置していろいろが問題ないはずだった。だがこのように破壊されてはどうしようも無い。そして、いくら秘術士をかき集めてもこれでは何の意味も無くなってしまった。

「す、水路は無事か？」

「はい、健在です。兵を一部回して警護につかせましたが・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

雪が濃くなる。二人は天を仰いだ。

「ともかく復元作業だ。基本の線は残っているんだろう？」

「はい。ですが工夫らも疲弊して・・・」

「やるんだ。やらなければどの道先が無いのはわかるな」

「・・・・・・・・はい」

自分も手伝おう、とシユナは馬を降りた。兵士も頷き、続こうとした。

だがその時、二人の背後から蹄の足音が急ぎ近づいてきた。

胸騒ぎが膨れ上がる。隣の兵士も似たようなもので、泣き出しそうな表情をしていた。馬を走らせ、陣を一目見るや絶望にも似た表情を浮かべていた男は気象観測官の制服を着ていたからだ。

「こ、これは・・・親衛隊長・・・」

もはやシユナには言葉を発することができなかった。男の顔を見据え、言葉を待つ。

状況は見れば分かる。観測官の男はわなわなと唇を震わせ、馬から降りた。

「・・・・・・・・ほ、報告です」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「吹雪が・・・吹雪になります。国内全域に警戒令が出されました。一両日は外出規制です。そ、それで・・・これは」

「・・・・・・・・・・見ての、通りだ」

「そんな・・・・・・・・」

風が強く吹き始めた。工夫らも呆然として手を止め、天を仰いでいる。隣に立つ兵士と観測官は唇を真っ青に染め、それでも絶望が寒さを上回ったか身じろぎもできていなかった。

シュナは急に体中から力が抜けたように感じた。膝を地に付き、焦点の合わない目で宙を見つめる。兵士と観測官が何か叫んで駆け寄るが、シュナはそのままぺたりと尻餅をついてしまった。

吹雪になれば作業はできない。無理をしても凍死者が続出するだけで、作業が進むわけがない。

「天は・・・天は我々を見放した・・・」

南海の湿った空気が空を包み、雪が更にひどくなる。

あの山の雪は、この吹雪で限界を超える。

第一話・「フィルラントの少女王」

『フィルラントの少女王』

事実として、シュエレー神山の異変を察知するのは神懸りのな直感を要するものだった。気象観測官を総動員しても雪量の異常などを看破するのは難しく、国内中を見渡しても独力で気付いた者は片手で数えられるほどだったはずだ。それ故に信憑性は皆無に等しく、他大勢から見ればいつも通りのシュエレー神山にしか見えなかったのも、事実。

ハンネル宰相が自分の目で見て問題なしと納得してしまったのも無理はない。彼とてこの国に生まれ育ち何十年もシュエレー神山の白壁と共に過ごしてきたのだから。なまじ若い観測官よりも確かな目を持っていると言っても過言ではない。

議員らの反発があったのも不自然ではない。王国議會は国家の運営そのものに直結するため、これを軽んじることは即ち国政を放棄すること。つまり、先王シャルテと同じ道を歩むのかと諫める声でもあったのだ。彼らとて後ろ暗い部分はあれど、何も国益を破壊しようと思ったわけではない。むしろ逆で、ある程度正常に国政が機能せねば彼らも立ち回れないのだ。自分のためであり国家のためでもあった。一から十を非難できるものではない。

ただ彼らは優先順位を間違えたただけだ。ただし、妨害工作を行ってまで主張するほどのものかどうかは話が異なるが。

その日は朝から快晴だった。朝日がシュエレー神山を眩しく輝かせ、雪原は太陽の熱でじわりと融けて水路に流れを作り始めている。北部市街は一面雪まみれだった。家から出る熱で道路などは雪も融けているが、一步街から出れば平原を貫く黒い道も閉ざされ、シュエレー神山までただ広大な雪原が形成されていた。

昨日までの吹雪がこの景色を作ったのだが、これは本当に珍しい光景でもないのだった。年に一度か二度、毎年このように雪が積もって街は閉ざされる。例年通りの光景なのだ。

その雪原の中を一人の少女が無謀にも歩いていく。リエルだった。

右手には白い杖を携える。一角馬の角と称される宝具である。重いものではないが、背の低いリエルが持ち歩くには長く、どうしても多少邪魔になった。

時折リエルは雪に足を取られて転んだ。その度にじたばたと手足を動かし、懸命に立ち上がり、歩いた。

リエルは子供で、体重が軽いのが良かった。雪量は大人の背丈の二倍近くに達しており、この上を歩くのは小さな子供以外には不可能だったろう。大人では雪に沈み、そのまま凍死してしまう。

手袋、マフラー、厚いコート。全て雪にまみれ、もはや防寒着として用を成しているかは分からない。頬を痛々しく真っ赤に染めて、鼻水をすすり上げて、リエルは必死に前へ進む。

先日のシュナを思い出す。絶望一色に染まりリエルに手を付いて謝った彼女を。何を謝る必要がある、シュナはよくやっていたのに、とリエルは何度も言った。だがシュナは涙混じりにリエルに謝罪を続けた。

レアが沈痛な面持ちでシュナを部屋に連れて行った。サエラは空元気でリエルを励ました。

ヒーム・エンデル学院院长は最後まで議員らを説得し続けていた。だが宰相の決定の下、何よりペリユーク・ヤカラボの声は大きく、総意が覆ることは無かった。

もう手立ては尽きた。陣公式が失われた今、秘術隊士を動かす意味すら無くなってしまった。

だからリエルはたった一人、誰にも言わず城を抜け出したのだ。

雪原の中に巨大な円形の窪みを見つけて、リエルはやっと一息

ついた。恐らくこの場所が陣を敷いた場所だろう。街の一区画ほどもある巨大な円形は先日から陣の敷設作業の間中、雪をどかし続けていたため分かりやすく表れたのだ。

きよろきよろと視線を巡らせると、もしも雪に埋まった場合に備えて設置された巨石が雪から顔を出していた。リエルはまた手足をばたつかせるようにして雪の中を這い進み、巨石の上によじ登る。腕力の乏しいリエルにとってそれは非常な苦労を強いられる行動だったが、非力さに震える腕を渾身の思いで動かした。

岩の上で背後を振り返る。明け方に城を出て、もう太陽は真上に近い。正午を過ぎてはいないがじきに昼だ。それほど彼女にとって遠い距離。

荒い呼吸を整えていると、不意に涙が落ちた。ぼろぼろと流れ落ちて、すぐに止まってしまったが。

城に居たのは一ヶ月にも満たない。それでも彼女にとっては夢のような日々だった。食べるものも着るものも、寒さにも困ることの無い日々。城内の者は皆優しくしてくれた。

あの国はどうなるだろう。きつと迷惑に思うのだろう。でも、いつか分かってくれると信じる。

リエルは岩の上に立ち、白い杖を両手で掲げた。

一角馬の角は霊力の動きを助け、増幅する秘術士の至宝。これが宝物庫に存在したのは幸運だった。

きつと成功させてみせる。皆を救ってみせる。

さあ、始めよう。

「アル・ヤトウル・イルア（因果よ辿れ）」

公式陣の無いこの場では、リエルは公式の全てを読み上げることで術を完成形に持っていくしかなかった。杖を掲げ、長い文面をひたすら読み上げる。その意味を想像し、事象として創造する。

アル・ヤトウル・イルア。因果よ辿れ。

アル・イウス・イルア。万象よ巡れ。

他の秘術の公式では絶対に見られない文頭の文句を持ち、続けて綴られるのは神話をモチーフにした文章。扱われる事象は既に手のひらに収まる規模を超える。例えば、星。例えば、災害。

母ミュシェがこれを始めとする秘術をリエルに伝える際、彼女はこう言った。

『これは神々がこの世を作った言葉。だから人間はこれを使ってはいけない』

ああ、ごめんなさい。

お母さん、お母さん、ごめんなさい、わたしは使います。リエルは何度も心の中で謝った。

何故ならわたしはこの国の王さまだったから。皆を守らなくてはならないから。

ゼルガ・ハバトは言った。「民は家族だ」と。ならばこそリエルは一層の意志の力を振り絞り、勇氣は満ち溢れ覚悟を確固たるものとして促す。

疎まれても、飾りでも、家族。リエルが一度完全に失ってしまい、運命によって再び与えられたもの。

家族を守るのならこの命も惜しくは無い。二度と失う恐怖に比べれば死をも恐れない。

秘術は完成に近づく。星々の物語の一片、太陽神オルヤの説話に基づいた荒々しい奇跡の発露。

神々の長兄たるオルヤは天の頂きに座し、イウスイーリアを見守った。太陽の始まりである。

オルヤは不埒な星々を左手に繋ぎ、右手で天を掴んだ。天動説の否定、地動説の肯定。

太陽神オルヤは軍神の性格を併せ持つ慈悲の男神とされる。その愛情は天の陽光となって星々に与えられ、星々は感謝を示すため夜空に輝き彼を崇める。

オルヤの両手は常に炎に包まれており、それまで凍てついていた世界は彼に掴まれたことで暖められ、動物達が生きていけるように

なつたとされる。

「バイロウ・アル・ガレット イラ・セレ・オルヤ・ヤハンダ」
オルヤの右手よ、今一度の顕現をして奇跡を表し給え。

リエルの眼前に巨大な球体が生まれた。

莫大な熱量と閃光を放つその球体は、太陽神オルヤの力の発露。
即ち極小の太陽である。

全身の血が奪われるようだ、リエルは感じた。霊力の急激な
消耗が体力に影響している。

小さな術ならいくら使おうがリエルには影響が出ない。それほ
どリエルの先天的な霊力は巨大だったが、今使おうとしている術
は桁が違いすぎる。流星は母の作った術だ。

「やっぱりお母さんはすごい人です」
笑顔で。

白い杖の先端をゆっくりと振り下ろす。

巨大な火球が雪原に落下し、秘めた熱量を撒き散らした。

「あれは何だ」

城内からは既にリエルの術が確認できていた。当然だろう、火
球の直径はあの公式陣と同等、つまり街の一区画ほどの巨大さな
のだ。眩い閃光が雪原に反射して城下町を照らす様は、まさに地上
に現れたもう一つの太陽。

何が起こった。あれは何だ。戸惑う声が城内を駆け巡る中、シュナ
もまた走った。

「陛下！陛下！」

どうしてリエルが居ない。

シュナはもう泣き出しそうだった。先日の公式陣の破壊以来塞ぎ
こんでいたが、今朝になって事態は急変した。どこを探してもリ
エルが居ないのだ。

レア、サエラも城内を駆けずり回っている。だがシュナはもう、

頭では分かっていた。あれはリエルだ。

「・・・・・・・・どうして！」

何故一言も、何も言い残さず行ってしまった。やはりあの会議での一件は大きかったというのか。シュナは頭を抱え、北のシュエレ―神山が見える窓の近くにまろび寄った。

あそこに行くまで馬を飛ばして半時は要する。だがそれ以前に、自分が行って何になる。

視線の先で火球が動く。空中に浮いていたものがゆっくりと落下していき、雪原に叩き付けられた。その途端、爆発的な量の水蒸気が山の麓に溢れていく。雪が一瞬で蒸発しているのだ。遅れて爆発音が届いた。

どれほどの熱量があればあんな真似が可能になる？ 秘術士隊の隊士が何十人も連携して発動させる術というものもあるが、その中にもあれほど巨大な規模の術は無かったように思う。そしてそれをリエルは恐らく一人で使っているのだ。

戦慄した。あの小さな体の我が君は、その内側に恐るべきものを秘めていたらしい。

「陛下・・・・・・・・・・！」

「これだけの爆音でも雪崩が起きないなんて・・・・！」

リエルは悲鳴をあげそうだった。目の前に見える白い壁は、いっしか地面に溶け込んだ水分もろとも地盤と同化するように凍結し、巨大な一枚の氷の板になってしまっているらしい。予想を超える事態だ。

今の水蒸気爆発が発した音で何も起こらなかった。新雪は多少流れてきたが、火球に飲み込まれて蒸発した。しかしそれも微々たる量。

もしも雪解けの時期になればどうなっていたか。水が地盤に流れ込み、その強度を弱らせる。発生するのは地滑りなどではない。山が半分崩れてしまう。

地面に染み込む前に全ての雪を気化させてしまわなければ。

「間に合って・・・お願いだから・・・」

今日は朝から快晴だった。随分雪は融けて水になったことだろう。どれほどの水量が地中に流れ込んだだろう。

もはや一刻を争う。

思えばあの雪崩避けの防壁は失策だったのではないか。あれがあるから雪は堆積し、水分は地中に入り込んでしまう。先人達は雪崩を恐れる余り簡単に短期的な効果の望める対策を打ったが、長期的な影響は予測できなかったのだろう。

火球の熱量によって生まれる水蒸気で頭がくらくらする。術の熱量を防ぐため結界を張っておいたが、防ぐのはあくまで熱量なので水蒸気は侵入してしまう。蒸気は高温になっていて、リエルは額を流れる水が汗なのか結露した蒸気なのか、もうわからなくなっていた。それにコートも暑い。今すぐ脱ぎ捨てたい。

雪はみるみる内に融けて無くなっていく。だが、やはり懸念したことが当たった。

「だめ・・・あれじゃあ大雨が降ってしまうわ」

もうもうと立ち昇る水蒸気は上空に溜まっていき雨雲を作り始めていた。この雪全てを溶かした量の水分が雨になったらどうなる。春の雪解け水は川の水位を一ヶ月に渡って三倍まで増水させるといふのに。

焦って火球の制御を誤るわけにもいかない。確実に地面を乾燥させながら山肌に沿わせなければ、自分の手で雪解け水を作り地盤を崩してしまう。ゆっくりと、火球を押し出すように動かす。

農地として再生できるだろうか。地下深くまで熱量に炙られて水分を失った土地が。懸念するが、仕方無いこと。ここで失敗すれば農地がどうこうと言っていられる場合では無くなる。

この地表はもう乾いたと見て、更に火球を押す。汗が流れ落ちて目に入るが、ぬぐい取る暇もない。喉がからからに渴ぐが、休んでいる暇などない。

山を見上げる。なんて無慈悲なんだろう。わたしがここを動けば
フィルラントの民は皆死んでしまう。その重責をただ一人に、災害
の形で押し付けてくる。

「・・・負ける・・・もんか・・・」

脚が震える。立っていられず、岩の上に座りこんだ。体力が保ち
そうにない。

「負けるもんか・・・！」

城の北門には大勢の人が詰めかけていた。シュエレー神山の異変
を見届けようとしているのだが、おかげでエンデルはシュナを見つ
けることができた。彼女は他の人とは違い、外に出ようとしていた
のだ。

「親衛隊長！」

「ああ、学院長」

顔色を見て直感した。やはりあれは陛下が一人でやっている。

「陛下ですね！？」

「そうです！は、早く・・・陛下をお助けしないと！」

だがどうやって。親衛隊長のシュナは元々騎士団の人間だったが、
秘術には詳しくないはずだ。行ったところで何ができるというのか。
複雑な心中を察し、エンデルは俯いた。

その時後方から野太い怒鳴り声が響く。

「お前達、何をしている！あれは一体なんだ！？」

ペリユーク・ヤカラボだ。いつの間に城に来ていたのだろうか。

いらいらと眉をひそめる小太りの男は集団の中にシュナを見つけ
ると、その顔色を見てにやりと笑った。

「どうした親衛隊長。あれはもしや貴様の差し金だな？独断で秘術
士隊を動かし、勝手な真似をさせている。そうだろう、シュナ・ミ
ユテス・ルゼ！？」

シュナが顔を上げた。この男は何を言っているのだろうか、と。

「学院長殿も！あなたも共犯であることは明白だ！即刻あの馬鹿騒

ぎを止めさせなさい。さもなくばお立場を危うくしますぞ！無論、議会で査問はお覚悟していただきますが」

エンデルもシュナと似たような顔だった。この愚か者は一から十まで念入りに説明しても理解しないのか。いや、確かに理解しがたいこととは思う。技術的な内容なら先日のも会議で他ならぬリエルが例を示した。彼らは理解しないのだ。

呆然としていながら、いつしかエンデルは身を震わせていた。

「陛下も陛下だ！こんな騒ぎを放置するとは、品性を疑う！所詮市井の育ちということですか！」

だがエンデルは自分の怒りは抑えねばならなかった。それより、シュナを止める必要があった。

「おのれええええええええっ！」

城内では数少ない常時帯剣を許された親衛隊長が、ペリユークに向かって抜剣していたのだ。エンデルは咄嗟に彼女を羽交い絞めにし、押さえつけた。

「貴様っ、陛下が、陛下がどんな思いでっ！！」

「ひっ……じ、城内で剣を抜くのか！？」

「離してください学院長！こいつだけは！こいつはっ！！」

いっそ離してしまおうかとも思った。だが、こんなことをしていつになる。

「やめなさいシュナ！無意味だ！」

暴れるシュナ。後ずさるペリユーク。状況に気付いた周囲の者が驚いて兵を呼び、遠巻きに様子を見ている。

兵士達にシュナが取り押さえられ、ペリユークが安堵して意地悪い笑みを浮かべた。その時。

「……！！？」

「な、なんだ？」

ずうん、と地面の奥底を何か振動のようなものが駆け抜けていった。周りを見れば皆も何かを感じたらしく、不安そうな顔をしている。

兵に両手を掴まれたままのシュナと、エンデルが顔を見合わせた。
『・・・・・・・・！！』

もう一度だ。今度は先ほどより大きい。

城の天井からばらばらと破片が散っているのを見ても間違いあるまい。確実に今、揺れた。

「じ、地震か・・・？」

それにしても妙だ。まるでこれは、巨大な爆発の衝撃波のような振動だった。

まさか、とエンデルは山が見える場所に駆け寄った。そして驚愕に目を見開く。

「何が起きてるんだ・・・」

雪が消え失せて黒土の平原が広がる、あの辺りにリエルは居るのだろう。その先に巨大な火球が赤々と炎を撒き散らして雪を蒸発させているのが見える。だが、更にその少し先。

地表の黒土と同じ色の巨大な壁が次々とシュエレー神山を封鎖でもするかのようにせり上がっていく。周囲の人々もその異様な光景に呆気にとられ、ペリユークやシュナも呆然としていた。

だがエンデルが気になるのはその先だ。

エンデルは山を見ていた。あの黒い壁はリエルが発生させたものだろうが、何故そんな必要がある？あの振動は一体何だというのだ。それらは、半ば予測の付いていたことではあった。

山が白く霞んだようになった。その数秒後、またあの振動が響く。エンデルの顔がみるみる恐怖に引き攣っていき、脂汗を流し始めた。何が起きているのか。何が起ころのか。彼はそれを明晰な頭脳で看破してしまった。そしてある問題にも。

「山が・・・山が崩落を始めるぞ。今の振動は地盤がズレた時のものだ。雪崩なんて生易しいものじゃない。シュエレー神山がそのまま滑り落ちてくる・・・」

エンデルが呟くように言った言葉だったが、予想以上に聞こえた人々が多かったらしい。メイドの一人が悲鳴を上げた。

「本当か、それは!？」

ペリユークでもエンデルが演技などしていないことは一目で分かった。だがもう、今更どうしようもない。

心底哀れむような目でペリユークを見てみると、誰かが後ろからエンデルの肩を叩いた。

「学院長、それは本当ですか」

「………フォガリ騎士団長か。ああ、本当だ。もう逃げる時間はない。今すぐにでも崩落は始まる」

「我々はどうすれば? ……いや、とにかく避難を。市民を南へ……」

拘束を逃れたシュナが真っ青な顔のまま、ゆっくりとフォガリの前ににじり寄った。剣は兵が預かっている。

「……秘術士隊を動かされたそうですが。私に断り無く……」
シュナも、エンデルも。もう我慢の限界だった。

「あれは、陛下だ! あれは陛下なんだ! たったお一人で行ってしまったわれたっ!!」

「!？」

「秘術士隊など動かしておらんよ、騎士団長。それに財務長官。貴様が陣を壊させたから動かす意味が無くなった!」

「な、何を根拠に……」

シュナが心底憎しみを込めてペリユークに掴みかかろうとし、今度はフォガリ騎士団長がこれを抑えた。エンデルはもうシュナを抑える素振りすら見せなかった。

「落ち着け、親衛隊長。あれが陛下というのは本当か」

「本当だ! 今朝から……どこを探しても居なくて……」
「杖ありません! 間違い無くあれは陛下です!」

レアだ。青ざめて、息を切らせている。今までリエルを探して走り回っていたのだろう。だが、シュナと同じく諦めがついたようだ。

フォガリが傍に控えた部下達に取り急ぎ市民の避難を命じている。

どの道間に合わないだろうが、リエルがあそこで頑張っている限りは大丈夫かもしれない。エンデルはそこまで考えて、先ほどの思考の続きを思い出した。

背筋が粟立つ。馬鹿な、何故こんな重要なことを忘れていた。

「騎士団長……騎士団長!!」

「なんです、学院長!」

「陛下を……秘術士隊を出して陛下を助けるんです!陛下はお一人であんな術を使っている!!」

「ああ、大した才能だが……」

この場に秘術に堪能な者はいないのか。エンデルは頭を抱えてしまいたかった。

「馬鹿か君は!陛下は死ぬ気だぞ!」

一瞬で場が静まった。エンデルの言葉を信じられないと言うように、皆黙って聞いている。

「なっ、何を……」

「あんな規模の術だ、いかに陛下の霊力が巨大でも体力が持たん!10歳の少女が耐えられるわけが無いだろう!」

霊力の消耗は体力も同時に消耗させる。これはどうしようも無く、どれだけ霊力が大きくても体力が伴わなければ必ず術は体を蝕む。小規模な術ならほんの少し走る程度とか、ジャンプしたくらいの体力の消耗で済む。だが、霊力や体力に見合わない大規模な術を使えば、下手をすれば心身衰弱による気絶、昏睡。最悪で死に至ることもある。

そんな、とレアが悲鳴をあげた。シュナはもう言葉も無い。遠くにサエラが立っていたが、彼女も無言で青ざめた。

フォガリ騎士団長は絶句した。ペリユーク・ヤカラボ財務長官も同じだった。

見落とすべきでは無いものを見落としていた。あの少女が何者なのかを。

「陛下は覚悟している。でなければたった一人で行くわけがない。

そうだろう！」

もう長らく忘れていた。

王だ。彼女は、リエル・タナック・フィルラントはこの国の王なのだ。

先王シャルテの遺児だからと、どこかで侮ってはいなかったか。まだ子供だと蔑ろにし、その言葉に耳を貸さなかった。だが彼女は王だ。王あつての民、民あつての王。どちらも欠いてはならない。それ以前に、10歳の少女に全責務を押し付けて見殺しにするなど人間の所業ではない。欠片でも仁義を知るなら、ここで動かないのは罪惡にすら相当した。

「隊を編成する。シュナ、一緒に来たまえ！」

「は、はい！」

騎士団長が駆け出した。シュナが後を追う。

レアがメイド達を引き連れて行った。万一に備え、医療体制を整える必要がある。

エンデルはペリユークを引きずるようにして走る。

「避難勧告を出す。手伝えるな、ヤカラボ！」

「も、もちろんだ！」

「私は学徒と教員を分けて陛下の援助と、避難誘導にあたらせる」「では私は使いを走らせる。宰相以下大臣を皆集めたほうがよからう」

兵士達も慌しく走り始めた。

たかだか10歳の少女。そう誰もが侮り軽んじた王は、それでも己の責務を忘れず我が命を賭して民を救おうとしてくれる。王国に住まう者達が最も避けるべき罪を、あの少女は厭わなかった。

この国の真の王。人々はリエルへの敬意を思い出しつつある。

意識が飛びそうだった。

「……………っぐ、う……………」

歯を食いしばり堪えるが眩暈が消えない。リエルは唇を血が出

るほど噛み、痛みで意識を保った。

目を上げると山が白く靄に包まれている。ゆっくりと地すべりが始まっているのだ。咄嗟に別の術を構築して巨大な土の壁を築いたが、これで防げるかどうかは分からない。

「大地の神さま、ヤヌアフ。どうかお力をお貸してください」

海神カンジャラの背に五つの船を載せた五柱の大陸神。ミールハン、ヤヌアフ、ベゾツテュラ、ウエセアトア、オルゴレン。フィラント王国があるのはヤヌアフ大陸だから、必然ヤヌアフ神の加護の下に我々は生きている。

加護。リエルにはあっただろうか。

セス教が予言をするなど初耳だった。母の死は、あの日の雪は、全ては予言に無かったという。リエルにとって母こそが全てだったのに。

神に祈る度に一抹の虚しさを感じた。国土神セスの加護は母を守ってはくれなかった。

代わりに王位を与えるというなら、王位を返上して母を返して欲しいとすら思う。それが不可能だと分かっているにも。

霊力が極限まで消耗され、消え失せそうになる意識でリエルはそんなことを考えていた。それは弱気なのだ、とリエルは頭のどこかで理解していたが、思考が止まらない。

悔しさに泣けてきた。結局、自分がここでこうしていることも神々の手のひらの上なのではないか？自分の運命は全て利用され、消費されるだけなのではないか。そんなのは御免だ。

だがそれでも、リエルは力を振り絞ることを止めない。

「アル・ヘーレバタ アル・ヤヌアフ・カマル セレ・ユラス・シユエラス」

大地の加護よ、ヤヌアフの恩恵よ、我らを守る盾となれ。

黒土が更にせり上がり先ほどの壁を包むようにもう一段、構築された。何もかもが巨大で、圧倒的な光景。その光景を支配するのがこのちっぽけな少女だと誰が信じよう。

揺れが酷くなる。もう限界だ、あの山は今この瞬間からでも崩落を始める。いや、これだけ揺れているのだから既に内部では地盤の隙間に水脈が入り込み、大規模なズレが発生している。ぎりぎりです引っかかっているような状態だろう。

リエルの周囲は完全に雪も無くなり、黒土の大地が見えている。ここまで乾燥させてしまわずとも、せめて表面の雪だけでも溶かせば被害は減るだろうか。そしてあの黒土の壁をぶつけ、強引に押さえ込む。

どれだけ霊力を消耗するだろう。まだリエルの中には枯渴しきれないほどの霊力を感じるが、体力のほうがもう限界を既に超えているのだ。汗すら出なくなり、吐く息に病的な熱を感じる。倒れこみそうになりながら杖に縋りつき、火球と壁を維持するために左手だけは前方に突き出されている。手のひらで距離と角度を見ているのだ。目測だけでは難しい。だがその左手も、もうリエルには重い岩でできているように感じられた。肩がきしみ、肘が悲鳴を上げ、手のひらが焼け付くようだ。今すぐ降ろしてしまいたい。でもそれはできない。

シュナはどうしただろうか。レアは、サエラは。城のみんなはもう逃げてくれているだろうか。流石にこの状況を見ればエンデル学院院长が事態を察しているはずだ。

少なくとも北部の市街は全員避難していてもらわなければ困る。万が一リエルが失敗して力尽きれば、少なくとも最初の見立て通りの被害は覚悟せねばならない。南部まで土砂が到達するようなことはさせないが、王城のある丘、そして城も壊滅は免れないかもしれない。

何度も何度も意識が暗転しそうになり、堪え、持ち直す。もう時間の感覚もほとんど無い。ここに来てからどれだけの時間が経過したのだろうか。

既に火球は麓を舐め尽くし、山肌に到達していた。斜面の雪を吹き飛ばし、途方も無い量の水蒸気が立ち昇る。だが、ああそれだけ

では駄目だ。やはり一手足りていない。上空に達した水蒸気が凝固し、雲になっている。いつ雨が降り始めてもおかしくない。それではせっかく乾燥させた土壌がぬかるんで地盤が脆くなってしまおう。どうにかして雲を海まで流さないといけない。

リエルは泣きたい思いを耐えながら、更に別の術を唱えようとした。風を起こしてあの雲を流す。民は困るかもしれないが、弱い風でも市街までなら動かせるかもしれない。そう考え公式を口にしようとした。

その時、今までにない大きな揺れがリエルの体を突き上げた。

「！！」

岩から転がり落ち、地面に肩から着地する。左肩を強く打ってしまった。左手全体が痺れたような感覚に襲われ、痛みで気が遠くなる。

いつそこのまま眠ってしまおうか。気の迷いが首をもたげ、リエルの弱気をくすぐる。

だがそれでも、こんな状況になってまでも。

「……………まだ、まだよ……………まだ、負けない！」

もう嫌だ、と言えない。リエルらしい長所であり、短所が彼女を悲惨で過酷な判断へと突き落とす。

泥まみれのマフラーが鬱陶しくなり、剥ぎ取るように外して投げ捨てた。痛む左手を懸命に上げて、火球の制御を取り戻す。杖を右腕に抱きかかえるようにして体を支え、土壁の形状を維持する。

揺れが更に強くなり、シュエレー神山は白煙に包まれた。

何かが聞こえる。低く、太く、巨大な咆哮。山が鳴いているのだ。崩落が始まった。

土壁に土砂が衝突した瞬間、その抵抗と土壁の形状維持のために霊力が一瞬恐るべき勢いで消費され、リエルはほんの数秒だけ完全に気絶していた。

「っ、いけない！」

防雪壁がある部分が次々にひび割れ脱落し、植樹が根元から倒れて軽々と転がりまわる。同時に地中を血管のように流れて地盤を剥離させた水脈が溢れ、怒涛の勢いで水が流れ落ちてきた。

轟然と音を立てて山が崩壊してくる。雪と混じって土石流となった暴力的な力の奔流が次々に土壁を打ち据え、内部の水分が火球に触れて一瞬で気化し破裂音を鳴らす。

なんとか土砂は土壁によって横に逸れ、水路に沿って流れている。だがリエルは一瞬たりとも気が抜けない。

崩れたのは斜面の下側、ほんの一部だった。ここから見える頂上まではまだ健在であり、そして揺れは依然として続いている。まだ続きがある。それも今のものとは比較にならない規模が。

風を、そうだ風を起こさなければ。公式を読み上げようとして、だがリエルの喉は渴ききっており、張り付いて声が出なかった。代わりに掠れた吐息だけがひゅうと鳴る。

リエルは喘いだ。もう打つ手がない。火球と土壁だけでなんとかするしかない。

雪がある程度無くなったら火球を上空に放り上げてみようか。熱量は気流を生むから、うまくすれば雲を押し流せるかもしれない。

雨が降る前に土壁をもう一枚作って水路を形成しようか。東の守護聖獣クシャタラナトは怒るかもしれないが、川まで水路を繋げば流水が土砂も流してくれるかもしれない。

まだ出来ることはある、とリエルは氣を持ち直した。だがそれも、もう遅かった。

「あ……あれ……」

脚が動かない。這って進むこともできない。いつの間にか右手は杖を支えず、肩にもたせ掛けて保持していた。左手だけが辛抱強く火球を支えるように突き出されている。

呼吸が弱い。強い睡魔が襲ってきて、リエルは必死に眠るまいと耐えた。だが視界は徐々に暗くなり、彼女の意味とは無関係に意

識が途切れようとする。

駄目だ、ここで眠れば火球が制御を失って消滅する。土壁も形状を維持できず、土砂が溢れてくる。

混濁する意識の中、僅か10年の記憶が脳裏に蘇ってくる。母のこと、秘術のこと、数少ない友のこと。

「……お・母・さ・ん……」

城のこと。シュナのこと、レアのこと、サエラのこと。

「……」

……風。

「……カイン……さん……」

友を呼んだ。

風が吹いた。

『小さく幼き我が友よ。よくぞここまで頑張った』

「……」

言葉は空から聞こえた。いつの間にか日が翳っている。リエルは僅かに上を見た。

昔、リエルは西の森で迷ったことがある。森を抜けて辿り着いたのは国境に聳える巨大な壁だった。そしてその中央、壁の上に座した巨大な鳥に出会った。

彼はたった一人、いや一羽のリエルの友だった。時折リエルは森を抜け、彼に会いに行った。彼もまた小さく幼い友人が訪れるのを喜んだ。

しばしば彼は遠くを、城を見ていた。城とリエルを見比べ、何かを思っていた。

幼くして聡明だったリエルは彼と色んな話をした。秘術の話、動物の話、世界の話。建国より以前から生きる彼は、三千年以上の歴史を語りつくせるものかと笑った。

そしてあの冬が来て、会うことができなくなった。春になればま

た会えるとリエルは信じたが、彼はそうはならないことを知っていた。いや、ある意味で春になれば会えることは分かっていた。

今ここで助けるために。

彼は風を司る者。

フィルラント王国西方国境の守護聖獣、巨大鳥アールカイン、飛来。

天が捻じ曲がる。そう形容してもおかしくない光景が彼らの前に広がる。

「あ・・・あれは、まさかアールカイン様か!？」

馬よりも遥かに大きな騎竜を駆るのはフォガリ騎士団長であり、同じくシュナも同乗していた。その上を巨大な影が通り過ぎていったのはたった今のこと。後方に続く馬上の兵士らも目を見張り、天を仰ぐ。

何故守護聖獣が国境を動く。まさか王のためだとしても言うのか。フォガリは信じられないものを見た思いで呆然としていたが、空の動きを見て更に驚いた。

「風だ・・・」

山麓で発生した膨大な量の水蒸気が雲になっていたが、上空を猛烈な勢いの風が吹いてこれを南へ流している。その雲が真上を流れ、ほんの微かに水滴が頬を打ったがそれだけだった。雲は雨になる前に海まで流れていく。

「た、助けてくれている・・・のでしょうか」

「・・・分からない。だが、我らも遅れを取るまい!」

「はい!」

騎竜、ゲマトルダットというレムダット種、つまり飛竜の仲間だが、飛ぶよりも走る方向に進化した竜は馬よりも圧倒的に速く、巨大だ。先行することで北方の雪道を蹴り払い、後続する部下達の道を切り開いて行く。

なにより雪が溶けかけていたのが幸いした。朝までの雪量のまま

であれば騎竜でも雪の壁に道を阻まれていただろう。だがあの火球の熱量によって、その雪も半分近くが溶けてしまっていた。

改めてシュナはリエルを想う。彼女の存在こそが奇跡のようだと。フォガリ騎士団長にもその感動は乗り移ったのか、先日までの軽薄な雰囲気は微塵も無かった。必死に騎竜に鞭を入れ、更に加速させる。

目指す先、黒土の平原に巨大な鳥が舞い降りようとしていた。その、あまりにも幻想的で優美な光景。鳥は艶やかな木目に似る翼を揺らし、その度に風圧で羽毛が波立った。翼長はもはや考えるのも馬鹿らしいほど巨大だ。

何もかもが巨大なので、フォガリやシュナは遠近感が狂ってしまいそうだった。雪原も、シュエレー神山も、小さな太陽も、黒い土の壁も、あの大きな鳥も。そしてその中心に彼女はいる。まだ10歳。年齢に比して体はかなり小さく、足腰は強いが腕力が無い。ちっぽけな少女だ。本当に小さい。

シュナは泣いていた。あんなに小さいのに、あんなに幼いのに、我が君よ。我が王は誰よりも大きいではないか。

フォガリ騎士団長はシュナの鳴咽を聞いて、肅然と黙り込んだ。彼はつい先刻まで、王のことを単なる可愛らしい飾りくらいにしか考えていなかったような気がする。それを恥じ入っていた。

その恥を拭わんがため、フォガリの鞭打つ手に一層の力がこもる。距離はもうそう遠くは無い。早く、速く。

突然の雨に市街は動揺していたが、概ね誘導に従って国民は南へ向かい逃げ始めた。皆シュエレー神山の異変に気付いていたため僅かな説明で事態を把握し、誘導に従っている。問題はパニックが起きないかどうかだが、こればかりは何とも言えない。

エンデルは部下の教員らに後を任せると、先日から声をかけ集めていた数十人の教員と学徒の集団に声をかけた。

「これより我々はシュエレー神山に赴き、陛下の術を補佐する！だ

が、行きたくない者は無理に付いて来なくてもよろしい！なにより君達の命に係わるかもしれない！親兄弟が心配だろう、自分だけのことを考えても構わん！だが陛下は、御身を投げ打って我々を救わんとしていることを忘れないで欲しい！」

命に係わる。そう聞いて一同に動揺が広がるのが分かった。だがここで逃げたいと言う者があっても止められはしない。彼らは兵士などではなく、市民と変わらないのだ。

しばらくの沈黙が流れた後、一人の教員が前へ出た。

「学院長、そのリエル陛下がああミュシェ・タナックの遺児という噂は本当でしょうか」

教員の間に驚きの波が広がる。当然だろう、その名前は既に学院の伝説であり、学院に籍を置く者達が最後に目指すべき目標なのだから。

エンデルは無言で頷いた。その教員はまたしばらく黙ったが、やがて苦笑した。

「では、我々教員一同は是が非でも陛下をお助けせねばなりません。あの術を見ればわかる。陛下は、ミュシェ・タナックの夢の続き。

我々の理想の続きです。失うくらいならこの命を身代わりに差し出したい」

「君・・・・・・・・」

私ものです。僕ものです。教員らが次々に意思を示した。そして学徒の一人が前へ出る。

「学院の伝説、ミュシェ・タナックのことは僕らでも知っています。どうか学院長、逃げろなんて言わないでください。それに王様なのでしょう？王様一人に頑張らせて僕ら国民が逃げ出したんじゃ、僕らはこの国に居る資格がありません。どうぞ僕らも連れて行ってください」

その青年に、後ろの若者達も続いた。皆決意を秘めた表情で、エンデルは目頭が熱くなる思いだった。

「・・・・・・・・ありがとう。協力に感謝する」

ご覧ください陛下。あなたは民に愛されている。

ペリユーク・ヤカラボ名義の緊急召喚状によって城内の会議場に議員全てが集められた。彼らも異変に気付いていたが、最初のペリユークと同じようにシュナ辺りが暴走したのだろうと決め付けようとしたため、当のペリユークは顔から火が出る思いだった。自分は何と愚かな事を言ったのだ、と。

「お聞きください。緊急を要する事態なのです」

珍しく殊勝な態度のペリユークが説明を始めた。あそこで今何が起こっているのかを。

説明が続くにつれ、議員らの顔はみるみる青ざめていった。そしてあの火球を作り孤軍奮闘しているのが他ならぬリィエル陛下であると言葉にした瞬間、数名の議員からは悲鳴すら漏れた。

ハンネル宰相が馬鹿な、と叫ぶ。

「何故、そんなことになっている」

「へ、陛下は・・・陛下はお一人で我々をお救いくださるおつもりだったのです。秘密裏に陛下が指示なさっていた秘術の陣が壊されて、そのために・・・そのために秘術士を出せず、唯一対処できるのが陛下で・・・」

「なっ・・・なら、その秘術の陣が壊されたというのはどういうことか!？」

ペリユークの顔にさつと血が昇り、また引いて真っ青になった。

そうだ、これを説明せねばならない。

冷や汗を流しおろおろと落ち着かないペリユークを見てハンネル宰相は大体のことを悟った。そもそも、彼ならやりかねないとは思っていたからだ。

「・・・ぼ・・・妨害、工作を・・・し、指示したのは・・・わ、わわ、私・・・なのです」

会議場が水を打ったように静まった。ペリユークの独白が続く。

「兵に・・・兵に金を握らせ、雪が降ったらそれに紛れて陣を壊せ

と・・・それが、そ、それがあんな・・・」

ハンネル宰相が眉間を揉んだ。他の議員らは啞然とし、だが思うところが無いわけでもなく罵声はまだ無い。

「・・・・・・こ、こうなった以上、死罪を覚悟しています。ですが、ですが・・・・・・どうか、償いたい。陛下をお助けせねば、私は死んでも死に切れない」

「その陛下こそが死をお覚悟し今まさに決死の場におわすのではないかッ！！」

「ひい！」

ハンネル宰相が拳を机に叩き付けて立ち上がった。叫び声に議員らは驚く。宰相が激昂する姿など一度たりとも見たことがない。

ハンネルはペリユークを睨み付けていたが、目を閉じてまた座った。ため息が漏れる。

「・・・・・・私も陛下を侮った所があったようだ、貴様をこれ以上は詰れん。構わぬ、兵を出すなりするなら軍団長としての全権を一時的に分配して皆に託す。今からできる全ての対策を講じ、動きたまえ。では解散！」

ハンネルが手を打ち、それに弾かれたように皆が立ち上がった。思い思いに部屋を駆け出し、それぞれが居るべき部署へと向かっていく。そしてペリユークとハンネルが残った。

「・・・・・・どうした、行かんのか」

「・・・・・・死をもって償わんという覚悟はお認め下さい。私は、余りに愚かだった・・・・・・！」

「気持ちわかる。事ここに至って相対的にあの陛下は我らの遙か天上の存在にも思えるからな。余りに聡明、余りに勇敢。だが思い出すがいい、長官。陛下はまだ10歳の少女だ。軽々しく死罪など頂けまい」

「・・・・・・」

「どうなるとしても、まあ陛下が生き延びてくださってから、だがな」

「そう、そうですね・・・」

祈らずには居られない。ペリユークは再びリエルの御前に出てこれまでの所業を謝罪し裁定を受けねば気が済まない。その結果として死刑に処せられようとも、それがリエルの意思なら彼は満足するだろう。

どうか生きて帰って欲しい。ペリユークもまた心から願った。

『風に聞いた。エリー、無茶をする』

「カインさん、どうしてここに・・・」

『友だからだ』

「・・・ありがとう、とっても嬉しいわ」

『それは光栄に思う』

岩に背を預け、掠れた声でリエルが話している。会話の相手はリエルの体の何十倍あるだろうか、途轍もなく巨大な鳥、西の守護聖獣アールカイン。

シュナとフォガリは目の前の光景に目を丸くし、呆けたように言葉も出なかった。何故なら、守護聖獣は基本的に人々とは関わらない。フィルラント王国史三千年で西の国境兵が彼と対話したことすら十回も無いとされる。例外的に王や司祭長などが対話を求めて応える場合があるとも言われるが、少なくともシュナとフォガリはこの聖獣の姿を見た事さえ少なく、ましてや声など初めて聞いた。

そしてそれ以上に、そのアールカインと親しく話すリエルが信じられなかった。この少女は一体どこまで自分を驚かせてくれるのか。

ましてこの空前の風景。太陽と見紛う巨大な火球が山肌を焼き尽くし、雪を吹き飛ばし気化させ、土砂の内に含まれる岩石は半ば溶解して灼熱の溶岩となり、地表に落ちて固まっていくな。黒土の壁は国境の壁よりも高い。これに比べれば城の周囲を巡る城壁など紙切れのようなものだ。それが轟音鳴り響かせ山へと迫り、大量の土砂を押し阻んでいる。リエルが火球で巻き上げた水蒸気は上空で雲

に変わっているが、恐らくアールカインの御技だろう、空が渦を巻き突風を生み出して有り得ない速度で雲を南方へ押し流している。風を操る聖獣アールカインならではの言えた。

だがそこまでを見て気付く。リエルは岩に背を預けてアールカインと会話をしながら、左手を前に突き出したまま。彼女は今も術を制御しているのだ。そして、その体はほとんど身動きもしない。

「陛下……陛下あつ！」

騎竜の背から飛び降りて走る。自分に何ができるわけでもない。ただそれでも、リエルの傍に居てやることはできる。せめてそれだけでも。

アールカインが瞳の動きでシュナをちらりと見ると、リエルに何かを言った。リエルはそれに反応し、立ち上がろうとしている。もう、体力がどれだけ残っているのか。

岩陰に回りこみ、リエルの姿を見て愕然とした。泥にまみれ、衰弱し、虚ろな目で、だがゆっくりと確かにシュナを見て笑った。

「シュナ、さん……」

「陛下！ ああ、こんなになって……！」

遅れてフォガリもやってくる。彼もリエルを見て絶句していた。「だめ……だめです、逃げてください。抑え切れなかったら、みんな死んでしまう」

リエルはぼろぼろの姿で、掠れた声で、それでもシュナ達を氣遣った。シュナが言葉を失って俯き、フォガリは険しい表情で目を逸らす。

だが、まずフォガリ騎士団長が顔を上げた。

「逃げるなど、聞けません陛下。我々に恥をかけとおっしゃるのですか」

「………？」

フォガリが後方へ目を向ける。ほぼ同時に音が聞こえてきた。無数の騎馬が地を駆ける勇壮な交響曲。

先陣を切って到着したのは騎士団麾下秘術士隊、剣士隊の面々で

ある。この到着を待つてフォガリは前方へ歩み出ながらその腰に提げた剣を抜き放った。

リエルが彼を止めようと喘ぐ。それはそうだろう、黒土の平原には今も多量の水蒸気が満ちており、これは火球の熱量に炙られてかなり高温になっている。現にフォガリも少しばかり眉をひそめていた。

だが、彼は堂々たる態度でその剣を地に突き立てて吼えた。

「よいか諸君！我々はフィルラント王国女王、リエル・タナック・フィルラント陛下の剣であり盾である！故に陛下の背後に身を隠し使命を忘れるは末代までの恥と思え！」

馬から降りた兵士達が次々に駆け寄り、リエルの前に整列していく。だめ、とリエルは叫ぼうとしたが声にはならなかった。そしてそれを、アールカインは面白そうに見下ろしていた。

「ここに立てた剣より後ろに退くことまかりならぬ！一步でも退けばその者は既に騎士団の一員ではない！いや、退いたその瞬間に私がこの手で成敗してくれる！分かったな！！」

応！！

一糸乱れぬ兵士達の雄叫びが響き渡る。直ちに彼らは作業に入った。剣士隊が小さな塹壕を掘り、盾を地に固定して熱風を防ぐ場所を作っていく。秘術隊が各小隊長の指示の下、リエルの使う術を検分し同時詠唱の公式を決定する。その工程が終了するまで、三分も要しなかっただろう。恐るべき手並みだ。

作業が終わるや否や秘術隊士の面々がその穴に飛び込んだ。さほど深くない穴の中で跪き、前方を見据える。

「詠唱、用意！」

号令に従い彼らは手帳のような大きさの本を開いた。

「・・・陛下、自分は秘術士隊長のモルトレと申します。あの術、見たところ火球ですが、ただの炎ではありませんか？使用する術は考慮すべきでしょうか」

近くに立っていた秘術士隊の制服を着た男に問われ、リエルは

頷いた。

「あれは太陽の複製です。炎を使うなら焦点をずらしてください。土の壁は大地の基です。壁を重ねるなら岩を用いて被せてください」
「了解致しました」

ごく手短に会話は済んだ。彼にもリエルの惨状は一目で理解できる。いや、秘術隊士だからこそだ。どことなく辛そうな表情だった。こんな子供に辛い思いをさせて、自分は今まで何を。そう自身を責めるような。

「項目一を開け！第四章六番！……始め！！」

隊士らが一斉に公式を読み上げる。まるで合唱のような全く乱れない詠唱にリエルも驚いていた。だが、これほど整った詠唱であらうと、ほんの僅かなズレだけで術の完成度には影響が出る。それが長文公式を詠唱する欠点だったからこそ陣を敷こうとしたのだった。今更ながら悔やまれる。

『アル・フォーラド・アーク！』

炎を操る公式が完成し、一同の眼前に無数の火の玉が生まれた。リエルの術の何千分の一にも満たないが、これだけの数が複合すればそれなりに補助はできる。

隊長の命令と同時にそれらは空中を疾走し、リエルの火球の周辺で霧のように拡散した。次々に火の玉が同様の変化を見せ、火球周辺の気温を一気に引き上げていく。術同士の干渉を防ぎ、効果を相乗させる上手いやり方だ。

リエルは火球と雪が衝突する際の負荷がかなり軽くなったように感じた。手のひらにかかる圧力が和らいだような、そんな感覚だ。これなら体力の消耗も随分と抑えられる。

「おお、もう始めているのか！よし皆、すぐに詠唱の用意だ！」

加勢は更に続いた。エンデル学院院长と学院教授陣、それに生徒達が馬と馬車から飛び降り、秘術士隊の背後に整列する。その誰もがリエルを見てはっとしていた。彼女を見るのが初めてだという者のほうが多いだろうが、それ以上に新女王がこれほど若い、少女で

あること。そして命を賭してという言葉に偽り無いことに衝撃を受けた。

「剣士隊が新たに塹壕を掘り、その短い間にエンデルはリエルの容態を診る。」

「……もう、限界では？制御は手放せないのですか」

「はい、だめです。わたしが止めたら、あれは消えてしまいます。だから……」

「……承知致しました。騎士団が火球を担当しておるので我々は壁を補助します」

その時エンデルの背後から秘術士隊の隊長モルトレが歩み寄り、挨拶をしてきた。彼が先ほどリエルの指示を受けとっていたのでそれをエンデルに伝える。

やはり塹壕は三分もかからず出来上がり、学院の面々もそこに飛び込んだ。エンデルも彼らと共に参加するらしい。

「……シュナ、君がそんな顔をしてどうする。君はここで陛下を支えるんだ、いいな」

「は……はい。分かっています」

「よろしい。では陛下、また後で」

エンデルがその場を後にし、連れて来た面々と公式の詠唱に入る。だが秘術隊士でもない者達が即席でそうそう連携が取れるわけがない。どうするのかわかっている、予想通りでバラバラな詠唱が聞こえてきてしまった。

これでは駄目だ、とシュナは頭を振るが、リエルは逆に笑顔を見せた。

「あは……す、すごいです。やっぱり、学院……お母さんの居たところって、すごいんですね……」

「え？」

直後、シュナは背後で大きな音が鳴って振り向く。そこには何枚もの石の壁が地中から発生し、津波のように次々と黒土の壁に押し寄せてその表面から押さえつけるという光景が広がっていた。

連携が取れないなら取らなければいい。秘術士隊という道を捨てて研究の道に人生を捧げた連中だ。少なくともその才能は本物で、個々の能力だけなら秘術隊士の面々を遥かに上回る。その証拠に隊士らからは感嘆の声が漏れ聞こえてきた。

『見事だ。どれ、随分軽くなったのではないか？』

「あ・・・はい、本当です。だいぶ楽になりました」

アールカインは笑ったようだった。目を細め、獰猛な外見にも係わらず随分と優しい喉を鳴らす。まるで鳥のようだな、とシユナは思ってしまった、直後に思わず噴き出しそうになった。鳥だ、彼は。『・・・そうか・・・そうか、エリーは王になったのだな』
「はい、王さまになったんです。でもまた遊びに行きます」

『うむ・・・』

屈託無くリエルが答えたが、こういうところは子供らしい。シユナにはアールカインが何を言わんとしたのかすぐに察していた。なるほど、幼い頃のリエルを知る者の言葉だ。

『ならば祝いだ。この身に宿す風を司る力、とくにご覧じよ！』

アールカインが翼を広げ、飛翔した。風圧であちこちに風の渦が巻き起こり、雪が舞い上がる。だがそれで終わりかと思っていると、その全ての風の渦が勢いを止めることなく成長していくではないか。
「すごい・・・！」

風の渦は竜巻となり、それでもまだ勢いを緩めず更に更に巨大化していく。それらは火球に吸い寄せられるように動くと、ついにその中に飲み込まれてしまった。何が始まるのか、皆も興奮気味に目を輝かせている。なにせ聖獣が力を発露するところなど滅多に見られるものではないのだ。戦争が勃発すれば話は別だが。

火球に飲み込まれた竜巻は山の斜面の方に突き抜けて姿を表した。それは今や火球の熱量を纏う、炎の渦と化している。莫大な熱量を持つ空気の渦が雪山の斜面を駆け登り、その表面の雪を蒸発させて吹き飛ばしていく。

負けていられない、とリエルは火球を押し、秘術士隊も続いた。

雪が無くなっていく速度は今までの比では無く、山の斜面は炎に巻かれて上空の大气まで歪んで見える。

その時、一際大きな振動が皆を襲った。ついに山頂から垂れ下がっていた斜面が剥離し、崩落を始めたのだ。

学院の面々は更に詠唱の速度を上げて石版を生み出し、その枚数と量で黒土の壁はもう見えなくなるほどだった。彼らもまた体力の配分を考えず、衰弱した様子の者も散見される。

だが、ここで己の命を惜しむ者などいなかった。それはどの道ここで術を止めれば土砂に飲み込まれ死んでしまうからであり、幼いリエルの覚悟とひたむきさを思い知ったが故の決意である。

「・・・っ・・・うつ、く・・・あっ・・・！」

リエルが小さな悲鳴を上げた。術に圧し掛かる負荷が彼女の体力を瞬間的に奪い、全身が激痛に襲われるほどに蝕まれているのだ。それでも彼女は耐え続け、同じく誰も逃げ出す者は無かった。

『三千年、この国にあつてこれほどの災害は初めてだな』

アールカインですら啞然とする。それは恐ろしい光景だった。シユエレー神山の斜面が完全に剥離し、都市サイズ一枚岩となって滑落してくるのだ。あんなものをこの国は長らく抱えていたのかと誰もがぞっとした。仮にあの巨大な岩が落ちてきていたら、この国は完全に壊滅していただろう。

リエルが気付いていなければ今頃・・・。シュナは恐怖し、そしてリエルに感謝した。当のリエルは必死に土壁を維持しているので声をかけることもできなかったが。

前もってリエルが黒土の壁を作っていなければどうなっていたことか。斜面を轟音を鳴り響かせ滑り落ちてきた一枚岩は起伏に衝突して砕け、大小の岩のかげらとなって土壁に次々と降り注いでいく。

「・・・っ・・・っぐ・・・う・・・」

リエルは必死に耐えていた。火球のある辺りでは今も水蒸気が発生し、土壁にはまだ大量の岩と土砂が降り注いでいる。遠くに見

るので小さい規模に見えるが、実際あの山の近くまで行けばどれほどの速度で巨岩が降り注いでいるのか、想像した者は背筋を寒くさせた。そしてその衝撃を壁で受け止めている、その抵抗が跳ね返るリィエルの体力が心配だった。

その時、空から朗々と声が響く。アールカインだ。

『エリー、炎はもういい。雪は消えたぞ。岩土を固めて崩落を抑えよ』

「・・・は・・・はい！」

リィエルが火球への霊力の供給を止めたらしく、急速に球体が小さくなっていった。まだ大気の渦と秘術士隊の術の残滓があるため熱量は炎となって残っていたが、それらもすぐに小さくなっていく。火球の制御を止めたため、リィエルの顔色は急に良くなってきた。青ざめた頬に赤みが戻り、杖も再び右手に握りしめて先端を前方へ向けている。

いや、それ以上だ。

「!!・・・陛下!？」

「う、うう・・・うううう・・・!!」

黒土が盛り上がっていく。リィエルが過剰に霊力を供給しているのだ。

何を、とシュナが言おうとして誰かの悲鳴が聞こえた。同時に衝撃も。

「なっ!？」

フォガリが立つ前方に巨石が落下してきたのだ。あの一枚岩が落下した衝撃で地面に跳ねたものがこんな距離を飛来してきている。今落ちてきたものは明らかに巨大な一つだったが、握りこぶし大のものが降って来ても頭に当たりでもすればそれだけで死んでしまう。続いてばらばらと小さな破片も飛んで来ていた。死の恐怖が突然目の前に迫り、隊士や学院の者達は動揺している。だがその中でフォガリ騎士団長は仁王立ちを崩そうともせず、シュナは身を挺してリィエルを庇おうとし、エンデル学院長もより力を込めて術を詠唱

し続けている。

「へ、陛下、おやめください!」

「いいえやめません!」

「陛下!」

一角馬の角にリエルの膨大な量の霊力が注ぎ込まれる。それを介して黒土の壁に霊力が送られ、更に巨大化は進んでいく。今や壁はシュエレー神山の標高半ばまで届いていた。だが今も落石が止まっていない。

「陛下っ!!」

「うう、うううううああああああああああ!!」

見ろ。誰かが言った。

黒土の壁が更に巨大になり、ある一瞬を境に急激に形を変えて行く。

上部の両端が伸び、棒のようになる。それは全体を支えながらシュエレー神山を包み込むように前方に動き、地に突き立った。その衝撃がこの場所まで響く。

今やその黒土の塊は、巨人の上半身にしか見えなかった。誰もがその光景に目を疑う中、リエルは悲鳴に近い叫びを伴って黒土を制御する。そしてアールカインが一声を、震えるような声を漏らす。『ヤヌアフ神の再現か・・・!!』

大陸神の形骸を地上に再現する。そんな秘術、今まで見たことも聞いた事も、それどころかエンデルですら想像もしたことが無かった。

黒い巨人は崩落した山の斜面を完全に押さえつけ、落石が跳ね上がるのも一つ残らず防いでいる。

さしもの聖獣アールカインですら驚愕し、シュナはリエルの身を案じ、フォガリ、エンデルは言葉もなく呆然とその光景を見ていた。既に隊士や学院の者らも術を行使するのも忘れ、見入る。どの道彼らではリエルを補助しようにも付いていけない規模だった。

まるで神話の風景のような。

巨人が崩落を抑える間に、徐々に地面の振動は収まってきていた。山も白い靄が消え、むき出しの地盤を晒すのみ。既に崩落は止まり、後は落下した土砂が重力に従って巨人の体に沿いゆっくりと流れていくだけ。

そうしてどれだけ時間が経ったか、不意に巨人の体がしばむように縮んでいった。遠目にそう見えるが、実際は黒土の体が崩壊し、地面に降り注いでいるのだとわかる。

あれほど暴れ狂った山が、今はただ静寂に身を沈めていた。

「終わった・・・」

誰かが呟いた。

「崩落が止まってる」

「終わったのか？」

「・・・やった」

「助かったんだ！」

歓声が上がった。

フィルラント王国史上空前絶後の大災害は、一人の死傷者を出すことも無く終焉を迎えたのだ。

フォガリが安堵のため息を吐き、地に刺した剣を鞘に戻した。彼は隊士らに覚悟を示し続けた。彼が一步も退かなかったから皆は鼓舞され、勇気を振り絞ったのだろう。

エンデルが立ち上がり山を眺めた。無残な姿になったが、どうせ崩落したのはシュエレー神山帯のごく一部。山岳の奥深くに神殿を構える女神シュエレーはこの程度、意にも介さないだろう。

シュナも喜び、リエルを見た。リエルは杖に縋りつきながら笑顔を向け、そして

「・・・陛下!？」

リエルが倒れる。全身の力が失せたように、糸の切れた操り人形のように。

シュナが駆け寄って抱き起こすが、目を覚まさない。呼吸も弱く今にも止まってしまいそうだ。

一瞬の思考。直後シュナはリエルを抱きかかえフォガリの騎竜に跨っていた。

「騎竜をお借りする！」

「分かった！行け！」

鞭を一闪。騎竜はシュナの意に応えたか、全力で走り始めた。

空では聖獣アールカインがこれをしばらく見送るように旋回していたが、やがて彼は西へと飛んで行った。その間際にこう言い残して。

『このアールカインがお前達を見ている。王の従者としてな』

第一話・「閉幕」

『閉幕』

気持ちの良い晴れた日になった。例年より一週間ほど遅らせて実施される王国議会の開催日である。

「ああ、やっと終わった・・・間に合った・・・」

「本当・・・疲れたわ・・・」

シュナとレアが狭苦しい部屋で書類をまとめ終えた所に、扉をノックもせずサエラが入ってくる。

「お茶ですよお二人ー。あーあー徹夜なんかしちゃって、肌荒れますよ」

『・・・・・・もう、どうでもいい』

「女捨ててますね・・・」

サエラすら呆れた口ぶりだったが、実際の所二人にとって女達の結婚などという話は・・・まあ少しは心残りだが、本当にどうでもいいことと思えた。

リエルのために働く。これほどの喜びが他に無いから。

「う・・・そうだ、副長を呼ばねば・・・」

「ああはい、いつてらっしゃいシュナ」

「・・・レア、寝るなよ・・・？」

「当然でしょ・・・・・・」

「寝るなって」

シュナが立ち上がり、のろのろと部屋を出て行く。そもそもこの執務室はシュナのものであったはずだが、レアは私用の寝室以外に専用の執務室を持たないので会議用の書類を作成するにあたり、シュナに頼み込んで共に一夜漬けとなった。メイド長としての執務室ならあるが、あそこは他のメイドが頻繁に出入りするので集中できないのだ。

「サエラ、座っていいわよ」

「はい、それじゃお言葉に甘えて」

座れとは言ったが勝手に茶を飲み菓子を食えとは言ってない。そう言おうとしたが、レアは精根尽き果てて机に突っ伏してしまった。

「ほんとに大丈夫ですか？会議中にぶっ倒れたりしないでしょうね」

「・・・しないわよ。たぶん」

「これじゃリエル様のほうがお元気ですよ」

「それは大変結構なことじゃないの・・・」

駄目だこりゃ、とサエラはため息をついた。

「・・・何か目が覚めるものでも作ってきます。辛いスープと苦いハーブティー、どっちがいいです？」

「・・・好きにして」

そうですか、とサエラが立ち上がり、同時にレアはがばっと顔を上げた。

「あっ、や、やっぱりハーブティーだけで！」

「・・・ちっ、そうですか。分かりました」

「両方持つて来るつもりだったでしょ？」

「それで両方無理矢理にでも詰め込んでやるつもりでした」

「・・・」

面白半分でこういうことをするから頭の固い議員や兵士に煙たがられるのよ、と言おうとしたがどうせ聞く耳を持つはずもない。それにあれはもうサエラの性格というか、味だ。今更変えられても逆に気持ち悪いだろう。

サエラが部屋を出て、レアは一人書類をめくりながらため息を吐いた。

「・・・シュナの癖が移ったわね」

などと一人ごちてもう一度ため息。

しかしまあ、仕方ない。これも仕事だし、少なくとも予算決議に必要な資料くらいは自分の手で最終稿を作らないと、下手をすれば一年間予算不足で城内管理に必要な備品が確保できない場合もある。

この部分だけは先代からも徹底的に教え込まれたので、気合は抜いても手は抜けない。

それにリエルがここに来て初めての会議だ。十分用意をして彼女の補佐をしなければいけない。

気を揉んでいると部屋の扉がノックされた。

「どうぞ」

入ってきたのはサエラだった。

「・・・早いわね？」

「もう時間だそうですよ。大臣さん達も集まって来てます」

「あら、もうそんな・・・何故貴女はそんな残念そうな顔を？」

「・・・特製激苦ハーブティー、飲ませそこねました」

「・・・」

年に一度、これから一年間の政府の行動などを決議する場がこの王国議会である。ここで前年の税収を元に各大臣らは各々の部署の予算をどれだけでもぎ取れるかを競い合うことになる。その他にも大臣らの査問会議や人事、税率の変更なども含まれており、会期は初日の朝から短くても三日後の夜あたりまでみっちり話し合うのが通例だった。

会場には既に宰相以下多数の議員らが集まっており、他にも副長官位や書記官などが入るため総人数百名以上が一堂に会していた。シユナは親衛隊長としてリエルを連れてくるため、レアは一人入室する。彼女の存在など気にも留めないのか、部屋中に満ちた喧騒は止みそうにない。

宛がわれた席に着いて辺りを見回すと、ほんの数名ほど姿が見えなかった。財務長官、以下副官。外務長官、以下副官。この面々だ。人数にして六人。

やれやれだ、とレアは渋面を作った。先日財務長官、ペリユーク・ヤカラボはそれまでの陛下への言動に対し死罪も厭わぬと覚悟を示したという。その意志も二週間ほどで挫けたのだろうか。

そんなことを考えていると、当のペリユークが入室して来た。その瞬間、室内の喧騒が止まり急に静寂が訪れる。ペリユークはいきなり静かになった室内に戸惑ったようだが、急ぎ足で自分の席に座った。やがてゆっくりと喧騒が元に戻る。

その内に外務長官らも姿を表した。見渡すと欠員は無さそうだ。レアは書類を開き、書記官らが配って回った会議のしおりにも目を通す。

「……さて、どうなるかしら」

「医師の診断では健康状態は良好。ただし疲労状態が長時間続くようなことはなるべく避けるように、と」

「そうですか。なら大丈夫ですね」

「……会期はなるべく陛下のご負担にならないよう調整します。それだけはお許しください」

「はい、ありがとうございます」

「……では、参りましょう」

むしろシュナのほうが大丈夫かなあ、とリエルは怪訝そうな顔をしていた。目の下のくまが酷い。

手を引かれて立ち上がると、シュナが少しふらついて二人とも倒れそうになってしまった。リエルはシュナに支えられて事無きを得る。

「だ、大丈夫ですか陛下」

「は、はい……あの、シュナさん？」

「……分かっています。お恥ずかしいことで」

「ふふ……じゃあ、今日はしっかり手をつないで行きましょう。わたしもシュナさんを支えますね」

「いえそんな……」

固辞しようとしたが、リエルはしっかりとシュナの手を握って離さなかった。

「で、では……よろしくお願いします」

「はいっ」

サエラが姿を見せたら口を封じよう。そんなことを考えながらシユナはリエルの手を引き、控え室を後にした。

フィルラント王国女王、リエル・タナック・フィルラント陛下ご入場。

号令と盛大な拍手にリエルは迎えられる。やけにシユナとしっかり手を繋いでいるのがおかしくてレアは微笑んだ。

リエルが玉座に着き、シユナが隣に控える。それを待って司会が一同に着席を命じた。

まず、議長であるハンネル宰相の挨拶がある。年相応に長ったらしい挨拶もリエルには新鮮なのか、じっと耳を澄ませているようだった。レアも今回ばかりはハンネルも例年と違うことを言いはしないかと期待したが、流石は完全中立主義者だと言うべきか、去年とほとんど同じ内容だった。

そしてリエルの挨拶。体調を考慮して着席したままの挨拶だが、誰も異を唱えなかった。

むしろ感嘆の声すら聞こえた。リエルは先週まで心神耗弱による昏睡状態にあり、今期の王国議会は王抜きで開催しようかという意見すらあったのだから。

「おはようございます、皆さん。気持ちよい朝になってよかったですね」

眩しい笑顔で言うので、つられてレアも、あるいは他にも数名表情が緩んだかもしれない。

「わたしは初めて参加する王国議会なので、不慣れなところもあるでしょう。ですから、皆さんに助けてもらえると嬉しいです。わたしも早くお役目を覚えて皆さんの力になれるように頑張ります」

拍手に包まれて短い挨拶が終わる。彼女がこの言葉を単なる挨拶ではなく本心から言っていることが想像できて、レアも袖を捲くり上げる思いだった。遠くではフォガリ騎士団長がまだ拍手を続けて

いる。

さて、本番か。とレアが身構えるとどうも様子がおかしい。司会とシュナが何かを話し合い、頷きあっている。

次に発言したのはシュナだった。

「会に先駆けて、陛下の発案により査問審議会を行います。異議のある者はここで申し出るように」

場内が騒然となった。唐突に何を、と誰かが言いかけて言葉を切る。理由など一つしかない。

ペリユーク・ヤカラボは青ざめてはいたが、どこか吹っ切れた様子だった。

異議が無いためシュナは司会と共同して進行を務め、査問会を開く。

「・・・ペリユーク・ヤカラボ財務長官。お立ちなさい」

きつぱりと言いつ放ったのはリエルだった。シュナも驚いたようでリエルを見上げたが、直接言われたペリユークの驚愕はそれ以上だったらしい。何より、今日のリエルはどこか超然としたものを感じてならない。

「陛下・・・お、おっしゃりたいことは全て承知しています。わ、わ、私は陛下のご采配とあらば、どんな裁定が下ろうとも構わぬ覚悟です」

「よい心がけだと思います。ですが聞いてください、ヤカラボさん」
リエルは相変わらずあの微笑のみを浮かべていた。本心から世界の全てを慈しむような微笑。じっとそれを見ていて、レアは急に何か恐ろしい事実に気付いた気がしてならなくなった。

もしかしてあの微笑こそがリエルの”真顔”なんじゃないかと。いや、リエル自身も恐らく心の中でも微笑を湛えているのは分かる。そうではなく、微笑と真顔に差が無いのでは・・・急にそんなことを思いついた。

「陛下、ここはまず私から」

「どうぞ、シュナさん」

シュナが引き継いで咳払いをする。彼女もどこか、何かが不自然だと感じているようだ。

「ペリユーク・ヤカラボ財務長官。貴公はその地位と特権を利用し、不当に高額の商品を授受していた。そうですね」

「・・・はい」

「財務局内において不正を働き、記録を改ざんして特殊会計を利用し、特別予算を引き出していた」

「はい」

「先日の北部農耕地帯における一件、陛下直々の工事を妨害し陛下の御身を危険に晒す一因を作った」

「はい」

「・・・外務長官、ウィバル・ランデミス。お立ちなさい」

「は、はい」

立ち上がった外務長官はペリユークにどこか似た禿頭の男だった。

「ペリユーク・ヤカラボと共謀し税収の一部を不正搾取していた。これは事実ですか」

「・・・じ、事実です」

「ではお二人とも、前へ」

ペリユークとウィバル・ランデミスが席を降り、円卓の中央、最も低い場所に並んで立つ。その横へシュナが歩いていくと、二人にその場で跪くように命じた。

リエルは少し、眉を悲しそうに曲げたようだった。

「お二人は、民の幸福とは何だと考えますか？」

リエルの言葉に、跪く二人は俯く。

「そうですねえ、考えても分からないことです。みんなそれぞれ、幸福に思うことは違うはずですから」

場内はしんと静まりかえった。リエルの言葉は子供の口調ながら、どこかに重いものを持つ。

「わたし、王さまのお役目って何だろうって考えてました。それはね、ええと・・・そう、ごはんがおいしくて、体が健康で、みんな

が病氣もしなくて、ちゃんとお仕事があつて・・・」

ハンネル宰相が微笑を浮かべた。やはり、この陛下は本物だと確信したように。

「わたしは、わたしにとってはそれが幸せです。それで、王さまはね、その幸せをみんなにも共有してもらうのがお役目だと思うんです」

リィエルが言うのは最低限の幸福だ。全てを失ったことすらある少女の言葉には否定できる要素が無い。柔らかい口調ながら説得力の塊のような言葉だった。

「言うは易し、行うは難し、ですねえ。でもわたしはがんばってこれを実現したいです」

リィエルは分厚い紙束を傍らの机に置いて、これに手を乗せた。少しだけ目を閉じるのが見えるが、あれは一体何なのだろうか。あのような行動の後は決まってリィエルは様々なことを急に把握したようになる。

「・・・今の、わたしの行動の意味がわかりますか？」

「い、いえ」

エンデルが椅子をがたりと鳴らした。何かを思い出すような顔だ。「母から教わった秘術の一つにこんなものがあります。それは、物質の内部にある記録と記憶に触れ、それを読み取るという術です。今、ここにペリユークさんとウィバルさんがこれまで会議や公の場で発言した議事録を持って来ています。この内容を全て読み取りました」

『!?!』

場内がまた騒然となった。そんな恐ろしいことまでできるのか、秘術とは。エンデル学院長が在りし日のミュシェ・タナックを思い出して全力で納得する様子がよく分かった。レアはこれまでのリィエルの行動の意味を察し、シュナもまた同じように理解して深いめ息をつく。

「まず、お二人への判決を決めています。これを言い渡しますね」

「は、はひ」

「・・・・・・」

もう言い逃れなどどうあっても無駄だ。リエルがこんなことで嘘を付くとは思えないし、嘘を言っている様子も無い。ならば二人の所業の全てはリエルにとつて隈なく明るみに出たと言える。

「ペリユーク・ヤカラボ。ウィバル・ランデミス。二人は前述ならびに調書にある罪状により、法務庁及び裁判所の裁定においては死罪相当とされる」

『・・・・・・！』

「ですが、わたしの権限をもってこれを撤回。代わりの裁定として、まず二人は財産を没収すること。家宅を没収し、領地を剥奪すること。これを言い渡します」

財産を失って家も無くし領地も剥奪されればそれはもうそこらの貧民と大差無いのではなからうか。

「で、では陛下、我々はこれからどうすれば・・・」

「あ、はい。えーっと、二人は城壁内の官舎に移住してください。税收からのお給料も一年間は九割を没収、ご家族がいるなら一緒に来てください。家族寮を用意します」

『はあ！？』

「この条件でこの先一年間、城の官舎に住み込みで今の職務を継続していただきます。来年の王国会議で多数決を行い、その採決によって領地と家宅は返却するかどうかを決めます。ですが財産などは国庫の損失額の補填に充てるため、そのまま完全に没収となります。よろしいでしょうか」

ある意味社会的に抹殺されたようなものだと言いかげんが呟いた気がした。或いは自分の胸の内の呟きだろうか。

金も家も没収され城壁の内側で無賃労働。ほとんど奴隷みたいなものだ。

だが二人はそれでも、始めは当惑していたものの段々と納得したらしい。それはそうだろう、本来の裁判所の判決に従うなら死刑な

のだ。彼らの行った罪は本来それほど重い。

「・・・他にも、後ろ暗い部分を持つ方がいると思います。ですが、名乗り出なくてもいいです」

リエルの言葉にぎくりとした者が何人いるだろう。ちらりと見渡しても分からない。それほど少ないのではなく、それほどに多い。そもそもリエルの記録を覗く術があるなら、隠したところで既に完全にバレていると考えるのが自然だ。

「今回のお二人の採決は、つまり見せしめだと思ってくださって結構です。これからは行動を改め、真面目なお働きに期待することになります。それでよろしいでしょうか。嫌だと言うのなら、残りの裁定は法務長官と裁判所に委ねることになりますけど」

ここまで言われてはもうどうしようも無い。リエルは「あなた達の罪は全て明らかになっています。死刑になりたくなかったらこれからはちゃんと働きなさい」と言ったようなものだ。

まさかここまで言うとは。シュナもレアも驚いていたが、ハンネル宰相も目を丸くしていた。

「裁定に従います。寛大なご処置に感謝致します！」

「右に同じく、裁定に従います・・・」

ペリユークとウィバルが疲れきった様子で、だがリエルへの認識と忠誠を改めて礼を送った。これから二人は受難の道だろうが、自業自得だ。せいぜい頑張ってもらいたい。

城内の風紀はただこの一件で完全に片付いたと言ってもいい。もはや王の目を盗んで内職に精を出そうなどと考える者も無いだろう。第一リエルの前では不可能だ。

誰ともなく、リエルへの拍手が送られた。それは数を増し、やがて大きな拍手と歓声に変わる。

この国は真の王を迎えた。いずれ強い国へと、誰もが賞賛を送る王の下で生まれ変わるだろう。

リエルが玉座で笑んだ。

フィルラント王国、万歳。女王陛下、万歳。リエル様、万歳。

「では、王国議會を始めましょう」

後日、戴冠の儀が執り行われる。

リエル・タナック・フィルラント、この儀をもって王位を継承。女王として認定を受ける。

戴冠式に際して王の御前に守護天使が現れるが、一つ騒ぎが起る。

天使は七つの階級に分けられ、属する階級に応じて異なる性質を持つ。

第一天使は生命を司る。

第二天使は進化を司る。

第三天使は力を司る。

第四天使は戦を司る。

第五天使は統治を司る。

第六天使は繁栄を司る。

第七天使は運命を司る。

彼らは必ずしも人の姿を持つわけではなく、実に様々な動物の姿を持って人の目に映る。またこの上に大天使と呼ばれる階級があり、彼らもまた非常に稀有ではあるが守護天使として現れる場合がある。先王シャルテの守護天使は第七天使ヘペルネ。純白の体毛に覆われた、兎に似た馬のような姿をしていたと伝えられる。

この日、リエル新王の前に現れたのは大天使インリユーク。真理を司る絶世の美女の姿を持つ天使であった。

大天使と聖獣の庇護の下、フィルラント王国の女王は幼いながらも圧倒的な声援を受けて民に迎えられた。その知性は紛れも無い本物であり、既に名君の片鱗は多く見られるという。

後の世に並ぶ者無き希代の名君、フィルラントの少女王の誕生である。

第一話・「閉幕」(後書き)

ここまでが第一話です。投稿に際して不慣れな点が多々あるため読み難い部分もあると思いますが、楽しんでいただければ幸いです。感想など忌憚の無い意見を頂ければ嬉しく思います。

第二話・「戴冠式(前)」

フィルラント王国暦3191年、春。

例年以上の雪量に閉ざされたフィルラントにも緩やかな暖かい春の日差しが訪れ、雪解けの季節を迎える。

北に聳^{そび}える峻峰シュエレー神山は先日的一件以来ほとんど雪も降らなかったこともあり剥き出しの岩盤を晒し続け、長年あの白壁に親しんだフィルラント国民には心穏やかならぬ風景となっていた。あの恐怖。這い上るような恐怖を伴った長く続く地響きは今でも全国民の心に傷を生み、そしてしかし、それ故にあの少女の尊さを知る。

ただ一人国家の存亡を回避せんと立ち向かった弱冠10歳の少女。今やその名を、その知性を、その奇跡のような存在を知らぬ者はこの国には居まい。愚王に呆れ官吏^{かんり}の腐敗に倦^うんだこの国は希望を与えられた。

先代シャルテ・フィルラントの子、フィルラント国新王リエル・タナック・フィルラント女王陛下、本日戴冠。

花畑みたい。

リエルは馬車に揺られながらそんな風に外の景色を眺めた。向かいに座るレアが、きよろきよろと辺りを見回すリエルを微笑ましそうに見やりつつも、堂々としていてくださいと言う。

王城を出て十数分。フィルラント王国におけるセス教の教会は南部市街地の中央に座し、その門扉は王城に直面するように設けられている。中央通りは二本、その西側^{なら}を教会まで行き、帰りは東側を通るのが通例だとか。それに倣^{なら}いリエルのためにと急拵^{はしら}えで用意された華やかな飾り馬車が市中を南下していく。

その道を、リエル新女王陛下を一目見ようと集まった民衆が埋

め尽くしていた。

「こんなにたくさんの方がいたんですね」

人口約三万人と言えば小国に数えられるフィルラントのほとんどの人間がこの場に集っているのではないか、そう思えるほどの群集であった。そして誰もが女王陛下の御前にあつては失礼はならぬとばかりに着飾り、その色とりどりの装飾はあたかもリエルが過去に暮らした家からも見た、春の花畑を彷彿とさせる。もっとも、あの花畑はこれほど大きな歓声を聞かせることはなかったけれど。

馬車と護衛の兵士らを先導するのはシュナだ。この日のために警備を始め道程の速度、兵士の人員数、配置、果ては用いる馬の健康状態や馬車の安全性の点検まで計画し、自らも加わって入念に準備してきたという。その先導は城を出てから几帳面なことこの上なく、本当に一定の速度で馬車は走っていた。フォガリ騎士団長とハンネル宰相に言わせれば、シュナの能力の中で最も秀でるのは馬術であり、手綱捌きにおいては若年でありながら他の追隨を許さぬ腕前だとか。

「法衣は重くありませんか？」

「大丈夫です。それより、この冠が・・・」

「ふふ、慣れてくださいまし」

「うう・・・はい」

リエルは頭に載せた宝冠を幾度目か、また位置を直した。べたべたとあまり触れるのはよくないのだが、どうにも頭に重いものを載せるのは慣れず、少々げんなりしていた。

宝冠に法衣。どちらもリエルの年齢とこれからを考え、彼女の体にはやや大きいサイズが用意された。アクセサリとして用いられるこの宝冠は、リエルのふわふわと踊る陽光色のくせ毛によく映える、紅の絹地に自然風景をモチーフとして何種類もの宝石をビーズのようにちりばめた豪華なもの。これがリエルの大人しい性格には派手過ぎると映り、当初困惑していたもののやはり年頃の少女らしいというか、誰しも懂れる「お姫様の冠」に思えてきたのか外

観は概ね気に入った様子だった。問題はこの重さで、綿や絹を用いた比較的軽い宝冠とはいえ、他のほとんどは金でできているのだ。重くないはずがない。

もう一度宝冠の位置を直そうと手を上げたところで、法衣の上に羽織った長いマントも手に引っかけかけて持ち上がってしまった、危うく宝冠を取り落としそうになった。レアが甲斐甲斐しく手を添えてくれたので事無きを得て。

「ドレスのほうがよかったのでしょうか・・・」

「いいえ、そんなことは御座いませんとも」

法衣かドレスか。リエル戴冠の儀に際して彼女の着衣とするもので少々揉めた。それは、他ならぬリエルが法衣を着て行きたいと望んだために。

法衣は、基本セス教の司祭を始め神職にあるものが身に纏い、王や臣は無論として民も、セス教の祭事には身に付ける場合がある。そして特に、秘術士の正装としてフィルラントでは用いられる。恐らくそれ故にだろう。リエルの事情を把握する臣達は、最後には王立学院長エンデルの強い提案もあって秘術士の法衣を基にデザインした一着をリエルへと献上する次第となった。

感極まってリエルはありがとう、と涙ぐんで礼を言い、試着したまま庭にある母の墓前へ行こうとしたのを皆で何とか言い含めて止めさせ、と一騒動もあった。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・よくお似合いですよ」

レアの言葉に再びありがとうと返し、微笑むリエルの表情。そのどこかに、奥深くに翳^{かげ}りが見える。

リエルの母、ミュシエ・タナックは卒業に際して学院から渡されるはずの法衣を受け取らず、誰の見送りも受けず学院から姿を消したという。その当人の口から、リエルは聞いている。

「お母さんが、あの時法衣を受け取らなかったのは失敗だった、と言っていました。服はあんまりこだわっていないつもりだったのです

けど、やっぱり着てみると気持ちが違うものです」

「嬉しい、と？」

「はい。・・・お母さんにも見せてあげたかったです」

そして寂しい、と。

華やかな暮らし、華やかな行事があればそれだけ、リエルは過去に目を向け母を想う。事ある毎に深く落ち込むほどリエルは弱い娘ではなかったが、幼さ故の儚さがあった。

秘術の成績を修めた者は誇らしさを法衣に表す。ミュシェ・タナックは誰にも誇るわけにはいかなかったために、法衣の贈呈を辞退した。だがそれでも心残りがあった。それほどその女性は努力を重ねたということだろう。

リエルもまた秘術を学び続け、ついに母と並ぶ知識を保有するに至った稀有な少女である。誰かに認めて欲しい、誇っていたという心情があるなら、やはり王ではなく秘術士としての自分が第一に浮かぶのだろう。だから法衣を選び、今こうして身を包ませている。そしてそれは母には出来なかったことだから。

「・・・・・・・・」

リエルは車窓の外に広がる鮮やかな民衆の花畑に再び目を向けた。レアはその横顔に、常に一抹の寂寥せきりょうを見出し続けている。リエルが登城してから、今に至っても。

ミュシェ・タナックとはどんな女性だったのだろう。レアはリエルにとって大きすぎる存在であるその女性を思い浮かべようとしたが上手くいかず、幻想の存在のような人物像をおぼろげに想像するのみだった。

やがて、馬車が止まる。

「着きました。さあ、リエル様」

「はい」

歓声が一際大きくなる。その時にはもう、リエルの顔に翳りは見えなかった。代わりに、少女としての緊張、そしてもう一つは新米の王としての小さくも確固たる威厳。

馬車の扉が開き、シュナが手を差し出していた。

レアが法衣の裾を持ち、他の侍従や兵士らも集まってきてリエルの歩みを守る。

石畳を金糸の靴で踏みしめ、教会を見上げた。

憂いと迷いは違う。リエルに迷いなど無い。

見上げた顔は晴れやかだった。

ことん。足音は小さく。

巨大な門が開け放たれ、リエルが無数の従者を伴って一步を踏み出す。それを見下ろすのは門の上の二体の天使像。その名前も由来もリエルは知らないし、誰かが知っていると聞く事もない。それほど古い、旧くからの意匠が施された建物。国家の基礎となる、神が与えし場所。

教会に入るのは初めてだった。私生児であるリエルは教会の生誕名簿に登記がなされておらず、そのため彼女の身分を示す記録は本来どこにも存在しない。それは一般であれば教会や国家との関与が極端に希薄であるということ。税金は発生せず、代わりに保護も無い。婚儀や葬儀は教会が行うがこれも扱ってもらえず、そもそも生まれたということになっていないはずだった。当然、後に登録することは可能だが、母は拒んだ。理由はこれも知らない。

リエルはこの国のどこにも存在しないまま生まれ、生きて、あの日飢えて朽ち果てようとしていた。だがその血を証として、彼女はここ場所へやって来たのだ。顔も知らぬ父が遺した唯一の、そして絶対の財産によって。

迎えた教会の古い匂いがリエルの鼻をくすぐる。何もない平原に神が国家に対し与える唯一の建造物。人間による補修を重ね、この国にあっては三千年を超える歴史の塊。

長椅子が並び、中央に道。正面の奥に低い舞台があり、祭壇が設置されている。周囲の壁は全て石造りで、防寒のため厚手のカーテ

ンが壁面全体を覆う。それらにほぼかび臭さは無く、常に丁寧な手入れが施されていることが分かる。

門をくぐったリエルを、先に列席した臣達の誇らしげな顔ぶれが迎え入れた。

「どうぞ陛下、ここからは教わった通りに」

「はい、わかりました」

幾分緊張もあろう。やや上ずった声音になり、リエルはレアに苦笑してみせ、レアも微笑んだ。するりとマントの裾を手放すと、リエルは再びことん、ことん、と軽い足音を伴って歩き始める。マントは教会の静謐に佇む空気に泳ぎ、ふわりと翻ってまたリエルの背に収まった。

歩みは軽く。だが強く、強く。

フィルラント国セス教司祭長カテユ・マリアツキナが祭壇で待っている。祭壇の上には小さな冠がうやうや恭しく祀られており、その金色が天窓からの陽光と蠟燭の灯火で眩く輝く。リエルは目を細めた。ことん。足が止まる。

「ようこそ、リエル・タナック・フィルラント女王陛下。セス神と人の盟約に基づき、貴女へ三つの奇跡を示しましょう。心の準備はよろしいか？」

「はい、マリアツキナ司祭長」

老齢を如実に語る結わえた白髪は長く、足首まである。カテユ・マリアツキナ司祭長は若い頃にシュエレー神に礼拝し、以来断髪を自ら戒め教義に殉じるべく覚悟を示した男だという。鉄の名簿は彼の名を50年以上に渡り、その最上段に刻み続けている。

皺だらけの手が、しかし微塵も震えぬ流水のような動作で王冠を持ち上げた。そのままマリアツキナはひざまず跪き、リエルへこれを差し出す。

「どうぞ、お受けを」

「・・・はい」

手渡された王冠は、リエルの手に予想外に軽かった。さほど華

美でもないシンプルなその外見は、むしろ全体が金属製であることからずしりと重厚に思えたものだが。

「裏側に文があります。朗読を」

「文？・・・これは」

言われるままに王冠の裏側を見ると、確かに小さな文字で文章が彫られて・・・いや、浮き彫りにされていた。傷や曇りが見えないということは、鋳型で成型したのだろうか。

文字は、面白いことにリエルにも読めない太古の言語で書かれたものだった。面白いというのは、読めないのにその内容が理解できたことである。頭の中に文章の意味だけが浮かび上がってきた。文字そのものの読み方は分からないが、リエルはこの事象を臆することなく受け入れた。

「フィルラント国王 シャルテ・フィルラント ” 運命が汝 汝が宿命 思うまま在れ ”」

リエルが目を見開き、何か言う前にマリアツキナが口を開いた。「先代、シャルテ王の戴冠に際してもこの王冠は天意を示した。意味は王ただ一人が知ればよいもので、この文章の意味は私は知りません。先々代の王も別の文章を与えられましたが、やはりその意味は問うべきではない」

「あ・・・」

「文に触れてごらんさい。なぞって、拭い取るように」

まさか、と思いリエルはしばし躊躇ちゅうちよした。じっと文章を見つめ、やがて深く息を吐いた。

リエルの指がゆっくりと文字をなぞると、その下から全く別の文字が出てくる。前の文字は消え失せ、新しい文章へと変わっていく。

神が父へ送った言葉はこうして消える。全ての王がこうして先代の歴史を上書きしていくものであり、過去と決別してきた。だがそれは必要な儀式なのだと、リエルも理解できる。

ただし、時にこんなこともある。

「これは……お父さん……お母さん……」

「……文は、何と？」

浮かび上がった文字を見てリエルは涙を目端に浮かべた。背後で、肩を震わせるリエルを見て息を呑む気配があつて、リエルは慌てて肩口で目を拭った。

「フィルラント国王 リエル・タナック・フィルラント」

これは悲しい涙ではない。むしろ、嬉しさがリエルの胸を突く。

「母の愛は杖に 父の愛は道に 汝は運命の子」……」
教会内がざわめいた。リエルは拭った先から涙が溢れ、鼻を^{すす}吸り上げる。

「涙の意味は問いませぬ。誰に説明せずともよろしい。真意はお分かりなのですか？」

「……はい。よく、分かります。分かってます……」

何もかもを言葉にすれば、民は怒るかもしれない。臣も同じく。きつと父が受けた言葉もそうだろう。この言葉の真に意味するところを明らかにしてはならない。

王座に着き国家を見渡した、母の知識を受け継ぎ秘術の奥義を学んだリエルだからこそ、その重さは理解し得た。

マリアツキナの指示に従い、王冠を再び彼の手到手渡し、リエルは頭を下げた。

王冠はやはりリエルの頭にも軽く、まるで最初からその体の一部であつたかのように馴染んだ。

「これが第一の奇跡。今この時をもってリエル・タナック・フィルラント女王陛下は正式にこのフィルラントの国王となられた。列した御一同、新王陛下に礼を」

マリアツキナが深くリエルへと礼を送る。背後に控える大勢の臣も同じように。

金の王冠を戴いたリエルが振り返り、朗らかな笑みを浮かべる。頭を上げた臣の面々は万感の思いを込めて拍手を送り、この小さな女王陛下への祝辞とした。

「私めの役目はここまで。第二の奇跡をお待ちくださいませ」

「第二？」

マリアツキナが身を引き、祭壇のある舞台の袖へ下がる。では、ここから誰が続きを行うのだろう。リエルは不思議な心持ちながら、興味深くその時を待った。事前にこの展開は知らされてはいない。

その時は、それほど長く待つほどでもなく訪れた。

「・・・風が・・・」

ふわ、と教会の中を柔らかな風が駆け抜ける。暖かく、慈しむような風。天窓からはより強い日差しが降り注ぎ、リエルの姿を照らし出した。

とん。

「・・・・・・・・！！」

リエルの足音よりも更に軽やかな足音が壇上から響いた。その場所には今まで誰の姿も無かったはずが、いつの間にか一つの人影が生まれていた。

淡く光り輝く純白。身に纏う僧衣も、肌も透けるほどに白く、髪は殊更に眩しい白銀。表情は優しげで、底知れぬ慈愛の眼差しをリエルに向ける。

白い貴婦人がそこにいた。そしてその美貌。誰もが、リエルでさえもが息を呑み目を見張るほどの絶世の美女。

とん。まるで時間の流れが緩やかになったような錯覚を覚える、たおやかな動作。

見とれるリエルの前へと、その女性は歩み出て立ち止まる。

『私の名は既にお分かりですね』

涼やかに、それでいて柔らかい、春の知らせを告げる草原の風のような声音にリエルは聞き惚れる。その言葉に頷き、リエルは魂の奥底から湧き上がる名を口にした。

「はい・・・大天使、インリユーク。わたしの守護天使様」

もう何度目だろう、教会のそこかしこから息を呑み驚愕する気配

がある。マリアツキナ司祭長でさえ感嘆のあまり口をぽかんと開いていた。

『こちらへ。王の祭壇を開きましょう』

天使に招かれ、リエルは差し出された手を取り壇上へ上がる。

天使の示すのは壇上の奥、扉のような彫刻だけが施された白い石の壁。

怪訝に思っていると、天使インリユークがその壁に触れた。

「わぁ・・・！」

壁の装飾はどこにも継ぎ目などなかったのに、その滑らかな壁面は一直線に切り開かれ音も無く動いた。扉がそこに出現していたのだ。

微笑む天使に導かれ、二人はその奥へと入っていく。

王の祭壇。王と天使だけが入る事を許され、対話を行う秘密の小部屋へ。

扉が音も無く閉じた。

第二話・「庶務と閑話休題」

「予算は足りてるんですよえ」

「はい、財務長官の一件で捻出できましたからな。人員も問題なし。騎士団の協力も御座いますし」

「でも水路は・・・」

「・・・ですなあ。クシャタラナト様はどちらかと言えば気難しい気性の聖獣。説得は難しいかと」

「いっそのこと黙って上流から工事を行ってはいかがです？」

「そんな、駄目ですよシュナさん。黙ってやるなんていけません」

「は、はい、失言でした」

リエルの執務室にて。会話しているのは席に着くリエルと、机越しのハンネル宰相、シュナ親衛隊長。共に文官と思しき部下を引き連れており、膨大な量の書類を持参して来ている。

王国議会が滞り無く終了し、今年度の政務予算の全てが決定。リエルの戴冠式もつつがなく終了し、晴れてリエルは国王としての職務に従事する日々が始まった。

大勢の予想通り、リエルは庶務全般においても非常に明晰な頭脳を発揮してくれた。そも、政治のなんたるかをやるよりは幾分か、細々とした事業を処理するほうがリエルの性分には合っているように見えた。なにせ数字や学術的が絡むほぼ全ての公共事業に関する書類に手を触れるだけで内容を理解し、的確な指示を下すのだ。逆にその指示を受けて行動する各部署の方が指示が余りに的確かつ素早いので目の回る思いだという。

そんな中、ある懸念事項が浮上した。

「最初から整理してみましよう。何か思い付くかもしれません」

「ふむ」

リエルは目の前に置かれた数々の書類束をぺらぺらとめくり、はくばん箔板という一種のノートにインクでペンを走らせた。この箔板とい

うのは、硬度の高い金属箔を滑らかに表面加工した木の板に張り付けたもので、ごく一般的な文房具の一つである。紙は製造が難しいため高価すぎるのだ。一方で箔板は、インクを水洗いして何度も使えるという大きな利点を持っている。

目の前に広がる書類も公文書の一部として清書されたものなので、いずれ城下にある公文書館に保管され秘術による保存がなされるのだろう。うかつにインクを落とさないよう、リエルも気を遣っている。

「まず、先日シュエレー神山の一件で発生した多量の土砂ですね。これを除去して、山肌がこれ以上崩落するかどうか調査を行い、必要なら補強工事をする、と」

「国土庁の技官や王立学院の学芸員によれば、目測ですが補強は必要ないとか」

「きれいに剥離しましたからねえ。でも、わたしも同意見ですけどやっぱり調査くらいはしないと。万が一ということもあります」

「ですな」

ハンネル宰相は既にリエルに対して子ども扱いするような態度を一切見せなくなっていた。ことリエルの普段の生活においては年齢そのものが幼いためそのように接することもあるが、政務に関する対話においてはリエルを練達した識者であるかのように振舞っている。

「それから・・・わたしの術で乾燥してしまった農耕地帯の土壌ですか。・・・これをもう一度耕して農場に戻し、緑化を行うためには、どうしてもたくさんのお水が要りますねえ」

「であるからして、水路を造る必要はどうしても御座いますな。まさか手桶で川から運んでくることなどできますまい。井戸を掘ろうにも、これも土が深く乾いてしまったため無理、と。技官に言わせれば通常よりずっと深く井戸を掘ることができれば水源に当たるかもしれないとありますが・・・」

「前にも言いましたが、土が乾いている状態で地下水脈を汲み上げ

るのには反対します。土壤の密度がこれ以上変わると危ないと思いますから。平地ならまだしも、不安定な山の斜面ということもありますので」

「・・・なるほど。しかし、それならばやはり川から水路を引くことになりますか？」

「そうですね・・・なんとか、泥水が出るのを抑えられれば説得できるかしら？」

「難しいでしょうなあ。何せ川上で簡単な漁をするのも禁じた方です。今回の崩落で流れ込んだ土砂でも、どれだけ立腹しているか容易に想像がつくというものですな」

「困りましたねえ」

「・・・まあ、出来ぬものは仕方ありません。説得か別の方法を模索するかは後に保留するとして、他の作業計画もご確認を」

「うーん・・・他といっても、後は焼けたり埋まってしまった穀倉と苗倉の対策ですね。どうしましょう」

「一応、この城にも予備の備蓄として農作物の種は保管しておりますが、とても今年の農作業に足る量とは言えません。麦や芋を始め作物のほとんどは農民らが大半を引き上げて退去していたため少なくなると今年の食料に困ることはありませんが、来年以降は収穫が途絶えることになりますな。牧草が無いため、同じく引き上げた家畜の飼育もままなりません。既に飼料を切り詰めている状態とか」

「うーん・・・」

大きく唸り声を上げてリィエルはそれきり眉をひそめて黙り込んでしまった。

つまり、先日のシュエレー神山崩落の一件、あれが及ぼした影響はその崩落そのものに留まらず、リィエルが用いた術の被害も含めて二次被害が散発したのだ。その主なものに農地の焼失が上げられる。

フィラント王国の農業は、国の北部、つまりシュエレー神山の麓に位置する広大な斜面においてを中心に展開される。収穫物は黒

麦、大麦、芋、葉野菜、寒さに強い果物が少し。収穫量は王国の食卓を賄い、2〜3%が余剰して備蓄できる程度にしかない。

「塩害について調査したところ、これに関しては無事とのこと。農民によれば水を撒いた際に注意すべきとありました」

三次被害について調査隊を編成したのは、騎士団と王国軍の一部を預かったシュナである。王の身边を警護する親衛隊といえども、平時は騎士団と同等の扱いを受けて行動する場合が多い。というより、騎士団も平時は多種作業に従事する王国軍と同等に扱われる。

独自権限を有し活動できる騎士団ではあったが、フォガリ騎士団長に言わせれば「どの道訓練ぐらいしか今のところやることはありません」というわけで、北部に練兵所や兵舎を構える軍の一員として焼け爛れた農地の麓で訓練する気にもなれないのだろう。

「縞マメの備蓄はいくらほどあります？」

「十二分に」

「では手配をお願いします。石橋を走って渡ることは今は避けましょう」

「は。そのように」

縞マメとは、海の沿岸部に自生する豆類の一種である。塩分に強い耐性を持ち分解して栄養とする植物で、これを栽培し塩害農地を塩抜きする手法は古くから存在する。名前の由来は見た目のまま、樹木の年輪のように種子の表面が縞模様になることから。

「これでしばらくは縞マメを食わずに済みますわね」

三者の紅茶を注ぎながらレアがこぼし、いけないと思いつつも全員が苦笑した。縞マメはその性質から塩分を蓄積し、その分解物も溜め込むためにかく苦く、不味い。調理法によっていくらか食べやすくできるとはいえ、城の調理人をして「専用の鍋を毎年用意させてください。あれを料理した鍋で他の材料を調理したものを陛下に出せません」と言わしめる代物だった。そして王城に暮らす皆には不憫なことに、こういった塩害対策で必須となる作物だけに王城には常に備蓄が置かれ、毎年その量を減らすこともないために王城

の者がこれを通して消費するはめになる。リエルも貧しい食事に慣れた舌を持つに至る過去があれど、この豆を初めて食べた時には表情を凍らせたほどである。

農地復興が急務であるこの時に「食べたくない」などと言えないが、それでもなおこの豆はひたすら不味かった。滋養は多いと聞か
が。

「数少ないフィラント原産の作物も、あの味では・・・」

ハンネル宰相ですら眉をひそめる脅威の穀物、それが縞マメ。が、今では世界中で栽培され、塩害対策に用いられる重要な農作物である。この国の功績としては大きい。せめて焼却や肥料、飼料に用いることで処理できるものならなお良かっただろうに、焼いても海に捨てるしかなく、土中に埋めると再び塩分を発生させ、飼料にするにも家畜すら食べるのを拒む。

「・・・・・・・・ところで、今日の夜のご飯は・・・」

「・・・・・・・・縞マメが献立に上がっていましたね」

リエルの確認にレアが答え、二人してげんなりする。既に王城でも食べる物を選び、農地再生の目処が立つまではこの調子らしい。

縞マメはお菓、縞マメはお菓、と口の中で呟くリエルは甘い茶菓子を齧^{かじ}っているのに苦々しげだ。

「もういつそのこと今度縞マメをたくさん持ってきてください。秘術士は薬師でもあります。わたしが薬草として使えるか研究を！」

「政務があるので駄目です。是非にというなら王立学院に依頼しましょう」

「・・・・・・・・うう、わかりました」

にべもないハンネル宰相である。いかなる時にも冷静さを見失わないのは彼の美德だが、この限りにあってそれが恨めしい。

「南部市街に退去している農民らも、家が残っている者は帰還を始めた。家が埋まった者についてはこちらで対処しておりますのでご心配なく。この他に鉱山との運搬路が絶たれたためフォードムレフテ市職人街で少々揉めたようですが、輸出品目の相場をやや上

昇させて職人らには生産頻度を落とすよう通達しました。隣国も相場変動には復興支援として納得を頂いております」

「エンケルダとトルパトルには戴冠式の招待状を送る暇もありませんでしたね。その内にご挨拶に伺ってもよいのでしょうか」

「それはもちろんでしょう。追って両国に通達しておきます」

エンケルダ国は西の隣国。トルパトルは東の隣国である。国交はあり、フィルラントとは秘術士の育成やフィルラントの誇る職人の作成する道具類の流通、対して食料など生産物や材木の交易のやり取りがある。商魂逞しい商人らには三国間の相場に沿って年中歩き回る者も居る。無論、軍事同盟も結ばれている。

「……既に、命令が下れば工夫工兵共にいつでも作業に取り掛かれる状態です。土砂の除去は先日から既に始まっておりますが、本格的な工事はまだ一切手を付けておらぬ状況。いかがなさいます？」

ハンネルが言外に言いたいことは分かっている。リエルが答えるべき言葉も分かっている。だが、二人とも表情は渋いままだ。

先に言及されていたが、この案件の最大の障害となっているのが、東の守護聖獣、水竜クシャタラナトだった。

フィルラント王国東方の国境に指定されたシュエレー神山から注ぐ河川は平原にて堰き止められ、そこそこ巨大な湖沼を形成している。これに住まい国境の守護者として水竜クシャタラナトとフィルラント王国は契約しているわけだが、この水竜がとにかく気難しい性格だった。

先日の神山の崩落の際、リエルは土砂を受け流すべく河川へと大量の土砂を流し込んでしまったが、これがいけなかった。クシャタラナトは突如上流から流れてきた濁流に憤怒し、二度とこのようなことがあれば自分は国境の守護契約を破棄するとまで言い放って湖底に引き籠もってしまったのだ。以来数日、彼は誰の呼びかけにも応えないまま。その言葉通りなら、河川工事ですらしても発生する泥水を目ざとく見つけ、彼は本当に守護の契約を破棄しかねない。

唯一行っていない可能性としては、まだリエル本人がクシャタラナトに直接面会を申し出ていないことが上げられる。王国議会からこちら、戴冠式や庶務の処理、加えてレアからは遠出できるほどにないと静養を求められ、リエルは城外に出ることすらできないでいる。しかし、このままでは埒が開くはずもなく、時間の流れに任せられる問題でもない。

「わたしが行って、もしもクシャタラナト様が応えなかったら・・・」

「その時は手立てが尽きますな」

一言、リエルが行くと言えたら楽だろう。しかしそれは可能性を論じるに過ぎず、樂觀的に過ぎる。無論聖獣クシャタラナトも国家と契約し居場所を確保しているため、王たるリエルの懇願に応えないとも思えない。が、聖獣は王の下にあり臣の上にあるもの。保障や交渉材料も無く赴いては両者の関係に溝を生みかねない。既に溝はあるが、深まる危険性を冒すほどの理由が今は無い。聖獣を失うことは国力の数割を失うに等しいからだ。隣国との関係が良好でも、例えば災害など聖獣の力を借りる場合もある。

「うーん・・・」

「むう・・・」

どうしたものか。リエルとハンネルはまた唸って黙る。

「アールカイン様に助力を頼むというのはどうでしょう？」

シュナが思いついて言うが、リエルは首を横に振った。

「駄目です。先日もお世話になったばかりですし、それにカインさんはこういうことで頼みごとをしても、きっと不愉快に思うでしょう。わたし、カインさんに怒られるのは嫌です」

「左様で・・・」

ちよっぴり拗ねたようなリエルが微笑ましく物珍しかったが、シュナはそんな考えを抑えて自分に出来ることはないか考え続けた。が、そうそう急に妙案が浮かびはしない。

西の守護聖獣、巨大鳥アールカインとリエルは親しく友誼^{ゆうぎ}を結

んでいるそうだが、シュナは今でもこれが信じられない。聖獣とはそうした存在であり、国家と共にあれど一般に親しげに接するような存在ではないのだ。リエルの交友関係こそが異端と言える。

じきに雪解けの季節になる。本来水量が増えればそれだけ農業用水を引き浄水を通して国中は冬の渴きを潤すものだが、あの水量が流れる川を工事するのは無謀すぎる。今が最も良い時期なのだ。

土地は乾いたが、やがて雨が降り風が種を運び自然に土壌は回復するかもしれない。が、それには一体何年を要するのだろう。一年やそこらであれだけ乾燥した土地が潤うとも思えず、その間に国は飢えることになる。

「レアさん・・・」

「・・・お気持ちはわかりますが、駄目です。どうしても言うのであれば、もっとお食事を頑張って食べてくださいまし。陛下があんまり小食なのでコックが嘆いておりました。それで体力が付けばお外へ出て構いません」

「でも、あんなに沢山食べきれないです。すぐお腹が一杯になってしまいます」

「お体が小さいので当然ですが、それでも陛下は健啖けんたんとは言えませんよ。偏食が無いのも良いことですが、パン一つにスープ一杯、少し多い時で肉の一切れ程度ではあまりにコックが哀れです」

「・・・サエラが最近太ったと言っていたのはそれが理由か・・・」
リエルの残した食事をつまんだらしい。

「あと一皿、頑張ってみましょう陛下。栄養不足で倒れられては困ります」

「・・・はい」

結局、会議はリエルが長時間外出できるまでに体力を付け、クシャタラナトに直接面会する。これで結論となった。

ついでにサエラには後にレアより直々に処分が下される方向で決定したことも追記する。

「んっ……ふぁぁ……」

ハンネルとシュナが退室し、レアも紅茶を淹れ直して来ると給仕室へ行ってしまいリエルは珍しく一人きりになった。椅子に腰掛けたまま猫のように背を伸ばし、大きく欠伸をついて机に上体を投げ出す。ひんやりと冷たく、疲れた頭に心地よい。

時刻は昼下がりに。茶菓子で腹も多少膨れ、根を詰めて考え事に没頭していたこともあり疲労がある。

高価なガラス板で覆われた窓から日差しが投げかけられ、リエルの背が温もって気持ちよかった。そのまま今度は椅子の背もたれと手すりに寄りかかり、うとうとし始める。

暖炉は煌々《こうこう》と明るく、部屋を暖める。

まどろみの中でもリエルは思考を止めず、何かよい方策が無いものか考え続けていた。しかし、今回の事例に関してはいっそシンブルな物事だけに解決方法が限定されすぎる。先ほどの決定通りにやるしかないなら、レアの言いつけを守って今日から晚餐は多く食べるようにしなければ。

薪がパチリと音を立て、火の粉が煙突に吸い込まれる。

ドアがノックされる音でリエルは目を覚ました。失礼します、とレアの声。足音が一つでないので、サエラも来たようだ。

「あら、お目覚めですね」

「え？わたし、どれくらい寝てましたか」

「半刻ほど。先ほどは失礼を」

「?？」

あらいやだ、とレアは軽く噴き出した。

「申し訳ございません。いえ、先ほどはノックもせず入室しましたので」

なるほど、とリエルも笑った。レアが温かい湯気の立つ茶を持ってきたので、リエルは執務机を離れて窓際の小さなテーブルに

着いた。

「サエラ？」

これまで一言も喋らずドアに立っていたサエラに、リエルは声を掛ける。どうしたのか、サエラは目を泳がせて小さく「はい」だけ。

「どうしたの？」

「いいんです陛下。サエラには少々お灸を据える必要があります」
「……………レアさ……………じゃなくて侍従長」

やっとサエラが泣き出しそうな声を出した。ああ、と納得しリエルは破顔する。先ほどの一件だろう。

「だから一緒に食べましょうっていつも誘ってるのに」

「ほらあっ！ほらレアさん、リエル様もこう言ってくれてるじゃないですか！」

対するレアは片眉をひそめた。硬質な無表情が特徴的な彼女だけに、こういう表情はかなり怖い。

「午後のお茶を同席するまでは、私も許可しましょう。陛下にも休息の時間は必要です。しかし、晚餐では何を求められているか、私が毎晩のようにお教えしているでしょう。それとも？サエラにも陛下と同じくテーブルマナー始め楽しい楽しいお勉強を受けていただきますようか。私にはサエラがああ授業を真面目に聞くとは思えません」

サエラがうげっ、という顔をしながらリエルを見た。リエルはその視線に苦笑で応える。

サエラが晚餐に同席したことが無いため知る由も無かったが、晚餐時にはリエルはレアからテーブルマナーの講座を受けつつ、平時は一人で、そして時折は大臣らと会食しつつ政治の勉強も兼ねながら過ごすことになっている。日中は忙しい大臣が多いため、これは旧来の慣習としてリエルも納得していることだった。もちろん、子供らしく夜の早いリエルを考慮して会食なども短時間で済ませるのが。

知識においてリエルは傑物だが、今後王族として振舞うための洗練された仕草や言葉遣いなど、各種マナーはごく基本的なものしか備わっていなかった。恐らくそれはリエルの母ミュシェが教えたのだろうが、良い下地にはなっていない。立ち居振る舞いの全てを監修し、一端のレディーとして教育するのがレアに任された最大の仕事である。手を抜くとも言えない。

「どうしますか、サエラ」

「うう、遠慮しときます・・・」

「分かればいいのよ。それと、つまみ食いなんてはしたないこともお止めなさい」

「はぁーい・・・」

しょんぼりするサエラの頭をよしよしと撫でるリエル。二人して笑い合い、レアも口の両端を持ち上げながら紅茶をカップに注ぐ。午後の空いた時間、最近では今のようになりに近い側近らがこの執務室でリエルを中心に歓談するのが通例になりつつあった。それは誰が言い出して決めたことでもなく、ごく自然に。ただ、この広い執務室にリエルが一人ではあまりに寂しいだろうと誰ともなく心のどこかで気付いていたのかもしれない。

その通例に従い、ドアが再びノックされる。どうぞ、とリエルの言葉に扉を開けたのはやはりシュナだった。

「通達を済ませてきました。調査団以外は通常のまま城内警護と、土木作業の補助を行います」

「はい、結構です。シュナもこっちに来てお菓子を食べましょう」

「いただきます」

引き締めた表情がやや緩む。リエルのためと誰も言わないのは、この集まりが自分自身の安らぎの場でもあるからだろう。なにかとストレスの溜まりやすい立場にあるシュナとレアは特に、この部屋に居る時こそ最もくつろいでいる様子だった。

和やかな午後の時間が流れる。窓の外を見て陽が翳り始め、急に

冷えてきたのでレアが暖炉の薪を足した。サエラがリエルのためにと毛糸のケープを持ってきて、シュナはといえば執務机の上を整頓していた。

そろそろ陽が傾く頃か。リエルはつらつらと思考を巡らせながら、ふと窓の外に見える建物に目を留めた。

「そういえば、あれは官舎でしたね」

「え？ ああ・・・そうですね。横にあるのが家族寮、それに・・・」

「ずらっと並んでるのがメイドやなんかの借家ですね。私んちは反対側なんで見えないんですけど」

「そうなの。でも、サエラはこのお城に住み込みですよね？」

きょとんと尋ねたリエルに、サエラは頬を掻きながら答える。

「あ・・・いや、その・・・まあそうなんですが」

ふう、とレアが息を吐く。

「まだ名義を変更していないのね、サエラ。何度も催促しているのに」

「いやあ、母さんの名前のほうがお給金とか諸々がそのあの」

「サエラはわたし付きのメイドなんですから、相談してくれたらわたしのお小遣いからちゃんとお給料を出しますよ？」

昨年、シャルテ王と王妃が遭った事故の際、サエラの母も同じ馬車に乗っていた。九死に一生を得たが両足にひどい怪我を負い、以来自宅にて療養しているという。代わりにサエラがメイドに昇進したが、そもそもサエラは以前から城内で手伝いをしていたためこれらの新人メイドより遥かに使えるというのがレアの評。リエルも、出自に難があるだけに気安く接してくれるサエラの存在はありがたく、心強い。長く勤めてきたというサエラの母と比較しても、サエラの地位は今や無視できるものではないのだ。

「お母さまを大事にしてるのね、サエラは」

「い、いやリエル様にそんなこと言われたら・・・ねえ？」

気恥ずかしいらしい。目を泳がせて照れるサエラが可笑しくて、リエルはくすくすと笑った。

「あ、そうです。レアさん、この後の予定は？」

「この後は晚餐まで空いています。どこか行きたい場所でも？」

リエルはサエラの手を握って満面の笑みを浮かべた。

「はい。サエラのお母さまのお見舞いに。いいでしょう？」

サエラが慌てた様子を見せたが、レアはなるほど、と思った。窓の外を確認して、天気と距離を見る。暖かくして手を引いて歩けば問題はあるまい。典医の言葉では体力を付けると同時に適度な運動も行うようにとあったことだし。

レアの僅かな目線にシュナも頷いた。

「いいでしょう。私たち全員でお供しますが、よいですね？」

「はい。お願いします」

一方で急なことに狼狽するサエラは、リエルの手を振りほどくわけにもいかず立ち尽くす。

「いやそんな、ウチなんて陛下のお目汚しになっちゃうって言いますか、その、べ、別にお見舞いなんて大それたことしなくても母さんぴんぴんしてますし、ええとあのう」

「・・・どうということなんだ、レア？」

サエラの態度を不審に思ったシュナ。リエルもレアの顔を見上げている。そのレアは心なしか楽しそうだった。

「サエラ・ウォセツト・レーレン。聞き覚えは？」

「?・・・ああ・・・ああ・・・なるほどなあ」

「どういう意味です？」

リエルが聞くと、レアはいたずらっぽく茶目っ気のある微笑みで返した。が、その返答はシュナから出る。

「サエラの母、レーレン婦人と言えば城内で有名なメイドでして、私も世話になりました。レアの直接の上司だったのですが、これが厳しい方で」

「鍛えられましたわ。もの凄く気配りの利く方で、言い換えればどんな小さなミスも見逃さない、そんな女性でした」

「私も怒鳴りつけられたことがあります。無論、私に非があったの

ですが・・・」

「基本的にあの方は間違ったことは言わないのよ。シュナも勉強になったでしょう？」

「そうだな、ふふふ」

思い出に花を咲かせる二人とは対照的に、退路を絶たれつつあるサエラは本気で嫌そうな顔をしていた。

「やめましょうよ、陛下連れて行ったりなんて」

「どうして？わたし、会ってみたいです。サエラのお母さま」

得心のいったシュナがいじわるそうな笑みでサエラを見た。普段とは形勢が逆転し、サエラは怯む。

「サエラは陛下の前で母上から怒鳴られるのが嫌なんだろう？」

「うっ！」

「あの方なら間違い無くやりますわね」

「うう・・・」

「大丈夫ですよサエラ、わたしが付いてます」

「ひい・・・」

もはや退路は無かった。レアが外套を用意し、リエルはサエラの手を握ったまま離さず、シュナの先導で四人は部屋を後にした。

王城は広く小高い丘の頂上に聳え立ち、その丘の麓をぐるりと城壁と柵、そして水を張った濠で囲まれている。麓にある外門と城門まではかなりの距離があるが、斜面には無数の建物が並び、さながら一つの巨大な宮殿のように見える。

建物の多くは城仕えの役人や侍従、その他兵士など城内関係者が居住し、円形に立ち並ぶ屋敷は小さな都市としても機能していた。城下町に対して言うなれば城内町としようか。これら建造物は王城の一部と見なされるものであり、所有者はもちろん国王、リエルである。

これだけの規模で人々が住まうため、城内町には認許を受けて出

入りする商人が店舗を持ち開業している場所すらある。しかし街並みは古くに形成されたこともあり景観は統一され、木造を基本とした茶色の屋根が上品さを保つ。欠点として、全包围の景観が似るため慣れた者でないと迷い易いというところか。これは王城内の建築基準に準ずるものでもある。

リエル達一行は念を押してと同行した数名の兵士に守られつつ、道を知るシュナに先導され町の一角へ赴く。そこには他の大きな集合住宅などに隠れるように、可愛らしい庭付きの一軒家が鎮座していた。

「いい家よね。シュナは来たことがあるのかしら？」

「何度かな。レアもだろう？」

「他にも結構来てますよ。母さんの趣味です。お二人も母さんの魚介パイを食べたんでしょ？」

既にげんなりとしているサエラがリエルの両肩に手を置いたまま言う。これに、そうそう、と二人の女性は頬を緩めた。他に、護衛の兵士の数人までもがごくりと喉を鳴らす。よほど手広く客を招くのが好きなようだ。

「あれ、美味しいのよねえ。レシピを貰えなくて残念だわ」

「料理長もそんなことを言ってたな。隠し味がどうしてもわからないとか」

「へーえ？隠し味とかあるんですかね。ずっと食べてますけど知らなかったです」

珍しく少しむくれ気味なのはリエルである。一人、その魚介パイなるものの見た目も味も知らない。

「わたしも食べてみたいです。ああ、でもお見舞いに来たのでした・・・」

「そうですねえ、それに最近作ってないみたいです。足が悪いんじゃない料理も難しいみたいですから」

「残念です・・・」

さて入りますか、とサエラが鬱屈としたまま庭の門に手をかけた。

木製の小さな柵が小気味良い軋みを鳴らし、後ろにぞろぞろと一行が続く。

そこで横合いから声をかける者があった。

「おやサエラ、久しぶりの実家ですね」

優しげな男性の声に振り向くと、そこに立つ白髪の紳士。声色とは裏腹にギリリと引き締まった顔の皮とがっしりと盛り上がった両肩が特徴的である。それでいて全体的には細身の印象を受ける、形容するに剛槍のような外見である。表情だけがにこにこ柔らかい。なかなか異様な外見的特長を持つ御仁であった。

「あら父さん、面白い物ですか」

「そうなんだ。それで・・・おや?・・・なるほど。しまったな、急いで片付けないと。先に入っていますよ」

「はい」

携えた布袋はぎっしりと詰まっており、買い物と言ったが何を買ったのか窺い知れぬ風体。その袋を軽々と持ち上げ、どうぞこちらへ、と手招きしてくる。そのまま啞然とする一同を尻目に家の戸を開けて入ってしまった。

「今のは・・・」

「父さんですよ。シュナさんは会ったことあるんじゃないですかね」
「・・・あ、ああ」

さあどうぞどうぞとサエラが言うので再び一行はぞろぞろと進む。サエラが少しお待ちをと言いついて残して家に入り、ややあって中から賑やかな喧騒が聞こえてきた。部屋の片付けを始めたらしい。

「シュナ、どなたなの?」

くい、とシュナの袖を引くのはレア。視線は背後の兵士へ。どうやら護衛の兵達もあのサエラの父という男性を知っているらしいのか、そわそわと不穏な表情だった。

問われたレアは、信じられぬといった顔つきだった。

「いやそれが・・・千人長なんだ、彼は。王国軍軍団長麾下弓兵大隊の指揮官。宰相閣下の下で実務を担当する三人の千人長の一人だ・

「……と、思うんだが」

「も、元とかよね？」

「いや、現職なんだ。功績あって先々代国王陛下から子爵位を授与された、れっきとした貴族だぞ。なんでこんな所に……？」

「うそ……」

背後の兵士に目線で確認すると、彼らもまた引き攣った表情で頷いた。思えばあの男性、官給品の防寒コートを着ていた。

リエルがきょとんとし、大人達の反応をなんだか面白いことが起こっているらしい、程度に捉えて微笑む。サエラの家族、一体どんな人たちなのだろうか。

それから待つことしばらく。傾いた太陽が落ちていくように動き、空が茜に染まり切った時刻。

待っていたのは実時間でそれほどにならないが、急な冷え込みが体感を狂わせた。まだかしら、とリエルも少々寒そうだ。

「すみません遅くなりました。もういいです、どうぞお！」

袖を捲くり上げ息を荒げ汗を流すサエラが皆を呼び、一体どれだけ散らかっていたのだろうと嫌な憶測が流れる。

「居間に物を置きすぎなんですよね、んもう」

「うふふ。それじゃ、お邪魔します」

「はいどうぞ。狭いところですけど」

入る前にシュナが指示し、護衛の兵士らは家の外を囲んだ。それほど時間を取る予定ではないので、寒空の中に長々と待たせることもない。それに人数もやや多いので、交代で休息してよいと伝えている。近隣には寮住まいの者のための食堂や茶店もある。

二階建ての、傍目には小さな家はやはり古い軋みを鳴らすドアをくぐらせ、童話に出てくる森の家のようにも思えた。

サエラの背からひよいと横に目を向けると、思いの外広い暖炉付きの居間、奥には台所が見える。階段で二階に通じ、他にはほとんど仕切のないという面白い空間があった。居間の中央、暖炉の傍には低いテーブルとソファ。どちらも結構な人数が着けられる大きさ

である。

暖かい中の空気に触れ、一行はほっと息をついた。サエラの指示に従い、めいめいに外套を脱ぐ。

「かわいいおうちですねえ」

「えーそうですかね？ まあ、他の家とは造りが結構違うのは知ってますけど」

などと言いつつも、サエラもほんのり照れている様子を見せた。はにかんだような顔をしたまま、皆をソファに座らせる。

暖炉の灯で体を暖めていると、台所にいたのかサエラの父が顔を覗かせた。

「それじゃサエラ、母さんを手伝ってあげてください」

「はい。って、父さんがご飯作ってるんだ？ 珍しいね」

「そうかい？ まあ、母さんの代わりにですね。最近はしょっちゅう戻って来ていますよ」

「そうなんだ。それじゃ私もそうしようかな」

なんだかな、とシュナとレアは顔を見合わせた。リエルが、このフィルラント王国の主が訪問してきているというのに、この気安さはどうだ。まるで単に友人を招いただけのようなサエラ一家に、二人はむしろ落ち着かない。見ればリエルだけが、本当にただ友人の家に遊びに来た子供のように、楽しげな顔で周囲を見回していた。

「急にお客さんだなんて、この子ったらたまに顔を見せたと思えば・
・・」

「だからっていきなりゲンコツはないでしょー！」

「お黙りなさい。まったく服も着替えずに。よいしょっと」

「・・・大丈夫？」

賑やかな言い争いは二階から。階段を苦勞して降りてくる足音が聞こえてきた。

「あたたたた・・・そこの、帽子掛けの横に杖があるから、取ってちょうだい」

「これ？」

「そうそう。よいしょ・・・はあく、階段を降りるのも一苦労だわ」
リエルが立ち上がった。

「それで、お客さんっていうのは・・・」

次いで、シュナとレアが立ち上がる。

サエラの肩を借りて杖を突くのは、表現として失礼ではあるが、少しばかりふくやかな女性だった。サエラよりも背が高く、言うなれば逞しい雰囲気、快活な婦人である。顔をみれば皺も無く健康そうだが、両足の包帯が部屋着のスカートの裾から垣間見えた。まだ添え木が取れないのだろう。歩くのも辛そうだった。

サエラの母。その目が、まず背の高いシュナとレアを見た。数ヶ月ぶりの知己の顔に懐かしむ笑みがこぼれ、そしてその二人に挟まれて立つリエルを見た。

始め、彼女はリエルが誰なのかわからなかったのだろう。だがリエルはこの大柄な女性に申し訳なさそうに眉尻を下げ、労るように足を見て目を合わせる。この少女は何故、初対面でこれほど泣き出しそうな顔をするのか。

そして、この国の新王がどういった人物なのか、彼女は夫と娘から聞かされていた。

「あ・・・ああ・・・！」

杖が手を離れ、床に甲高い音を穿つ。

驚くサエラの手を掻い潜り、杖を拾おうとしたリエルの前へ、彼女は走り寄った。足に激痛が走るのも一切構わずに。そしてまろぶように膝を折り、リエルの両手を握り締め、懺悔の涙を流した。
「申し訳ございません、申し訳ございません！陛下・・・ああ、なんてこと・・・陛下に合わせる顔など無いというのに！こんな・・・！」

リエルの手を引き、彼女はその豊満な胸元に少女を抱きしめた。急な展開に驚き、女性の胸元に顔を埋めるリエル。きょとんとしていた彼女は、やがて女性の服を掴み、顔を沈め、声を殺した。

カムラ・テレグス・レーレン。先代王妃付きの専属メイド。あの事故の日、カムラは王と王妃の乗る馬車に同乗していた。その事故が原因で、彼女の両足は重症を負い不自由を強いられている。だが、彼女はそれ以上の傷を抱えた。

新王は10歳の少女。シャルテ王の隠し子であり、父と同じ日に母を失い、孤独と飢餓に臥していたところを救助された。そして先日のシュエレー神山の一件でも、民を守ろうと命を賭した。

この少女を、この余りにも過酷な運命にたたき落とした責任の一端は自分にある、と。

「いいんです。サエラのお母さま、いいんです、もう」

リエルは目に涙を湛えながらも、気丈に笑顔を作りカムラに声をかける。慰めの言葉にカムラは首を振り、いつそう強くリエルを抱きしめた。彼女もまた、リエルの痛みを知っていたから。

抱きしめてくれる人が居ないのは、子供にとってどれだけ辛いことか。なまじ賢しいリエルなら尚の事。

「シュナ、貴女も。よく耐えたわね・・・偉いわ、ずっと辛かったでしょうに」

「え・・・そんな、私は・・・」

「いいのよ、我慢しなくても。貴女のこととはちゃあんとわかってるから」

「・・・」

言われてシュナは俯いた。そう、カムラとシュナは境遇をほぼ同じくする。あの日目の前で王を失ったという痛み。職責を全うできず、しかし感情に委ねることを許されない。

「・・・私は、涙してはなりませんので」

「・・・そうね。貴女は、そうよね。ごめんなさい、シュナ」
いえ、と言うシュナだが、見透かされた痛みに耐え兼ねて目を背けた。

「シュナ・・・」

レアが気遣うようにシュナの肩を叩く。シュナは苦笑して、やや

赤らんだ目尻で、それでも涙粒を落としはしなかった。

リエルがゆっくりとカムラの胸から顔を離す。彼女もまた涙を流してはいなかった。だが、カムラの着る服の胸元は確かに濡れていて。

「足の具合はどうですか。お加減は悪くありませんか？わたしにできることがあれば、言ってください。わたし・・・わたしは、大丈夫。お城でみんな優しくしてくれて、毎日ご飯が食べられますし、シュナさんもレアさんも、サエラも仲良くしてくれます。わたしばかりこんなに幸せなんじゃ、おばさまが辛そうにしている方が心苦しいです。ですから、どうか泣かないでください。わたし、大丈夫です」

カムラは驚いて目を見開いた。居間の様子に涙ぐんでいたサエラの父も、このリエルの言葉に喉の奥でぐっと低い音を鳴らし、震えながら跪いていた。

「・・・娘は、サエラはどうです？失礼を致しておりませんか？」

「ええと、いいえ。いつも私を楽しい気分にさせてくれます。大切なお友達です」

ちよっぴり言葉に窮したリエル。サエラが「なんでちよっと詰まったんですか！」と苦い表情で、リエルは笑顔を浮かべた。

「サエラ」

「あ、はい」

「陛下を、この素晴らしい女王陛下を、きつとよく守り、よくお世話して差し上げなさい。絶対に怠るようなことがあってはなりません。仲良くしてくださいのなら結構なこと。陛下のお力になれるよう、一生懸命おつとめなさい」

「・・・はい、母さん」

よろしい、とカムラは言って立ち上がった。涙を拭い、優しく力強く微笑んでみせる。サエラの差し出した杖を掴んで、空いた手でリエルの頭を優しく撫でた。

「ごめんなさいね陛下。突然こんなこと、失礼致しました」

「いいえ。ありがとう、おばさま」

「ふふ……さあ、それじゃもうしばし座ってお待ちくださいまし。丁度いい日にいらしたわ。主人に手伝ってもらって一昨日から下拵したしじろえを始めていたの。お口に合うとよいのだけれど」

サエラの父が立ち上がり、再び台所の奥へ向かった。戻った時、彼は大きな皿に乗った巨大なパイを両手に抱えていた。

わっと小さな歓声が聞こえた。シュナとレア、そしてサエラだ。

リエルは、ならあれが件の魚介パイかしら、と興味津々にその大皿を見た。

「父さんが作ったの!？」

「半分くらいです。母さんが細かく指導してくれてね。簡単な料理なら私も作りますが、こればかりは母さんの得意料理ですから」

言いながら置かれた巨大なパイは、なるほど魚介パイと言うだけある。色とりどりの貝類とイカ、魚の切り身、それに彩りを添える野菜が上面を飾り、この匂いから察するに魚肉とキノコ、ハーブなどを練り合わせたすり身がぎっしり中に詰まっているようだ。香ばしい、芳醇な香りが部屋を満たした。パイ生地は程良く焼き上がっており、栗色の焼き色が見目美しく、それでいてふんわりとよく膨らんでいる。生地の練り方一つから、見た目だけで相当の熟練を要する仕上がりであることは疑いようもあるまい。

「我が家自慢の魚介パイです。昨日までに準備していた最後の一枚がやっとさっき焼き上がったのよ。さあみんな座って。あなた、切り分けてくださる? サエラ、食器を用意してちょうだい。前掛けもね。熱いうちにいただきますしよ。急いでちょうだいね」

リエルは、その貧しい過去から基本的に好き嫌いなど出来ない。それ以前に自然の恵みに感謝を捧げる日常であったタナツク家では、母ミュシェ共々どんな食材でも料理して食べる習慣があり、偏食は一切しないように育てられた。が、問題はあまり量を食べられなか

ったことである。彼女の胃は体軀に比例して小さく、極めて少食ながら長時間の労働にも耐える体が出来てしまっていた。これでは、逆に沢山の食べ物を詰め込もうとしても胃が拒んでしまう。体に合った食事というなら、リエルには少量で足るのだ。

「陛下はちよっとお痩せすぎね。骨はしっかりしてらっしゃるようですし、筋肉もあるみたいです。が、長く歩いたり運動する分はともかく、急な運動や力仕事は苦手でなくて？」

「は、はい。分かりますか」

「それに疲労が溜まりやすいでしょう？一度疲れると体が休まるまで時間がかかるんじゃないかしら」

「当たってます・・・」

カムラの言葉にリエルが驚いてこくこく頷いた。レアも、医師と相談した内容にびっくり当てはまる言葉を聞いて驚く。確かにリエルの体力について懸念していたが、こんなにすぐ分かるほど深刻だっただろうか。

「王妃様の専属でしたからね。あの方も体の強い方ではなくて、しょっちゅう病に悩まされておりましたの。だからその内に簡単な健康診断ならできるように・・・そうそう、それに陛下は少食でいらっしゃる？駄目ですよ育ち盛りなんですから。美味しいものをお腹いっぱい食べて大きくならないと。ご公務にも差し支えるというものですよ」

「はい・・・でも、すぐにお腹いっぱいになってしまふんです」

「あら、でも私のパイはペロリと平らげてしまわれたじゃないですか」

「・・・あ、あれ？」

見ればリエルの皿はもう空っぽになってしまっていた。他の皆も似たようなものだが、リエルがこれほど食が進んだところを今までリエル自身でさえ見たことがない。

カムラがにっこりと笑うので、なんだか照れてしまってリエルはごまかすように口元を前掛けで拭いた。

「普段はあんなに少食なのに・・・」

「あつはは、レア、そりゃあそうでしょう。陛下のお年頃でお城住まいならそんなことだろうと思いましたがよ。陛下はまだお城の堅苦しいお食事に慣れていらっしやらないのね」

「・・・そうかもしれません」

リエルは頬をピンクに染めながらも、自分でも驚くことにもう一切れ、パイに手を伸ばした。サエラが手伝って皿に盛りつけてくれる。

本当に久しぶりに、リエルは普通の空腹感を覚えていた。あの飢えとは違う、口の中が唾っぽくなる感覚だ。まず、それほどこの魚介パイは美味しかった。それに、皆で食卓を囲む団欒だんらんの一時が嬉しくて、楽しかった。

フォークとナイフで丁寧パイを切り分けると、白身のすり身からじわりと汁が流れ出る。これが底のパイ生地に染み渡り、かつサクサクした食感が少しだけ残り、口の中いっぱい頬張るとハーブの香りがすうっと喉の奥から鼻へ流れ、舌の上にすり身のふわりとした食感が乗り、口全体にキノコと貝の旨味が広がった。食べるほどお腹が空いてしまう、そんな味わいに皆酔いしれる。

「すごく美味しいです。こんなに美味しいもの、初めて食べました」
「まあまあ、そりゃお世辞ですよ。陛下が知らないだけで、もっと美味しいものが世の中にはたくさんあるもんです」

「そうなのですか。でも、わたしこれ、好きです。とっても美味しいです」

リエルが心底満ち足りるに言うのでカムラも目を細め、そうですか、と嬉しそうに微笑んだ。甲斐甲斐しくリエルの口元を拭いたりしながら、カムラはふう、と息をつく。

「・・・レア侍従長」

「あ、はい？ なんででしょう」

レアも夢中になって魚介パイを頬張っていたため、呼び止められて慌てて皿を置いていた。その隣に座るシュナはまだ食べている。

「これは、本当はサエラか夫に頼んでお城に持って行って貰おうと思っ
て焼いたんです。お世話になったから、と。・・・侍従長、サ
エラはまだ私の名義でお給金を受け取っているのでしょうか？」

「ええ、そうです。お望みなら、まあ多少処理が面倒ですが、その
ままでも・・・」

と、レアはリエルを見る。リエルも口を休めてカムラの顔を
見上げた。

「構いませんよ。サエラはよくしてくれますし、咎めたりしません」
しかしカムラはくすりと笑って、首を横に振った。

「いいえ、そういうことではなく。そう・・・実は、お暇をいただ
こうと思うのです」

ハンカチで上品に口を拭って、シュナも皿を置いた。サエラとそ
の父だけがまだ食べ続けている。

「この足ですし、サエラもようやくとお城勤めができるようになり
ました。ですから、もう引退を申し出ようと考えていますの。サエ
ラはこんな娘ですけど、黙って親孝行してくれるとってもいい子で
すし、夫の稼ぎも十分あります。よい機会なので、そのようにして
くださいまし」

思わぬ言葉にサエラが驚愕の眼差しを母に向け、そして顔を真赤
にして俯いてしまった。

レアはカムラの目をひたと見据え、何か考えている。口を開いた
時、ふっと小さく微笑んだ。

「それは・・・確かに理解できます。ですが、秘術治療は？完治す
るはずですよ。お歳もまだまだでしょうに」

「いいえ、これは戒めです。自然に治るのを待つつもりです。罰と
言うのはおこがましいけれど、私はあの日を忘れられない。きつと
粗相をするでしょう。それでも今までお皿の一枚も割ったことが無
いのが自慢なんです。どうか、レア侍従長」

懇願するような口ぶりだったが、カムラの瞳は訴えるような表情
ではなかった。レアが既に心を決めていることを、カムラは察して

いる。

リエルは少々残念そうな顔だった。だが、レアが決めることだろうと口を挟まずにいた。

「そんな、母さん」

サエラだけが食い下がった。長年、子供の頃から母の後を付いて回って城の中で過ごしたのだ。今は母の代わり、と公言もしている。「それより、サエラを正式にメイドとしてお仕えするよう取り計らってくださいますか。どうせこの子ったら、私の代わりだからなんて言って少し適当にこなしているんでしょ？」

「うっ、す、鋭い・・・」

さすが、サエラの母である。娘の行動など把握できて当然といった風だった。

レアはちらりとサエラを見て、リエルを見て、それからカムラの目をもう一度見据えた。

「・・・そう、そうですね。それがよいのでしょうか。名残惜しいけれど、サエラの名前で登記をしておきましょう。いいわね、サエラ」
急なことでサエラも動揺する。母に何か言おうと口を開くが、言葉は出ない。言い分は母が正しい。自分のはただの駄々でしかない。
「・・・はい。それでいいです」

「ごめんね、サエラ。貴女に相談もしなかったからびっくりしたわね。怒ってるかしら？」

「ううん、怒ってないよ。母さんが決めたことだし、そうしたかったんでしょ？ 私は尊重する」

「・・・ありがとう、サエラ」

では、とレアが自分の皿を持ち上げながら言った。

「ではサエラ、明日からそのように再登録しておきます。陛下、許可はいただけますね？」

「もちろんです」

「ありがとうございます。そしてサエラ」

「は、はい」

「今まではカムラ・テレグス・レーレン婦人の代理として雇用していたため、貴女の職分は陛下の専属仕え、それに雑務に限定していました。が、明日以降は他のメイドと同じく一般業務や来賓の接客などにも参加してもらいます。よいですね」

サエラの顔が凍りついた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あの・・・・・・・・・・・・・・・・え・・・・・・・・？」

「厳しく指導していくので一日も早く仕事を覚えて陛下のお役に立てるよう、頑張りましょう」

「頑張ってください、サエラ」

「頑張りなさいサエラ。母さんは隠居してのんびりさせてもらいます」

「ん・・・・・・・・ああ、頑張るんだぞサエラ」

シュナは三枚目のパイを平らげるところだった。

「そ・・・・・・・・そんなあ・・・・・・・・」

弱々しいサエラの悲鳴が聞こえて、陽は地平線に沈む頃になろうとしていた。

「まさか子爵閣下がレーレン婦人の夫だとは露知らず・・・・・・・・あの、失礼なことを色々と申し上げたことがあるような無いような」

「ははは、いいんですよ親衛隊長殿。よくあることですから」

「そうですよシュナさん。父さんの名前知ってます？レーベン・レーレンっていうんですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あああ！レ・・・・・・・・ああ！そ、そうか・・・・・・・・しまったあ・・・・・・・・」

さて陽も落ちたことだし、とリエル達は立ち上がり、帰りがけの軽い世間話。台所ではレアがカムラを手伝って例の魚介パイを大量に紙で包み風呂敷に詰めている。護衛の兵に持たせて城に届けるよう、先ほどシュナが外に伝えていた。

「レーベン子爵だとか、レーベン千人長という呼び方は知っていたのですが！ああ、も、申し訳も・・・・・・・・」

「レーベンがお名前でレーレンが苗字なのですか？ あら、似てるんですね」

「そうでしょリエル様。ほんと、紛らわしい名前ですね父さんは」「いやあハハハ、面目もない」

「ん？ とレアとリエルが同時に気づく。目線はサエラの顔へ。」

「あれ？ なら、サエラは子爵さま・・・じゃない、子爵令嬢ということになるのですか」

「おいおい、聞いてないぞ」

そうなるんですかね、とサエラは頬を掻く。

爵位は王が臣下に、功あった時などに特別に授与する独立した位である。貴爵、准爵、老爵、子爵の四階級。爵位は爵領地と同時に与えられ、これらは貴族院によって記録、管理されることとなる。貴族院は一種の公文書館。記録は国家が続く限り残り、財産となる。また、爵位は子へと相続されるものとなる。

「ゆくゆくはサエラに子爵位を継がせることになるんですかね。領地はこの庭付きの家だけですけれど」

「どうせならもうちょっと大きな・・・いや、まあここでもいいのかな。欲が無いねえうちの一家は」

「あつはは、まあまあ。蓄えもあるし、サエラは若いうちに好きなことをするといい。父さんと母さんは応援するよ」

「またいつもの放任主義なのね。ううゝ、本当にいじわるなんだから」

「お仕事、頑張るんだよ。サエラ」

レーベン子爵、もといてレーレン子爵という名は、シュナなど軍人の筋では有名な名前である。

先々代国王の時代に王の武芸指南役として王城に仕えた若き武人の物語。二人は歳の離れた友であり、やがて王はこの武人によって命を救われることになる。

遠征先でふとしたはずみから王は狼の群れに囲まれ、これを武人はただ一人助けに駆けつけ、十本の矢をもって十五頭の狼を射る神

業をして王を守った。王は彼を称賛し、平民の出であつた彼に爵位と領地を与える。しかし武人は控えめに、王をお守りできるよう門内に僅かな土地と家を求めた。

つまり、このフィルラント王国においては英雄と称される一人である。今なおその腕前は健在で、軍内でもその訓練と任務は最も過酷とされる弓兵隊を指導し、高い練度を保っている。宰相の信頼も厚いと聞き、フォガリ騎士団長でも彼の話をしたことがある。

その英雄が今、娘にぼかばかとぶたれ苦笑しながら妻と侍従長の手伝いとして大きなパイの包みを受け取り、それを家の外の兵士達に渡しながらくれぐれも落とさないようにお願いします、と腰も低く丁寧にお辞儀まで添えて兵士らの顔を見事に引き攣らせている。シユナはいっそ呆れて脱力せざるを得なかった。なるほど、人の噂に誇張は付き物。実力は確かなのだから真実がどうあれ問題あるまい、と。

「ごちそうさまでした。あの、いずれまた遊びにきてもよいでしょうか？」

「ええ、もちろんですとも陛下。またパイを焼いて待っていますよ」若干遠慮がちなリエルに、カムラは快活な笑顔で遠慮することなどないと説いた。折り目正しくリエルはお辞儀をし、夫妻に手を振って別れを告げる。二人もまた手を振り、それはリエル一行が道の角を曲がって姿が見えなくなるまで続いた。

レーレン夫妻に見送られ、暗くなつた道をリエル一行はのんびりと歩く。談笑しながらの食事とあつて気付かなかったが、皆急に満腹感を思い出したようだ。

「うっぷ。久しぶりなんで詰め込みすぎましたね。大丈夫ですかリエル様」

「うふふ、こんなにお腹いっぱい食べたの、初めてです。こめかみの辺りがちよつと痛くなるんですね」

「急に冷えたのもあるでしょう。さあ、早く城に戻るとしましょうか」

レアの手を肩に添えられ、リエルは彼女に寄り添うように歩いた。

城の南辺りは城内町でも特に家族寮の多い区画で、サエラの家ほど小ぢんまりではないがそれなりにまとまった、小奇麗な一戸建てが軒を連ねている。城下の貴族街や商人の屋敷の並びに比べれば派手さは無く、どれもほぼ同じデザインをした建物。色調までも統一され、確かにこの道を歩くのは迷うのに注意したほうがよさそうだとリエルはつらつら考えていた。

ふ、と思いつく。

「もう一軒、少し遠いんですけど、寄りたいところがあります。よいでしょうか？」

「場所によりますが・・・夕食も済ませましたし、どちらへ？」
す、と指で示すのは城の北東。夕闇が広がってもわかる、味気ない官舎街の辺りである。

「おすそ分けです。ペリユークさんとウィバルさんの様子を見に行ってみませんか」

シュナがぽんと手を打った。レアとサエラは渋面を隠さなかったが、苦笑いで応える。

「ははあ、気に病みますか」

「いえ、そういうわけでは・・・ただ、ご挨拶をと思ったのです」
「気に病んでいる顔ですよ、陛下。まあ、更迭以降の財務長官達の様子も気になりますし、よいのでは」

変なことを考えますね、とサエラはやや呆れ顔だった。

先日のシュエレー神山の一件前後において、リエルが調査させ判明した罪状により、ペリユーク・ヤカラボ財務長官とウィバル・ランデミス外務長官は本来死刑になるところを、温情により財産没収、減給、そして官舎への転居が命じられた。長年の不正による自業自得であり、リエル自身がこれら裁定を見せしめであると示していることでもあって、以来公務員や役人の職務連携は格段に向上していると報告が上がっている。

「そういえばあの人達、ここ最近お姿を見かけませんね。リエル様のところにも来てないでしょう？」

「ええ、それもあって。担当のお役所の書類決済が溜まってるみたいな」

「へえー」

護衛の兵士が持つパイの包みを一つ受け取り、半数は城へ戻つてよいとシュナが命じた。命じられた兵士らは立ち上るパイの芳香に待ちきれないようでも、リエルの護衛という役目を継続できないのが残念そうでもあった。そして残る兵士らはその逆、名残惜しうにパイを見送り、リエルの護衛が続けられるからまあいいかと納得するような。

冷えてきたこともあり、レアとサエラに挟まるようにしてリエルを歩かせた。シュナが先導し、背後には三名の兵士。

陽が落ちた直後は星が見えていたのに、今は空を見上げて黒一色。どうやら曇ってきているらしく、天候を鑑みてリエルも足早になる。

「・・・あれ、今・・・門が開く音がしませんでした？」

ふとリエルが振り返り南を見る。が、街灯の明かりの向こうは逆光で見えず、首を傾げたのみに留まった。吹いてきた風の音だったのだろうかと思うことにして、また歩く。

王城で働く者は一般的に官舎の一室を与えられ、家族のある者は申請すれば家族寮を宛てがわれることになる。レーレン家は元々家族寮住まいだったが、寮舎をそのまま改築してかの一軒家を現在の居としている。とはいえこれは例外で、ほとんどの者は一時住まいとして官舎を利用するに留まる。無論、自宅を有するなら一部役職を除き自宅からの通勤が認められる。

ペリユーク・ヤカラボは商家の出自で、ウィバル・ランデミスは移民三世の同じく商人の家系らしい。両者ともフィルラント市街、

王城に近い南部の市街の一角に屋敷を持つ豪商であり、つい先日まではそこから通勤してきていた。今、その両方の屋敷は中にある多くの調度品や家具、美術品に至るまで全て政府によって接収され、屋敷は手入れをされ維持されるが財産のほとんどは競売にかけられ売り払われることに決まっている。これにあたってリエルは、どうしても手放せない大切なものは個々に引き上げてもらいと伝えられている。二人は感謝したが、いくつか金品など本来なら没収対象になる品物も持ち出しているらしい。

なるほど、それを売った金はかなり額のなるのだろう。官舎の一つに赴いたリエルらは、そのロビーにあるサロンでやけに高級そうな絹のローブに身を包み酒を酌み交わし談笑する二人と鉢合わせた。

「へ、陛下っ！？な、どうしてここに！」

「こ、これはですな・・・」

シュナのため息が聞こえた気がして、リエルは自分のため息のタイミングを失ってしまった。

「随分と、悠々自適なご様子で。財務長官、外務長官？」

レアの猫撫で声が皆の背をぞわりと撫で上げ、またリエルは何か言おうとして口を半開きのままレアを見上げた。

こほん、と可愛く咳払いをしてリエルが一步出る。

「こんばんわ、お二人とも。今日、サエラの実家に行く機会がありました、おすそ分けを持ってきたのですが」

「は、はい！いや、あの、それはどうも・・・」

上ずった声でペリユークが狼狽し、ゆったりと背をもたせていたソファから勢い良く立ち上がる。膝がパキッと音を立てた。

男性用の官舎ということもあり、ロビーから見上げれば吹き抜ける一階、二階ともに官舎住まいの男性らが驚いてこちらを見ていた。皆王城で働く役人であり、当然この珍客らの顔を見知った者達である。一様にぎよっとした空気が流れ、ややあってドタバタと走る音が聞こえた。リエルへの挨拶もそこそこに、皆身なりを整えに向

かったのだろう。女性の目の無い所とはかくもむさ苦しいのが常である。

「男だらけのわりに結構綺麗ですねー。お金の使いどころ分かってる人は嫌いじゃないですよ私」

「サエラ・・・少しは自重しなさい」

レアがこめかみを指で抑え、それを見てまたにやりと笑うサエラ。何が面白いのか、先ほどから不敵な笑みを顔面に貼りつけたまま周囲を眺めている。彼女を知る役人も居るので、彼らはサエラの視線を苦笑しつつも嫌そうに避けていた。

ともあれ、リエルの御前とあってペリユークとウィバルは畏まってお辞儀をする。

「突然来てしまつてごめんなさい。長居することはありませんから、ご容赦くださいますか」

「め、滅相も。こんなむさ苦しい男所帯ですが、お好きなようになさってください」

相変わらず謙虚なリエルに逆に恐縮してしまう二人。先日裁定が下つて以来、ペリユークとウィバルは行いを改め、なによりリエルに対する忠誠は非常に深まった。眼前の少女はただの子供と侮つてよい存在ではなく、既存の王侯並みに見るなどと蔑ろ^{ないがし}な扱いをできない人物である。そう彼らは認識している。

「シュナさん」

「はい。お二人とも、これを。レーレン婦人の焼いたパイです」

「官舎のみなさんとご一緒にどうぞ。おすそ分けですから、遠慮は無用ですよ」

急にやって来てよい匂いのするパイの包みを渡す我が王に、二人はむしろ動揺を深めた。一体何が目的なのだろう。まさか先日引き上げた金品について追求されるのだろうか。はたまた別の、あずかり知らぬ事情か。

と、ここまで考えて二人とも同時に気づいた。

「・・・・・・へ、陛下直々のご視察ですか」

「そうお思いです？なら、それでもよいのですけれど」

「う・・・私めが言うのもなんですが、陛下はどうにも、その・・・老獺でいらっしゃるようですね」

リエル直々の監視ということか。この幼い陛下のちよっぴり意地悪な企みに、初老に差し掛かるペリユークも苦笑するしかなかった。人生経験だけでこの少女の先に行くことはできないらしい。

「レーレン婦人の魚介パイですか。ご好意に感謝します。いや、久しぶりだ。これは絶品ですからな」

普段言葉少なめなウィバル外務長官がやっと喋ったのがこれ。やはりレーレン婦人のことはかなり多くの人々の知るところらしく、恐縮したふうであった二人の中年男性は漂ってきた芳しい香りに喉をぐくりと鳴らした。

「ああ、茶も出しませんで申し訳ありません。今から急いで・・・」

「いいえ、いいんです。もう陽も落ちましたので、少し立ち寄っただけですから」

「左様で・・・」

「あの、それより、これはなんででしょう？」

リエルが指すのは、ペリユークとウィバルが対面して囲むテーブル。その上に、木彫りの人形を並べた無色と黒色のタイル模様のボードが置いてあった。シュナとレア、サエラもこの質問におや、という顔をする。

「ご存知、ないのですか？これはシックルというものです」

「シックル？」

「ええ。卓上で遊ぶ・・・まあ、遊戯ですよ。札遊びのようなものですな。このシックルは特に、かなり古い歴史のあるものでして、私とウィバルはこれが趣味の一つでもありましたな」

「へえ・・・」

しげしげと眺めるリエル。本当に知らないらしい。

「リエル様、シックルを知らないんですか？珍しいですね」

「こらサエラ」

「まあ、知名度はあっても少々敷居のある遊びでもありますし」

ふうん、とリエルはボードに目を止めたまま興味深そうに頷いた。目線の先でウィバルが人形を一つ摘み、別のタイルへと動かす。「これは”駒”です。種類によって動かせる方向が違うのです。盤の上で交互に駒を動かして、場所が重なった場合は相手の駒を奪うことができます。この、一番大きな駒、これが”王”ですが、これを奪うのが勝利条件となります。難しいものではありませんよ」

ウィバルの説明に、だが当のペリユークが渋面を作ってみせた。

「・・・ウィバルはこのシックルに限らず、賭け事や卓上遊戯が得意でしてな。シックルは中でも特に上手い。旧知の仲ですが、一度もこやつに勝てた試しがありません」

「手を抜いては失礼ですからな」

「少しぐらいはよいだろうに」

ふふん、とウィバルは笑う。

「強いとは、どのくらいでしょう？」

やや不躰な質問はレア。意外でもなさそうだが、彼女もこのシックルというゲームは好んで興じることがある。相手は専ら部下のメイドだが、暇な時は暇なメイドという仕事にとってこういったゲームの類は有用だった。レアも、かつて先輩のメイド達から手ほどきを受けている。

対してウィバルはこともなげに答えた。

「宰相閣下にも無敗ですな。王立学院長にも。まあ、それほど親しい間柄でもないのです数少ないのですが」

「まあ！それじゃもの凄くお強いのですか！」

珍しくレアが大声を上げて驚いた。

このシックルというゲーム、リエルは知らなかったようだが実に広く親しまれる遊戯の一つであり、老若男女問わず大抵の人々が遊んだことがあると答える。直感と経験、知識を要するゲームであり、王城ではとりわけハンネル宰相が強く、王立学院長エンデルもまた負け知らずと言われている。この二人に対して無敗となれば、

恐らくウィバルはこのフィルラントで最もシツクルの腕前が強い人物と言えるだろう。

「どうです、遊んでみますか？」

ペリユークの誘いに、リエルは残念そうに首を振った。

「せっかくですが、またの機会にお願いします。お仕事はまだありますので」

外出する前、晚餐まで時間があるとレアが予定について述べていた。先刻のレーレン家で馳走になったこともあり本日の夕食は取り止めにする就先んじて帰った兵士に伝えさせたが、寝る前に片付けねばならない仕事はいくつか残っている。

そうだ、とリエルは手を叩いた

「あの、ペリユークさんにウィバルさん」

「なんででしょうか？」

「はい」

やや落ち着きを取り戻した二人は朗らかに笑ってリエルの言葉を待つ。が、リエルの表情は笑っていたが、同時に困ったように眉尻を下げていた。

「お仕事が溜まっているようですが、きちんと庁舎に出ていますか？書類の決済が滞っていると、部下の方々から苦情が上がっているのです。おくつろぎの所悪いのですが、明日からはそのようにお願いしますね」

間。

丁度、身支度も整った官舎の住人が集まってきたこともあり、リエルの言葉は大勢の者の耳に入った。結果、この大爆笑である。そりゃあいけないなペリユークさん。陛下の言うとおりで。あんたら仕事行ってなかったのか。シツクルは仕事じゃないでしょう。等々。

サエラは無論、シュナやレアも声を上げて笑っていた。ペリユークとウィバルも、顔を真赤にしたあげくに笑い出す外無く、複雑な表情を浮かべていた。が、当のリエルだけは何故皆が笑うのか分

からず、小首を傾げている。

「あの、わたし何か変なこと言いましたか？何か失礼なことを言ったのなら謝ります・・・」

とまで言わせ、さすがにペリユークらも慌てて背筋を正した。

「もっ、申し訳ありません。陛下のおっしゃる通り、怠っております！」

「ご忠告痛み入ります。猛省し、改めます」

はめを外したのだ、とシュナなどは理解している。豪商である二人にとって莫大な財産のある自宅で生活することは、一見するに豪盛な暮らして誰もが羨むところかもしれない。だが、それは責任を枕に眠り、贅沢とは衣服とする生活だったのだろう。二人とも結婚して家族ある身でありながら独身寮のこの官舎に居るということは、つまりそういうこと。

リエルによって財産を没収されたのはよい機会と思えたか。だが、奔放すぎではまずかったな、とシュナは苦笑した。

「お気持ちは分からないでもありませんが、今一度自らの立場を思い出すとよろしいでしょう」

「・・・そ、そうでしたな」

本来は、死刑。シュナに諭され、肅然と二人は頭を下げた。

リエルの用事とは、本当にこれだけだった。勧告を受けた二人の大臣は厳粛な面持ちで恐縮し、少女らを玄関先まで見送る。その背後ではパイの包みを解いて歓声を上げる官舎の一同。

「明日からは必ず、仕事に戻ります。少々・・・ここは居心地が良すぎましたな、我々のような者には」

「それはよいことではないのですか？」

ははは、と乾いた笑いはウィバルからだった。

「いいえ陛下。時として、我々政治家は居心地の悪い家に住まねばなりません。ペリユークの言う通り、ここは居心地が良すぎました。安寧に身を委ねてよいのは、役目を終えた者だけですからな。我ら

はまだ引退するつもりもございませんとも」

「少なくとも命じられたこの先一年は、なあ」

「いやまったく」

居心地の悪い家がよい、とはどういう意味か。計りかねてリィエルは首を傾けた。

「追々、陛下にも分かるでしょう。生粋の政治家でなくとも知り得たのです。宰相閣下などは特にご理解していらっしゃることでしょう。もっとも宰相閣下は既に実践しておられる分、我々を鼻で笑い飛ばすでしょうがね」

なんとなく言わんとするところは分かったが、確かに実感の湧く話ではなかった。政務の一端を預かる身として、積むべき経験から得られる教訓のようなものがあるのだろう。

不正に手を染めた二人だが、やはり無能ではない。

「それでは、明日からはお城で。今日は急にお邪魔をしてごめんなさい」

「いえいえ。陛下さえよろしければいつでも遊びにいらして構いませんとも。シックルの手解きなどしてさしあげましょう」

「ぜひ、お願いしますね」

シックルの手解きに対して是非にという言葉だったが、同時に別の意味にも聞こえて、ペリユークとウィバルはぶるっと震えた。

二人に見送られ路地に出た頃は既に夜。夕食時か、その片付けをしようかという時か、官舎街の寒々とした光景でも部屋から漏れ出る明かりはほんのりと暖かそうだった。

再びサエラとレアに挟まれて歩くリィエル。背後で護衛の兵士がくしゃみをしたのが聞こえ、寒くなりましたね、と漏らす。

彼女らの視界に白いものが紛れた。

「あら、降ってきましたわね」

粉雪が風に乗っている。

「本当。寒いわけですね」

「早く帰って温まりましょう。風邪ひいちゃいますよリィエル様」

「うふふ、そうですね」

吐息は刺すほどに冷たい風に吹かれて白く曇りすらしない。春も近いのにこの寒さは、フィルラントでは例年通り。シュエレー神山からの吹き降ろしは収まりつつあるが、南海から来る風が山肌で冷やされ、ちょうどこの王都あたりで渦を巻く。

時折風が止み、そのたびに雪は粒を大きく増していくようだった。この時期、湿気を含んだ風はこのような成長する雪を降らせる。

王城へと続く緩やかな坂道が湿り気を帯び始め、道脇の雑草や植樹にうつすらと白い衣が纏い始める。

「・・・あら？」

「何か、なんででしょうね。こっち来ますね」

その白んだ坂道の上、王城の門が開き兵士の一団が駆けてきた。リエルの姿を探し求めているようだが、何かあったのか非常に焦っているようで誰もが強張った表情をしている。

「陛下！大変です、お早く！」

兵士の一人が叫んだ。なにかしら、とリエル達も緊迫して小走りになる。

降りしきる雪に厳しさは無く、遊ぶように風に乗って逆巻いていた。

『獣の国の王ムルエルファス』

フィルラント王国では秘術の研究が盛んなこともあり、王城に近い市街では特に秘術を用いた道具が試験的な意味合いも兼ねて頻繁に交換され用いられている。中でも長く使われているのが、街灯である。

王国軍の一部に消防団という組織があり、市中の火消しを始めこ

の街灯の管理も受け持つ。彼らは夕暮れ時になると出勤し、市内各所の道路沿いに敷設された金属の棒、つまり秘術灯の点灯を行う。これは霊力を充填することで先端部分が一定時間輝き続けるもので、点灯時間はおよそ10時間ほどになる。天体イウスィーリアの一日は我々と同じく24時間ほどなので、日没直前に点灯すれば明け方前ほどまで市内は煌々と明るく照らされ続けることになる。

霊力を消耗して使用される秘術の道具全般に言えることだが、この性質のため大量に敷設された街灯では殊更に同時に体力も消耗する。よって、点灯を任される消防団とは軍でも突出して屈強な男達の集団となった。これが市内を練り歩いて警邏けいろうも兼ねるのだから、少なくとも夕暮れ時における市内の犯罪率はほぼ皆無と言ってよい。点灯の順路も日によって複雑に変更されるため、心無い者が計画して消防団の虚を突くこともできず、街灯の明るさもあって消防団が姿を見せると市民は一樣に歓迎するように暖かい声を掛けていた。

「降ってきたなあ」

「陛下は外出中だった？ お体に障らないといいが」

「まったくだ」

北部市街と王城の敷地を隔てる門は、他の門と同様に二人の門番が置かれる。他との違いがあれば、それはシュエレー神山からの吹き降ろしに備えて外套を厚く着込んでいることだろうか。鼻を嚙り上げながら二人は世間話をしていた。

「おや、消防団だ。まだそんな時間か？」

「まだ暗くなるのも早いですね」

二人の見る先で、太い道路沿いに街灯の明かりが順に灯っていく。地面に直立した金属棒の中程にはやや平たくなった部分があり、そこに刻まれた秘術の公式を担当者が手でなぞる作業。簡単なものだが、北部市街だけで300本を超える街灯全てを一人で点灯させることは不可能だった。僅かとはいえ消耗する体力は、彼ら消防団でも一人あたり100本程が限度という。

以前、いや最近でも稀に現れるのだが、後先考えない者がどれだ

け街灯を点灯できるか競って無茶な本数に挑むことがあった。その時点灯できた本数は最高で216本と記録にある。挑んだ愚か者は、衰弱死したとも。

「ご苦勞様です。今日も寒いでしょうに、お互い辛い職務ですな」
地図を持ち先頭に立って歩く髭を生やした男が門番に声をかけた。
見知った顔だ。門番二人も半笑いで手を振った。

「いやはや、まったく。ですがこうして仕事が続けられるのも陛下のおかげですからな」

「なるほど。では我々は貴殿らを羨むべきかな？わはははは！」

どっと門番、消防団の面々が沸く。確かに、誉れ高い己が王の住まい王城、その門を守護する役目とあればある意味羨望の的とも言えよう。辛いはずの仕事にも誇りが持てたのは、確かにあの幼い陛下のおかげだった。わざとらしい嫌味に、わざとらしく胸を張り鼻息を鳴らして応える。それを見て一同はまた笑った。

この国は幸せだと、今は誰もが言う。それは名君を得たからだ、誰もが言う。王を愛せる己が嬉しく、王に愛される己が嬉しいのだ、と。

数ヶ月で国とはここまで変わるものかと驚嘆する者は多い。他国に外向していた者ほどそう言うのだが、国内にあってもそれは実感できた。

「笑い声が絶えないのはよいことだな」

「あつはは、そうでしょうとも」

誰かの声に門番が笑顔で答える。それでは、と消防団らも街灯の点灯を終えて別の通りへと歩いて行った。それを二人の門番は手を振って見送って、また静かな宵の口が戻ってきた。二人は門の周辺を見渡し、異常が無いことを確認すると門内の見張り小屋へ入ろうとぐくり戸を開けた。

「ああ、君たち？どうした、勝手に通ってもよいものなのか？ここでは客は無条件で通行できるのだろうか」

「!？」

「だ、誰だ!？」

突如聞こえた謎の声に身構える二人。そういえば先ほどかけられた言葉も同じ声だった。

だが、いくら周りを見ても不審な人影などどこにも見えない。

「ここだ、ここ。いかなな先入観に囚われては」

「
●
●
●
●
●
●
?」

声は、二人の足下から聞こえたようだった。

「余としても許可無く侵入するのは心苦しいのだ。そうそう、ここだよ。やれやれ、人間はいつもこうだな」

「! ! . . . ! ? . . . ! ! ? ?」

「だっ
・
・
・
・
・
・
え！？」

二人の混乱も無理からぬことだろうに、”彼”はむしろ状況を面白がってこうしているのだった。誰でも彼の姿を見れば驚く。人間は無論、動物らも内面を知るにつければ驚愕し、聖獣で初対面の者には必ず侮られる。

「先んじて報せを送る習慣が無いのは容赦願いたい。代わりにこうして自ら遙々やって来たのだからね」

彼の背は、彼らの膝下ほどの大きさしかなかった。

顔から胸元までは白色、そこから尾の辺りまでは黒色。尾羽根は青と黄を交えて派手に逆立ち、翼も先端にいくと赤みを帯びて炎のゆらめきを思わせる。トサカは角のように硬質で、付け根から伸びる長い白毛が添えられて頂上は黒に近い。瞳は藍色で、クチバシは白に近く褐色をやや帯びた光沢のある黄色。

そう、ニワトリがそこにいた。いや、ニワトリにしてはいささか派手な外見だったが。

「余は、北方シュエレー神山帯の向こう、妖精郷ユクティラの主、ムルエルファスである。君たちは我らの同胞を聖獣と称していたな」

1000人の人間に「ムルエルファスを知っているか？」と聞けば

100人全員が「知っている」と答えるだろう。しかし「では、見たことはあるか？」という問いには100人全員が「いいえ」と答える。即ち伝説と呼ばれる存在であり、神々など幻想の存在として語られる。

フィルラントが所蔵する中で最も古い文書にもムルエルファスの記述があり、これは今では童話やお伽話の形式に改変されて多くの人々に読み親しまれている。その中に「聖獣の中の聖獣ムルエルファス、彼は全ての聖獣の頂点に君臨し続ける偉大な王であり、その姿を見た者は今では誰もいない。イウスイーリアの極北にあるという妖精の郷ユクティラに国を築き、配下の聖獣、そして多くの動物の庇護者となる」と、ある。しかしながら、どの文章にも彼の姿について詳細に述べられたものは無く、一説には山よりも大きなドラゴンだとか、見上げるほどの巨体を持つ獅子だとか、永久に飛行し続ける巨大な鳥だとか、その他様々な憶測があるが、どれも共通して巨大な体躯を持つとされている。

リエルは童話の類としても知っており、また母より学んだ学術的な文章の一部として聖獣の生態などについて述べたものでもこの名前を見た覚えはあった。当然、その姿を想像もした。

「聖獣の王、覇鳥ムルエルファス様は大きなドラゴンの姿をしているものだと思っていました・・・」

「ハッハッハ！よく言われる。今でも臣下など『我が君が竜ならよかったのに。これでは腹が空いて仕方がない』などと馬鹿なことを言うものだ。そのたびに『ああ腹が空いた』と返すのだがね・・・笑ってもよいぞ？」

人は見かけによらぬもの。噂は本人を明確に表さぬもの。この場合、人ではないが。

当たり前なことだが、人語を解するニワトリなど普通は居ない。居るとすればそれはまさしく聖獣でしか有り得ない。ならばこのニワトリは確実に聖獣であり、当人、いや当鳥が自分はムルエルファ

スであると言うなら、聖獣がそう称する限りそれは事実だろう。

とはいえまさかニワトリの姿をしていたようとは。いや、そもそもニワトリの聖獣が居ようとは思わなかった。これが皆の感想であり、そもそもこのニワトリが本当にムルエルファス公なのかどうか、何故突然に訪問してきたのか、などの些事は念頭から吹き飛んでしまった。あまりにも衝撃的すぎる出来事だったのだ。

「とにかく、ええと・・・謁見の間にご案内すればいいのでしょうか？ねえ、レアさん」

「えっ？あ・・・ええと、そ、そうですね。あ、いえ・・・親衛隊長？」

「そう、だな。謁見の間へお越しただくのがいいだろう。それで・・・そう、侍従長は迎賓の用意をして」

「そうね、そうだね」

リエルが城に戻った時、城内は騒然としていた。

メイド達は仕事も放り出してこのニワトリを見に来る始末だし、兵士らも浮き足立っていた。一方で悠々と案内されて門をくぐったムルエルファスは、陛下が外出中につきしばしお待ちをと衛士らが止めるのでのんびりと待っている。が、彼があのだに伝説に謳われた偉大な王というなら、寒い玄関でいつまでも待たせては失礼だろうと衛士らも困惑していた。そこへ、息せき切ってリエルが帰ってきて、自己紹介をしたムルエルファスに開口一番上の一文。不躰すぎたかと言った後でリエルは後悔したが、当のムルエルファスは豪快に笑い飛ばした。やけに渋い声で。

「まあ、突然の訪問で申し訳ないのはこちらだ。ごゆるりとなされよご婦人がた。それで・・・フィルラント国王陛下はもうご就寝かね？急いで来たがもう夜だ。会えぬなら日を改めるが」

「えっ？」

と、沈黙するリエル。ムルエルファスの自己紹介はあったが、リエルは身分を明かしていない。

「親衛隊長殿、どうかな？そちらの侍従長殿なら。ああ、こちらの

下女の娘さんに尋ねてはいけなかな。会えるかどうか、まだ伺っていないと思うのだが」

サエラはリエルの外套を急いで部屋へ持っていったため、ここにはいない。リエルはきょとんとして、ああ、と笑った。

レアとシュナが混乱しながらも不遜な、と気色ばんだため、二人には謁見の間の準備をするように言いつける。命令に従って二人ともその場を退出し、リエルとムルエルファスが残された。周りには興味深げにこの状況を見つめる手隙のメイドや兵士ら。

リエルは自分の着ている服を見て、そういえば書き物をするため汚れてもいようになるべく古い、それほど高価でもない部屋着のままであったことを思い出した。聖獣が身なりで他者の貴賤を問うのかは知らないが、周囲の人物と比較してもまさか国王だとは思えない。それに、まず真っ先にこの問題があるのだが、リエルはまだ子供だ。

スカートの両端を教わった作法に則ってつまみ上げ、リエルは丁寧にお辞儀をしながら言った。

「申し遅れましたムルエルファス様。わたしはリエル・タナック・フィルラント。今はこの国の王さまを務めさせてもらってます」

ぽかん、といっそニワトリそのものの表情でムルエルファスは硬直した。

やや、間。

ムルエルファスは無言のまま数歩下がり、何度か首を上下に動かし、最後に石畳の床に腹を押し付けるように座り込んで頭を下げ、クチバシの先端が音を立てて煉瓦の床を穿った。

「ぶ………無礼を言った。どうか許してくれまいか、国王陛下。望むならこのまま踏みつけてくれても一向に構わぬ」

「いいえそんな！ごめんなさい、わたしも初対面で失礼なことを言いました。それにわたし、王様らしくないから仕方ありません。お顔を上げてくださいませ、ムルエルファス王」

「む……そうか」

ニワトリなので表情が分かり難い。が、真面目に落ち込んでいるらしいムルエルファスにリエルは焦って気遣った。妙な初対面になってしまったな、と内心も複雑な心境である。

「なるほど、シュエレー神山の災害については伝え聞いたが、まさかこのような・・・失敬。あー、斯様かようにお若い女王陛下だとは露知らず。曖昧な情報だけで人物像など想像するものではないな」

「うふふ、そうですね。わたしが子供なので、知らないで居た人はみんなびっくりするかもしれないですね」

リエルの言葉には何処かしら自嘲めいた響きが含まれていた。耳聴くムルエルファスは首を振ってリエルの顔をしげしげと眺める。

「・・・確かに、シュエレー神も太鼓判を押すわけだ。そのお年で・・・ふむ」

やけに人間くさい仕草をするので、リエルは失礼だとは思いますが、微かに笑う。

聖獣とは寿命も無く遠大な年月を生きる生物だが、親しい間柄のアルカインもここまで人間っぽくは無い。それは偏ひとへに彼らが人とはほとんど関わりを持たないからであり、持って生まれた精神性がそうさせるのだが。それにしてもムルエルファスの性格は見ていて興味深かった。

「シュエレー神と、お話しをしたのですか？そんなことができるのです？」

「まあ、余は・・・余だからな。厳格な神だが、求めに応じぬほどでもない。気安くもないがね」

リエルがまだ話を聞きたそうにしていると、ムルエルファスは軽く笑った。

「そうそう、それも今日来た理由の一つだったな。他にもあるが、ここで立ち話もなんだね」

「あ、はい。それじゃ、謁見の間にご案内しますね」

と、妙なことにリエル自身が賓客であるムルエルファスを先導

して廊下を歩くことになった。当然護衛の兵士は付いたが。一層妙なのは、リエルがその状況を変だと感じていないことだろうし、ムルエルファスも特に口を挟むこともしないことである。護衛兵らのほうが反応に困って気まずそうな顔のまま一人と一羽の後ろに付いて歩いた。

蛇足ながら付け加えると、リエルとムルエルファスが並んで歩く様はまことにシュールで、一見してほのぼのとした和やかな絵面ながら双方各所では並ぶ者無しと賞賛されるに至る王ともなればなおのこと現実味とは乖離した光景に仕立てられていた。

閑話休題。

謁見の間を準備するにあたってレアはこの短時間でよくやったと言えよう。

まず、そもそも聖獣は食物をほとんど摂らないことが知られている。不老不死である彼らは空腹が極限を超えても平時と同じく活動することが可能であり、その点では食事を取る意味もあるのだがやはり基本的に栄養を求めることは少ない。一つ例として、西の国境の守護聖獣アールカインなど、伝聞でしかないが風を食べるのだと言われる。大気に乗って流れる惑星の霊力を摂取するのだともされるが、詳しいことは定かでない。

とまあそんな理由で、晚餐の用意は躊躇ためらわれた。代わりにレアは考えあぐねた結果、城の料理長と少し相談して穀物倉を開け、ごく限定的に栽培される上等の麦の実を器に盛って出すことにした。聖獣とはいえニワトリならこれを喜んで貰えるかもしれないと、苦心してのこと。

椅子と机を用意する必要もよく分からず、これも妙案として昨年収穫された羊毛の中でも最上級の品質のものを詰めた柔らかいクッションを一つ調達し、麦の器を置く台と共に謁見の間に設置した。

聖獣をもてなすのは無論、それがニワトリともなれば一体どんな手を尽くせばいいのか。レアは他にも思考を巡らせたが、これ以上

に良い案が浮かばなかった。そのため謁見の間にてリエルの傍らに控えた時には疲れ果て、加えてムルエルファスの反応如何がどのようなものになるか極度の緊張を無表情の端々に滲ませている。

結果として、ムルエルファスはこのもてなしのやり方を驚きと共に喜んだ。

「美味しい。黒麦かな、粒が大きいが大味ではないな。脂が乗ったと形容しようもある。肥えた土地でもないだろうに、なるほど学者の国らしい。よく品種改良を重ねたのだね。うむ、素晴らしい。この布団も温かくてよろしいな」

食事を必要としないとされるわりに、ムルエルファスは供された麦を全て平らげてしまったが。

リエルは傍らに安堵のため息を聞いた。失礼があつてはならないと努力したレアは報われたことになる。

「ですって。よかったですね、レアさん」

「は、はい！お褒めに預かり光榮に存じ上げます」と喜んでみたものの。

シュナもリエルの傍に立っていたが、レアも同様二人とも眼前の光景に戸惑いを禁じえない。それも無理はないだろうが、なにせ賓客として迎えたのは一羽のニワトリなのだから。

彼が聖獣と知って尚、外見から来る先入観と違和感は拭いようもない。

黒麦の大粒を食べ終えてひとしきり満足そうに息を吐いたムルエルファスは、さて、とリエルを見据えた。

「急な訪問で無礼とは存ずるが、ご容赦願えればこの上ない。他でもない、フィルラント王リエル陛下、貴君に諸用あつてのことだ。出発したのは三日前だったが、途中で色々と小話も仕入れたのでよければ聞いて欲しい」

渋く響く声。態度。なるほど眼を閉じてみればそこに居るのは紛れもなく大勢の民衆の上に立つ覇者の存在。

リエルも据えた腰を改めていた。

「はい。他国のお客様をお迎えするのは、わたしの代ではこれが初めてですから、何事につけても不慣れな部分があるかもしれません。寛大な目で見ていただけたら幸いです。お話しを伺えるはその上にありがたいことと思います」

うむ、とムルエルファスは人間のように頷いた。

リエルも見劣りするものではない。謙虚さに満ちてはいても10歳にしてこの貫禄となれば、伝説に語られる偉大な王も少々態度を改めて、一介の君主らしく慈愛や尊大さといった感情を唯一見える表情であるその双眸から消失させていた。

「夜も更けてこよう。まず幾つかを語り、残りは後日にいたす。構わぬかな？」

「ええ、もちろんです。ええと、客室・・・はどのようなでしょう」

「ふはは、そうだな。馬舎・・・は要らぬ気遣いをさせそうだ。竜舎はあるかね。藁束を積んで貰えるとういが」

寝泊りする場所に畜舎を指定してくるあたり、流石に人間とは一線を描く。

「そのようにしましょう。レアさん、いいです？」

レアはこくと頷き、静かに退出した。

竜舎とは騎竜を飼育し保管する、馬舎のようなものである。ムルエルファスが人間の文化に詳しいことにはもう左程驚きもしない。そして、確かにフィルラントには竜舎があり、今は三頭のゲマトルダット、つまり騎竜が飼われている。空いた檻もあったはずだ。

「なにかと手間をかけさせるな」

「いえ、そんなことは」

「ふふ・・・では、そうだな。まずは先日シュエレー神山の災害だ。あれは見事な対処であった」

ムルエルファスは言う。シュエレー神山の崩落を神々は予期していたと。だがそれがいつになるのか、までは詳細に知ろうとはしなかった。何故と問うならば、命の悲鳴は聞こえなかったからだ、と。

「それは、シュエレー神から？」

「いやユクティラ神だ。・・・そうか、言っていなかったな。余はユクティラの王だが、同時に神殿の管理者でもある。ユクティラには教会が無いのだよ」

「まあ」

それはさておき、と付け加えて話は続く。

未曾有の危機、大災害により滅ぶはずだった国を救い希望を見せたフィルラント国王とは如何なる人物か。ユクティラ神はムルエルファスの問いに答えず、己で知ればよいと返した。興味を持ったムルエルファスは次にこう尋ねる。

「その王がどうやって災厄を逃れたのか、予想は付く。故に、その存在は危険に過ぎるのではないだろうか、とな」

「はぁ・・・」

「・・・ふふん？」

リィエルの顔をムルエルファスはじっと見つめた後、器一杯の麦を食べた時よりも満足気に深く頷いた。

彼の言葉に警戒心を見せたのはシュナだったが、二人の様子を眺めた後にムルエルファスには何か思惑があるのだろうと黙っていることにした。リィエルに近い者である自分とて、王では無い身なれば彼らの思慮を最後まで理解することは難しいだろうと。

「返答は曖昧だった。が、ユクティラ神は面白がっていたな。ふん・・・余の間抜けも想像したか。あの小生意気な女、いずれ痛い目を見せてやりたいものよ」

「ええ？だ、だめです。神様と喧嘩はいけません」

驚いたリィエルに、ムルエルファスは愉快そうな笑い声で答えた。それでリィエルは思い出す。

「あ・・・そうでした」

「まあそうだ、あれは喧嘩だったな。双方、楽しんでいた。だからユクティラ神は余に国を与えたのだからね」

ムルエルファスの伝説において最も有名なものが、彼が神と戦っ

た出来事である。その神の名はユクティラ。豊穰と護国の神。

数ヶ月に渡る戦いの後にムルエルファスはついに敗北し、その武勲を認めたユクティラ自身によって王国を一つ与えられた。かつて妖精が住んでいた国、妖精郷ユクティラを。

「警戒もしよう。余の王国とはシュエレー神山の険しきが隔てるとはいえ、ここフィルラントは隣国なのだから。かの山の変事がどれほどの規模のものかは此処へ来る際に見た。あれを防ぐとなれば、その王とやらは史上稀に見る巨大な力を持つ者だ。人間がそれほどの力を持つならば、少なくとも余が直接出向いて牽制しに来た意味もあるかと思えた。ま・・・出鼻を挫かれたのはこちらであったがな」

「えっ、どこかお怪我を？」

ぐ、と何かを飲み込むような音が聞こえた。横を見ればシュナが無表情のまま片眉を跳ね上げている。レアかサエラが居れば教えてくれただろう。あれはシュナが笑い顔を隠している表情だと。

「アハハ、まあそれはいい。いいのだが、リエル陛下。貴君に会ってこうして話して、一つ保険をかけていて良かったと思っている。フィルラントとは三千年前の建国の際に少々付き合いがあったが、それ以来疎遠でもあってな。気にかけてはいたが、機会もなかった。全ては巡りあわせなのだろう。陛下は即位間もなく、またお若くもある。今日でなくとも余の動向が影響する部分もあっただろう」

「はい・・・なんでしよう。保険ですか」

うむ、とムルエルファスは言葉を切って右の翼の根本をつついた。本能的なものだろうか、そのまま彼は何事もなかったようにまたクチバシを開いた。

「シュエレー神、ユクティラ神は概ね君の経緯を評価するようだ。ユクティラ神など痛快そうな素振りだったが、余はシュエレー神の態度が如何なるものかと考えた。あれは恐ろしい神だからな」

「・・・・・・はい」

「氷雪と試練の神シュエレー。その御名の下に神職に就くことはセ

ス教の司祭らにとて格別の誉れだと言うな。そのシュエレー神の膝下であの大崩落だ。これはただで済むまいと思っていた」

それはリエルも考えていた。奥深く巨大なシュエレー神山帯の中央に住まうシュエレー神の領域、その最も外側であるこのフィルラントの白壁が崩落する原因を作ったのは旧時代のフィルラント国の人間だ。そして山の斜面はリエルの炎で焼け焦げ、今も痛々しく無残な姿を晒している。

もしも仮にこれがシュエレー神の課した試練だとするならとんでもない試練もあったものだ。一つ間違えばフィルラント王国は滅亡していた。そしてもしも試練でないとするなら、リエルはシュエレー神の領域を汚したことになる。

ムルエルファスは、だがリエルを怯えさせる風でもなく事も無げに伝える。

「ただ、こう言った。不運の積み重ねであっただけだ、と。あの神が微笑んだところなど滅多に見られるものでは無いな。おかげで得をした気分だったよ。いささか恐怖もしたが」

これを聞いてリエルは、ほう、と安堵の息をついた。ずっと気がかりだったのだ。

「お伝えくださってありがとうございます」

「なに、礼には及ばぬ」

そして、とムルエルファスは続ける。

「シュエレー神とユクティラ神、そして余と余の同胞が大地と空の声として聞いた。他の神々も、やはり危惧するほどではないようだ。むしろ歓迎している。ヤヌアフにおいて余の国に次ぐ歴史を持つフィルラント王国は、良い方向へ向かおうとしていると。エンケルダ、トルパトルの神もこの態度なのだから、関わり薄い遠くの国々などは問題にもなるまい。・・・天使の名を伺ってもよいかね？」

そうですか、とリエルはよく分からないまま頷いた。いや、言葉の意味するところは理解できるのだが、どうもムルエルファスは何か言葉の裏に含むところがありそうで、それがリエルには見え

てこない。

なのでリエルはとりあえず言葉の額面通りに受け取ることにして、素直に喜びながら相槌を打った。

「はい。大天使インリユークです。優しい方でした」

天使のことを聞くのは理由があるのだろうか。リエルは先日戴冠式を思い出して答えた。あの日受けた言葉を。

なんと、とムルエルファスは口を半開きにして驚いた。リエルは他の天使を知らないのによく分かっているのだが、やはり珍しいことだったのだろう。特にセス教の関係者らは口を揃えて前例の無い栄誉だと言う。

「大天使の顕現など何千年ぶりか・・・イウスイーリアの国家全てを見渡してもそうそうあることではない。なるほど、余が伝えるまでもなくリエル陛下は神々の保証を授かっていたか」

「どういふことなのかよく分からないのですが・・・」

だがムルエルファスはリエルの疑問に答えてはくれなかった。またしばらく彼女の愛らしい顔をじっと見つめていたかと思うと、フイとその視線を逸らす。そして深く考えるように目を閉じた。

「・・・・・・・・巡りあわせよなあ」

「？」

ふん、と自嘲的に、あるいは単に短く笑ったムルエルファス。再び、右の翼の付け根をクチバシでつついた。

面白い。果たして巻き込んだのはどちらか。

密やかな呟き声は誰にも届かなかった。

「そういえば」

リエルもまた呟くように言ったが、玉座からの声はよく響いた。「ムルエルファス様の天使様はどういったお方なのですか？神殿の管理者と仰っていましたが、何か違いがあるのでしょうか」

「うん？うん。そうだな、違う。余に守護天使はいない」

「え？でも・・・」

「代わりにユクティラ神が余の守護者だ。故に、余は他国の王より

も託宣を受け取ることが容易なのだよ」

「・・・・・・・・なる、ほど」

やっと、リエルは様々なことを理解した。そして、それは再びほとんどリエルにしか理解できないことだった。

傍らに立つシュナはリエルが咄然とする理由がわからない。

「聡い子だ、素晴らしい。何故、余が貴君を警戒したか、これで理解できたね？」

「は・・・・はい。そういうことですか・・・確かに、ムルエルファス様だけはわたしのことを危険だと思いいなられても仕方ありませんね」

「杞憂であったよ。それは確信した。君は、良い子だ」

ムルエルファスは慈しむ様に言った。

リエルは彼の小さな双眸を見つめ、ゆっくりと、深く一礼を送った。

「さて、と。要件はこれで済んだ。火急に伝えるべき用向きは以上だ。余を含めユクティラの者はフィルラント王国に友好的であろうし、神々もまたリエル陛下をどうしようとする向きは無いし、他国はこの国をどう扱うべきか警戒も無く熟考中だな」

「本当に、お伝えくださって感謝申し上げます」

「よいよい。それで・・・だが」

ムルエルファスが神妙にするので、リエルもはたと気構えてみる。これら以上に重大な事案でもあるのだろうか。

「以上のものは建前だ。本当は観光に来た。いや、こここのところ暇でな」

「・・・・・・・・・・はあ、そうなのですか」

シュナの片膝から急に力が抜けてがくりと姿勢が崩れた。

「伝えるべきは伝えたし、後は世間話でもしたいところだ。どうだね、今日のところは陛下のためにも休むとして、明日以降共にフィルラント観光と洒落込まないかね。市井の様子を見るのもよいこと

だぞ？」

笑いを誘っているのだとリエルにも理解できたが、あまり面白い。いや、笑いながら答えるところなのだろう。それは分かる。しかしながら、やや緊張は解けた。

「そうですね・・・どうでしょう、シュナさん」

「あ・・・ああ、はい。よいのではないのでしょうか。侍従長とも相談するとして、馬車は出させますがよろしいですね？」

「歩くのは駄目です？」

「駄目です。ご自愛くださいませ。レアに怒られますよ」

「あう、それは嫌です。じゃあ、馬車をお願いしますね」

「はい」

ムルエルファスはこのやり取りを微笑ましそうに見ていた。常にどこか遠慮がちに話すリエルと、それを分かって愛情を注ぎながら受け答える臣下という関係は、彼の目にも和やかに映るのだろうか。

では、とリエルは振り向く。

「明日はフィルラントを案内しますね。わたしも国内の全てに詳しくわけではないので、お勉強ができます。是非よろしくおねがいします」

「うむ。楽しみにしていよう」

「それじゃあ、お休みに・・・あっ!？」

と、リエルは何かに気づいて素っ頓狂な声を上げた。あまり聞くことのないリエルの声にシュナも少々びっくりする。

「どうなさいました陛下？」

が、これに答えたのは愉快そうに笑うムルエルファスだった。

「フハハハハハ！一本取ったぞ！いやあ、先程の溜飲が下がった思いだ」

「あう・・・忘れてました。申し訳ありません・・・」

「何がですか？」

はふ、とリエルはため息を吐いた。珍しくしょげている。が、

それは何か政務などで重大な過失をしたというよりも、おつかいを任された子供がうっかり一品目の野菜を買い忘れた時のような反応だった。

「聖獣の方々は眠らないんです、シュナさん。眠るとしても、もの凄く長い周期にそれぞれ決まった時間だけ眠るんです」

「左様である。よく勉強しているね」

なるほど、とシュナは納得した。そういえばどこかで聞いたこともあったはずだ。西の守護聖獣アールカイン、東の守護聖獣クシャタラナトについて隊士の上官から講義を受けた時だろうか。

聖獣は非常に長い年月を一睡もせず活動できるが、定期的に個体差に応じて一定の期間を眠るために費やす。その間のみ彼らは無防備になるため、いつ眠るのかを明かすことは無いのだとか。アールカインも三千年、この国に生きるのだからいつかは眠っているはずが、その記録が得られたことは無い。そのために彼はあの巨大な堀の上に日頃からじっと座り込んでいるのだから。眠っていても起きていても姿勢が変わらなければ、睡眠の期間がいつなのか判別しようもない。それに彼らは基本的に無口だ。

「まだ余の休眠期では無いからな。まあ、今日は長旅で少々足もぐたびれたことだし、のんびり羽の毛づくろいでもさせてもらおうよ」

「気が回らず・・・申し訳ありません」

「ふっふっふ。一本取れたからよいのだ。それでは陛下、明日に、また」

「はい。お休みなさいませ、陛下」

兵士の数名がムルエルファスを竜舎へ案内して行った。ムルエルファスはまだ高らかに笑っていたが。

そして先ほどと同じく、兵士らはニワトリを護衛して送り届けるという異様な状況に戸惑いながら。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「面白い方ですねえ」

「そう思いになることのできる陛下をお見それ致します」
そんなこんなで、急に慌ただしくなった今日が終わった。
雪はもう、振り止んでいた。

翌日。

城の北側、軍人の家系が軒を連ねる方角は、城内も同様に軍関連の施設が集中している。馬舎や軍備倉庫、秘術士隊の書庫まであり、大小勝手の違う建造物は見た目に賑やかである。中でも目を引くのは、城内にありながら牧場のような巨大な敷地を擁する竜舎だった。北の内門を出て東。常緑樹の並木の途中に、竜舎への門はある。

「いかんいかん・・・ああ、何事もないとよいが・・・」

騎竜飼育の責任者、竜舎長のペルル・テッセは焦りながら門の鍵を開けた。急いで来たためか吐く息は白が濃い。早朝で気温が低く寒いというのもあって、テッセ竜舎長は鼻をすすり上げた。

昨夜のことである。

『・・・というわけで、こちらのムルエルファス陛下を竜舎にお泊めすることになりました。用意は先ほど伝えた通りです』

『一つよろしくたのむよ。やあ、中々立派な建物だ。陸竜が六頭ばかり入るな』

『・・・ええ!?!』

と、つまり碌な説明も無く件のニワトリの聖獣、ムルエルファス公を竜舎に泊めることになってしまった。無論、何かあればテッセの責任となるのは当然のこと。

だから焦るのだ。

今、竜舎には騎竜として飼育するゲマトルダット竜種が三頭、内一頭は雌が繋がれている。基本的におとなしい性格のゲマトルダット種だが、ある時期は別だ。即ち、春先から夏前にかけての発情期間。言うまでもなく、今は春先にあたる時期である。

発情期のゲマトルダット種の雄は、体の一回り小さな雌竜を求め、また外敵から守ろうとするためにかなり短気になる。竜舎長としてゲマトルダットを飼育できるのはテッセにとって天職と言えたが、熟練の域に達した飼育技法をもつてしても油断すれば命の危険もある仕事だ。

その危険な竜舎を訪れたムルエルファスは、構わないから休ませてもらうよ、と軽く言って三頭の騎竜の並ぶ横で積まれた藁束に乗るとそのまま一息ついてしまった。

他でもない、伝説に謳われた聖獣の言葉とあつて信頼しないわけにもいかず、テッセは了承したのだった。が、その後がいけなかった。

「ああもう、よりによってこんな時に」

念のためにとテッセは竜舎に併設されている宿舎で一晩過ごすつもりで居た。そこへ夜も更けた頃、馬舎番の男が駆けこんで来たのだ。

馬が二頭、産気づいた。とても手が足りないのではどうか手伝って欲しい。

三十代半ばながらテッセはゲマトルダットの飼育に関して熟達するほどで、当然、馬や他の動物も診ることは容易い。北部の農村で牧畜を営んできた一家の出ということで、馬など子供の頃から出産に立ち会うこともあった。が、それが徒となった。獣医のテッセといえは同業者からは一目置かれる人物なのだ。頼りたくもなろう。

そうしてつい先刻まで馬舎に居た。産気づいた牝馬は二頭とも無事で、一頭が双子を産み三頭の仔馬を取り上げての大仕事を終えた余韻もそこそこに、早朝の小鳥の囀りに急かされて来たのだ。

「ムルエルファス様、ご無事でするか！」

カンテラ片手に広く薄暗い竜舎に入ると、すぐに状況を検めた。一応呼んでみたが、木造の広い建物では声あまり響かない。それに、騎竜のいびきは五月蠅いのだ。

ぐるるるるる・・・ぷするるるるる・・・と、いつもの可愛らし

い竜のいびきが聞こえて、どうやら興奮した様子は無いものと見た。が、肝心のムルエルファスが鎮座していたはずの房が空になっているではないか。

いかん、とテッセは竜が眠っている房を順に覗く。

手前にある二頭の雄の房には居ないようだった。暴れた形跡も無い。

そして、問題の雌竜の房。

「……………」

テッセは我が目を疑った。

「む？ああ、もう出迎えかね。まだ早くはないか？」

昨夜も聞いたあの渋い声音が聞こえた先には、毎日見ている雌竜の巨体。だが、様子がいつもと違う。まるで子供を抱くように体を丸めた円の中心に、あのニワトリ王が居た。

テッセはその異様な光景に一しきり硬直した後、はたと思い出したように房へ駆け寄った。

「あの……そこでお休みに？」

「うむ、そうだが」

「……………」

基本的に温厚で人に慣れるのも早い陸竜ゲマトルダット種だが、それでも竜種なのだ。つまり、肉食なのである。ニワトリの肉なら毎日与えるほどでも問題ない、好物なのだが。

今のムルエルファス公のように間近に餌（失礼ながら）が置いてあれば、ほんのおやつ感覚で食してしまっただろう。

「ええと……その、何事もなかったようでは何よりです」

「うん？ああ、ははっは。そういうことか。うん、心配いらない。竜ごときに食われるムルエルファスではないのだよ」

「左様で……」

「それよりこやつ、余に色目を使ってきおったぞ。雄竜の二頭が盛さかっておったようだが、まるで無視だ」

色目とはどういう意味だろう。雄より小さいとはいえ、雌竜でも

馬の二倍近い体高を持つ巨体で、それが一見するとただ少々派手なニワトリを誘惑したというのか。さすがは聖獣の中の聖獣。意味がわからない。

「繁殖期は房を移して互いの姿を見せぬようにするといいぞ。この陸竜種は余はあまり見ないものだが、見たところレムダット飛竜種の改良種だろう？あれを参考にしたくもなるだろうが、こちらの竜種のほうが体臭が強いようだ。慣れすぎると欲求が薄れるのだよ」

「え・・・ああ！そういうことでしたか！なるほど、道理で・・・」
そもそも、ゲマトルダットは繁殖期になっても交尾頻度が少ないものだど勘違いしていた。春先からの興奮のわりに妙な習性だとかばかり思っていたが、実際は違っていたのだ。単に見慣れた相手を嫌がっていたというだけ。

「ご助力に感謝します、ムルエルファス様」

「他は良いようだな。いい飼育番と見える。相変わらずこの国は人材に恵まれているなあ」

「あ、ありがとうございます」

ふ、とムルエルファスが宙空を見つめた。

「・・・ん、まだリエル陛下も眠っているようだ。もうしばらくここに居るとしよう。また呼びに来てくれたまえ」

「は、はい。畏まりました」

「それとな」

「はい？」

ムルエルファスは、驚いたことに、ごほん咳払いをしてテッセの顔を見つめて言った。

「男女の寝所を不躰に覗くものではないよ。そうだろうか？」

「・・・・・・・・ええと」

「フン、言っただろう。色目を使われた、と。そういうことさ。

さあ、行った行った」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言で。テッセは蝶番ちょうつがいのようにお辞儀をすると、そのまま静かに

竜舎を後にした。

さすがは聖獣の中の聖獣。理解を超える。そう胸の内で呟いて。

「おお……お疲れの様子ですな、親衛隊長」

「あ、宰相閣下。ええ、まあ……」

「ふむ」

所変わって城内の一室。城務めの者が食事などをする小食堂。

城に務める者は一日中何かしらの仕事で入れ替わり、誰も居なくなるということが無い。そのため、こういった休憩所は必須となる。食事や喫茶、あるいはほんの少しだけと仕事を放置して休みに来たり。

給仕に立つ数名のコックと女中らは一日の半分をここで過ごして交代するのだが、地味に辛い仕事だともっぱらの噂だった。

その小食堂の部屋の隅のテーブルにはシュナが座っていたが、ハンネルが見たところやたらと不景気な表情である。そもそも顔色が悪い。目の下のクマが濃く、一目見て徹夜したのだと知れる。

「浮き足立っていたようで……」

「ムルエルファス公のことか。私も昨晚遅くに聞かされて仰天したよ。ご苦労だった……とはまだ言えぬのかな」

「はは、そうですね……」

と、温かいスープと白パンと干し肉入りサラダを不味そうに食べながらのシュナであった。せっかくの朝食なのに栄養になっている雰囲気は全く無い。相当疲れているのは間違いないらしい。

「馬車での移動ですし遊覧ですので、このような日程になりました。各所への通達は今朝付けで、滞り無ければもう連絡を終えた頃かと」
「どれ、拝見しよう」

シュナの向かいにハンネルは座り、給仕係の女中に菓茶を一杯、と伝える。歳相応に朝が早く、朝食は既に済ませたとのことだった。シュナは軽甲冑に毛皮のガウンを着込んで、朝も早くから仕事を

始めている、といった風情。一方のハンネルは適当なローブと厚手のコートを着ており、どうもゆったりとしている。宰相もこの頃は忙しくしていたはずだが、とシュナは気だるげに思うが、そういえばそもそも宰相ハンネルの私生活について詳しいわけでもなし。朝はこんな風体なのかな、などとスープをすすりながら、つらつら考える。

実のところ、シュナと同様に城内に執務室を持つ宰相はこの日、ムルエルファスの急な来訪を受けて未明に急ぎ城へとやって来るや、部下の秘書官らとも連携して各部所各庁の仕事を少しずつ自分の所へ持って来させるよう通達していたのだった。

宰相と言えば要するに総理大臣である。各庁の長に国王リエルからの命令を整理して通達するのが彼の本来の仕事であり、各庁から上がってくる書類を整理して国王リエルに渡すのも仕事。同時に王国軍軍団長も兼任するとはいえ、こちらはほぼフォガリ騎士団長と折半して動かせる。

つまり。宰相ハンネルは優秀なので、書類の決済など本来数時間を要するところを、ものの数十分で終えさせることが出来る。というわけで与えられた秘書官、書記官らは手持ち無沙汰になり気味なのだ。

まとめると、宰相ハンネルは暇なので、シュナ始め各部所長の予定に穴が空きそうな今日は、皆の仕事を肩代わりしてくれたのだった。

無論、シュナはこれに気づいていない。

「一晩でこれだけ練ったのなら疲れるのも当然か。うむ、陛下の城下見学も兼ねてのことであるし、この日程表に沿ってよいと思う。フォガリ騎士団長あたりにも通達は済んでいるのかね？」

「ええ、もちろん」

「ならいいだろう。どうせだ、親衛隊長も羽を伸ばして来なさい。城のことを含め、こちらに任せてな」

「お言葉に甘えさせていただきます、閣下。ありがとうございます」

日程表をシュナに返し、ハンネルは運ばれてきた葉茶に口をつける。滋養に富む温かい茶で、初老の皺が目立つ顔にも赤みが差す。城内では高価な紅茶を飲むことが自由に許可されているが、ハンネル始め老齢の者は逆に葉茶を好んだ。これは石造りの城の中がほぼ常に寒く、ことに長時間の執務で血の巡りが悪くなった体を癒すには葉湯や葉茶が望ましいためである。よって、若い議員や侍従らにはこの習慣をじじ臭いと笑う者も居る。

「ああ、私にも葉茶を」

「かしこまりました」

以前はシュナもその若者の一人に近かったが、最近では考えが変わっている。言うまでもなく、リエルの影響だった。

勤勉であろうとするリエルは、昼下がりの猛烈な睡魔に耐えるためには紅茶を飲むことにしている。しかし平時は葉茶を求めることが多い。聞くところによると、ずっと椅子に腰掛けているのは体に良くないから、とのこと。どんな因果があるのかと思っていたら、リエル曰く「葉茶を飲んでいると疲れが取れるのです。肩も凝らないです」らしい。真似をしてみると本当だったので、以来シュナもそれに倣っている。

ことにリエルに付き合っていると、机仕事がこの数ヶ月でもの凄く増えた。それはリエルがあまり外出しないからで、その護衛を第一の任務とする親衛隊長としては机仕事くらいしかやることがないのだ。無論、軍人として体を鍛えることも忘れてはいないが。

父が見れば何と言うだろう。お転婆が過ぎて縁談も無く、兄弟に続いてたった一人の娘まで家業の軍人になり、親衛隊長にまで出世した。が、今は机と戦う毎日。情けなしとは言うまいが、受け継いだ無表情にも珍しく苦笑いくらいは見せてくれそうだ。

「誰か、騎士団長と相談して騎士団あるいは国軍から優秀な者を護衛に回そう。親衛隊長、羽を伸ばすのはいいが、休養も兼ねなさい」
「え・・・あっ」

どうやらシュナはうとうととしていたらしい。道理で父のことな

ど思い出すわけだ。目の前でハンネルが朗らかに笑いながら菓茶のおかわりを頼んでいるところで、シュナは赤面して慌てて顔をまさぐった。よだれなど流してはたまらない。

「・・・そうします」

「それがいい。誰がいいだろうな・・・ああ、そうだ、彼だ」と、ハンネルは懷中から小さな紙束を取り出し、一枚を机に置いた。そしてどこに持っていたのか、小箱を取り出す。筆記用具を収納したもので、ペンとインク壺などが収められている。こういったものはかなり高価でありこのように気軽に持ち歩けるものではないのだが、どんなに着流し姿でも文官の心意気を忘れないあたりにシュナは内心で敬服する思いだった。

「弓兵隊に一人、私とも懇意の優秀な兵士がいる。騎士団長や何人かの兵団長らとも知り合いで、能力でなら騎士団長と同等と言われる男だ。陛下もご存知の方だから、要請してみよう」

「それは・・・いいのですか、そんな凄い方を」

「なに、本人は喜ぶだろう。階級は五十人長だし、気負うこともないよ。そう、本人が言うのだからそうしておくといい」

「はあ」

そう言いながら紙片にペンで簡単な命令書を記し、サインをして、最後に筆記用具入れの中から小さな印鑑を取り出して捺す。宰相の印である。これで、この小さな紙は正式な命令書となった。

「名前はゼルガ・ハバト。弓隊士五十人長で、騎士団長と・・・そうだな、レーレン千人長とも同期の男だ。二人とは今でも仲良く酒など同席する間柄と聞く。一度弓の腕前を見せてもらったが、レーレン子爵をして敵わないと言わしめるだけはあったな。凄まじいものだったよ、あれは」

「あ、それで陛下もご存知と。なるほど、陛下を救助した方でしたね」

「そうだな。陛下も安心するだろうし、私から強く推すものとして伝えてくれたまえ」

「ご助力に感謝します」

宰相兼軍団長という権限をもってすれば、複雑な命令系統を経ることも雑多な処理を行う必要もない。その利点を最大限利用して、ハンネルは常日頃からこのように機転を利かせてくれる。このような、ほんのちよつと立ち寄ってみた休憩の一時でも、だ。

時に誰となく言うが、フィルラントの財産は人材である、という言葉がある。まったく敵わないな、とシュナは内心で苦笑めいたため息をついた。リエルあたりに言わせれば自分もまた、その人材の一人としてくれるだろう。しかし相対的に見ればハンネルやリエルは突出して優秀だ。

「・・・その、ハバト五十人長ですか。能力でなら騎士団長やレーン子爵に並ぶとおっしゃいましたが、何故五十人長のままなのですか？それほど優秀ならもつと・・・」

複雑な面持ちが顔に出ていたか、ハンネルはシュナの顔をじっと見つめた後に柔らかく微笑んだ。顔に刻まれた皺が深くなり、年輪を重ねる樹木の印象を見せる。こういう顔をするときのハンネルは柔和な態度ながら、どこか諷めるような言葉を発する。思い出してシュナは気詰まりし、やや身構えた。

「まあ、これは君のような若者にはまだ分かるまいかな。そう、要するにだ・・・巡り合わせが無かった、といったところか。運が悪いと言うとレーン子爵の例において先々代陛下に対し失礼が過ぎるので言わぬが、そういう機会が彼には無かったのだね。運命は求めて切り拓くものと言うが、それでも予期せず訪れる機会というものもある。子爵や騎士団長はそれを掴んだ。五十人長には無かった。無いままに、しかし彼はそれでもよいと言っている。騎士団長や子爵も、まあ騎士団長は本心が解り辛い御仁だが、彼らもまたその機会が無くともよかったと言うだろう。この三人が入隊した頃から知っているが、彼らはそういう人物だ。機会があれば会って話すといい。彼らは君たち軍人にとって良い手本と思える」

「・・・生粋の武人、ということですか？」

「それは一面において言えることだが、全てではない」

空になった木のコップを持って、ハンネルは立ち上がった。

笑みはまだ深いまま。

「いずれ君にも理解できよう。恐らくその機会は多く、そして早く訪れると思われる。きっかけは君の手の届く場所に居てくれるのだからね。その時になれば君にも選択肢は与えられるだろうが、どう選ぶかは君次第だ。なに、気負うことも心配することもない。今のままで居れば、今の気構えを保ち続けてさえ居ればよいことだ」

「……分かるような気は、します」

「そうか、ならよかった」

ではお先に、とハンネルは小食堂を後にした。

シュナは一人、機会、と呟く。そして目の前のスープを匙でつつく。

「なるようになる、ということか。今のところは」

冷めたスープには汁気は残っておらず、具材が少々皿の端に転がっているのみ。野菜の欠片と、あの縞マメがいくつか。

まとめて匙ですくい取ると、躊躇わず口に放り込んだ。

公務との兼ね合いもあり、身支度を整えたリィエル一行が馬車で城門をくぐったのは昼をややまわった頃になった。

天候は晴れ。昨日の雪もすっかり止んで、陽光が気持ちよく降り注ぐ日となっている。

「馬車は知っていたが乗るのは始めてだ。ほほう、こういうものか」
「わたしもあんまり乗ったことが無いです。便利ですねえ」

開いたのは東門。

城下の人々は先日の戴冠式以来に姿を見せた王族専用の飾り馬車に、喜びの歓声をもって迎える。あの可愛い小さな女王陛下がどこかへお出かけするらしい。あまりに姿を見せないで、人々は

そろそろ女王の体調を心配していた程だった。

背が低く敷地の広い建物が広がる東部市街。前方に目をやれば、その中で一際大きく目立つ黒っぽい建物、王立学院。

今日最初の目的地に向けて、馬車は軽やかにのんびりと走り始めた。

他国からの客を迎えて最初にどこへ招待するか。諸国に悩みを同じくする者は必ず居るだろう。そういった意味で、シュナは外務大臣のウィバルに夜遅くにもかかわらず相談してみた。そこで返ってきたのは、簡単な返答。

『学院でしよう。職人街もいいが、まずは学院だ。この国の最も誇る施設ですからな』

それはそうだ、とシュナは頷いた。そもそも、この程度のことを外務大臣に相談する必要も無いくらいだった。

派手ではなく、地味でもなく。そんな味のある黒さが全体を覆う王立学院の建物。城下に住む者なら誰でも目にしたことがある、この国では王城よりも長い歴史を持つと言われる施設。フィルラントを訪れてこの場所を訪れない手はあるまい。

シュナの立てた予定に従い、既に学院にも通達は行き届いていた。正面の巨大な門扉から伸びる遠大な金属柵に囲まれる建造物を見上げ、馬車はその門前に待つヒーム・エンデル学院長に出迎えられた。

「降りてもよいものかな？」

「大丈夫です、ここは。むしろ学術的な好奇心旺盛な人々の居る場所ですから、そういう点では多少問題があるかもしれませんが」

人々が怖がったりしないだろうか、とムルエルファスは気遣った。それに対しシュナは問題ないと答える。これは、早朝にエンデル学院院长からの通告で知らされていたことだ。彼は学院の面々に今日のことを既に伝えたが、怖がるどころか興奮気味に早くお会いしてみたいという声が相次いでいるとのこと。

そういった内容を、リエルの横で籠に布団を敷き詰めて丸く座っているムルエルファスに告げる。

「大人気なのですわね」

「いやあ、まいったな」

掴みどころのない性格ながら、リエルはムルエルファスと意気投合しているらしい。シュナもそれほど知識は無いが、このムルエルファスという聖獣は、多くの聖獣の中でも特筆に値する変わり種なのではないか、そう思えてならない。

それはともかく、シュナは二人（一人と一羽）が思った以上にくつろぎ楽しんでくれている様子なので、今日の遊覧は問題なさそうだと今から安堵していた。

「では、両陛下」

「はい」

「うむ」

シュナに手を引かれてリエル。そのリエルの手に抱えられてムルエルファス。なんとも言い様のし難い一行が馬車から降りた。

なおムルエルファスを両手に抱えているのは特に理由も無く、つい今しがた籠から出ようとしてつまずいたムルエルファスをリエルが慌てて受け止めてそのまま、ということ。やけに収まりがいいのでリエルはそのまま手を放さず、ムルエルファスも愉快そうにされるがままである。シュナもぎょっとしたが、リエルは特に重くなさそうであるし、ムルエルファスも了承している風なので口を出さなかった。

そんな一国の王と伝説の王。さしものヒーム・エンデル王立学院院長も嘖き出すのを堪えきれず、ごまかそうとして失敗し呼気が妙な所に入ったのかゲホゲホとむせ込んでしまっていた。さもありなんとシュナも頷く。

「うおっほん。あー、ようこそおいでくださいました」

なんとか取り繕ったエンデルに、二人の陛下は丁寧な礼を送る。

「急なことでごめんなさい、院長先生。今日はよろしくお願いしま

す」

「秘術の学び舎か。ふーむ、なるほど、こう利用したか」

どうぞとエンデルの招きに従って一同は門の中へ。正面に広がる学院の庭は広く、芝生や木々が均等に植えられており爽やかな光景となる。まだ肌寒い季節でも、青々と茂る緑が風の冷たさも忘れさせてくれそうだった。

左右を兵士らに固められての一行は目立ち、敷地に居た学徒らはこれに気付いて歓声を上げている。

「創立2500年以上。ムルエルファス陛下はこの学院の由来をご存知なのですか？」

先程のムルエルファスの言葉に、懐かしさのような響きを聞いてエンデルは問うた。

ムルエルファスはリエルの腕の中でしみじみと頷く。

「うむ。かつてここは黒の砦と呼ばれる場所だった。記憶も曖昧なほど昔になってしまったが、形は違うようだ。恐らく一度壊して建て直したのだろう。黒色を基調とした部分だけは引き継いだのだな」

「黒の砦・・・」

リエルは学院の建物を見た。石材そのものの色が黒色に近く、これが全体の壁面を覆うために黒一色に染まる巨大な建造物。

建物の印象そのものは国内の他の屋敷とそう違わない。木組みに煉瓦と土とで構成されるのはここも同じだが、色だけが異彩を放つ。

正面玄関から、これまた広いロビーに入ったところでムルエルファスは再びクチバシを開く。

「シユエレー神が教会を授け、次に作られたのがここだ。黒の砦は初代フィルラント王の住居であり、同時に当時の高名な秘術使い達が集う場所でもあったため、我々はこの場所を”黒の要塞”とも呼んだ」

「要塞？誰かと戦っていたのですか？」

「そうだ。当時は戦乱が絶えなかったからな。人間達の間での争いは無論、我ら獣王の血族とも戦っていた。・・・・余は、この

国を叩こうとしたことがあるのだよ」

一瞬、リエルとシュナ、エンデルも色めき立った。しかし一瞬である。

もはや考えるのも馬鹿らしいほどの遠大な過去の出来事。その時代と今とで、情勢などいくらでも変わる。現にムルエルファス王は目の前でリエルの腕に抱かれて安穩とした口調のままだ。動揺するほどのことではないのだろう。

「まあ、難しかったがね。結局、この国とは争うよりも盟約を結ぶほうが良いと気付いて手のひらを返したよ。余に土をつけたのはユクティラ神のみだが、余が侵攻を諦めたのはこの国だけだ」

「そんなに、凄い王様だったのですか」

ロビーに入った一行はひとまずその場で待たされることになった。前もって通常の業務を行うよう指示してあるので、特別な企画などがあるわけではない。が、リエル達の訪問自体が特殊なイベントでもあることなので、生徒や教員らは浮き足立って気もそぞろといったところ。昼過ぎまでの学徒用授業はじきに始まるはずだが、ロビーを見にやって来る若者は見渡す限りでも100人近く居ようか。

ざわざわと騒がしくなる中、ムルエルファスはその喧騒こそを微笑ましく眺めた。遠い目をして。

「そんなに凄い王だったのだよ、初代フィルラント国王は。あれが人間とは思えないほどだった。知略に長け、計略と謀略を指先で使い、秘術を使わせれば我らの威力に匹敵し、不屈の精神は我が同胞の矜持をも叩き折ってくれた。いざとなれば国土もろとも吹き飛ばしてやろうかとも思ったが、それよりも直に話してみたかった。人の身で聖獣に比肩した者などあの時初めて見たのだから」

言いつつムルエルファスはリエルの腕からひよいと降りた。

「見てまわってもいいかね？昔と違って今のほうが面白そうだ、ここは。秘術の学舎というのは術導機の研究もやっているのだろうか？」

術導機とは、秘術を応用して生物の霊力で作動する道具のことだ

ある。市街地に敷設された街灯などもこの術導機の一つ。

エンデルは少し考えてから、近くにいた教員の男性を呼びつけて何かを小声で話していた。その後、頷く。

「いいでしょう、案内します。安全面に配慮したいので、できればこちらが指定した場所以外には立ち入らないようにお願いしてもよろしいでしょうか？ 知識無く触れると危険な機材などもありますので」

「ふむ……うむ、よからう」

エンデルの表情を窺うムルエルファスは、彼が真剣に言っていることを汲んで了承したようだった。

部外秘の研究や軍事目的の研究は基本的に他国の者には絶対に知られてはならない。が、現状フィルラントでそのようなものはほとんど無い。単に、本当に危険だという理由があつての指示であり、エンデルも一切含むところなど無かった。

とはいえ、エンデルの目の前に居るのは地上最強の聖獣と称されるムルエルファス王である。彼にとっての危険などそうそう遭うことも無いだろうが、と思ったところでリエルの存在を思い出す。なるほど、過保護なことだ、と胸中で呟いて。

ちよこちよこと尾羽根を振りながら歩くムルエルファスを追い越すように、エンデルは先に立って歩き始めた。

「ではリエル陛下、一緒に行こうか」

「はい、ムルエルファス様」

と、リエルも。

先程から続々と集まって来ていた生徒や教員らは、既に広いロビーにも収まりきれないほどの人数になってしまっていた。先んじて通達していたため動揺する風でもないが、まさかこれほど歓迎されるとは思わず、誤算だった。

前を見ればリエルが握手を求められたり、ムルエルファスにおっかなびっくり話しかける生徒の姿もあり、シユナは少々気が気で無い。一応その周りを部下の兵士らが固めているし、問題は無いの

だが。

「では、我々も」

「あ、ええ。ハバト五十人長」

シュナの補佐官に任命されたゼルガ・ハバト五十人長はリラックスしているようだった。聞けば王族の警護などの任務は今回が初めてだそうだが、その割に馬車の通る道路や訪れる建物の構造についての把握など、シュナも舌を巻くほどときばきと動いてくれる。

口調は穏やか。行動は無駄なく。機転が利き、ユーモアもある。上級士官としては破格の能力ではあるまいか、とシュナは驚いていた。流石にハネル宰相が推挙するだけはある。

「ハバト殿はどちらのご出身で？弓兵というには若い頃から鍛えていたのでしょうか」

なんとなくするには不躰な質問だったかと思ったが、ハバトはこだわる様子も見せなかった。

「北部の、農家ですよ。狩猟を代々やとり一家です。家は弟達に預けましてね、それで入隊を」

「預けた？何故です、ご長男だったのでしょうか？」

目線で常にリエル達とその周辺を捉えつつ、ハバトは苦笑した。「あゝ、っと、あまり女性に言う話ではないのですがね。その、以前一度結婚はしていたのですが、なんというか、子供が出来なかったもので」

「え……」

「原因が自分にあるのは医者に知らされて、離縁して……で、家督を継げないのも仕方が無いので、軍に」

仏頂面を常とするシュナも、流石に赤面した。

小声で失礼を、と頭を下げる。

「いや、いや。申し訳ない、下品な話で」

「下品というか、仕方のない話だ……」

「……父はいいと言ったのですがね。私は根が頑固だったようだと、その時知りましたよ。家を出てこちらへ移って、もう二十年以

上経ちますか・・・たまに帰ると家長のように扱われるもので、弟夫婦の手前、逆に肩身が狭い」

ふと、今朝思ったことを再び思い出した。

父には勘当を言い渡されたわけではない。が、あまり実家に帰りたいもない。

しかし父は何と思っているのか。

「弓が得意で良かった。元々これ一つで食っていけるものと思いがった若造だったのが幸いしました。妙な意地で、弓だけは誰にも負けまいと訓練にも熱が入ったし、自信も確かになりつつある。塵も積もるものです」

その腰に吊られるのは短剣と、折り畳み式の弓という珍しい装備。自作したという一品は小弓より少し長いくらいだそうだが、室内なご狭い空間ではこれで十分らしい。

シュナは、殊に馬術は誰にも負けない自信があった。しかし武器のほうは凡庸より少し上という程度だ。訓練は欠かさないが、それでも剣術で少しばかり伸びて、弓など他の武器ではからっきしだった。ハバトのような才能あって努力できる持つ者を羨望することもある。

現に今、ハバトの視線はリエル達の周囲を警戒するに留まらず、常に一定の距離、一定の空間を保つように動き、体を移動させている。建物の構造も完全に頭に入っているのだろう。

王国軍弓兵隊には、こういった特殊任務向きの人材が多い。中でもハバトは五十人長で、精鋭揃いと言われる四番弓術隊の訓練担当官だ。彼の實力の全容は想像だにできない。そもそも王の目に留まっただけで親衛隊長になれた自分とは、練度も経験も全く違う。想像しないほうが精神衛生上良い。すれば鬱屈してしまうだけだろう。

「弓兵隊ですね・・・」

声なきため息はハバトに聞こえたか。彼はもう一度苦笑した。

「親衛隊長は、まだお若い。これからです」

「はい・・・」

朝と似たようなことを言われて、シュナは逆に気落ちしてしまった。女性ながらに早く歳を重ねたいものだなどと、複雑に想う。

しばらくそのままリエルの後を歩いて、ハバトの仕事ぶりを見て。

エンデルに案内され、一行は学院の奥、研究棟へ向かう。先ほどまで騒がしくしていた学生らも、教員達に叱られて授業室へ飛び込んだらしい。今は静かなものだ。その、午後のとろりと流れる時間が穏やかで、シュナはエンデル院長に連れられて歩くリエルを眩しく見る。

学院に来る機会は、一般人にはほとんど無い。上流階級の子弟でも秘術を専門に学ばない者が訪れることも無い。シュナは軍人の家で、幼い頃は親が指定した家庭教師に学んだ。社会生活を送る上で的一般教養は、大抵の場合は私塾や家庭教師に教わる。親が代わることもある。教会が運営する少年学校というものが国内数カ所にあるが、これは庶民の中でも上昇志向を持った親が子供を通わせる場所だと聞いている。内容は他と変わらないが、13〜4歳ほどまでの子供たちはここで社会を学び、親の手伝いをして、よく働くようになる。

秘術を学ぼうとする者は稀有だ。だが、総人数で言えば少くない。国外からも志願して来るほどのフィルラント王立学院は、秘術を修めんとする若者、修めて更なる高みを目指す学芸員らにとって、秘術の聖地とも言える。志がある者が集うのだ。

こうやって大勢の人間が集まって教育を施し施される場所というのは、シュナにもなんだか面白そうに思えた。自分には無かった環境だ。が、総じて秘術士らが変わり者と言われるように、シュナが望んでも親は許さなかっただろう。いや、望みはしないが。

ただ、違う目線に少し憧れるだけだ。

「.....」

シュナは不意に顔を強ばらせるようにして軽く笑い出しそうになった。

（任務中に私一人だけ勝手に一喜一憂して、馬鹿だな）

それで気を取り直す。結局、ゼルガ・ハバトが五十人長という地位に甘んじている理由は聞き損ねたが、まあいいだろう。

些事を考えてもしようがない、とシュナは頭を振ってリエルへ近寄っていった。今は術導機の試作研究をエンデル院長の案内で見せてもらったりしており、シュナに気づいたリエルが手招きしている。机の上に乗るムルエルファスは物珍しそうにリエルが持つ道具を見つめていた。

「こういうものは、特に必ず必要というわけではないのだろう？ ほか、この熱量を発する板など、火を起こせば済むことではないのかね？」

「火を起こせば火事になるかもしれない、また火を起こす作業自体が面倒である場合には有効だということです」

「人間は物ぐさだな・・・」

「いえいえ。その分、空いた時間に他のことが出来るでしょう？」

「ああ、なるほど」

「聖獣であるムルエルファス王であれば逆に理解し易いのではないでしょうか。我々人間の時間は有限であり、その中で最大限の成果を求めたがる生き物だということに」

「なるほど、ふむ・・・なるほどな」

「はあ、なるほどです」

ん、とエンデルとムルエルファスとシュナがリエルへと振り返った。

「え？ あ、えっと・・・そんなこと考えたことなかったです。便利だとは思ってましたけど・・・」

ムルエルファスはしばし黙って、エンデルを見た。

「若者の意見として重く受け止めておきたまえ」

「染み入りました・・・」

シュナと、遠くでゼルガ・ハバトがくすりと笑う。時間の有限性

を想うのは総じて大人であり、子供にとって時間も世界も無限に等しいものであるから、リエルはエンデルの言うことに目を開かされたのだった。

「しかしまあ術導機と言っても色々あるものだな。ここまで多様化する技術になろうとは思わなんだ」

「それは常に世間でも言われているようですよ。術導機の発明は本当に早い。今日作ったものが明日には過去のものです」

「ふむふむ」

この研究棟の一室は、エンデルが私室としても使用している部屋だとのこと。私室というには、やたらと大掛かりな実験器具が所狭しと配置されており、言うなれば工房という雰囲気だった。

学院の運営を任される身にあつて学生らと共に研究に没頭することも多いという彼らしく、部屋にある術導機の数々は一般には出まわっていないものばかり。それも、新しい試みが施されているものが多かった。

エンデルの説明にメルエルファスは食い入るようにして聞き入り、リエルは説明よりも現物の構造に興味を持った。知識の寄る所によつて好奇心の対象が明確なのが分かりやすい両者である。

「こんなに軽量化できたのですか。お台所に使う加熱板は、もっと大きいものが主流では？」

「ふふふ、さすがと言つて欲しいものです。一見地味ですが、生徒らもこの出来には満足していましたよ」

「素材は・・・軽銀ですか？何か混じってます？」

「軽銀と鉄と石炭粉です。この薄さと面積で秘術を織り込むのは苦心しましたよ」

「でしょうねえ・・・すごいです」

リエルが持ち上げてみたり裏返してみたりしているのは、先ほどメルエルファスが全否定しようとしていた金属板。熱量を発して調理などに用いる加熱板という道具は一般的だが、リエルの言うように普通はかなり大きく、重い。

物体に秘術を織り込んで記録させる技術は、秘術の応用形として現在では広く研究されている。これを術導機と呼び、スイッチのようには刻まれた起動公式の文章などに触れることで、内包された秘術が起動する仕組みになっている。

「誰でも秘術を、か。うむ、それはいい考え方だと思う。我ら超越種は生まれながらに己の領域に親しむから、秘術という概念は持たぬ。そもそも秘術というものが、誰でも我らのような力を持ち得る可能性そのものだ。それを更に、とは。ううむ、やりおるな」

感心しきりのムルエルファスだったが、言葉の端々から得られる聖獣の生態のほうがエンデルやリエルにも興味深いものだった。聖獣アールカインと親しいリエルも、彼しか知らないのだから聖獣全体の在り方というものを直接耳にするのは初めてだ。

「それ以前に道具を使わぬからな・・・手があるのは面白そうだな」「翼があるのも面白そうですよ？」

と、リエル。相手がニワトリの聖獣と知っての言葉だったが、失念していたわけではあるまい。

「飛べぬ翼でもか？」

「人間の手も飛べませんよ？」

「物を掴むこともできぬぞ」

「大気を掴むことはできるのでしょう？わたしの手では無理です」

「文字を・・・ああ、うん、止めよう。ふふん、褒め殺しだな」

「？」

要するに、根本的な進化の結果であるということをリエルは言いたかったようだ。えらく言葉が足りないのは彼女の癖か。

各々の適した体の形があるので、差異を比較することは無意味だということ。

エンデルとシュナが嘖き出し、ハバトや他の護衛兵も可笑しそうな顔だった。リエルは、大人たちが何を可笑しがっているのかは分からず、しかしつられて笑顔になる。

「物事の道理とは、まさしくリエル陛下の言う通りだ。より根源

的であるほど良い。より単純であるほど良いのだな。くつくつ・・・余としたことが、まったく敵わぬな」

言って、飛び乗るようにリエルの腕に抱かれるムルエルファス王。

「敵わぬので、リエル陛下の掌中に収まって居るとしよう」

固いクチバシを斜めに向けて、ムルエルファスはこうやって笑顔を表現する。

リエルはままごとをする子供のように笑った。

「あら、わたしの好きにしているのですか」

「なにせ抵抗したくとも、余は羽ばたいて逃げられぬ」

「うふふ。でも、ムルエルファス様のお体を掴んでいるから、わたしは他のものを掴めません」

「そうなれば余が助けてしんぜよう」

「じゃあ、しっかり掴んでいますね」

そうやって二人で笑い合う。

「ではエンデル殿、次はどこを見せてくれるのかな？」

「は・・・では、授業風景などを。ちょうど大講堂で講義中です」

「よろしい。さあ行こうか、リエル陛下」

「はい、ムルエルファス様」

少なくとも、リエルは見せた。信頼は一夜で生まれることもある、と。ムルエルファスも全幅の信頼をこの少女に置いたようだった。

何か、傍からでは計り知れない意思疎通があるのだろう。リエルとムルエルファスは共に王であり、特殊な力によって地位を際立たせているという部分も共通する。この二人にしか分からない共感があるのかもしれない。

初対面から一日でこれほど仲良くなった二人の王。特殊な立場や条件があるとはいえ、こんなにも急に親しくなれるものかと皆は怪訝にしたが、それでもリエルならと思えた。それに、両者は誰にも別け隔てなく気安いという共通点がある。別段不思議なことでも

ないのだろう。

「・・・すごいですね」

「です、な。王の資質というやつでしょう」

僅かなやり取りに感動するシュナとハバト。目の前で二人の王が交わした会話の意味は、両者の立場が影響して幾重にも形を変える。それを、二人はあっさりと飲み込んで話している。

「・・・・・・・・行きましょうか」

「・・・・・・・・です、な」

考えた挙句、二人に言葉は無かった。

王立学院の見学は、2時間ほどで終わった。

リエルはエンデルから母の思い出なども多少聞いたが、詳しくはもつと時間のある日にでも、とエンデルが言うので了承していた。他に学術的な質問を中心にエンデル含め学院の誇る学芸員、教員らに行っていたが、やはりこの少女の年齢という点を加味すると誰もが驚愕していた。そもそもリエルは学院で秘術を学んだわけではないのに、平均的な秘術士はもとよりエンデルと比較しても遜色ない知識と応用力を持つのだ。皆は舌を巻いて、逆にリエルに質問を返す場面もあった。それほどリエルの知識は、学院にとっても新鮮なものだったのだ。

ムルエルファスはというと、終始この見学を楽しんでいる様子だった。しきりにあれはなんだ、これはどう使うものなのだ、と皆に聞いている答えに満足し、人間とは面白いものだとは何度も言う。

広い大講堂での講義を見学していると、ムルエルファスが授業をしていた教員に質問を投げかける場面があった。

「それで、靈力を増大して補填する秘術はいつになったら作られるのかね？」

秘術の命題の一つであり、難題であり、悲願である。リエルやエンデルが苦笑していた。

質問された教員は、フレティ・メテユエ・クロージャツハという

女性教員だったが、彼女が「人が神になる日か、神が人になる日に出来るでしょうね」と返すと、ムルエルファスは驚いたようになって頷いた。

「なるほど、いい発想だ」

他に、リエルがエンデルに勧められて講壇の上で学生らに挨拶をしたり、秘術の知識を披露して教員と共に授業を行う場面もあった。若い学生らはこの幼い少女王を微笑ましそうに見ていたのが、その知識に触れて目を白黒させていた。少なくとも、この場の学生でリエルに追従できる秘術士は一人も居なかったのだ。クロージヤツハ女史も、リエルが話す隣で驚嘆の眼差しを向けていた。

「以上が、アंकの動詞に類する発火術についてのわたしの見地です。基本形の合理化については今述べた内容で完成すると思いますけど、考察の余地はまだあると思います。それに、なんでも合理的にするより、間接動詞を加えて多様化するほうが面白いと、わたしは思います。ええと、以上です。ありがとうございました」

箔板を置き、紙にリエルの論を記録する者が続出していた。ほんの僅かな授業だが、今彼女が語ったものはちょっとした革新なのではないか。語りつくされた基礎的な秘術で、これほどの持論を展開するとは誰も思ってもみなかったようだ。

歓声と盛大な拍手に見送られて、リエルら一行は大講堂を後にした。

その後は、学院の食堂で休憩を兼ねてお茶と菓子が振舞われた。ムルエルファスがリエルの手のひらから菓子をついばんでいて、微笑ましいやら失礼に値しないのかと皆が動揺するやら、これも小さな騒動だったのはご愛嬌。一息つこうとしたシュナが紅茶を噴き出しそうになっていて、ハバトとエンデルに介抱されたりもした。予定を押し気味だったが、皆が満足しているのでシュナも一安心だった。

一行はエンデルに見送られ、残る日程に従って移動した。

次に向かった気象観測局では、リエルは予想以上の歓迎を受けた。

「陛下には何とお礼を申せばよいか・・・」

局長を務めるのは学院職から転向して就任したハッゼ・テストツタという男性である。気象観測官は彼のように秘術士出身の者が多い。

先日の国難を省みて、リエルが予測し気象観測局が同様の予測を立てた点は後になって高く評価された。そも、この気象観測局は平時はほとんど閑職のようなもので、誇りを持って働く局員らは税金を食いつぶすと非難されてもいたのだ。そこにあの事件で、リエルに申し訳なく思い、また災害を喜ぶ不謹慎さもあれど、評価ががらりと変わって予算も優遇されているのが現状。

局員らは一様に、日頃の働きが報われたと喜んでいたのであった。

「正當な働きに報いたまです。これから頑張ってくださいね」

「は・・・はいっ！」

と、リエルの労いの言葉に更に興奮して感動する始末。

王立学院に隣接して建つ気象観測局は、一見するに何の建物なのか解り辛い。全八階建ての塔が三つくつたような特徴的な局舎と、それを円形に取り囲む平屋。敷地いっぱい建物が詰まっているため庭が無く、正面玄関に申し訳程度に「気象観測局」と小さな看板がある。

リエルら一行が立ち入ったのは、玄関から入った平屋、つまり気象情報を国府に提出するために文章化する施設。これが左程掃除も行き届いていない雑多な部屋が続くという見苦しいもので、所狭しと置かれた机には、これまた机狭しと膨大な量の紙束が載っている。聞けば、これほど紙を消費する部署はこの気象観測局くらいだという。箔板では得た大量の気象情報を記録しきれないらしい。

統一された気象観測官の制服は、誰の着ているものを見てもくたびれてしまっているが、むしろそれが仕事に従事し没頭する彼らの働き振りを表している。シュナはこの制服を見ると、先日のあの雪

の日の絶望を不意に思い出して暗い顔をしていたが。

テストッタ局長に招かれ、一行は三本の塔にも登ってみた。

「狭いのでお気をつけて。一階は資料作成室と同じで、二階から四階が交信室。五階は編集室。六階と七階が観測機や大気、雨、水質、土壌などの成分検出を行う試験室。八階は展望台となっております」
細い階段をすいすい登りながら話すテストッタ局長。さすがに歩き慣れているようで、リエルの健脚でも少々へばり気味なのに、中々過酷な仕事であることが窺えた。

「交信室？」

「ええ。ここ以外にも国内の端々に監視塔があるのはご存知ですか？ 規模はここより小さいですが、それらの塔とも秘術の念話を行って情報収集を行うのです。一室に一人、合計で九人が常時待機して、日に一度交代します」

「日に一度・・・大変なお仕事ですね」

「はは・・・いえ、まあ、強いて言えば座りっぱなしで退屈なくらいでしょう」

言葉は濁したが、要するに一日中椅子に腰掛けて持ち込んだ本を読んだり茶を飲んだり菓子を食っているだけの仕事というわけだ。シユナやハバトはそれを知っていて、リエルの後ろで苦笑する。

「編集室とは得た気象情報をまとめて交信室に渡すのか。観測機とは？ 術導機にはそんなものもあるのか」

「ご覧に入れますよう。こちらへ」

ムルエルファスが興味を示した観測機の置かれる六階の一室へ。秘術の灯りを廃して蠟燭に照らされる薄暗い部屋には、フィルクント全土を表す巨大な地形図と、その上にずしりと鎮座する透明な立方体の物体があった。

「ああ、望遠球なのですね」

「さすが陛下。その通りです」

テストッタが立方体の一部に貼りつけられた金属板に触れると、透明な内部に球体の歪みが浮かび上がった。

「これは・・・初めて見ますが」

シュナが驚くのも無理はない。これほど大掛かりな術導機は、一般的に用いられることはまず無いのだ。

望遠球とは術導機の一つで、透明な球体に遠隔地の風景を描写する道具である。面白いのが素材で、純水のように澄んだ透明でありながら、実は全て金属で構成されているのだ。術を付すことで物質としての色彩を消失し、透明にして用いられている。

ここに置かれた望遠球は巨大だが、リエルの知るものは手に乗るサイズだった。王城の私室に持ち込んだが、自前の望遠球もある母に教わって自分で作ったものだ。金属球の成型から秘術を用いて作られた高精度なもので、出来栄えに母は褒めてくれた。

「球？確かに球体が見えるが、どういう構造なのだ？」

立方体の内部に球体。どうやって作られているものなのか、ムルエルファスは不思議がった。

「密度を変えてあるのですよ。真球を作るのは難しいのですが、この構造なら計算だけで簡単に構築できるのです」

「・・・！！」

と、驚愕するリエル。なるほど、と呟く。

金属を溶かせば如何様にも成型できるとはいえ、確かに真球状に創り上げるのは非常に難しい。それが、今テストタ局長が言ったやり方であれば、物体の内部に真球を構築するだけでよい。秘術の公式さえ緻密に仕上げれば、それがたとえどんなに不恰好な金属の塊であっても、内部に密度差で真球を作れる。発想の転換だ。

一同の前で、球体に地図が投写された。横から球体を覗き込むと、このフィルラント王国の上空に目を置いたような風景が見える。今は、晴れ間に挿し込む陽光や、遠くの森、崩落したシュエレー神山などが映しだされている。

「すごいな。いくつもの術を同時に重ねているのか。この国のどこでも見られるのかね？」

「いいえ、そこまでは。下の地図は座標を確保するために公式に組

み込んであるもので、要するに縮小模型のようなものです。都市の隅々まで詳細に覗き込むことはできませんが、このように球体の位置がフィルラントの上空にある形ですのでかなり遠くまでの空の様子なら見られます。地図の示す、フィルラント王国の国土の範囲なら視点を移動もできますよ」

「ほう・・・」

そして、とテストッタが別の文字盤に触れる。すると、投写された風景の色彩が一瞬で大きく変化した。陸地が消え、雲だけが青く表示されている。更にテストッタが文字盤に触れると、その動きが巻き戻されたり現在の時点まで早送りされたりした。

「記録もできるのか。色が違うのは強調しているのだな。風速や風向も見ろのか」

「ご名答です。色は温度も表していて、この青は平時の雲の温度ですな。雨雲など冷えた雲は、より青が深く黒っぽくなります」

はあー、と一同がため息を吐いた。

これほど精巧であり、かつ多彩な機能を実用的な運用形式で実現する術導機は滅多にあるまい。リエルはこの気象観測局という部署がいまいち重要視もされず軽視される傾向があるのが不思議でなかった。

「他の国は、これは？」

「いいえ陛下、このフィルラントだけのようです。なにぶん作られて千年以上経つ術導機ですし、再現して製造することは可能ですが、金額が相応のものになるので・・・」

「おいくらほどなのですか？」

「ええと、試算では確か、トルプ金貨7000枚ほどです。気安くは作れますまい」

『7000枚!？』

「高いのかね？」

ムルエルファスだけが貨幣価値を知らず、きよとんとした。説明しておこう。

フィルラント王国のあるヤヌアフ大陸では、複数の国家間で共通の通貨が用いられている。種類は三つ。セス木貨、フィル銀貨、トルプ金貨である。この内フィル銀貨はここ、フィルラント王国で製造管理が行われている。

セス木貨はセス教の管理下で作られる木製の硬貨で、よく乾燥させた櫟を型でくり抜き、教会の洗礼の炎と煙で燻して速乾性のかかわで固めたもの。偽造は容易だが、洗礼を受けたものを汚すと「神の目が閉じる」と言い、幸福を逃すとされている。それ以前に木貨の偽造は普通は赤字が発生する仕組みになっていたため、やはり行わないもの。最低価値の硬貨であり、1枚あたりでパン一つほどの価値になる。

フィル銀貨は1枚がおよそセス木貨100枚に相当。先述したようにフィルラント王国で製造される。教会と王国術士の共同で洗礼と秘術の刻印が施されており、偽造防止の機能を持つと同時に軽い魔除けの作用を持つと言われる。

そしてトルプ金貨は1枚がおよそフィル銀貨20枚に相当。金貨1枚は一般市民の給金でほぼ一ヶ月分に値する。

フィルラントの隣国トルパトルで製造される、恐ろしく精緻な装飾を持つ金貨。1枚あたりの重量もほぼ誤差無く完全に均一になっており、その偽造の困難さから通貨として最上の信頼性を持つ。装飾は製造された期間内の王の肖像であり、これによって製造時期が容易に判別できるようになっている。

7000枚の金貨とえば、一般市民の平均的な給金の7000ヶ月分に相当するわけで、換算すると600年分ほどの給金に匹敵する計算になる。はっきり言って非常識に高額な数字である。

なお、蛇足ながら付け加えると、これほど高額の通貨を財布に入れて持ち歩く者は通常居らず、代わりに国立銀行が発行する為替が高額取引の際には一般的に活用される。富裕層の者でも金貨を所持する者はほとんど居ないという。

「おお……高いな」

「それは・・・ちよつと、簡単には作れないですね・・・」

「打診されることもあるようですが、費用に効果がさほど見合わないのですよ。トルパトルが導入しようとして金額を聞き、逆に怒って諦めたという逸話もあるほどです」

「代替素材で作れないのでしょうか。これは何でできてるのですか？」

見た目は水晶のようだが、その実は金属の塊。掘り出して鑄潰して成型するだけなら、それほど高額になるだろうか。

「秘術の挿入や構築期間が長いというのがありますが、素材は赤晶銀だそうです」

『赤晶銀！？』

今度はムルエルファスも一同と同じく驚きの声を上げた。

説明しておこう。

赤晶銀とは非常に採掘量の少ない希少金属で、名の通り赤みを帯びた金属である。金属としての性質が銀に似るため、こう名付けられたとされている。

最たる性質は、霊力との親和性が極めて高いこと。つまり、秘術の媒質として有効なのだ。これは術導機の基幹素材として非常に有用であることを意味している。

一般に、そこらにある鉄で作った術導機よりも、この赤晶銀で作ったものの方が十倍以上の効率で作動すると言われている。

同時に装飾用の貴金属としても取引されるため価格の上昇に拍車がかかるわけだが、過去にはこの金属の鉱脈を巡って戦争が起きたという話すらあるのだ。それがこれほどの量で、惜しげもなく使われるとなれば、なるほど非常識だった。

「こんな量を・・・」

シュナが自分の着ている軽甲冑に触れる。先王シャルテから賜った秘術を織り込んだ甲冑は、まさにこの赤晶銀が各部に使われている。軽量化の秘術がかかった鎧は軽いが、価値を問うたことは無かった。聞けば恐れ多くなるだけだろうから。

「作られた当初は術導機の研究が今ほどでは無かった時代なのでしょうな。現代ほど赤晶銀も高価ではなかったからこそ、これだけの量を使うことができたのでしょう」

「はぁー・・・」

リエルは深くため息を吐いた。感心したか、あるいは呆けたか。今年のフィルラント王国の国家予算は、税収部分の概算では金貨3000枚ほど。先年までの税率はかなり高いとされるが、急に变えるのも難しいのでほぼそのまま引き継いでもその額となっている。数字だけ見ると分かり難いが、この国は現状でかなり貧しいのだ。国庫の貯蓄分と、貿易による収入を加えてもこの望遠球一つも作れない。

税金を払わない民が多いというのもあるが、大半は払えないと言うのが正しいだろう。

亡き父が遺した負債と、北部の復興。真綿で首を締めるような小さな搾取も積み重なれば巨大な歪みとなっている。国の中心に立って初めて見えた情勢を、こんな場で改めて見せられてリエルは眉尻を下げざるを得なかった。

「ふうん・・・ふむふむ。我々聖獣が自然界の声を聞き取る力を持つが、その模倣に近いものか。しかしこちらのほうが見た目も賑やかで面白いな。余の国にも一つ欲しいが、使う者が居らぬなあ」

もう少し東を、もう一度北を、視点を下げられないか、などとテストETTA局長に操作をさせてムルエルファスはつらつらと呟いていた。

北のシュエレー神山あたりを隈なく眺めているのは、やはり気になるのだろう。リエルもこの視点で見るのは新鮮だったので、ムルエルファスを抱えたまま覗き込んでいた。

「上から見ると一段と酷いな」

「そうですね・・・怪我をした人が居なくてよかったです」

「しかし、農牧地か。ふむ・・・急いでも今年の収穫は見込めまいな。備蓄はあるのかね？」

「ええ、一応。お野菜なんか難しいんですけど、食いつなぐ分はあるみたいです」

「ならばよからう。漁獲量は？」

「増やすように指示をするつもりです」

「北海は海獣が少ないのが幸いか。遠洋まで船を出せるな」

「お船は詳しいのですか？」

「人間と海は切っても切れぬものだ。海が無ければ湖や河だな。どれほど陸が飢えても、漁をすれば食い物にありつける。今も昔もそれは同じだろうと思うよ」

「そういうものですか」

長い経験から語る言葉に偽りはあるまい。有り難い訓示としてリエルはムルエルファスの言葉に耳を傾けた。

「天候の見通しはどうなっておる？」

「しばらくは晴れると予測しています。ただ、昨夜のような通り雨、通り雪は頻発するかと」

「雪解けは？」

「例年より遅れるはずです。気温が低いので
リエルが首を傾げた。

「具体的に、どのくらいの時期になるのでしょうか？」

答えようとしたテストッタ局長は顔を曇らせる。

「・・・例年と比較して、半月から一月ほど遅れる見通しです」

ハバトが眉を跳ね上げ、シュナとリエルは小さく、えっ、と声を上げた。ムルエルファスはこの国の収穫期を知らないので、真上にあるリエルの顔を見上げている。

「まずいのかね？」

「ええと・・・」

「耕作期の直前です、陛下。いえ、時期的に少し被るかもしれませ
ん」

春になってもフィルラントでは完全には雪が溶け切らない。耕作期は雪解けが終わる頃の、川の増水が治まりつつある時期に行われ

るのだが、この時期が遅れると秋の収穫期を過ぎて冬になってしまう。夏の野菜類はともかく、穀物の収穫は大打撃を受けることになるのだった。

ハバトは北部の農家の出だけに、この時期の重要性を身を持って知っている。一斉に種を巻き苗を植え、伸び始めた牧草地に冬越しさせた牛や豚などの家畜を放牧する耕作期は、毎年ほとんど同じ時期に来るものだった。たまに出遅れた農家などが居たが、彼らは大抵の場合秋や冬に収穫量を減らし、寒空の中出稼ぎに行くはめになる。その間、雪で埋まる北部の農村には一度も帰ることができない。「ふむ、なるほど大変だ。しかし、季節の問題となれば長い歴史のあるこの国のことだ。対策はあるのだろうか？」

「それが・・・あるにはあるのですが」

天候の問題なら、三千年の歴史を持つフィルラントのこと。確かに対策はある。

リエルは目の前の望遠球に触れた。

物質を透明化する秘術は、例えば布地などに使うこともできる。

これを用いて巨大な透明の幕屋を作り、その中で作物を育てることをフィルラントでは古くから行っていた。これを温屋栽培という。

温屋栽培は小規模な野菜の栽培などに使うのが一般的で、冬でも保温を行える幕屋の中に、更に透明な布地が日光を遮らず通すことで無理なく栽培ができる手法である。そして、稀に天候不順などの対策として国が巨大な温屋を建築させ、その中に田を敷くことで水温までも管理し冬でも稲作をすることがある。ただしこれで育つ麦はあまり肥えず、味が劣るため好まれない。

それでも、温屋栽培ができれば食べ物も困らないはずだった。

「透過布の保管庫は農村地帯の共同倉庫でしたので・・・その、埋まってしまうて」

「ああ・・・あの土の下か。今から作るのはどうなのだ？」

「透過布は植物の繊維の持つ霊力を使ってゆっくり透明にするものなので、完成まで時間がかかるのです。普通に布を透明にしたらだけ

だとすぐに元に戻ってしまいうので。それに、それだけ大きな布を作るのも大変なことですから」

「しかし、ならばどうするのだ」

リエルはしょんぼりとうなだれた。先日からこの問題ばかりが彼女を悩ませる。

「掘り起こすのはどうなのだ。屋内に保管しているなら、埋まってもそうそう損傷してはいまい？」

「そうなのですが・・・東の、クシャタラナト様のお許しが出ないのです」

「・・・・・・・・・・なに？」

散々議論したことだが、瓦礫を撤去して農地をもう一度作るには、大量の水が要る。そのためには川から水路を引いてこなければならず、その際に大量の泥水が下流に流れていくのは避けようが無いことだ。クシャタラナトに迷惑をかけないで済む方法は無い。

「運河を作りたいのですけど、そうすれば東の湖に泥水が入ってしまうのです。クシャタラナト様には先日の、シュエレー神山の一件でもご迷惑をかけてしまったので、これ以上無理を強いるのはできません。それで、でも、どうしたらいいのか・・・」

「待て、待ってくれ、クシャタラナト？居るのか、国境に」

ムルエルファスが食いついたのは別の部分だった。リエルはきよんとする。

「はあ、はい。居ますよ、クシャタラナト様」

「水竜の？」

「そう伺ってます。わたしは実際にお会いしたことがまだ無いのですから」

「・・・契約を結んで、何年ここに？」

「ええと、シュナさん、何年でしたっけ？」

「800年ほどだったかと、確か」

「・・・・・・・・・・」

「？」

ムルエルファスは唸り声を上げて、それきり黙った。顔を下に向けて何かぶつぶつ呟いている。端々から「こんな所に居たのか」など聞こえるが、どういうことなのだろう。

「あの、面識がおありなのです？ よろしければ後日、一緒に会いに行きませんか？」

「・・・直談判か」

「ええ。直接お伺いを立ててみようと思っていたので・・・」

それで許してくれなければ方策は尽きる。最後の手段のはずだが、ほとんど唯一の手段でもあるので仕方がない。

宰相ハンネルが日程を調整しているだろう。レアもリエルの健康状態を逐一チェックして、それも日程の検討に取り入れているはずだ。東の国境のある湖は、それくらい念を入れなければならないほど距離がある。小国とはいえ、そこその国土はあるのだ。

ムルエルファスが来てくれれば頼れるかもしれないが、それはしたくない。ただの客として同行してもらうつもりだが、どうなるだろう。そんなことをリエルが思っていると、当のムルエルファスがリエルの指をクチバシで軽くつついた。

「彼との対話を余も望もう。同行させてもらえるかね」

「・・・はい、もちろんです」

なるようになるかな、とリエルも腹をくくって息を吐いた。

ハバトが状況を知らないのでシュナにそれとなく聞き、表情を陰しくしている。テストッタ局長も事情を知らないが、彼なりに推測してリエルを慰めるように眉を下げていた。

ムルエルファスだけが、恐らく別のことを考えて押し黙る。

気象観測局の見学を終え、時刻はまだ夕刻にも少し遠い。

一行はそれから馬車に乗って東部市街地を移動し、ここからは本当にただの観光となった。

美味しそうな匂いがする店に立ち寄ってみれば、そこは学院の生徒が頻繁に利用するパン屋で、シュナが兵士を数人引き連れて馬車

を降りいくつかのパンを買って皆で食べたりました。

風光明媚とは言えない東部市街は王立学院を中心に成り立つため当然だが、それでもなかなか味のある風景だった。文具や学院で使用する精密機器などはこの辺りで製造するため、小さいがしっかりと営業し繁盛しているような工房や工場がそこかしこに見受けられる。

紙の製造もこの近辺で行われていると聞き、政府直轄で運営される製紙工場の見学もしてみた。

糊と樹木繊維と鉄の匂いが蒸気に乗って立ち込める工場で、ムルエルファスは嗅覚が鋭敏だと明かして苦悶の呻きを上げたため、慌ててリエルが連れ出すという一面もあった。そのため結局ムルエルファスは工場に入らず、外でシュナの胸に抱かれて大人しくしていた。シュナはシュナでムルエルファスの扱いに困りつつ、柔らかな羽毛を思わず撫で付けようとしてしまい慌てて手を引っ込めたりもして。

一日目はそんな風に過ぎて、終わった。

翌日からも国内の見学は続いた。

シュナの考えで、この遊覧はリエルの社会勉強も兼ねていたため一日目は東部市街、二日目は南部市街、三日目は西部、四日目は北部ときっちりした動きで一行は国内を巡る。

南部には何と言っても教会があり、華やかな上流階級の商人らが軒を連ねる大通りなど見た目も賑やかで、皆も退屈することは無かった。そして南部市街でシュナが懸念していたフォードムレフテ職人街という場所についてだが、治安もよろしくない地域なので紹介はほんの触り程度に収め、リエルが名残惜しむのをなだめて馬車はゆったりと走りまわった。

西にあるのは国府関連の施設ばかりで、公文書館や王立図書館な

どはリエルが特に喜んでいた。あれほど大量の紙の書物が保管されている場所は、諸国を比較してもフィルラントが有数と言えるだろう。多岐に渡る文書が保管された両施設で、リエルはムルエルファスのことも一時忘れてはしゃぎまわってしまい、一同に呆れられていた。

王立病院も西部である。国内の病院の元締めであり、千人近くの入院棟を持つ巨大な病院は壮観だった。中には医療関連の製品を製造する工場もあるというが、滅菌義務のある施設での見学は国王リエルでも簡単に許可が降りず、しかし彼女もムルエルファスもそれは当然だろうと納得して引き下がっていた。代わりに、と工場で作られた加工食品を何種類か土産に貰い、シュナは反応に困り妙な顔だった。保存性のいい乾燥パンや瓶詰め野菜は栄養価のみを考えられたもので、おやつ代わりになるほど味はよくないのだ。

病院の責任者、シャンドイン・ハルザッハとは城内で面識があり、リエルは多忙によって痩せこけた老齢の男性に丁寧な挨拶と、礼を述べた。一方のハルザッハ病院長は疲労した顔つきのまま、それでも満面の笑みでリエルを迎えてくれた。と、そこで補佐医師の女性に呼ばれて慌ただしくその場を辞してしまっただが、シュナによると病院長は非常に優れた外科医の腕を持ったため休まる時間が無いのだとか。

北部は、何度も述べたが軍関連の施設、そして軍人の家系が多く屋敷を構えるある種堅苦しい雰囲気のある市街。

シュナの実家に行ってみようかとリエルが言っていると、彼女は首をぶんぶん横に振ってこれを勘弁していただきたいと謝った。実家とは疎遠きみだそうで、リエルはご家族と仲良くしましょうね、と言ってシュナがしゅんとする場面もあった。何故かムルエルファスも軽く気落ちしていたが。

市街地そのものはほとんどが邸宅なので、主には城内にある軍事施設を回った。案内役は、フォガリ騎士団長。

なにかにつけて美しく伸びた赤毛をかき上げながらの案内に一行はうんざりしながら（リエルとムルエルファスはこれに対してほとんど無反応だった）、それでも兵团が準備していた軍事教練の模倣白兵戦や馬術戦などでは全員が目丸くして感動し、手を叩いて喜んだ。フォガリによれば普段はもつと地味らしい。どう違うのかとリエルが尋ねると、地味なほうが過酷です、とフォガリは笑って答える。

ムルエルファスがここ数日の寝所として使っている竜舎は遠慮し、一行は多くの馬を管理する馬舎にも行った。先日生まれたばかりという仔馬が三頭、これを見たリエルは思わず歓声を上げて駆け寄り、シュナも頬を上気させて仔馬に触りたそうにしていた。

遊覧の間、リエルとムルエルファスは多くの話をした。

それはただの雑談であったり、政治に関することであったり、リエルが知らぬ遠くの地の話であったり、聖獣にまつわる逸話であったり、ムルエルファスの過去の物語であったりと、本当に多くの内容だった。

リエルは必死にこれに耳を傾け、一言一句漏らさず聞いた。あまりに熱心に聞いてくれるので、ムルエルファスも時々照れたように翼をばたつかせて照れ隠しをすることもあった。

真面目な声音で話す時は、王としての気構えやあるべき姿、教訓などについてだった。

「国家というものは小さくまとまっているほうがよい。それは国土、国勢の両方に言える。版図を無理に拡げて良い結果があった試しは無い。何故なら国土が拡大し国勢が肥大化しすぎると、端から国は脆く崩れやすくなるからだ」

「人間は国を作ると、その中枢は必ず一つと定める。故に、中枢の目が行き届かぬ遠く、または見落としがちな足下に反発が生まれるのだな。そう、国は拡げられた分だけ反動が生じる。まとまろうとする動きが生まれる。これは少なくとも余が見てきた歴史において

確実に証明されている。例外は無かったよ」

リエルはふと思いついてムルエルファスに年齢を問うてみた。

ムルエルファスは笑って、一万あたりまでは覚えているのだがな、と言った。

「王とは何か。その答えが出ることは昔から今も、これから決して無い。しかし多くの結論は既に存在する」

「王とは孤高である。王以外の誰も王であってはならず、王が王以外であってはならない。その意味は己自身で考察し、探求していくがよろしかろう。どの王でも、最後にはそれを悟るものなのだからな」

「王と国は等しくあるのが正しい。王の一人は国家の重みと釣り合い、国家の重みは王のただ一人が支えるものである。その均衡がいつ如何なる時であっても釣り合っておれば国はそれでよい。あとは国もまた自ずと均衡を保つべく、王を支えるだろう」

「王は信頼し、信頼されねばならない。信頼を得るのは難しく、失うのは容易いものだ。信とは力足りうるもので、不信とは衰退の一因成り得る。不信の下に与えられた命令では不信をもって応えられるのみだが、果敢に信頼を求めて他者と通じるのがよいだろう」

「王は民に尽くし、民に尽くされねばならない。それは命を賭けるに値するかどうかだ。民のために命を張れるなら、きっと民は王のために命を張るものだ。・・・リエル陛下は、すでに民のために命を賭したな。その行動はいずれ必ずや報われるだろう」

「国家の誰もが諦めても、王だけは諦めてはならない。国土に最後まで、最期まで立ち残り続けねばならない。民の最後の一人までも守らねばならない。何故なら、国には王が必要であり、王には国が必要であるからだ」

それが王である。そうムルエルファスは語った。

ただし、と彼は言う。ただし、それでも王を語り尽くせぬ。訓戒としては一部だが、足しになればよいだろう、と。

リエルはただ頷き、言葉に感謝し、様々を想った。

偉大な王という手本を眼前に、いや胸中に抱き、多くを学ぼうと。

そして、東の国境へ訪れる日になった。

第二話・「霸道のススメ」

執務室から通じるリィエルの寝室は、元々は先代の王までが書架などで利用していた小ぢんまりとした部屋である。とはいえリィエルの生家と比べてもやや広いほどの面積はあるのだが。

朝。リィエルは趣味のよい小さなベッドの上でむっくりと起き上がった。

「……………ん……………」

くしくしと目を擦って、ぼんやりとした眼差しを宙に向ける。

「おはようございます、陛下」

「……………ふぁ……………おはようござ……………まふ……………」

顔を洗う水を持ってきたレアに声をかけられるが、リィエルはまだぼんやりしている。

リィエルは、親譲りと思われる美しい金髪を持っていた。しかしこの髪、幼い頃から彼女自身も悩まされていたが、強いくせ毛である。湿度が上がると好き勝手に踊り跳ね、毎朝の寝ぐせも酷い。髪質が柔らかいのが救いで、頑張って櫛で撫で付ければなんとかまとまってくれる。

もっさりと増量したような寝ぐせのまま、リィエルはレアに手を取られてベッドから降りた。ふらりとおぼつかない足取りで。

「顔を洗って目を覚ましてくださいませ。今日は東の国境へ行く日ですよ」

「んう……………はぁ……………」

普段の理知的な態度は何処へやら。あどけない返事にレアは微笑んだ。

昨晚遅くまで（といっても大人にとっての遅く、よりは早く）、リィエルは宰相エンデル、騎士団長フォガリ、親衛隊長シュナ、侍従長レア、それに外務長官ウィバル・ランデミス、ラタレイ国土大

臣も交えて今日のことと話し合っていた。

国境に位置する湖の向こうは、東の隣国トルパトルの国境の手前に広がる無国籍地帯。とはいえ、国境の聖獣との対話は例え平和的な会話であっても他国への影響がある。国に程近い場所で王が聖獣と対話するという出来事そのものが諸国の動揺を招くのだ。

通達に関しては外務長官のウィバルに一任された。遠隔念話を行う秘術士が外務庁には専属で居り、他国との距離を無視した会話が可能となっている。当然、念話であるということで無言での会話なので、良からぬ企みをする者があってはいけないという理由からこの念話は別の秘術士が似たような種類の術を用いて傍聴し、記録に残る。

「細大漏らさず話してよいものでしょうか？」

「隠す必要ありませんから」

「ムルエルファス様のことは？」

「そうですねえ、話してもよいと思います。いずれお隣りも知るところだと思いますから」

「それもそうですな。では、仰せの通りに」

ということで、トルパトルは後日この通達を受け取って大いに動揺したという。当のフィルラント王国がのんびりしているので、その内に納得するしか無く沈静化した。

リエルの体調に関することでレアは最後まで渋っていたが、当人が不可欠な事案なので強く言うので押し切られる形で了承していた。そもそも、最近になって周囲もレアは少々過保護すぎるのではないかと言われていたので、レア自身もどこかで区切りを求めているのだろう。

「万全の救護体制を整えておくぐらいはご了承くださいまし」

「あの・・・いえ、よろしく願いますね」

「それと医師の同行も。明日の着衣に関しても指示させていただきます」

「はあ」

「それから恐らく昼食は現地で摂ることになりますが、緊急時に備えて多めに・・・」

『コーツハイン侍従長』

と、一同からの突っ込みの声が無ければレアはいつまでもくどくどとリエルの健康管理の話題を続けただろう。

結局、数人の意見をすり合わせてリエルの意見も尊重され、医師の同行に代わって軍医が護衛部隊に参加。食料は必要分、着衣は本人も好きに選ぶこととして決定した。これもレアは最後まで渋っていたが。

他に決めたことと言えば、フォガリ騎士団長とエンデル宰相がそれぞれ兵隊をどれだけ編成して護衛に付かせるか、など。それほど大規模な編成を組む必要は無く、しかし国境付近まで遠出するということでそれなりの人員を揃えることになり、二人して唸り声を上げていた。これは最終的に50名ほどの兵士を親衛隊長の指揮下に臨時編入させることになった。親衛隊は全員が護衛のため出動することになっている。

ムルエルファス王に関してどのように扱うかは結局ほとんど保留のような形になってしまった。そもそも彼に対して行動を強制するわけにもいかず、それ以前に彼なら妙なことはしないだろうし、そもそも客分でもあるし、での保留である。これについて皆はどうすべきかという案そのものが出てこず、リエルの「ムルエルファス様に任せましょう」という一言で決定である。他にどうしようもあるまい。

そんな話し合いが夜更けまで続けられ、連日の国内遊覧もあって疲れていたリエルは会議の最後、執務室の机に突っ伏して倒れるように寝入ってしまった。慌ててレアが彼女を寝室へ連れて行き、会議はそこで打ち切られた。決めることはほぼ全て決定しているのが問題も無い。

後は、当日のクシャタラナトとの対話次第。

寝室から執務室を挟んでもう一部屋、リエル専用の衣装部屋がある。が、衣装がしまっており大きな箱やクローゼットは部屋の半分ほどで、残る半分はリエルが家から持ってきた私物など。秘術の実験器具などは高価であり換えが利くものも少ないのでこうして実家から持ち込んで保管してあるが、レアはリエルが今日着る服を選びに来てはため息を吐いた。

「もうちょっと、衣装を増やしましょうね」

「ええ？ そんなに必要ないと思うんですけど・・・」

「そうはいきません。いつも同じ服を着ていると、民からは何事かと思われるものです。それに外交の場でも、陛下は派手な服はお嫌かもしれません。それなりに着飾っていただかないと」

「そういうものなのでしょうか・・・」

綿のネグリジェも部屋履きも、リエルが生家で着ていたものは比べ物にならないほど高価な品だった。敢えて金額を聞かずとも、この着心地の良さだけで判別がつく。やっぱり王族などの人々は着るものから違うんだな、と登城した頃は思ったものだ。

多少着慣れてきても、リエルにはまだ不相応という考えが残っていた。質素でも暮らしていければよいという、母との生活。あの頃を思い出しても不幸だと感じたことなど一度も無かった。飢えたり貧しいのは嫌だな、とは思っけれど。

「トルパトル国との間はずっと広く平原が続いているのはご存知です。ね？」

「はい、知ってます」

「風を遮るものが何もないので、湖の辺りは特に冷たい強い風が吹きます。今日は確かに着飾っていただかなくても結構ですが、防寒着としていつもより多く重ね着していきましょう」

「それなら・・・はい、そうします」

レアがしめた、という顔をした。

リエルはしまった、という顔になった。

寒いフィルラント王国ならではの。この国では特に外套にこだわる者が多く、コートなどは他国に比べても優れた機能、デザインで知られる。

結果リエルは防寒着と称したレアによって、礼服としても用いる厚手のドレス、同じく手袋、帽子はもとよりストール、長靴下までしっかり着せられ、コートに至っては最上級の絹と子羊の羊毛で編みこまれた恐ろしく高価な品物を持って来られてしまった。

嫌と言おうにも了承してしまっている。派手ではないのが救いだろうか。

「これ、あの、レアさん・・・？」

金糸の刺繍とアクセントに小さな宝石類があしらわれた、ある意味これ以上無いほど華美な代物である。派手なものよりこういった地味な柄のものの方が遥かに高級であることが多いとリエルが悟ったのは今の境遇になってから。これ一着で一般庶民なら家一軒が買える金額だとメイドの誰かが言うのを聞いて、リエルは恐怖のあまり部屋の隅まで後ずさりしたものだっただ。

「どうです、温かいでしょう。古いものですが丁寧に保管されていたもので新品同様に保たれているはずですし、誰に見せても恥ずかしくない一品です。これを着て行きましょう」

そんな、とリエルは小さく悲鳴をあげた。だがレアはこの上ないほどに満足そうにしており、リエルの意見が聞き届けられそうな気配など皆無である。

「汚したらどうすれば・・・」

「汚さないようにしましょう。多少の汚れなら落とせますし、陛下の御物なのでそもそも汚そうがどうしようがお好きなように」

「ええと・・・そう言われても・・・」

と、そこがチャリと音を立てて執務室のドアが開いた。

サエラである。片手に銀の盆を持ち、湯気のたつ紅茶を持ってきたらしい。

「おはようございまあ・・・っと!？」

「わあ!？」

もしかしてこの二人、わざとやっているのか。そう思わずには居られないほどわざとらしい事態。

サエラが紅茶のポットとカップ一式を片手に載せたまま足をつまずかせ、リエルの方へよろめいたのだ。紅茶のシミが落ち難いのはリエルも最近になって知ったこと。そして今、シミ一つ無い高価な衣服をリエルは着ている。

何故今日に限ってサエラは丸盆一つで飲み物を持ってきたのか。というか何故サエラが飲み物を持ってきたのか。いやそれ以前に、普段ならサエラは寝坊したとかでもう少し遅い時間まで顔を見せないのに、何故今日に限って早起きしているんだろうか。そんな思考が一瞬の内にリエルの脳裏を駆け抜けていた。

「アル・ベルテル・エイン・イラ!」

リエルが叫んだ。途端、倒れそうになっていたサエラの体がまるで時間を止めたかのように停止してしまったではないか。

サエラの驚いたような表情もそのまま、ぴたりと動かなくなった。

「これは・・・」

レアが驚きリエルを見ると、彼女はしかし慌てふためいていた。

「あっ、だ、駄目です間違えました!」

「えっ?」

「レアさん、お盆を押さえてください!」

「はっ、はい!」

言われるままにレアが駆け寄り、空中に静止した銀の盆を掴む。上に乗った紅茶までもが停止しており、レアが掴んでも固定されたようにびくともしない。触れてみても、銀の冷えた感触すら無かった。

一方でリエルは自分の体をつっかえ棒のようにしてサエラの胸元あたりに潜り込ませ、うんしょ、と力を込めてその体を押し返しているようだった。何をしようとしているのかレアが問おうとした

が、その前にリエルは鬼気迫る表情で叫ぶ。

「いきますよ！」

「えっ？はい！」

「オルート！」

何が起こるのか、レアは少ばかり好奇心で期待してしまったことを直後に後悔した。

しっかりと掴んでいたはずの銀の盆だったが、リエルが秘術の公式を唱えた直後、本来の落下速度に増して鉄塊でも乗せたかのような重量と勢いをもってレアの手にのしかかってきたのだ。余りにも急激な変化にレアは体が予測しきれず、思わず足を滑らせた。

「きゃあっ！？」

「わ、ああああああっ！？」

隣ではサエラが再び動き始め・・・いや、静止する直前よりも加速してリエルを押しつぶすように倒れこんでいた。そしてその光景を見ながらレアもまた。

がしゃん、どたん、と大きな音がリエルの執務室に響き渡った。

ごめんなさいと何度も言うリエルの半泣きながらの説明によると、あれは物体に流れる時間を”堰き止める”秘術だとのこと。押し留められた時間は「オルート」つまり再動を意味する単語によって解放され、一気に流れ始める。結果、静止していた時間に比例して物体の時間は一時的に爆発的に加速してしまうという理屈。

熱い紅茶をかぶったレアは体を拭きながら、サエラを介抱するリエルの口から聞いて納得するしかなかった。サエラはいえばまだ気絶しており、リエルが彼女の額に冷たく濡らした布巾を乗せたりしている。場所はリエルのベッド。

あの瞬間にリエルが「間違えた」と言ったのは、つまりこの秘術は本来生物に対して使ってはならないものだったからだ。非生物の剛体に対してのみ使うべき時間停止の秘術は、サエラの時間を加速させた。この結果、サエラの体を巡る血流などの速度も一時的に

増加。一瞬とはいえ体中で起こった血圧の異常で、サエラは伸びてしまったのである。

一歩間違えば危なかったです、とリエルが言うのでレアも調子に乗ったことを少々後悔していた。

「ううーん……あれ……？」

「あ、サエラ……」

寝ていたのはほんの数分。サエラは目を覚まして、自分の置かれた状況を把握しようとしているようだった。

「ええと……どうなったんでしょうか、私。なんでリエル様は泣いてるんです？」

「あの、あの、ごめんなさいサエラ。体は大丈夫ですか。どこかおかしいところ無いですか？」

「へっ？ いえ別に……あれ？ いえ。ああ、なんかちょっと目まいみたいな感覚がありますね」

「や、やっぱり！ 寝てくださいサエラ、安静にしないと……！」
「うええ！？ いやなん……だっ、大丈夫ですし！ ということな
んですか！？」

あわわ、とリエルが青ざめてサエラを無理やり寝かしつけようとするが、逆にサエラは慌てて起きようとするので妙な押し合いがベッドの上で発生していた。その様子を眺めながらレアが一言。

「とりあえずサエラ、陛下の言うとおりにしばらく休んでいなさい。

それと陛下、先程は申し訳ありませんでした。でもそのコートは着
ていてくださいましね」

「……レアさんはちょっといじわるですね」

「そういう職務ですので」

珍しく反抗的なリエルに対しても動じないレアであった。

馬車が城門をくぐったのは昼より少し前。城下を走る馬車ではなく、舗装されていない道を行くための頑強な旅馬車である。

護衛の兵団を率いて集団の先頭で馬を走らせるのは騎士団長フォガリと、親衛隊長シュナ。馬術に長けたシュナにもぴったり馬の歩調を合わせるのは、流石の騎士団長と言えよう。

あまり大げさな編成をしなかったつもりだったが、振り返って見ればかなりの大人数になってしまっていた。これを指揮して移動するのは難しいか、とシュナは胸の内のため息を吐く。

「天氣に恵まれてよかった。湖あたりは風が吹くと荒れるからね」
「ええ、まったく」

のんびりと気持よさそうにフォガリが言う。確かに、こんなに天氣も良く暖かい日は何日ぶりだろうか。春はもう目の前まで来ている。

しかし、目の前まで来られても困るのだ。本格的に暖かくなると雪解け水が一気に増えてしまい、計画している工事にも影響する。時期としては本当にぎりぎりになっているのだ。

市民に見送られながら、馬車の一団は市街地を抜けて草原へ。ここからは少々道が荒れるため、シュナはフォガリに断って馬を後ろへ下がらせた。途中で会釈を送る兵の列の中にはゼルガ・ハバトの姿もある。

馬車の速度に合わせて並走し、コンコンと窓をノックした。小奇麗なレースのカーテンがちらりと動く。

「陛下、揺れますが大丈夫ですか」

問いかけると、馬車の窓が開いた。中に乗るのはリエルとムルエルファス、レアの三名。座席も用意してあるのだが、相変わらずムルエルファスはリエルの腕の中に居た。

「はい、大丈夫です。お気遣いありがとうございます、シュナさん」
日差しに目を細めてリエルは答える。

あんなに厚着をして大丈夫だろうか、と出発前にシュナはレアに聞いてみた。返答は「着けばそうも言っていられないでしょう?」
と。それもそうかとシュナが納得したのも当然、本当に東の平原は風が強く、身を冷やす。

ところでレアの着ている外出用の服が妙に新しいものだがどうしたのか、と言うとレアは少しムツとしたように眉を曲げていた。これこれこういう事情よ、と大雑把に聞いたところでシュナは可笑しくなって爆笑し、近くに居たサエラにも笑われてレアは更に眉間に皺を寄せていた。

「この先は緩やかな坂道が続いて、それから平地へ出ます。少々速度が出ますのでお気をつけてください」

「はい」

につこりとリエルの笑顔。つられて微笑みながらシュナは再び馬を先へ進めた。

「なかなか絵になる女性だな、親衛隊長は」

「そうなのですか？」

「後で彼女に伝えておきましょう。きっと喜びますわ」

馬車内。ムルエルファスは閉じた窓の向こうを見たまま、ぽつりと呟いた。

ニワトリなのに人間の女性の魅力について理解しているのかしら、とレアは遠い目をする。

「いい天気ですねー・・・」

「左様であるなあ」

ゆるゆると馬車の速度が上がり、景色は流れていく。

日差しに照らされて馬車は少し蒸し暑かったが、レアが小さく窓を開けると涼しい風が吹きこんできた。ただし、まだ少し風の方が冷たい。

たまにがたと音を立てて大きく馬車が揺れたが、そのたびにリエルの小さな体は座席から浮き上がるのでレアは気が気でない。一方で当のリエルとムルエルファスは面白がっており、二人して笑っていた。

からからから・・・がたん、からからからからその内に、徐々に馬車の速度が落ちてくる。平地に入ったらしい。

水平になると、今までの緩やかな坂道が急斜面だったような錯覚がある。リエルはまた窓の外を眺めた。

草原と言えるほど、まだまだ雪も残る平原は緑色ではない。しかし、一面が白く覆われていた数日前と比べると格段に緑地と地面の土の色が増えてきている。

ちらほらと花も咲いているのを見かけて、リエルは複雑そうな面持ちながら、それでもやはり喜んだ。どんな事態であれフィルラント王国に生きる者にとって春の到来は待望のものである。

「……………余の治めるユクティラという国は、豊穡の神ユクティラによって守護されている」

またムルエルファスがぼつりと呟いた。

「へえ……………」

「即ち、このイウスィーリアの北極点に位置する国でありながら、常春の気候なのだ。花は年中咲き乱れ、木々は実り、それは美しい土地だ。最初にあの土地を見つけた時、既に妖精の姿は無かった。だが、それでもあそこは妖精郷と冠するにふさわしい土地だったのだ」

「わあ、いいところなのですねぇ」

「うむ。素晴らしい土地だぞ」

翼の付け根をつつくムルエルファス。ほう、と息を吐く様はまるで人間の老紳士のようなだが、あまりにもその姿はニワトリでしかない。

「その樂園に八千年。余の王国は今も樂園のままだろうと思う。戦いも飢えも老いも無い国だ」

「はっせんねん……………」

窓の外を流れ始めた道沿いの並木を眺めつつ、ムルエルファスのしみじみと語られる言葉は続く。

八千年。この天体イウスィーリアにおいて最長の歴史を持つ国家、それこそがムルエルファス王に治められる獣の国ユクティラである。フィルラント王国の三千年と少しという歴史も、人間の作る国家の

中では史上二番目と非常に長い。が、やはり別格というものだろう。戦いも飢えも老いも無い国。

リエルがどれだけ想像しても決して人間には届かない国。

「老いも無いというのは言い過ぎかな。臣の聖獣たちはともかく、膝下に生きる多くの動物たちは普通に生まれ、生きて、老いて死んでいくのだから。ただ、余は幸運なことに彼らが国に対して不満を言う声を聞いたことが無い」

「それはすごいです」

「ふふん、すごいだろう？・・・これを八千年続けられたのだから、まだまだ大丈夫だろうな」

「・・・永遠の王国、ですね」

リエルの言葉に、ムルエルファスは少し黙った。考え込むように頭を下げ、しばしあってまたクチバシを開く。

「それこそが余の理想だ。永遠の国、なんと甘美な響きではないかね」

「ムルエルファス様なら叶う理想ではないのですか？」

八千年という遠大な年月ならば、人間にとってそれは永遠と言うに等しい。だが、寿命を持たない聖獣にとってはどうなのだろう。

少し考えて、やはり人間の主観としてリエルはそれも永遠に程近い年月ではないかと思った。

だが、ムルエルファスは自嘲気味な響きを声に含ませる。

「叶わぬ夢だから、理想と言うのだよ」

フィルラント王国、東方国境。

湖である。

冬はどこまでも白い平原に青い円。もやが立ち、寒い朝には凍結した空気中の水分が朝日に反射し煌き踊る。

秋は枯れた黄色い平原に青い円。風に流された紅葉が湖面に朱を^{あで}引き、一種の艶やかさが垣間見える。

夏は鮮やかな緑の平原に青い円。太陽の光を最も強く照り返す日々は、渡り鳥たちが翼を休めるためにある。

春。雪と緑の狭間の季節だけは、ただ静かな水面のみがこの湖の彩り。

『・・・・・・・・何用か』

青い、透明な水は自然にできあがるものではない。この湖の主が、己が住みやすいように水中の泥を押し分け、水草を管理し、魚たちが住まうのも端へ追いやり、そうして長い年月を経て出来上がった光景である。

空の色と水の色が溶け合わさって生まれる色は美しいが、それは拒絶の色でもあるのだ。

湖の主の名はクシャタラナト。

水竜クシャタラナト。

フィルラント王国東方国境の守護聖獣である。

「お初にお目にかかります」

『・・・・・・・・』

「わたしはフィルラント王国の主、リエル・タナック・フィルラントと申します」

『・・・・・・・・』

「本日はクシャタラナト様にお問い合わせがありがとうございました」

『・・・・・・・・』

「先日のシュエレー神山での崩落によって、山の斜面の農地が埋まってしまったのはご存知でしょうか」

『・・・・・・・・』

「これを復興させるため、どうしても水路を作る必要があるのです」

『・・・・・・・・』

「ですが、そのためには川を汚してしまうことになるのです」

「先日の崩落でも土砂が川に流れ込んだため、お怒りのことと存じます」

『・・・・・・・・・・』

「ですが、どうか工事の許しをいただきたいのです。土が川に入ってしまうことへの、許可を」

『・・・・・・・・・・』

「工事ができなければ我々は飢えてしまいます。国が立ちゆかなければクシャタラナト様にもご迷惑をおかけしてしまいます。憂慮する事態だけは避けたいのです。どうか、許しをいただけないでしょうか？」

呼びかけに応じ、水竜クシャタラナトは姿を表した。

美しい竜だった。水竜という種族は滅多に居るものではないが、聖獣ともなればその巨大さに見合うだけの体を持つのだろうか。全身は白いようであり、鋼のような黒光りする光沢も見える。鱗の一枚一枚はよく見れば微細な体毛の集合であり、水に濡れてまとまることで毛先が魚鱗の輪郭を描いている。それが細長い、蛇のような体を一面覆う。

背には大きなヒレがあった。広げれば体の太さよりも長いだろうか、鱗と同じ白と鋼の色の骨格は澄んだ透明な膜を支えている。同じようなヒレが頭部の周囲にも二枚。

角は無い。竜は総じて角か、それに準ずる骨格を頭部に持つものだがこの水竜の頭には見当たらない。代わりに、頭髮のように生えた無数の絨毛せんもうがあり、後頭部の両端から長く伸びて垂れていた。

牙も無い。口は川魚のようなクチバシに似た形状になっており、やはり先端も尖っている。

『・・・・・・・・・・』

鎌首をもたげて水面に突き出した体は蛇に似ていたが、総じてやはり魚のほうに雰囲気は近いだろう。

静かに、その目がリエルを見据えていた。

「・・・・・・・・・・」

『・・・・・・・・・・』

最初に一言を発して以来、彼はじっとリエルを見ているだけで

何も喋らない。何かを言いそうな雰囲気はあるのだが、それを待っているだけの時間はいつまでも続きそうに思えた。

『・・・・・・・・・・確かに、国が立ち行かなければ私も困るかもしれないね』

口は動いたように見えない。声だけが周囲に響き渡り聞こえた。声変わりを終える前の少年のような声。ただしそこに無邪気さなどとは無く、繊細な、まさしく澄んだ水のような声。

「川を汚してしまうことはどうしようもないのです。でも、なんとか最小限に抑えてみるようにはします」

水竜クシャタラナトの体は巨大で、鎌首をもたげて見下ろすためリエルは首が少々痛みはじめた。なにせ自分の背よりもずっと高いところに彼の顔があるのだ。半身でこれだから、全長はどれくらいだろう。アールカインよりずっと細い体だが、ずっと長いはずだ。剣呑な空気が流れていた。

リエルの周囲には王国軍、騎士団、親衛隊の兵士が総計1000人近くで布陣していた。ただし、一応この場では国家の守護聖獣との対話ということもあって形式はリエルを正面中央に配する儀礼的なもの。リエルの両隣にはシュナとフォガリが立つ。

クシャタラナトはこれら兵たちをちらりと見たようだった。

『・・・・・・・・国王にしては若い。歳はいくつになる』

「今年で十歳になりました」

『・・・・・・・・風のアールカインとは友と聞く。そのためか』

「はい？」

『・・・・・・・・この場で恐怖しておらぬのは、そなただけだな。子供と侮ることはできぬか』

ぎくり、と空気が揺れたような気配。兵士らに動揺が広がる。

淡々と語るクシャタラナトの眼差しは冷酷そのものの静けさを纏って兵士たちを睥睨していた。侮蔑にも似た眼光が、彼らの肝を射^{すく}める。やはりこの水竜との対話は穏便に済みそうに無い。

「あの、皆さん怖いのです？」

返答し辛いことを聞いてくれる、とシュナは答えに詰まり曖昧な苦笑とうめき声を出した。

「偽っても仕方がないので白状すると、そうですね。聖獣の方々を前にする機会はそうそうあるものではないですから」

言ったのはフォガリ。表面的にはあまり怖がっている様子は見受けられないが、本人が言うならそうなのだろう。

リエルは、なら、と言い置く。

「わたし一人では・・・うん、失礼ですから。頑張ってくださいね、皆さん」

「そんな身も蓋もない・・・」

威厳というものがある。リエルは他者に誇示するような王では無いが、王として聖獣と対峙するにあたって最低限示さなければならぬものがある。そのためにリエルは兵を侍らせることを受け入れたが、なるほど、アールカインと親しく話した自分は感じなかったが、やはりこの巨大な生命体である聖獣は畏怖の対象だったか。あっさりと居残ることを強制したリエルは、確かに聖獣との対話には慣れた様子だった。それでシュナたちも仕方あるまいと納得せざるを得ない。まさか王を残して自分たちが引き下がることなどできるはずもない。

『・・・許しと言ったな』

「はい」

『・・・これ以上、私に汚泥にまみれよと言うのか』

「はい、そういうことになります」

『はつきりとものを言う娘だ』

「それ以外に言葉が見当たりませんか」

『・・・必要があれば、私との契約も反故ほじにすると？』

「・・・はい？」

ふん、とクシャタラナトは鼻息を鳴らした。

契約とはどういうことだろうか。リエルは彼の反応を怪訝に思い振り返るが、シュナやフォガリも首を傾げている。

『八百年か。人間には長い時間なのだろうな。だが契約は契約だ。私の領域をこれ以上汚すことはそれに反する』

「ま、待ってください。どういふことなのでしょう、契約？その、わたしはその内容を知りません」

『・・・・・・浅はかな。よく調べもせずに来たか。ファイルント王国も底が知れるな』

「そんな・・・・」

水面に波紋が広がった。

クシャタラナトが身をよじり、リエルの方へ顔をぐいと寄せる。巨大な竜の顔面を目前に対峙しても、リエルはたじろがなかった。

『私はこの国境を守護するにあたり、この湖を譲り受けた。だが契約とはそれだけではない』

「・・・・・・」

『この湖を決して汚さぬこと。我が領域を何人たりとも汚すことあってはならぬと、私は時の王に要請した。これを王は承諾し、契約は成っている。対価として私は国境を守護しているのだ』

「あ・・・・・・」

もう一度、クシャタラナトはふんと鼻を鳴らした。嘲りの笑いを乗せて。

『領域は汚された。だが、あれは避け得ぬ事故だと見逃してやろうと思っていたところにこれだ。私との契約を一方的に破る王国を、私は一体これ以上どうやって守護すべきだろうか？信頼を裏切ったのはどちらだろうな』

リエルは呆然としていた。そんな契約があったことなど初耳だ。だがクシャタラナトがそう言うなら本当に存在する契約なのだろう。リエルは無理にでも納得するしかない。

アールカインと親しい彼女だからこそ知っていた。
聖獣は、嘘をつかないのだ。

『……湖を汚さなければならぬというなら仕方あるまい。私は契約を破棄してこの場の守護を辞めよう。そうすればお前たちも苦も無く工事とやらができるだろうな』

「まっ、待って！」

『何を待つ。これ以上の対話は時間の無駄だろう。お前たちも一刻を争う事態なら、こんな所に来ずにさっさと事を始めればいい。私はただ立ち去るのみだ』

「……っ！」

とんでもない事になってしまった。いや、そもそもクシヤタラナトはまともに対話に応じるつもりなど最初から無かったのだ。

こういう事態にリエルは弱い。他人を言いくるめたり、煙に巻く言い方はリエルが最も不得手とするところだ。先程のように、馬鹿正直にはつきりと物を言うのはリエルの長所でも短所でもある。

嘘をつかない聖獣に嘘をつけないリエル。このままではどう考えても話は平行線のままになるだろう。

言葉に窮したリエルを、クシヤタラナトはじつと見つめていた。だが、何も言えないで居るリエルに呆れたか、彼はまた鼻息を一つ残してゆっくりと湖の中へ戻ろうとし始めた。

『人間にしては、偽らぬ姿勢は美德だ。しかし、偽り騙りかた籠絡するのが人間というものだ』

「あ、あの……あの……」

『王よ、お前は人間としては未熟だったな』

「……」

青ざめたリエルを見据える目は、悔しいことに憐憫の色を浮かべていた。でも、哀れみと同情は違う。

せめて俯くまいと気丈にもリエルはクシヤタラナトを見据え返した。

交渉は決裂した。

聖獣は決別の意を示した。

予想した最悪の状況である。

ただし。

『リエル陛下のためにも、口は挟むまいと思っていたのだがな』

『・・・・・・！』

今は、彼が居る。

響く声にシュナは怪訝に思う。巨大鳥アールカインや目の前の水竜クシャタラナトがそうだったが、彼ら聖獣の言葉は空間に反響するような聞こえ方をしていた。だが、彼は違っていたように思ったものだが。

念話の一種だと今気づいた。超常の存在である聖獣は己の親しむ領域、即ち風や、水などと同調して、それら全てを通じて言葉を持つ。その発露したものが今まで聞こえていた彼らの声だった。

今にしてみれば、彼らは口を全く動かさずに喋っていたではないか。だが、彼は違っていた。

クチバシが動いて言葉を発するところを何度も見ている。普通にそうしているので、そういうものだと思っていた。

しかし、そして今、彼もまた空間に響く言葉を発している。

この違いが意味するところとは、つまり。

『領域から出て気配を絶つと姿も見えぬか？クシャタラナト、見違えたのは図体ばかりか』

『・・・・何故ここにおられる、ムルエルファス王』

『余が立つ場所をお前が指図するのか、クシャタラナト。余は己の立つ場所くらい己で決められるぞ』

『そういうことを言っているのではない！』

いつの間にか歩いて来ていたムルエルファスが、リエルの足下に立っていた。

足下と位置できようか。今や、リエルの目にそのニワトリはまさに聖獣そのものと映った。ならば彼の立つ場所はリエルの足下

などではない。その場所こそが、聖獣の王の座する場所。

『八百年を経ても変わらぬ、お前はまだ己の領域に閉じ込もって世を拗ねているのか』

『飄々《ひょうひょう》と世を弄ぶムルエルファス王に言われたくはない!』

『生まれて千五百年、たかだが八百年を隔てただけで口だけは生意気に育ったものだな』

『相も変わらず、よくもそこまで他者を見下せるものだ!』

『そう思っているのはお前だけだと知れい!このたわけが!』
明らかに異常な状況であることは疑いようもあるまい。

シュナは呆然と横を見た。すると、やはり呆然と立ち尽くしてこの状況を理解しようとしているフォガリ騎士団長が居る。

リィエルでさえ、ぽかん、と口を開けてこの様子を見ているしかないのだ。

聖獣同士が口喧嘩をしている、余りにも前代未聞すぎて誰も付いて来れない状況。兵士らも動揺を通り越してわけがわからず、ただシュナたちと同じように目を丸くして仰天している。

『だから!何故ここに居ると聞いている!』

『余が何処に居ようと余の勝手であらう!』

『それが王の言い草か!』

『違う!このムルエルファスの言い草だ!』

『っ・・・詭弁を・・・!』

言い争いだとか、激論とも形容し難い。やはりこれは口喧嘩と言いつつ表すのがしつくりくる。

はた、とリィエルが気をとりなおして割って入ろうと声をかけた。
「あの、あの、喧嘩はだめですよ。冷静になってくださいお二方も」

『黙っている人間!』

『お前の主君であらうッ!』

「あう・・・」

余計に話がこじれそうなので、リエルは大人しく引き下がった。というか、なんだろうこの状況。何故メルエルファスはこんなにも熱くなってクシャタラナトに対し激昂しているのか。よく分からないが、ともあれ先日まで、いや先刻までとは一変したメルエルファス王の様子は、何故だかりリエルの目に必死さを読み取らせた。伝えたい事があるのに伝えられず、もどかしそうにしているような雰囲気である。

「……………あのう、もしかしてお二方は肉親なのですか？親子、とか」

そんなまさか、とシュナが眉を潜めた。フォガリも苦笑している。『ああ、そうだ。この不肖の馬鹿息子の父親だよ、余は』

『誰が馬鹿だと言うのです、父上』

『名の半分をくれてやったのは身勝手な出奔を許すためではないぞ』
『恩義に思えとでも？かつてクシャタラナト・メルエルファスと名乗った我が父よ』

『……………たわけが』

そんなまさか、とシュナとフォガリが口をあんどりと開けた。思わずリエルがシュナの表情を見返してしまう程の驚愕の事実である。ざわつく兵士たちの間にも寸分違わぬ衝撃が走っていた。

「ええと……………あまり似ていないようですね？」

ムッ、とクシャタラナトが顔を顰めるのが見えた。一方のメルエルファスは何故か満足そうな面持ちだ。

『こやつは母親に似てな。あれも美しい龍だ』

『……………母上を見出した点においては父上を評価しましょう』

母親好きなのだろうか、この水竜は。

リエルだけが会話に付いていつていたが、後ろの大人たちはもう意味がさっぱり解らなかった。

ニワトリと龍でどうやって子を成したのだろう。まず第一にして最大の疑問が彼らの思考を苛んだ。

「なら、なおのこと喧嘩はダメですよ。仲良くしましょう」

『余はそうしたいと思っているのだが』

『気色の悪いことを！』

聖獣は嘘はつけないのだから、これは本心のはず。本心から、クシャタラナトはムルエルファスのことを嫌がっているということだろうか。

素直じゃない、だとか本心を明かさないとかは、聖獣に限って有り得ないはずなのだ。

だが、クシャタラナトの態度にリエルは不自然なものを感じていた。どうにもこの二体の聖獣は人間くさい様子を見せているせい、クシャタラナトの態度の裏には父王への敬愛が垣間見えてくる。言っていいものか。いや、やめておこう。

流石にリエルも他の家庭の事情に口出しはできない。果たしてこの二体の聖獣の関係を、単なる家庭と一言で言い切ってよいものかは別として。

それに不自然と言えばもう一つ。

わざとらしいと、感じていた。

「ムルエルファス様は、何をお考えなのです？クシャタラナト様に会いに来たのが本当の目的だったのではないのですか」

そう判断したリエルだが、どうやら雰囲気が違う。

嘘は付けなくとも、それは隠し事ができないという意味にはならない。

『目的の一つだとも。リエル陛下に会いに来たのも目的だったな』何かを隠して話している。それに気付いて、やっとリエルは少しだけ後ずさった。

何か、恐ろしいものを隠されている。

『ふう・・・まあ、ここまできて喧嘩ばかりしても仕方ないな。第一クシャタラナトと喧嘩など初めてやったぞ。いい体験をさせてもらった。礼を言うぞ、我が息子よ』

『大概に不遜な物言いを・・・しかし、本当に何が目的のですか、ムルエルファス王。あなたはいつもそうだ。民が混乱していても面

白がって事を面倒な方向へ持って行きたがる。結果だけは良いものにするから始末に負えない』

思い出すのは母、ミュシェ・タナックだった。

何かわからないことがあると、大抵それは秘術の勉強の間のことだったが、リエルが質問をすると決まってミュシェはいたずらっぽく笑っていたものだ。そして、決まってこう言う。

『さて、どうだろうなあ』

（さて、どうかしらね）

思い出せる限りで最初にあれを聞いたのは、リエルがまだ母の腰ほども身長がなかった頃のはず。5歳かそこらだったか。

今は理解している。いや、今ここで理解した。

あれは、余裕だ。親や年上というだけではない。自分の場合ならば秘術の、その先輩としての、豊富な経験から来る余裕。

ざわ、とリエルの背に粟立つものを感じた。

『……勘も鋭い。ますます見事だぞ、フィルラント王国の新王リエル・タナック・フィルラントよ。この数日で君を教授したつもりだったが、こちらが学ばされることすらあった。感謝しきれぬな』

クチバシを、斜めに上げて。

『クシャタラナト、我が息子よ。数多く産まれた我が子の中で唯一生まれながらに聖獣であった水竜クシャタラナトよ。お前は我が膝元、ユクティラから余に何も言わずに出奔しおったな？』

『……それが何だと言うのです』

笑みは、リエルが見たことのない表情となった。

悪ぶった、狡猾そうな笑みだ。

『我らユクティラの民の数少ない規範は何度も言い聞かせたはずだ。我々はその強大な存在と力故に、無用に世を混乱せしめることを避けるために、余の許し無く勝手にユクティラを出てはならないと。見よ、フィルラント王国はお前という存在に振り回されておる』

『それはこの者どもの責任でもありません』

『だから？だから何だ、クシャタラナト。それは余の断罪の鉄槌を回避する言い訳にはならぬ。これも言い聞かせたはずだ。たとえばお前であろうと、息子、妻、同胞らであろうと、最低限敷かれたユクティラの規範を破ることは、このムルエルファスが許さぬとな！』

『……あなたは、何を』

リィエルは振り向いた。シュナとフォガリ、後方にゼルガ・ハバトも居て、彼らはリィエルの真剣な表情に驚いている。

リィエルが口を開くのと、ムルエルファスが翼を広げたのは同時だった。

「に、逃げて！逃げてくださいみなさん！！」

『名の半分をも今は名乗ろう！クシャタラナト・ムルエルファスと！』

クシャタラナト・ムルエルファス。

秘術に用いる言語に即して訳するならば、意味は「断固たる決意の下に振り下ろされる鉄槌」となる。

今、その鉄槌は振り下ろされた。

音が。

あのシュエレー神山の崩落の際に聞いたものよりも更に巨大な爆音が。

空気を唸らせる轟音が。

大気を絶叫させる衝撃波が。

右から左へ突き抜けるように、信じがたいほどの大音響が静かな湖の上を駆け抜けた。

「……！！……っ、……っ！？」

耳がおかしい。きいーん、と耳鳴りが続いて何も聞こえない。

そして眼前、湖の上をクシャタラナトの巨躯が恐るべき速度で吹っ飛ばされていく。

きらきらと舞うのは水しぶきではない。クシャタラナトの体から

剥離した纖毛、鱗だ。血飛沫は無いようだが、水竜の胴体の一部に赤いものは確かに見える。

何が、トリィエルは横を見た。だが、そこに居たはずの派手な尾羽根のニワトリの姿が無い。

何処に、トリィエルは前方を見る。そして、異様なものを見た。

湖の水面を、盛大な水しぶきを跳ね上げて疾走する一羽のニワトリ。速度は馬などの比ではなく、まるで大砲の砲弾だ。

どうやって水面を足で歩けるのか、そもそもあの速度はどういうことなのか、今はそんなことを考えるよりも目の前の光景に唖然となる。

『ぐっ・・・ううっ、ち、父上っ！』

『フフハハハハアーツ！さあどうした、かかってこいクシャタラナト！』

耳鳴りが治ってくると、聞こえてきたのはムルエルファスの高らかな哄笑。そして荒れ狂う湖面の水しぶきの音。

水面が爆発した。いや、一瞬の後にそれはムルエルファスが水面を蹴った衝撃だと知る。

垂直に飛び上がったムルエルファスの小さな体が、クシャタラナの巨体の目の前まで上昇した。

『父上であろうと、私の領域でえっ！』

上昇速度が無くなり空中に停止したムルエルファスを、湖の中から大量の水流が蛇のように伸びて絡め取ろうと襲いかかる。クシャタラナトの領域、即ち水を司る彼の親しむ場にあつて、彼はまさに水を得た魚なのだ。

だが。

『コ、コ、コケエエ——ッ！！』

鳴いた。

ムルエルファスが、ニワトリの声で鳴いた。

鳴けたんだなあ、トリィエルはなんだか脱力感に襲われた気分でその光景を見ていた。

大気が高速で歪む。

水流がごとく粉碎され、同時にクシャタラナトの巨軀も何かの衝撃を受けて盛大にはじき飛ばされる。

見えない力、とリエルは小さく呟いた。

『例えユクティラの領土の外であろうと、罰は罰だ。余の仕置きはお前であろうと受けてもらう、クシャタラナト』

ムルエルファスはそのまま、つまり、空中に静止したまま大声で話している。羽ばたいているようには見えないので、やはり翼で飛んでいるわけではなさそうだ。となれば彼の能力によるものか。

リエルはニワトリ王の視線に射竦められる。

『そして、今はまだ国境の守護者であるならば、余の行動は即ち侵略に等しい。そうだな、リエル陛下』

上空から振りかかる声は距離を問わず、リエルの耳にもしっかりと聞こえる。聖獣としての力を発露したムルエルファスが、己の領域を介して話しかけてきているのだ。

「は……はい」

『クシャタラナト、お前がまだ守護聖獣である内にその職務を完遂してみせよ。そしてリエル陛下、いや、フィルラント国王陛下。余の矛先は貴君へも向けられようぞ!』

「あ、えっ!? そ、そんな!」

『君はよい王だ。それ故に学ばねばならぬ。王の義務とは田畑を見守り民を導くのみにあらず。民を守りてこそ国家の王たり得るということを。君が学ぶべき最後の一つ、即ちそれは』

「……!」

『戦争というもの!』

リエルの周辺、湖に近く湿った土と草が何らかの圧力によって軋み、めりめりと剥がれて浮き上がっていく。

本能的な死への恐怖がリエルを突き動かした。

「イラ・マハタヤー・アル・パッゼ!」

『クオツコココココ、コケ—— ツツ!』

はっ、とリエルは後ろを見た。まだ兵士が、シュナたちが居る。
「や、ヤトゥール！ヤトゥール！ヤトゥールっ！！」

薄く光る靄のような膜がリエルの目の前に生じる。霊力そのものを放出し、高密度に空気と絡めて構築された防護壁。

母から教わった時にはこのような使い方はしなかった。嵐が来た時に家を守ったり、秘術の実験に失敗して小さな爆発が起きるのを押さえ込むために使っていた。

ヤトゥール。大きく。言葉に応じて光の壁が更に更に巨大化する。そう、守るのは自分だけではない。今この場で皆を守れるのは自分だけだから、皆を守ることさえ考えねばならない。

じわりと押し寄せてきていた不可視の力の奔流が一挙に加速し、怒濤の勢いでリエルを飲み込んだ。

「陛下っ！」

「うくっ、ううううううっ！」

猛烈な勢いで土が巻き上がり地面が吹き飛んでいく光景の中、リエルの盾によって守られたその後方だけは風も無く無傷。ただ地面は先ほどから振動が続いている。

シュナが駆け寄る。また、リエルに託すしか無いのか。その悔恨は彼女をこの異常な事態への茫然自失から解き放った。

「に、げて・・・逃げて、シュナさん。みんなを連れて・・・！」

「駄目です！今度こそは陛下をお守りいたします！」

シュナの後悔をリエルは知っている。

息を整え、光の壁を安定させるとリエルは首だけで振り向いた。「いいえ、この場であのお方に立ち向かえるのはわたしだけでしょ。ですから、ならお願いがあります」

「なんです！？」

「杖を、一角馬の角を持って来れますか。あれがあれば・・・」

フォガリが近寄ってきていたが、そんな無茶な、と言う。

「城まで遠すぎます。それより、我々がどうにか陛下のお助けを」
だがシュナは遮った。

「了解しました。一時間で戻ります!」

「……い、ちじかんですか。あは、凄い。じゃあ、願いますねっ!」

「はい!」

馬車で四時間近く。城からこの国境まで、そこそこ急いで来た。しかしそれでもかなりの距離があるのに、往復で一時間と言いつくとはリエルにも予想外だった。だがシュナの目は本気だ。

フォガリもそんな馬鹿など漏らしていたが、言い切った以上彼女はやってくれるかもしれない。

駆け去るシュナを見送り、リエルはフォガリを呼んだ。

「シュナさんが戻るまで、なんとか持ちこたえてみます。騎士団長さんは、レアさんたちを。馬車のみなさんが心配です」

レアや付き添った数名の侍従たちは兵士ではない。この状況に対応できないのだ。いや、彼女らのことだから冷静さを欠かずに居てくれそうだが、彼女たちの護衛が必要だろう。

「しかし何をすれば。護衛と言っても」

「隙を見せたらあのムルエルファス様のことです。みなさんに襲いかかる可能性は十分に考えられます。ですから」

「!・・・承知しました!」

そうしてフォガリも走り去る。兵士を連れて後方の馬車の所まで移動するのを見届けて、リエルはふと遠くに立つ人影を見た。

ゼルガ・ハバトだ。他に弓兵と思しき兵士たちの姿が、それぞれ距離を空けてまばらに立つのが見える。いつの間に移動していたのか、彼らの立つ場所はムルエルファスの攻撃の余波も少なく無事らしい。だが、いつ巻き込まれるか。

逃げてと伝えたかったが、距離がある上にこの状況。まだ力の奔流は止まっていないのだ。どうにもならず、齒を食いしばって耐えるだけが続けるしかなかった。

それに、彼らのことだ。何か独自の策を持っているのかもしれない。

『準備は済んだかね。うむ、なかなか早い。よい働きをするな、君の臣は』

「・・・その言葉を後悔なさらぬように、ムルエルファス様」

『ふふっ、ふははは！幼きとは、やはり見られぬ！その貫禄、君はやはり素晴らしい！！』

光の壁にかかる負荷が消えた。だが終わりではない。

浮遊していたムルエルファスが、何も無い空中を蹴るように動いた。途端、またあの砲弾のような加速。

どういう原理の能力を持つのかを知る前に、彼の猛攻を防ぐ必要がある。あの圧倒的な存在感、そして圧倒的な自信と余裕。

打ち負かせるイメージが全く見えない。

誰も彼を止められない。

「ゲーメツゼー・ベオトローレーレ・アル・カフ」

焦りは禁物。母の言いつけはもう破らない。

「アंक マセトレガ マザガテオル」

礼拝するように大地に両手を置き、眼を閉じる。

見るのではなく想う。

聞くのではなく確信する。

秘術とは事象の再現であり創造ではない。

あるはずの事象を世界に思い起こさせる、その現象そのものを想起する感覚。

「ルーテ・イラ」

今や、リエルは確かに戦意を持った。

十歳の少女ながらも王であれば、戦への覚悟も芽生えるということか。

鮮烈なる赤い閃光が、少女の周囲で発生する。

「アル・ロンフォーン・マーザガトーレ」

『・・・！！』

異様な気配にムルエルファスが虚空を踏みしめる足を止めた。す、とゆっくりリエルは目を開き、立ち上がる。

土に汚れた両手を正面、ムルエルファスに向けて突き出して。

「……………」フォロソ」

先程のムルエルファスの一撃にも劣らぬ大音響が炸裂した。

リエルを中心に赤い光が迸り、その一点から一条の赤い光の線が伸びる。

そう、光だ。

ムルエルファスですら回避できない速度は、つまり光速に達しているものであるがため。

赤い光がムルエルファスの小さな体を確かに捉え、飲み込んだ。

直後、どこまでも伸びる遠大な赤の光が上空を貫き、高空の雲と衝突したのだろう、轟音を鳴り響かせた。

大気中の雲に命中した赤の光が水分を一瞬で霧散させ、爆発を起こしたのだ。

この赤い光は触れた全ての物体を気化させ蒸発させてしまう。いや、それ以上に粒子まで分解させてしまう性質を持つ。

神話に語られる魔獣の放った炎。その再現。

神の言葉の一つでは無く、あくまでこの地上で再現できる物理的な事象の一つである。かつてこの力を持った魔獣は、神々によって討伐されたという。それほど凶悪な性質を発揮する光。

人間の、リエルの秘術として再現した場合は、オリジナルと比較して効力は減衰しているはずだ。しかし、一体何十分の一まで威力が落ちているのかは知らずとも、この破壊力。

己の行為にリエルは思わず身震いした。

「……………」それでも、やっぱりムルエルファス様は耐えてしまわれるんですね」

震えは、自らの術への恐れだけでもなかったが。

クチバシを斜めに向けるムルエルファスの姿は、まだ空中に確かに存在していた。

『絶空の魔鳥ロンフォーンの力、大地を粉碎する光フォロソか。懐

かく、今も思い出すたび恐怖する。かの恐るべき邪悪なる獣よ』
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『神々の戦列に加わった日を今も覚えている。それでも苦戦したのだ。あの当時の群雄割拠は二度と訪れまい。余りにも奔放なる世界の荒ぶり。秩序無き世の終末の一つ。あの戦いも、今という時代の礎である』

怖い、という思いは先ほどからずっと消えない。そもそもリエルは争いごとを好まない。

だが後ろには皆がいる。王国の民が。

そして自分は王だ。

「今ですっ、クシャタラナト様！」

『言われずとも分かっている！』

『ぬうっ！？』

湖の彼方へ吹き飛ばされたクシャタラナトだったが、既に復帰し再び水流を操り始めていた。

リエルの秘術で多少はムルエルファスも体力を消耗しているはず。これを好機と見て。

そう、聖獣の能力は即ち秘術の本質と等しい。霊力を消耗するのだ。

霊力の消費はそのまま体力の消費に直結するから、リエルが放ったあの破壊力を受け止めて耐えたならばどれだけの体力を消費したか。例えそれが微々たる量でも、現にムルエルファスはほんの僅かに、焦りを見せた。

先ほどのような何本もの水流ではない。それらを束ねた、クシャタラナトの体よりも太い巨大な水の柱が二本、螺旋を描くようにうねってムルエルファスの小さな体目がけて突進していった。

今度は水流がはじけ飛ばない。防げなかったのだ。

『まだまだ！』

二本の水流がムルエルファスの体を挟みこんでぶつかり、衝撃で大気が鳴動する。それほどの威力に加え、クシャタラナトの水を操

る能力はまだ留まらない。

水流の両端が湖面から剥離し、衝突した一点を目がけて全ての水が収束していく。

「これが聖獣……」

リエルでも我が目を疑った。いや、リエルだからこそ、目の前で起こる事象の原理を理解して驚愕できた。

水流が空中の一点まで恐るべき圧力をもって凝固しはじめる。形作られるのは、莫大な量の水が常温の大気中にありながら凝結し固体と化した巨大な氷塊。

一体どれほどの水圧が加わればこんな真似ができるのか。

摂理を乗り越え、超越種とも呼ばれる聖獣の力。確かに彼らは常軌を逸した存在なのだ。

そして、その王と呼ばれる者であれば、それはどれほどの。

『……余裕か。おのれ、まだ遊ぶか』

「……どうでしょう、クシヤタラナト様」

『知るものか。あれに勝利し得た存在など、私はユクティラ神以外に知らぬ。それがどうやって勝利したのかすら想像もできぬ』

「うーん、それは困りましたね……」

氷塊を睨みつけるクシヤタラナトと、その傍まで駆け寄るリエル。

先程から湖の波しぶきでリエルは全身がずぶ濡れになってしまったのもあってか、彼女は自分が着ている服などもはや頓着せず水際に足を浸らせていた。寒さを感じない。感じている暇が無い。

そのリエルが妙にのんびりと言うので、クシヤタラナトは呆れたように傍らの少女の姿を見下ろした。

『何か考えがあるのか』

「いいえ、特にありません」

『そのわりにお前も余裕そうだ』

「強がりです。やせ我慢をしてるんです」

『……ふん』

小さな震えはクシャタラナトの目に見えただろうか。

彼から見ればリエルなど小さな蟻のようなものだろう。小さく、弱く、臆病な生き物の一匹に過ぎない。

だが、この少女はそれでも逃げ出さない。

「一角馬の角を取りに戻ってもらいました。あれがあればもう少しうまく秘術を使えます。それまで何とか耐えていただけますか」

『どれくらいだ』

「一時間です」

『・・・そんなものか。ふん、よいだろう。父上もその内に飽いてしまわれるだろうからな』

びし、と音を立てて氷塊にヒビが入る。

リエルは首を横に振った。

「そうは思えません」

『・・・私が私の父を語るよりも、お前は我が父に詳しいのか』

「どうでしょう。わたしは自分のお父さんも知らないものですから、詳しくはないでしょうね」

氷塊が揺れ、砕けた小さな破片が落ちる。

クシャタラナトは鼻息を鳴らした。

『ならば何故そう思った。父上は我らを皆殺しにするとでも言うのか。いや、父上のことだ、そう父上が言うなら本当にやるだろう。だが今は言質を取ってしまい』

「飽きたと言って教鞭を置く教師は居ないと思いますから」

『・・・人間の風習は知らぬ』

「うふふ」

ヒビが大きくなる。氷塊は今にも砕けそうだ。

リエルは表情を改め、空中に浮く氷を見据えた。

何故この少女がこれほど虚勢を張るのか、それが例えやせ我慢だとしても、その理由がクシャタラナトには分からなかった。

「ムルエルファス様の能力、クシャタラナト様はその正体をご存知

ですか？」

『いや、知らぬ。ユクティラには争いごともしなかつたためだろう。私の前で父上が力を振るう所をほとんど見た記憶が無い。ただ、漠然とその大きさは感じていた』

「そうですか」

氷塊のヒビに沿って、氷が砕け始める。砕けた氷は圧力を失っていくようで、即座にただの水に戻っていった。ただし、圧縮されていた水は体積をも戻し、その量はまるで滝のようだ。

「あれは、推測ですけど恐らく”力そのもの”です」

『………なに？』

「物理学の運動系の第一関数を制御する能力ということでしょうか。秘術においても非常に重要な関数です。これを支配するということは、確かにこの世の全てを支配することに近しいと思います」

こと学問的な言葉を発するにあたってリエルは雄弁である。その内容を誰が理解できなくとも。

あまり他人にものを教えるのは向いていないのが彼女の欠点の一つでもあった。

『意味がわからん』

「ええと……ええっと、つまり、ええと……」

『”力そのもの”だと？ふん、よく解らんが、つまり万能に等しい能力だということだな』

「はい……ああ、はい。そんな感じです」

『………やはりお前は人間としては少々未熟なようだ』

「うう、精進します」

『もういい。それより、水が碎ける。来るぞ』

ひどくのにびりと氷は砕けたものだ。

これも、彼の余裕なのだろう。あの力であれば瞬時に氷塊から脱出してのけることも容易いだろうに。

氷塊は今やただの水に戻り、全て湖に降り注いだ。

そして、羽毛の一本も濡れずに空中に佇む一羽のニワトリ。

『なかなか呼吸が合ってきたようじゃあないか！よいぞ、興が乗ってきたな！』

『興が乗っているのはあなただけだろう、ムルエルファス王』

「命がけです・・・」

いかにも悪そうな声音で、ムルエルファスは低く笑ってみせた。

『そうかね？先程のリエル陛下の秘術といい、なかなかだったぞ。ふうむ、それでも緊張感が足りぬと言うならこうしうか』

何気なく。

言葉も、仕草も、表情も、全て何気なく。

リエルの横を爆発的な速度の風が吹き抜ける。ムルエルファスの放った一撃が一直線に王都上空を貫き、雲に穴を開けた。

そして、聖獣の王はこともなげに言い放つ。

『次は当てる。言ったはずだ、これは戦争だ』

今、大気を切り裂いて駆け抜けた力場の塊はたとえ一発でも市街に命中すれば、その周囲もろとも広範囲を壊滅させるだろう。それほど力の発露を感じた。

「・・・・・・一体、何をお考えなのですか。国民のみなさんに罪はありません！」

『戦争に罪など無いとも。ただ勝者が残るのみ。敗者は消えて失せるのみだ』

しれっと言うムルエルファスには冗談めいた感情が見てとれない。本気だ。

『だから言ったはずだ。あの王はふざけた態度のままでも、本質は聖獣のそれそのものなのだ』

「・・・・・・で、でも」

何の予備動作も無く、ムルエルファスの体がふわりと落下し水面に足をつける。まるで固い地面を踏みしめるように、当たり前のように湖の水面に佇んでみせた。

『さて、ここからは言葉少なに参るぞ』

恐怖は消えない。

自分が死ぬのはもちろん怖いが、それは些細なもの。それより、家族が傷つけられるほうがずっと恐ろしい。

そして、皆を守りきれぬ自信が全く無いのだ。

『術を用意せよ。不本意ながら協力してやろう。お前との話はその後だ』

「クシャタラナト様・・・」

湖から一斉に水の球が生み出され、空中に泡のように漂い始める。そのどれもが膨大な水圧によって押し固められた水の砲弾。クシャタラナトはこれらを操り、ムルエルファスに真っ向から対峙した。リエルはそれを見て、俯いて、手を握って、口を固く結んで。持ちこたえると約束したから。

『決意したと見る。ならば、ゆくぞ。地上最強と謳われし聖獣の力、その目でその身でとくと体験するがいい！！』

ムルエルファスが水面を蹴った。

あの聖獣の王はどこまでも雄大である。力に際限を見い出せず、精神の豪胆さなどはいかなる生物の追従も許さないだろう。

あの余裕。

リエルの母、ミュシエ・タナックのように、後に続く者達へと手向けられる魂の偉大さ。

母は秘術士だった。いつも彼女にだけはかなわないと感じていた。それは彼女が母であるから、そして誇張無く一人の秘術士としても偉大であったから。

ならば聖獣の先達たるムルエルファスの余裕は、一体どれほどの高みに在るだろう。永遠に生きることをも可能とする生命体の持つ、己という存在への絶大な自信と能力への自負。

幼きと侮れぬとムルエルファスはリエルを評してくれた。だがそれはリエルも、彼女は他の者に比べて他者を外見で簡単に判断しないとはいえ、やはりムルエルファスの外観が小さなニワトリであるせいかどこかで侮った部分は確かにあった。

侮る、というのはリエルの場合表現としておかしいだろうか。

逆により不敬ではあるが、愛玩というか、小動物を愛でるような感覚を持ったことになる。否定はできない。

否定したくもなるが。

ムルエルファスの姿が消えた。いや、消えたように見えるほどの速度で動いた。

水面が爆発したように水しぶきを跳ね上げ、それと同等の規模の爆発が湖面の各所で次々に発生する。そして、直後に耳の鼓膜を強く叩く爆音。

音速を超えた疾走速度だと気づくまでリィエルは啞然としてしまっていた。むしろ気づいたからこそ啞然としたのかもしれない。

『とおうっ！』

次にムルエルファスの姿が見えた時、そのニワトリは水竜クシャタラナトの巨体に猛烈な速度で突進するところだった。体を回転させ、ねじり込むような動きで片足を突き出して肉薄する。

『！！』

どおんっ！という轟音を共に、小さなニワトリが巨大な水竜に強烈な蹴りをめり込ませていた。ただし威力は、ともに受けてしまったクシャタラナトの体が水面から完全に出て空中に浮き上がるほど。まるで隕石か何かが縦横無尽に駆け回るようだった。

だがクシャタラナトもさるもの。浮き上がった状態、苦痛に顔をしかめたまま、それでも水流の制御を手放さない。

『これしきっ！』

『フハハハハハハハ！』

籠がはずれたように爆笑し続けるムルエルファスを無数の水球が取り囲んでいた。クシャタラナトの操る澄み渡った青い水。

『お覚悟っ！』

『ぬるいわっ！』

水の砲弾が全方位からムルエルファスに殺到する。その一つ一つが必殺の破壊力を秘めた水球は、相手が見た目のままのニワトリで

あればその肉体を木っ端微塵に粉碎していたであろう。

だが、ムルエルファスには通用しない。

無数の水球はクシャタラナトの制御に従って無尽蔵に放たれるが、ムルエルファスの体に命中する直前に片っ端から破裂させられ、ただの水へと戻って落ちていく。湖面は雨が降るような光景になっていた。

クシャタラナトの巨体が水滴と共に落下していく。

『・・・・・・・・』

水面に着水する直前、彼の体を大量の水滴が取り囲んだ。それは集結すると巨大な水のクッションを作り、クシャタラナトの体を包んで落下速度を弱める。とはいえ、自在に水を操るといってもそのまま浮遊することはできない。水は地に溜まるもの。ゆっくりと、彼の体は湖に戻った。

そして再びあの水流の蛇が幾本も生み出され伸びる。

『・・・・・・・・あれは、何をしている？』

攻撃を緩めること無くクシャタラナトの視線は下へ。

リエルは湖の周囲を走っていた。

「エールテ・ミステル イルア・アンカトウー・エネ・アル・ハイク」

走る途中、少しだけ立ち止まる。

奇妙な光景だった。リエルが立ち止まった場所が、印をつけたようにぼう、と淡く発光しているのだ。よく見るとリエルが走ってきた足跡も、その一步一步が全て星のように光っている。

そしてまた走り始める。

「エールテ・エネ エールテ・エネ・・・・はふ、エールテ、エネ・・・・はあっ・・・・・・・・エールテ・エネ・・・・」

また立ち止まった。

「エールテ・エネ イルア・アンカトウー・ゼノ・アル・ハイク」
やはり印だ、とクシャタラナトは気づく。あの光で湖を囲んで何かするつもりらしい。

湖は広いがリエルの走る速さはなかなかのもので、それに走り慣れているのか安定している。

一周するまでに、およそ一時間ほどか。

『!.....ふん、なるほど』

あれを止めてはならない。そう気付いて、クシヤタラナトは水を操る力を一層深めた。

『何かするつもりのようなだが、さてさて.....』

『邪魔はさせぬ』

ムルエルファスも気づいたらしい。クチバシを斜めに傾けると、一転リエルに狙いを定めた。

だがクシヤタラナトは阻む。

水流の鋼の巨軀が滑らかに動き、ムルエルファスの体を取り巻くように形を作った。能力の制御は、聖獣にとって手足を動かすことに等しい。体からより近いほど精密に操れる。

水流、水球を手繰りムルエルファスにぶつける。その圧倒的な破壊の光景。

だが、遠い。

『コ、コケッ! コツケエエ——ッ! !』

一点への集中ではなく、球面全天へ向けられたムルエルファスの力の発露は、全ての水を吹き払う。止めど無く押し寄せる暴力的な水の奔流も、彼の力の前にはただただ呆気なかった。

『そうやって慢心するがいい。我が父上ムルエルファスよ、私とて聖獣なのだ』

力の発露が止まった瞬間、何かがムルエルファスの直上から高速で落下しその体に命中した。

『ぬぅおっ! ?』

雨のように小さく細い水滴だった。だが、やはりその内部には高い水圧によって閉じ込められた必殺の破壊力がある。それが矢のように次々と降り注ぎ始めた。

『やりおるわ!』

『お覚悟をと言った!』

『ふん! せいぜい手こずらせてみせよ!!』

『言われるまでも無い!』

ムルエルファスは、更にクチバシを斜めに傾ける。

ハッ、とクシヤタラナトが気づいた時にはもう遅い。小さなニワトリの姿は、水竜の眼前から瞬時の遠ざかった。

『フハハハハ! 後ろがお留守だぞ!』

『しまった!』

煽るだけ煽って、なんとムルエルファスはリエルがその場を離れたことで手薄になった後方、リエルの臣下の面々に狙いを定めたらしい。哄笑を上げて一羽の弾丸が平原に着地し、そのまま地を這うように疾走し始める。

状況を眺めていた人間たちにも緊張が走った。ついにこちらが狙われたか、と。

そして騎士団長セイル・フォガリが真っ向に立ちはだかる。

「私がお相手しましょう!」

『その意気やよし!』

リエルは信じた。任せると言ったのだ。

クシヤタラナトは首を伸ばし、水を操って追った。だが遅すぎる。いや、ムルエルファスが速すぎるのだ。

秘術も使わぬただの人間が、ムルエルファスの猛攻にどう耐えるというのか。

フォガリが抜剣する。白銀に煌く重厚な両刃の剣は、彼の淡麗な容姿に似合わぬ無骨な造り。それを軽々と右手に構え、左手には盾。いや、この場に盾を持ってきてはいなかったはず。矢面に立つ必要も合戦の準備もしていなかったのだから。

それは胸元から外した軽甲冑のプレートだった。これを皮の紐で腕に巻き付けて盾としている。即席の合戦装備だ。

元よりムルエルファスの攻撃に薄い甲冑程度でどうこうなるものでもない。ならば、と彼は戦術を構築した。

『クオツツケエエ——ッッ!』

ムルエルファスが吼える。放たれた目に見えぬ力の砲撃。フォガリは盾を正面、向かってやや斜めに角度をつけて構え、体の側面を前に、右手の剣も盾、体のラインに合わせて一直線になるよう独特な形の構えを作った。

後方には部下の兵士、侍従たちが居る。彼もまた護られるのではなく護る立場にある者。

長い赤毛を風圧になびかせて、腰を低く落とした。

「・・・っ、ぐっ!」

直後、目に見えぬ巨大な力の塊が彼の体に衝突する。

だが。

『おおっ!?!』

ムルエルファスが目を見張る。クシヤタラナトも遠くで驚いている。

耐えた。

「せっ・・・・・・えいっ!」

『なんと、耐えおるか!』

ねじ伏せるように左腕を強引に持ちこたえさせ、不可視の砲弾は盾の角度に沿ってフォガリの斜め後方に受け流される。着弾。爆発。赤毛が翻る。

ムルエルファスは勢いを止めず突貫する。

「でやあっ!」

『かああーっ!』

全身を捻って遠心力も加えた白刃は地をかすめ、ムルエルファスの移動線上にぴたりと照準を合わせられていた。この速度で狙いを定めるとは並大抵の技術ではあるまい。

完全にムルエルファスも回避不可能なタイミングだった。しかし、ならば避けなければいい。

剛剣がムルエルファスの体に衝突すると、ガキン!と音を立てて弾かれる。金属を叩いたような音にフォガリは一瞬だけ啞然とする

が、すぐに姿勢を改めるとムルエルファスの側面に移動する。

そうそうこの聖獣に並みの攻撃が届くはずもない。体表を守る力の渦は、常に防壁としてあらゆる攻撃を無力化する。剣が弾かれたのもそのせいだった。

『ふんぬ!』

「っ!」

ムルエルファスが飛び跳ねる。位置はフォガリの顔あたりの高さ。ざわり、と赤髪の騎士の背に寒気が走った。

フォガリが素早くステップを踏んで姿勢を低く、ムルエルファスの背後目がけて飛び込む。直後、彼が立っていた場所から直線状に遥か彼方までの地面が抉れ飛び、土埃が巻き上がる。

『貴公、本当に人間か!?!』

「でえい!」

フォガリの振り下ろした剣がムルエルファスの首あたりを打ち落とそうと接触するが、やはり防がれる。刃は羽毛の手前で静止し、それ以上びくとも動かない。が、フォガリは更に体を動かす。

剣を引き、左手の盾を前へ。

ムルエルファスがまた力の砲弾を撃ち出すが、盾をかすめたのみ。フォガリは既に体を屈ませていた。

盾は目眩まし。剣が突き上げられる。

『効かぬわ!』

ほとんど死角からの攻撃だったが、それでもフォガリの剣は無効化されてしまう。突きはムルエルファスの体を傷つけることなく、体表を滑らされて逸れる。

そしてまた直後。フォガリは転がるようにその場を離脱し横に避ける。ほぼ同時にムルエルファスの力が、彼の居た場所を打ち据えた。地面が沈下しクレーターのようになる。

距離が開いた。

『……見事だ。人の身でよくぞそこまで練り上げた。音にも聞こえぬが、貴公、本当に一体何者だ。余の攻撃を悉く避けると

は只者であろうはずもあるまい」

ここまでフォガリ騎士団長が見せた反射神経、体捌きは確実に人間離れしたものだった。恐るべき手練てだれと言う他無いものだ。

「自己紹介は二度目ですが、フィルラント王国、騎士団長セイル・フォガリと申します。それ以上でもそれ以下でもありませんとも」
そして、とフォガリは続ける。

「我が陛下も既に見破っておられたようだが、私も気づいたことがあります」

『……なんだね?』

「貴方のお力、”溜め”がありますね?連続して放つのは弱々しいようだ。呼吸のようなものだろうか」

『ほう、なるほど、言われてみればそうだな』

「接近して私を打ち負かせるとは思わないでいただきたい」

『そのようだ』

「後ろではクシャタラナト様が待ち構えている。どうされます」

『ふふん、では、こうしようか』

ムルエルファスが飛び上がり、フォガリと更に距離をとった。

「!」

『コココ……コッ、コッ……』

気合充溢じきあういつ。ムルエルファスを中心に異様な圧力にも似た気配が収束していく。

次の一撃は防げない。そうフォガリも判断できた。

だが、ここに戦いに臨む者はまだ居る。

「今です!」

『コ……コ?』

ぴゅうん、と何かが音を立てて高速で飛来した。

『うおおわあっ!?!』

飛翔体はムルエルファスの鼻先すれすれをかすめ、そのまま飛び去る。

『なんだ!……矢か!?!』

再び、音。

今度はメルエルファスはその音の正体を辿り、眼前で力を駆使して受け止めた。

『・・・これは、なんだ？』

矢じりに穴の空いた特殊な矢だった。これが飛翔する際に音を立てていたのか。

それにしてもどこから？

『先ほどの弓兵か。しかし、どこだ。姿も見えぬ』

探す内に再びあの音が聞こえた。だが、今度は簡単にはいかない。『正体が割ればこんなもの』

次々と矢は飛んでくる。だがもはやメルエルファスはそれに頓着もしない。何本かは命中したが、そのまま失速して地に落ちていく。余裕を取り戻したメルエルファス。だが、フォガリは笑った。

「さて、こんなもの、ですか。我々の弓兵は強力ですから」

『なんだと？』

その瞬間、一本の矢がメルエルファスの目の前を通過した。眼前を一瞬とはいえ急に塞がれ、メルエルファスはぎょっとしたように身を引く。

今度の矢は音が無かったのだ。

そして、またあの甲高い音が聞こえてくる。

矢を放つ者は見つからない。

『・・・まさか』

「聖獣との戦い方を心得ていないとでも思いか。いや、真相も定かでないものだが軍の記録にはある。聖獣の王の戯れだった、と。

貴方がこの国に伝えたのです」

聖獣として生物。本能的に危険を回避しようとする肉体の反射というものが存在するのだ。

眼前を矢がかすめれば、自然と身は強張る。

思い出した。

『ああ、確かにそんなことを・・・い、いや、よもや律儀に伝えて

いるだと？三千年も昔のことだぞ』

「人口の少ないフィルラントの中にあって三千年、弓兵は主戦力ですよ。彼らの研鑽けんさんは私とて及ばない」

『くうっ、おのれっ！』

ムルエルファスが空を蹴り、フォガリに飛びかかった。流石にこの高速の動きに対して矢を放つことはできまいと。

弾丸のような小さな体がフォガリの構えた盾目がけて飛び込む。正面から受ければフォガリの技巧といえど、片腕を負傷するくらいは見えている。だが、それでも構えは解かない。

『コケエエ——ッ！』

ムルエルファスの足がフォガリの盾に衝突した。フォガリが臂力を頼りに受け止め、ムルエルファスが力を頼りに押し込もうとする。この瞬間。

ひゅん、と。

『くおおっ！またか！鬱陶しい！！』

刹那の間隙を突く矢の軌道。こんな芸当、フォガリにはただ一人しか可能とする者を知らない。

「・・・ゼルガ、相変わらず見事だ」

体が勝手にびっくりしてしまう、その反射を利用した妨害によってムルエルファスは止む無くその場を離脱した。

フォガリの技巧は確かなものであり、加えてあの矢。まさか、人間の技術とはこれほど力頼みで突破できないものだとは思ってもみなかった。

『くうーっ！ならば、そこだ！』

再びムルエルファスは駆けた。次に狙うのは、リエル。彼女は今最も無防備に見える。

フォガリは追いつがろうとしたが、ムルエルファスはやはり速すぎた。伸ばした手の先、あっという間に小さなニワトリの姿は湖まで走り去ってしまう。

「ゼルガ！」

信頼する友は狙いを定めているはずだ。彼の弓が今は頼りだ。

応える声は無いが、届いているはず。フォガリは油断無く後退し、再度馬車団の護衛に戻った。

そして信頼といえ、もう一人も。

『コケツエエ——ッ!』

『届かぬ・・・王よ!』

クシャタラナトが焦って叫ぶ先には、ふうふうと息を吐いて走り続けるリエル。あまりにも無防備だった。

そう、あからさまに無防備だった。

少女が立ち止まり、振り向き、両手を揃えて突き出す。

見えないが、ムルエルファスの力の砲撃が迫っているはず。タイミングは何度も見てそろそろ分かってきた。

公式は既に暗唱してある。残るは起動術式のみ。

ここだ。

「アル・イナンドゥ・”ヨーネリ”!」

リエルの眼前上方、空中で何かが衝突し炸裂した。それはムルエルファスの放った力の塊であり、同時にリエルが構築した秘術の発露。

渦だ。極小の嵐のような、高速で蠢く空気の渦が、ムルエルファスの力を受け止め攪拌かくはんしている。

『なにいつ!?』

「・・・・・・・・・・よしっ、うまくいきました」

上手く術が起動したことを見届けると、リエルはそっぽを向いて再び走り始めた。

馬鹿な、とムルエルファスはおろかクシャタラナトも眩きを漏らす。

『怪猿イナンドゥの”渦”だとう!? 馬鹿な、どこまで広いのだ、リエル陛下の知識は!』

『信じられん・・・ムルエルファス王の力を真っ向から無力化したのだ?』

やがて空気の渦は消滅してしまったが、同時にムルエルファスの放った力の塊も消え失せてしまっていた。

全ては先を読むことだとリエルはそろそろ理解してきていた。如何なムルエルファスの強大な力とて、着実に先手を打って対処すれば防げないことはない。それを可能とするだけの知識がリエルにはある。

ただ、もう彼女も気づいている。ムルエルファスは明らかに手加減しているということを。

あの、クチバシを斜めに傾ける仕草がまた行われた。

『ふ、ふふ・・・ふっはっはっは！ よろしい、ならば残るは貴様だクシヤタラナト！ お前という一角を崩して戦況の流れを引き戻そう！』

『やってみせよ、傲慢なる覇鳥ムルエルファスよ。お前の息子はそうそう容易くは無いことを目に焼き付けておけ』

『よくぞ言った！』

そうして再び聖獣同士の戦いが始まる。

流石にリエルも、この両者の争いに関わることは難しかった。なにしろ規模が桁違いすぎるのだ。

ムルエルファスが力の塊を打ち出せば、クシヤタラナトは水の塊を盾に防ぐ。防ぎきれるものではないが、威力は確かに減衰する。この隙にクシヤタラナトが水圧を固めて矢と打ち出し、しかしムルエルファスはこともなげにこれをあっさり受け止める。

じりじりとクシヤタラナトが追いつめられてはいるが、今や彼の目的は残る一時間弱をどう耐えぬくかどうにかかっている。問題は無い。それに、先程から手助けが始まっていた。

『くっそう、またか！ ええい鬱陶しいことこの上ないな！』

矢が、ムルエルファスの眼前をかすめて飛ぶのだ。あれは集中を乱されるだろうな、とクシヤタラナトも感心していた。

そもそもあの精度はどうだ。矢とはそう簡単に狙った場所に届くものではないだろうに、やすやすとムルエルファスの眼前のみを狙

って飛んでくる。人間の戦法など詳しくあらうとも思わないが、神業とはああいうものを言うのではないだろうか。

『おおおっ！』

『ぐ、くううっ！』

クシヤタラナトが吼える。ムルエルファスが呻く。

戦況は膠着（じょうちやく）し始めた。

芦毛あしげの馬がどう、と倒れる。息は荒く、全身が汗で濡れている。

それでもシュナがたてがみを撫でて「ありがとう」と言うと、心得ていたかのように小さく嘶いた。

「杖を！」

あれから馬を駆けさせ城に到着するまで、シュナは本当にたった半刻しか要しなかった。代償として駆った馬は疲労に倒れ、自身も必死に手綱を操り足を踏ん張っていたことで全身が強張っている。何事、と城内に居た者達がシュナの様子にびっくりして飛び出してくるが、シュナは目もくれず走った。

杖は、確か宝物庫ではなくリエルの私物室にあったはず。秘術の器具と同じ場所にレアが保管したのを自分も確認している。

「親衛隊長、どうした！？」

宰相ハンネルだ。どうした、と聞く彼は恐らく事態の検討が付いている。でなければ冷静に歩調を合わせてくれたりはすまい。

「先ほどの爆発はなんだ。上空で何かが・・・」

「ムルエルファス様が、我々を試しておられる。陛下が陣頭に立って戦っています」

「な、何だと！？」

「クシヤタラナト様も助力してくれていますが、一角馬の角を取りに戻るよう指示されました。直ちに持って引き返します！」

衛兵の静止をも振り切るようにしたため、ハンネルがこれに構う

なと声をかける。

開け放ったリエルの執務室。サエラが居た。

「うわ、どうしたんです!？」

「杖を! 一角馬の角を!」

「!?!? あ、は、はい!」

シュナの必死な形相に察するところもある。サエラは部屋の掃除をしていたのも放り出して隣の部屋に駆け込んだ。続いてばたばたと何かを探す音。

リエルの持つ秘術の器具はそれなりに高価だが、壊していないだろうな。と、こんな時にも関わらずシュナはちらりと心配していた。

「急ぎ騎竜を用意させる。乗って行きたまえ」

「しかし、騎士団長の許可が・・・」

「私の権限で済む。国境への道は下り坂だ。帰りで馬はもう息が上がつただろう?」

「え、ええ」

「下りは半分も持たん。足を壊すだけだ。騎竜ならば馬よりも速いし、下り坂にも強い。乗りたまえ・・・これは命令だ」

「・・・はい」

よし、とハンネルはシュナの肩を叩くとすぐさま部屋を出て行った。

確かに、騎竜があれば心強い。舗装された道よりも荒れた斜面や山岳地形に強いゲマトルダットなら、緩やかに傾斜する国境までの遠大な道を楽しんでくれるだろう。

なんとも、ハンネルの即断のありがたい事だとシュナは今更ながらに思う。

「つたた、ありましたよ!」

「急いで!」

サエラが白い杖を持ち出してくる。まごう事無き、まさしく一角馬の角だ。

「で、何があったんです！何か事件ですね！？」

杖を受け取り走りだしたシュナに、サエラも続く。

「リエル様が、戦っておられる！」

「……なんで止めないんですかッ！？」

思わずシュナも立ち止まった。

サエラは泣き出しそうにも怒っているようにも見える紅潮した顔でシュナを睨む。

「あんた親衛隊長でしょう！？なんでリエル様を危ない目に合わせるんですか！」

「それは、サエラ……」

「リエル様が秘術士だからですか！とっても才能のある秘術士だから、戦うのもお任せってわけですか！？」

「そんなことがあるか！」

「だったら！」

「私が命を捨てて陛下が救われるならいくらでもそうしている！だが陛下は、あの方々は！我々がどうやっても手の届かぬところに居るんだ！どうやっても！」

シュナはサエラの襟首に掴みかかっていた。サエラもサエラで、苦しがることもなくその両腕を掴んで強く握りしめている。

「……我々は無力だ、サエラ。無力なんだ……できることがあるならそれをする。それだけが、我々に許されたあの方々に届く手段でしかないんだ。私だって、剣でも弓でも陛下をお守りできるならなんだってやるさ」

「……シュナさんは、どっちも苦手ですもんね」

シュナはこの言葉に苦笑したが、心底悔しそうな苦笑だった。

ほとんど泣き出しそうに顔を歪め、サエラの胸元に頭をこつんと当てる。

「私は馬が得意だ。だから、リエル様に杖を取りに戻るよう指示された。私だから出来ることだ。短時間で杖を取りに戻るのには私だけなんだ。そう道中で何度も自分に言い聞かせた。他に何もでき

なくとも、せめてこれくらいはさせてくれ、サエラ」

「・・・・・・・・・・」

はあ、とサエラは息を吐いた。

結局、自分にも出来ることが無いという事実をシュナの身に転嫁してしまっていただけだ。情けない、ともう一度息を吐く。

シュナの両肩に手を置き、ぐいと押しやった。

「ああ、もう。泣かないでくださいよ。悪かったです、無茶言っちゃって」

「泣いてなどあるものかつ」

顔を上げてシュナが噛み付くが、確かに涙の跡も見当たらない。だがサエラは、いつものいたずらっぽい笑みを浮かべてみせた。

「涙流すだけが泣くってことじゃないでしょうに。まあ、シュナさんが登城し始めの頃に比べたら・・・・」

「うおおい！？やめろ馬鹿！」

ぎょっとして周囲を見回すシュナ。人気の少ない通路だったため、辺りには誰も居ないようだ。

「迷子になって泣くなんてねえ。いつリエル様にお教えしようかしら」

「あのなあ・・・・・・・・もう忘れてくれてもいいだろう？」

「嫌ですよ。死ぬまで覚えてますから」

今度はシュナがため息を吐いた。珍しく、吐息を伴うため息。

「はあ・・・・まあいい。その代わり絶対に誰にも言うんじゃないぞ。弱みとして持たせておいてやるから」

「へへん、そりゃどうも」

「・・・・もう行く。すまなかったな」

「こちらこそ。後で母さんに頼んで魚介パイを焼いてもらいますよ。帰ったら皆で食べましょうか」

「うん、是非頼む。食べたい」

食べ物のこととなると、シュナが妙に子供っぽく言うのでサエラは思わず噴きだしてしまった。

それじゃ行つてらっしゃい、ああ行ってくる。
シュナは再び走り始めた。

気象観測局は大騒ぎだった。

局長のハッゼ・テストタを始め、局員のほとんどが望遠球のある部屋に詰め掛けて国境の様子を見ていたのだ。おかげで部屋の床がみしみしと音を立てている始末。

「ああ、危ないっ！」

「そこだ、やっちゃまえ！」

「・・・あー、惜しい。もうちょっとだったのになあ」

「弓兵の人らすごいですね。全然見えないですよ」

「え？ほらあそこ、居るだろう」

「どこです」

「そこだよ。草かぶってるだろ、ありゃ見えないさ」

「・・・ああ、本当だ。凄いな本当に」

裏技、とでも言おうか。

望遠球を用いて市街の人々を拡大して視認することはできない、と先日 of 視察の日にテストタ局長も紹介していた。だが、ちょっとした秘術の公式を加えて起動させることでご覧のとおり、非常に鮮明に遠隔地の映像を投写することは可能なのだ。

昔、暇な気象観測官の誰かが思いつきで試したのが始まりと言われている。以来、文字通り暇つぶしに彼らは時折こうして望遠で遊んだりもするわけだ。

とはいえ、定期的に気象情報を記録しなければならないため長時間の私的使用は記録の空白につながる。ほんの数分のみのお遊びに、こっそりやっていたことだったが、今はそれどころではなかった。

国境付近で起こった聖獣同士の戦いと、それに参戦したリエル・タナック・フィラント陛下及び兵士の面々。

局員らがこれを見過ごす手は無くこうして狭い部屋に押し寄せて

いるわけだが、そうそう楽しんでばかり居るはずもない。そもそも楽しめるような状況でも無い。

「観測、これで間違い無いな？」

膨大な数字の羅列に目を通すのは局長テストッタ。最初こそ彼も一緒になって観戦に興じていたが、やはり職務を忘れるわけにはいかない。

「ええ、規則通りに三度、一応もう二度ほど記録を出して照合しましたから」

「ふうん・・・こりゃあ、どうなるかな」

一般人が見ても何を示す数字なのかさっぱり解らないだろう。リエルでも難しいかもしれない。

数字は、ある特定の気象の発生を示していた。

「関連していると思うか？」

「そりゃそうでしょう。あれだけ水しぶき上がってんですから。というか、これって人為的なものですよね？」

さて、とテストッタは呟く。

「人為的、という表現に当てはまるのかな。人じゃないんだから」

「ああ・・・ははは、そうですね」

「陛下も暗に察していたのかな。物凄いな、あのお方は」

「本当ですよ。王様じゃなかったらウチに欲しい人材でしたね」

「局にも収まるまい。そんな小さな器じゃないだろ」

望遠球が投写する映像でも既に視認できていた。

クシヤタラナトが多量に空気中に撒きあげ、リエルが秘術の炎で霧散させたあの連携。

雲が、湖の直上に生まれ始めていた。

「積乱雲って秘術で作れるんですね・・・」

「いや、私らには無理だろうよ」

「はは、そうですね・・・」

乾いた笑いは畏怖のために。

天候を創りだすほどの秘術の使い手となれば、やはりあの女王陛

下は人智を逸している。何百人もの優秀な秘術士をかき集めれば同じことができるかもしれないが、それを彼女は一人でやってのけた。知識、発想、才能、実力、その全てをこの気象観測局の塔から俯瞰して、一様に彼らも己の戴く国王陛下の凄みを理解せざるを得ない。

望遠球からものはっきりと見える、巨大な聖獣の闘争。これをも支配しようとする幼い少女。

「勝てますよね？」

局員が聞いた。

テストッタは当然のように縦に頷いた。

「勝てないわけが無いな」

そう言い切って望遠球を見た。映し出される小さな姿。走り続ける幼い姿。

シュエレー神山の一件が彼らの確信を生む理由だった。信頼など当然。それ以上に、気象観測局の者達は特別、リエルに対する信仰にも似たある種の確信がある。

彼女なら絶対にやってくれる。

天候の異変には既にメルエルファスも気づいていた。いや、気づくのが遅すぎたほどだ。

もうリエルは湖の円を回りきる頃になって、クシャタラナトとの戦闘に没頭していた小さなニワトリはやっと、周囲が影に包まれ暗くなっていることを知った。

『一体、いつの間に・・・』

上空に浮かぶ雲は厚く、暗い。非常な量の水分が無ければあれほどの雲は生まれない。それもただの雲ではなく、垂直に高く伸び上がる巨大な積乱雲だ。あんなものをいつの間に構築したというのか。ハッとなってクシャタラナトを見ると、彼は薄くせせら笑ったよ

うだった。

『まさか、お前・・・』

『人間の王にしては優秀だ。それもあの歳で。我らでもこれほどに知略を持つ者は居ない』

『いつの間に結託した！？い、いや、こんなに緊密な連携など・・・会ったのは今日が初めてなのだろう！？』

両者とも攻撃の手は緩めていない。一撃必殺の水と力の砲撃合戦は常時続き、水流の蛇と力の奔流が絡み合って弾ける。

矢の数に限りがあるのも当然だが、配分を考えたのだろう。あれから数十分経った今も、どこからか飛来する無音の矢がムルエルフアスの眼前を横切りその集中を乱す。

クシャタラナトはまた低く笑う。

『もはや認めざるを得ないということです。私とて愚かしくありたいとは願わない。真に知性ある者くらい、少し見れば分かる。あの王は、まったく見事と言う他ありますまい。最初から策略は始まっていたのですよ。私はそれに便乗したに過ぎませぬ』

『なんだと・・・』

大地を粉碎する光フォロソ。そう言ったのはムルエルファスだった。だが、あまりにも昔のことでその性質を失念していたのだろう。大氣中に放出された赤い光は熱量のような性質を持ち、消失するまでにかかりの時間、空気中の物質に触れ続けながら残留する。そして、この湖の上空において触れ続けた物質とは、ほとんどが水分。あの赤い光は、触れた物質を粒子状になるまで粉碎し尽くす。それは既に述べた。

水滴は微細な水の粒子として、つまり強制的に水蒸気のサイズまで霧散し、この状態がこの一時間、休まること無く続いたことになる。

クシャタラナトが上空に撒きあげた水はどれほどの量になるだろう。その大半が水蒸気化し、浮遊し、フォロソの光によって冷却されることもなく大氣の中に漂い続けた。結果、あの雲。

あの秘術を用いた瞬間から、リエルの策略は始まっていたのだ。クシャタラナトが水を操り、それが空気中に撒き散らされることまでも織り込み済みで。

クシャタラナトの伸ばした鎌首よりも高く、上空の空気を踏みしめるムルエルファスは、眼下に今も走り続ける少女の姿を見た。

もう、湖を一周するまでに残り四分の一を切っている。数分で一周を終えるだろう。

そして、それが終われば何が起こるのだろうか。

『ふ……ふははは……末恐ろしい。いや、驚嘆に値するのは今この瞬間もだな』

満身創痍に追い込んだクシャタラナトも、まだ闘志を捨てていない。矢も、まだ尽きていないらしく時折思い出したように飛んでくる。

再び馬車団を狙うのはさすがに格好が付かない。それに、これを戦争と言ったのは自分だ。主力たるリエルをどうにかして止める必要がある。それを捨てて他を狙うのは、少なくとも自分にとって戦争とは称し難い。

『……それより父上、何故手加減しておられるのか。少々本気を出すとは聞いたが、そこまで抑えるとは何をお考えだ』

怪訝そうにするクシャタラナト。そう、リエルも既に気づいていたが、ムルエルファスは確かに手加減している。それも、恐らく実力のほとんど全てを押さえ込むほどに。

だがムルエルファスはこれを聞いてもクチバシを斜めに傾けるばかりだった。

『手加減、んん……手加減なあ。そうだな、確かに加減してるな』

『……』

『だが、多少本気を出しているというのも本当だぞ？』

『それは知っている。我々は嘘をつけない』

『なら、それでよかろう。わざわざ頭の中をいじくって能力を封じ

限だった』

『ふむ……』

『せめて私は私だと確認したくなった。だから国を出た。ただ、自分は王とは違うと拗ねること自分というものを確立させておきたかった。そうでもせねば、私には存在価値など無かったのです』

滔々《とうとう》と語るクシヤタラナト。

ぽつり、と雨粒が落ち始める。

『そんなに良いものでもないのだがな、この体は』

『些細なものだ。その姿に与えられた威厳こそを模倣したかった』

『余はこの姿に威厳を携えたことなど無いぞ』

『私には見えていた』

『……』

ムルエルファスは右の翼の付け根をつついて、しばらく口をつぐんだ。

そうして、クチバシを斜めに向ける。

『余が、余であるという意志を携えたのはこの魂に、だ。お前に見えていたのはそれだ。そして、それが見えていたのならばいずれ理解できる。お前も余の何たるかを知り得るだろうよ。流星は我が息子だ』

雨が、音を立ててクシヤタラナトの体を打つ。

水滴に濡れて、水竜の姿は煌めいていた。

『………光栄です』

『よし。それでよい。さあ、かかってこい』

クシヤタラナトの巨体がするりと宙に浮いた。

彼は水に親しむ聖獣。ならば、今この水滴に満ち満ちた雨空は彼の親しむ領域に他ならない。

うつすらと茜が差し込み始めた空、リエルが創りだした雲の下、水竜は空を泳いだ。

一時間と、わずかに数分。

大会でも開いて競技とすれば、この記録が塗り替えられることなく面白くもないものになってしまうだろう。

「陛下あーっ!!」

叫ぶ声に兵士たち、侍従たちも振り向いた。レアが安堵に表情を緩ませ、フォガリが感動のあまり拍手している。

恐るべき早さだ。まさか本当に一時間ほどで戻るとは。

白い杖を持ち騎竜に跨り懸命に手綱をさばく、シュナ・ミュテス・ルゼ親衛隊長。彼女はまさに宣告に違わず舞い戻った。

目の前に広がるのは、あのシュエレー神山の奇跡を思い出す光景。聖獣の王と水竜が降り注ぐ雨の中、熾烈を極める戦闘を繰り広げている。そしてその下に、リエルは湖の周囲を走り終えようと息を荒げ、懸命に体に鞭打って足を動かしていた。

手綱を引いて騎竜を操り、道を逸れて草原へと踏み出させる。聞こえてくる轟音に多少の怖気を持つ気配を察するが、騎竜はそれでもシュナの手綱に応えて走ってくれる。

「陛下!」

「シュナさん!」

ぱっと明るい表情を見せてくれるリエルに、シュナは湧き上がる衝動を抑えきれそうになかった。役に立てることが嬉しい。

速度をほとんど緩めず、器用に体を鞍の上から乗り出す。危ない、とリエルが軽く悲鳴を上げているが、気にしない。こんなもの、自分には慣れた芸当だ。

ぱしんと騎竜の背を叩くと、応えて彼は湖への直進からその脇へ、上手く離脱できるように向きを変えた。そのタイミングを測ってシュナは体を宙に躍らせる。

「ふっ!」

息を吐いて体を弾ませ、騎竜の走る脚をわずかに蹴る。その反動を利用してシュナは華麗にジャンプし、見事にリエルの目の前に着地した。

「あ、危ないですよ!？」

「得意技です。それより、これを」

事もなげに言うので、リエルは驚いてシュナの顔をまじまじと見つめた。ここまで馬術が上手いとは。

「は、はい。ありがとうございます、シュナさん。急いでくれて本当にありがとうございます」

「陛下のためならば」

リエルが潤んだ目で満面の笑みを見せてくれた。そして、思いがけないことにそのままシュナに抱きついてきた。

「……ありがとうございます。頑張ってくださいって、本当に感謝しています」
馬に乗るのは体力を使う。騎竜も同じだ。馬も騎竜も疲労するが、乗り手も比例して体に負担をかける。

手綱を握り続けた両手は手袋が擦り切れて皮が破れ、血豆も潰れ、赤黒く染まっていた。リエルに渡された杖だけは布で包んでいたため、純白の表面を保っている。汗で額に張り付いた髪は乾いてしまい、ごわごわになってしまっている。

疲れていた。だが、充足感があった。

こらえ切れず、なんとか頑張って、一粒だけに抑えた。

「……その言葉だけで、私は全てが報われます」
きらりと光って落ちた水滴にリエルが顔を上げると、シュナはもういつもの勇ましくも堅苦しい表情だった。

「シュナさん……それじゃあ、シュナさん」

「はい。心得ております」

リエルはこれから大規模な術を使うつもりだろう。シュナが近くに居ては巻き込まれてしまい、迷惑をかける。逃げていてください、とは言わせなくなかった。先に言葉を乗せて、シュナはリエルを残して足を引いた。

「お助けできることがあればなんなりとお申し付けを。そして、ご武運を」

「……ありがとうございます、シュナさん」

もう、気遣いは自分たちの日常だ。今更だった。だから言葉は少なめでもいい。

シュナは一礼し、踵を返すと走った。後方、馬車のある辺りまで。騎竜も察したか、着いて来るように並走している。

遠くで何かが動いたのが見えて少し振り返ると、恐らくあれは弓兵だろうか。草でマントを装飾し草原に擬態した何人かの人影が、湖から距離をとるようにゆっくりと動いている。

あとはリエルに。

そもそも相手が王のただ一羽だけであれば、その相手が務まるのは同じく王のみでしかない。

国民の誰もが介在せず、王と王の勝負が望まれた場だ。

元より、家臣が出しゃばるのは無粋。それをあのニワトリは構うものかと豪快に受け入れてみせた。

ならば見よ。ここからが我らの王の真骨頂である。

「エールテ・シュラハ　イルア・コール・アンカトウー・エネ・アル・ハイク！」

第八の星より円環巡りて第一の星へ導け。

全ての光点はつながった。それらは線となり、四つの大光点と四つの小光点を通る円となった。

最初に踏んだ光り輝く基点に立ち、リエルは目を閉じる。

謳うように。

一角馬の角を両手で握り、祈るように。

「アंक・エネ・イラ・エールテ　キルシュ・ヨフ・イラ・エールテ　ハーツ・ゴーニ・イラ・エールテ　フツウィルミ・リル・イラ・エールテ」

火は一に。水は三に。石は五に。風は七に。

「フォロソ・ゼノ・アル・キルグーン　ギリアナアタ・ケノ・アル・ハザツハ　アクテルオル・ニコ・アル・ニキム　ヨーネリ・シュラ

ハ・アル・リールキリー」

第二にフォロソの憤怒を。第四にギリアナタの冷徹を。第六にアクテルオルの狡知を。第八にヨーネリの放埒を。

「ゼ・イルア・ノーフィム アル・カーハ・アル・コルン」

糾合せしめん。我とならしめん。

「コール・ウイル・アンカトータ・イラ・ヴァリハ・ケノ・ロンフアーナ」

四つの明星は輝きて。

「コール・ウイル・ネーゲン・アル・シェリハ・ケノ・ロンフォーン」

四つの暗星は抱きて。

「アルカーナヴァ ゼ・イルア・アル・ミステル・ハイク」
空よ、導き給え。

「ウイルト ゼ・イルア・アル・ミステル・ハイク」
土よ、導き給え。

「エンデリオ イラ・ケールハウナ・ゼ・アル・ハイク・オルゴン」
わたしというそんざいをするべとみなして。

すう、とりイエルは息を吸った。

「アル・クシヤタラナト・ムルエルファス」

断固たる決意の下にこの力を振り下ろさん。

「エクセヴァ」

其は”万象の詩篇”なりや。

光り輝く八つの星に導かれた円環は、湖を明るく照らし上げる。

その円の内側、湖の水面から上空の雲のあたりまで、茫洋とした光の粒子が瞬時に満ち溢れ、秘術の公式によって切り取られた特殊な空間を形成した。そこにムルエルファスとクシヤタラナトをも包

みこんで。

リエルが一步、湖へ踏み出す。と、その前に彼女は「よいしょ」と言って靴を脱いだ。

裸足でもう一步。ぬかるんだ湖の岸を、その中心を目指して歩く。皆がその姿を目で追った。

『では、いきますよ。覚悟してくださいね、ムルエルファス様』

『!?!?』

響く、声。

大気に響く声。

ムルエルファスのように。

クシャタラナトのように。

アールカインのように。

聖獣のように！

『てやつ!』

リエルが杖を振るった。目で狙う場所は上空、ムルエルファスの小さな姿。

気の抜ける掛け声に、しかしムルエルファスはこれまで一度も見られなかった必死の様子で素早く空中を走った。

轟ッ！

空間を駆け抜ける不可視の砲弾。

眼に見えない力の奔流。

力そのものの発露。

それは。

『な………なんだとおッ!?!?』

それは、聖獣の王ムルエルファスの能力そのものではないか。

眼下を見れば、リエルはまだ歩いていた。

水面を歩いていた。人間が、身長よりも遥かに深い湖の、その水面を、ごく自然に。

『ば・・・かな・・・馬鹿な、なんだと・・・ええ？ いや・・・えええ！？』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

クシャタラナトなど人間のように口をぽかんと大きく開けて啞然としていた。

水面に波紋が広がる。降り続ける雨とは違う、一際大きな波紋がリエルを中心に広がる。

『もう一度いきますよー。せえー、のっ！』

声に合わせて元気よくグーを突き上げ

『うわああああああああああああっ！』

『危ない！危ないぞ！』

加減を知らないらしい。放たれた不可視の力の砲撃は凄まじい太さと勢いを伴ってムルエルファスを吹き飛ばそうとした。だが、そこはさしものムルエルファスである。なんとか急降下して回避に成功している。

そしてクシャタラナトだが、突然のことに驚く彼は何の影響も与えられなかった。そよ風が、鱗を優しく乾かす。

『・・・・・・・・えっ？』

『げええっ！信じられん、こうも容易く模倣するか、リエル陛下！』

水面、眼前にて両の王は対峙する。

驚愕の事態にムルエルファスですら心の底から動揺させられたが、ここにきてやっとリエルが彼の舞台に上がった。

本番はここからなのだ。

『アル・ベルテル・エイン・イラ！』

両手を仰ぐようにかざして公式を紡ぐ。

今日、二度目となる術だ。ムルエルファスはあの出来事を知るまい。

『コ、コココツコ、コケエエエエツ！』

既にムルエルファスの両眼は戦いに臨む獣のそれだった。全身全

霊の喜びを込めて。

今や目の前に居るのは少々秘術の得意な少女ではない。

このムルエルファスにも匹敵する、恐るべき存在だ。故に、故に。水面を迸る力の塊は、大ききこそまさに大砲の砲弾ほど。だが密度はこれまでの比ではない。まさしく砲撃となつて、リエルめがけて撃ち放たれた。ほんの少しでも人間の体をかすめただけでも木っ端微塵にしてしまう威力である。

だがリエルは避けようともせず、掲げた両手の内右手を目の前に突き出した。

『やあ！』

水面が真つ二つに割れた。

力の塊に対し、真っ向から同じ規模の塊をぶつけたのだ。巨大な爆発が起こるが、力のベクトルに従い衝撃は直交するラインに。

そしてムルエルファスが気づく。

『むう！？』

雨粒が全て空中に静止している。

これは一体、と呟く間にリエルの口が開いた。

『オルト！』

左手を振り下ろした。

途端、堰き止められた全ての雨粒の時間が流れ始める。静止していた時間はおよそ十秒。

物体の持つ運動の時間を堰き止める術は、解放した際にある効果を生む。それは、例えばこの雨粒などは顕著だが、空気抵抗なので抑えられる速度を無視して内部では運動量が蓄積され続けるということだ。

雨粒は鉄板をも穿つ凶器と変貌した。

『くっ、ううううううおおおおおッ！——クオツケエエーッ！』

ズガガガ！と異様な音を鳴り響かせて雨は降り注ぎ、ムルエルファスの体を叩いた。だが力の壁に護られた彼には傷ひとつ付かな

い。

気合の咆哮と共にムルエルファスは能力によって雨粒を一挙に迎え撃ち、大規模な力の爆発によって全て吹き飛ばす。そして、そのまま水面を力強く蹴った。

リエルに対して接近戦は挑まなかった。それは彼女の性質を考えれば当然だった。剣の持ち方も知らぬ少女を研ぎ澄まされた大剣で斬りつけるような行為は本意では無い。だが、今のリエルはこれまでとは違う。

リエルはキツと闘志をあらわに身構えた。

拳の扱い方など知らない。剣の扱いなど知るはずがない。弓も、どんな武器でも。

薪を割る手斧すら満足に扱えなかったのだから。

だからただ、力任せに。

『よいしょっ！』

『コケッ！？』

振り上げた白い杖。非力にしか見えない動作で杖の一端を持ち、見よう見まねで後ろに構える。フォガリの振った剣。背後から地を這って振り上げるあの動作。ただしどこまでも素人の動きで。

だがムルエルファスは本能的に、何か得体の知れない恐怖を覚えた。とはいえ一度走り始めた以上、せめて一撃、試してみたい。

その超音速の疾走の中でムルエルファスは動物の範疇を軽く凌駕する動体視力と反射神経でもう一度よく見た。

白い杖。

あれは。

『一角馬ラムシルトの幼角ッ！あんなものを！？』

国宝として伝わる一角馬の角。その元々の持ち主は、隣国トルパトルだったと記録にある。建国に際して助力を惜しまなかったフィラントへの感謝の印として、トルパトルの守護聖獣ラムシルトの申し出で彼の角を受領した。

一角馬、つまり角のある馬だが、希少動物である彼らは子供から

大人になる時期に角が生え変わる。これを幼角と呼び、特に秘術士によって珍重される道具となる。つまり、持つ者の霊力を幾重にも増幅するものとして。

その一角馬の中でも聖獣として生まれついた者の角だ。世界でも類を見ない貴重品である。効力のほどは、リエルが先の事件において示した。

（いかん、力を減衰している今あんなものを受けられん！）

本気の焦りを覚えて、だがムルエルファスは気付いていなかっただろう。いや、周りから見てもわかるはずもあるまい。人間であればそこに、知らずに浮かんでいたであろう。深い歓喜、戦いへの充足、狂喜が。

その深層心理によるものか、次の瞬間ムルエルファスは全力で水面を蹴り、跳躍した。狙う先にリエルの胴体。

既にリエルは杖を振り上げる動作に入っている。

見えなくとも感じられた。あの杖が纏う、リエルの巨大な霊力。その霊力が、この秘術の力場を介してリエルの貧弱な腕力を杖に伝達している。何倍にも、何十倍にも、いや。

何万倍にも。

『へやあっ』

『コッ、コケエ——ッ！！』

『オールドっ！』

すとな、と。

ムルエルファスの視界が急に青く歪んだ。同時に軽い衝撃。体の動きが鈍る。

水球だ。

『だからいつの間に連携しとるんだ貴様らアアッ！？』

ムルエルファスの体は水球に包まれていた。それは、クシヤタラナトの作り出した水球に他ならない。

だがムルエルファスの速度を捉えるのは至難の業だった。そこへあの秘術。

リエルの考えを察して、クシヤタラナトは彼女の身長ほどの大きさの水球を作った。密度は低い。弾くのではなく、捕らえるためのものだからだ。水球の檻、作るだけなら容易いものを。

アル・ベルテル・エイン・イラ。物体の運動を引き止めて静止させる秘術。その効力は、術者の認識の及ぶ場所に。

つまりこの秘術の力場全てに。

そして、静止させられる物体やその解除のタイミングまでもリエルは自在に変動できた。

水球はクシヤタラナトの居る上空からほとんど一瞬で着弾した。一秒もかからなかっただろう。

父を知るクシヤタラナトだから、その移動する先を読みきった。リエルの秘術に感動したからこそ、その眼前に狙いを定めた。

『八百年。僅かだがやっと、届いた』

リエルの振り上げる白い杖が水球ごとムルエルファスの体を強く打った。

水球が爆ぜる。

この水の檻があつたのは幸か不幸か。ムルエルファスは吹っ飛ばされた瞬間、その一秒の十分の一にも満たない時間、ただその刹那の間に自分の置かれた状況を全て把握していた。

ぎりぎり、本当にぎりぎり、で防御は間に合っていたのだ。そして、この水の檻があればこそ、リエルの一撃は水圧の抵抗を受けて減衰してしまっていた。

『コケエエエ—— ツツツ！』

力の砲弾を放つ。これまでのものと比べると小さな砲弾。

だが今度こそリエルは無防備に陥っていた。

この小さな砲撃でも、人間の体が耐えられるような威力ではない。

「あっ」

そして、一瞬が過ぎる。

絶望的なまでに長い一瞬だった。

リエルの体が軽々と宙を舞い、同様にムルエルファスの小さな体も放り上げられる。

シュナも、レアも、フォガリも、ゼルガも、クシヤタラナトも、大勢の侍従、大勢の兵士たちも、皆我が目を疑い息を呑んだ。

まず、ムルエルファスが空中に足を着いて静止した。

聖獣の王は健在。外傷すら無い。

あれほど肉薄していようと、やはり地上最強の聖獣の呼び名に違わぬ実力であった。

そしてリエルは、

『王っ！』

リエルは。

『アル・エクセヴァ・ウィルヒムト！』

健在。

リエルの姿もまた空中に静止した。だがそれはムルエルファスのようではなく、何か別の外力が働いたようにふわりと、落下速度を弱めて浮遊するように見えた。

まるで、巨大な誰かが片手で彼女の体をすくい上げたような挙動

にしか見えなかった。

直後、空中に静止していたはずのムルエルファスの姿が消える。

同時、聖獣の王はリエルへの突貫を敢行していた。

だが、少女の眼前でニワトリの姿が耳をつんざく轟音と共に停止する。

刹那、ムルエルファスは驚きと共に瞬くがすぐにもう一度空中を蹴る。

眼前、またあの矢が飛来してムルエルファスは一瞬の動揺と行動の停止を余儀なくされた。

そしてリエルが叫ぶ。

『クシャタラナト様！』

『わかつている！』

膨大な数の水滴が、水流が、水球が空を切ってムルエルファスへと殺到した。その数は既にクシャタラナトも体力の温存など一切捨てた決意すらを示す、余りにも莫大な量である。聖獣とて能力を使うには体力をすり減らすのだ。

水はムルエルファスを乱打したが、このニワトリの姿をした聖獣の王は不動。空中に座して耐えるのみとはいえ、攻撃が通っているようには見えない。それどころか、クチバシを斜めに傾けてリエルをまっすぐ睨み据えていた。

その姿もすぐに水圧の壁の向こうに消える。

常温の水。水圧によって生まれる超自然の現象。

だが、本当にムルエルファスもぎりぎりの状況であったことをリエルも知っていた。

故に、杖を強く握り締め、勇ましく笑んでみせる。

『アル・クシャタラナト』！！』

断固たる決意の下に。

これまでのどれよりも巨大な轟音が鳴り響き、目に見えぬ鉄槌が

水の塊ごと聖獣の王の体を粉碎せんと恐るべき破壊力を伴って叩きつけた。その余波によって生まれた風圧で湖が大きく波立ち、草原の地表が剥ぎ取られて吹き飛び、付近にいた弓兵たちがこらえ切れず転倒し、馬車の列では家臣の者達が呆然とその光景を見るしかなく。

やがて、全てがおさまって。

雨の上がった空の下、クシヤタラナトはゆっくりと下降して着水した。そして小さな異変に気づく。

『……湖の幅が広がっているな』

気絶して湖面に浮かぶ我が父を呆れたように見やりながら、長い溜息を吐いた。

夕暮れの少し前。

空は茜というより黄色く見える時刻。

ムルエルファスとの戦いが終わって、リエル始め一同は馬車団の所で休息をとっていた。

「起きません……」

「大丈夫でしょう。息もあります」

リエルの腕の中にはムルエルファスが。気絶したようで、あれから声をかけても一向に目を覚ましてくれないでいた。

そうこうして困っていると、一羽の小鳥がどこから飛んできて、リエルの肩に留まった。見たことのない可愛らしい小鳥だ。やけに人馴れしているのか、肩から離れようもしない。

さすがにその小鳥が朗々と響く声で話し始めるとは思わなかったが。

『してやられましたな、ムルエルファス王』

「カインさん！……なのです？」

『うむ。眷属を越しての挨拶にて失礼する』

当のムルエルファスはこの声に対し、五月蠅そうに呻きながら目を覚ました。

リエルはずぶ濡れの体をレアに拭いてもらっていたが、そのためかムルエルファスの体も同じくずぶ濡れだった。

『……旧き友アールカイン。ああ、余は負けたか？』

『それはもう、見事に』

『ふ、ふははっはは……あー、痛い』

「だ、大丈夫ですか？」

リエルの腕の中でむっくりとムルエルファスは起き上がった。が、見たところ外傷は無いようだ。あれほど強烈な一撃を浴びたというのに。

『羽が抜けてしまった。どこかその辺りに落ちてないかね？』

「えっ？あの……」

何を言っているのか。リエルはきよんととして聞き返すが、ムルエルファスはクチバシでござこそと自分の翼をいじくっていた。

『ひい、ふう……おおう、三本も抜けたぞ！』

驚いて声を上げるムルエルファス。人間たちはこの言葉に対し一様に「はぁ？」と間の抜けた表情を浮かべた。

『なんですと、三本？三本と仰ったか、ムルエルファス王』

『ああ三本だ。三本も抜けておる。凄いな、こんなに羽が抜けたのは初めてだ』

『ならば間違いなくエリーの勝ちでしょう』

『うむ、そうだな。余の負けだ』

どうやら真面目に言っているらしい。

「ええー……」

ひどく釈然としないものを感じてリエルは少々むくれて、その場にぺたんと座り込んでしまった。

あれだけ頑張ったのに、戦果が羽三本を抜いただけとは。

「ああ、御髪についていましたよ。はい、陛下」

「はぁ、ありがとうございますレアさん」

手渡されたのは、確かにムルエルファスのものと思われる黒と赤の綺麗な羽だった。たった一本、リエルの髪に引っ掛かっていたのだろう。手に持ってしげしげと眺めてみたが、抜けた付け根部分にも血の一滴すら見当たらない。本当に綺麗に抜け落ちたらしい。

さすがに、リエルも大きいため息をついた。

湖を見ると、クシヤタラナトがなにやら落ち着かなさげにこちらを眺めている。そろそろもう一度話をしに行ったほうがいいのだろうが、まだレアが体を拭くのを止めてくれない。

そういえば、とリエルは自分の格好を見た。

「あの、ごめんなさいレアさん」

「はい？」

「こ、コートが・・・」

ああ、とレアは微笑んだ。そしてまた乾いた布を手にとってリエルの髪や肌を丁寧に拭く。

コートは濡れな上に泥まみれで、草などもあちこちに引っついて大惨事になってしまっていた。

どうしよう、どうしよう、とリエルはおろおろとレアを上目遣いに見る。が、レアはすまし顔であった。

「服は、肌が傷ついたり汚れたりするのを防ぐためにあるものですよ」

「でも・・・」

「それにほら、高価なだけはあるようです。どこも破れていませんね」

「そうですけど・・・」

この二人の会話に呆れたような声を出したのは、二羽の聖獣。

『衣服の心配とは・・・御身はご無事のようなだが、このムルエルファスが傷一つ与えられぬとはもう』

『大したものだ、エリー。友として鼻が高い』

アールカインの鼻が高かったかどうか、リエルは少し思い出そうとしたが、それが単なる言い回しの冗談だと気付いてくすりと笑

った。言葉遊びであれば、嘘では無い。聖獣とて言葉で戯れることもあると、リエルはこの稀有な友との思い出の中に知っていた。そうしてしばらくして、やっとレアが体を拭くのを止めてくれた。肌着まで脱がせられそうになり、慌ててこれだけは譲らなかった。子供とはいえ恥ずかしいものは恥ずかしいのだ。

フォガリ騎士団長、シュナ親衛隊長がしっかりと護衛し、遠くにはゼルガ・ハバトも居る。その状況でムルエルファスは心なしか息苦しそうにしながら、そしてリエルの肩に止まったアールカインの眷属とやらが小気味よさげにしながら皆で歩く。

湖の前に再び勢揃いすると、クシャタラナトは静かに一礼をしてみせた。頭をゆっくりと下げて、確かにあれは礼だ。

『父上、お怪我は』

『うむ、羽が三本抜けたぞ』

『な・・・三本！？そんなまさか・・・』

どこが凄いかさっぱりわからず、人間一同は反応に困るばかり。口、もといクチバシを開いて補足してくれたのはアールカインだった。

『何を我らが驚くのか、分からないといった顔だな』

「え、あの・・・はい」

『ふふ・・・ムルエルファス王、あれからは？』

『無かった。実に六千年ぶりになるぞ』

リエルの肩に乗った小鳥は低く響く声で、ふふん、と笑った。

『というわけだ』

「はあ・・・え？　どういうわけなのでしょう」

『つまり、この六千年、どれだけこの不遜な王が手加減していても、その羽一本を抜き取ることすら誰にもできなかったというわけだ。負傷などもつてのほかである。そもそも、多少の傷は自ら治癒してしまうことでもあるしな』

『待て、一言多いぞアールカイン』

『何がです、ムルエルファス王』

『……うん』

そもそもこの二羽の聖獣、やたらと親しげだ。と、リエルは思
い出すこともあった。

あれはアールカインに会いに行つて、直接聞いた話だったはずで
はないか。そう、『聖獣の王と、このアールカインはエリーが生ま
れるずっと昔からの友だ。いずれ会えるとよいものだ』と。あの
西の国境で、幼い日々に。

『それで、ムルエルファス王。皆に申し開くことがおありでしょう』
『む……うむ、そうだな』

アールカインの言葉にムルエルファスは神妙な態度になる。ひょ
い、とリエルの手の中から降りて、皆の前に見える場所まで歩き、
立ち止まった。そしてそのまま座り込む。

『すまなかつた。随分怖がらせてしまったらうか』

本心から言っているのは知っているが、思わずリエルすらも軽
く怒気を含んだ引きつった笑いを浮かべていた。

「その……ムルエルファス様、それは本当に偽り無いお言葉です
ね？」

『そうだが。本当にすまんと思つておるよ』

フォガリの言葉にも真摯に答えるムルエルファス。

だが、どうにもこのニワトリの王、態度というか何か、どこかお
どけたような、軽い雰囲気を感じる。

大きなため息の音は上から聞こえた。

『こういう者なのだ、ムルエルファス王とは。私が最初嫌がつてい
た理由が理解できたか』

ただアールカインのみが低い声で愉快そうに笑ったが、リエル
も他の皆も、笑ったものかどう答えたものか。理解できた、と言う
わけにもいくまい。

『力の扱い方は、どうやって把握したのかね？あの瞬間の一撃は勝
つたと思つたのだから』

「ええと、相打ちになつた時のことですか？」

『うん、それだな』

ほんのりと悔しそうなムルエルファスだったが、本当にあれで勝ちを貰ってもよかったのだろうか。

首を傾げるのはムルエルファスだけでなく、リエルもだった。

「えっと、あの秘術は湖全体を覆っていたのです」

『うん、それで？』

「それで、ムルエルファス様のものと同じ力を再現したのです」

『ふむふむ』

「だから、あの光ってた全体がわたしの感覚の延長線の範囲にあった、というわけです」

『・・・・・・ふむ。うん、そうか。うん・・・・それは凄いな』

要するに、あの光に満ちた領域内全てがリエルの五感の延長の範囲内であつたということになる。それ故、その内部で起こる全ての事象はまるで皮膚で触れて理解するように容易く把握できたのだろう。例えば、ムルエルファスの体を覆う力の渦はどうやって作られているのか、など。

ムルエルファスは当然、同じようなことはできる。だがそれを、こうも容易く模倣されてしまうとは。

『凄いな・・・・・・本当に凄いな・・・・』

『さしものムルエルファス王も自信を碎かれて落ち込むか。流石はエリーだ』

「えへへ・・・・・・？」

褒められているポイントが今ひとつ掴めていないのは本人だけ。

どれだけそら恐ろしいことをこの少女がやってのけたのかは、周りで見ていた全ての者がよく理解できている。

ちやぶん、と湖に波が立つ。

『それで、結局何をなさりたかつたのか。ムルエルファス王』

傷だらけのクシャタラナトがため息混じりの声を出す。この水竜、エラ呼吸のように見えるのだが、竜ともなれば普通の生物と一概に同じとは言えないのだろうか。

息子の呆れ声に、ムルエルファスは首を傾げた。

『ん・・・わからなかったか？』

「ええと、わたしに戦争を教えてくれた・・・」

『それと私を叱りに来た、か？後は、何です。ただ戦ってみたかった、久しぶりに訪れたフィルラントで羽目を外したくなった、それから？』

『よく見ておるなあ』

息子ですからな、という上からの声に、ムルエルファスはやれやれと呟いて首を縮めた。

聖獣の王の主張は、どうにも全てが薄いようだとは皆も感じていた。建前を積み重ねて理由とし、それを押し通してこのお遊びとも言える戦いを起こした、そんな雰囲気はずっとあった。

フィルラント王国の面々からすれば、聖獣の戦いの規模は冗談でもお遊びと済ませられるものではないが。

そもそも嘘を言わぬ聖獣が言ったあの言葉の数々。リエルが勝利していなければ、本当にムルエルファスはこの国を粉碎する腹積もりがあったのは間違いないのだ。

ムルエルファスは、また翼の付け根をクチバシで何度かつついた。そうしてから首をキョトキョトと傾げ、また翼の付け根をつつく。

『リエル陛下は実に、お強かったな。息子の成長も見られた。この国の人々は真面目で、王をよく助けているようだ。今は少々問題も抱えているようだが、なに、すぐによくなる。怠らぬことが肝要だ』

「・・・？」

『何の話です』

また翼の付け根をつつき、クチバシを斜めに傾けた。

アールカインが優しいげな鳴き声を小鳥の喉で鳴らしている。あれも、笑った声か。

『まずは、先にそちらの問題を片付けよう。クシャタラナト、よいか』

『は・・・何がですか、だから』

『リエル陛下』

心得てリエルは頷いた。ムルエルファスに促されるように隣に立ち、湖の主を見る。

クシヤタラナトも理解したようだった。もたげていた鎌首を下げて、リエルの目線に合わせる。

恐ろしげな、頼もしい水竜の顔が間近にある。

「フィルラント国王、リエル・タナツク・フィルラントからお願いがあります」

『・・・・・・うむ』

「先日シュエレー神山の崩落によって、この国の農地は壊滅的な被害を受けました。これを早急に復旧し、春の農作に間に合わせなければ、今年はまだ耐えられても来年からの食べる物が無くなってしまう。そのため、必要な工事があります」

『うむ、続けろ』

「土砂の除去と灌漑かんがいを行うため、水路を作りたいと考えております。そのためには、川の上流にて工事を行う必要があります。土砂が発生して湖に流れこむことにもなるでしょう。けれど、どうしても必要なことなのです。ですから、どうか工事の許しをいただけないでしょうか。湖が汚されるのを厭うお気持ちは理解しています。けれど、そこをなんとか」

『・・・・・・』

自分の小さな領土、この湖に暮らして八百年。澄み渡る青い水だけが彼にとって最上の環境なのだ。故に、魚や虫を湖底に追いやり、他の生物が住み難いほどに澄んだ水を作った。

水を通して感じる。湖底には、先程の戦闘に驚いて怯える魚が数十匹、うろろうと泳いでいる。どれだけ追いだしても川から流れて来て住み着いてしまうのだ。それに、湖底の暗くて土の匂いのする部分は好かないので敢えてそのままにしてある。関心は無い、はずだ。

土砂が流れ込めばどうなるだろう。薄い泥水なら大丈夫だろうか。岩が転がってくるのだけは駄目だ。

『……この湖から海までの間に、まだ距離はある』

「……はい？」

『枝流をそこに作れ。溜池を作り、この湖に住む私以外の魚と虫たちにはその池に移るように言おう。その後でならば、工事をしてもよい』

「あ……」

どれだけ追い出しても住み着いて、魚たちはこう言うのだ。「わたしたちのおうさま、いつもみまもってくださいって、ありがとう」と。人間には聞こえぬ、自分だから聞き取れる微かな言葉で。

小さな脳みそしか持たず言葉もたどたどしい生き物が何を言うのだとそっぽを向いてきた。その度に彼らは困ったように、またうろうろと泳ぐ。それで、どうにも苛立って追い出しても、また別の魚が住み着いて同じことを言う。

八百年、それが続いた。

今さら無碍にできるものか。

「……必ず、そうします。ありがとうございます、クシャタラナト様」

『……ふん』

クシャタラナトは照れたのだろうか。それからむっつりと黙りこんで、湖の上で眼を閉じてそっぽを向いてしまった。

理由あつての拒絶だったのだ。それがやっと分かって、リエルは嬉しくて微笑んだ。

うんうん、とムルエルファスは頷いている。

『良き哉、他者が解り合う瞬間というものは、実にのう』

やはり面白がっているだけだろうか。クシャタラナトが非常に嫌そうな顔つきをしてフンと鼻を鳴らしていた。

だが当のムルエルファスは至って大真面目、に見える態度である。恭しく畏まってリエルの前に移動し、また座る。

『最後の要件である。聞いていただきたい、フィルラント国王陛下』
「は・・・はい」

自分もその場に座ろうかと思ったが、地面はかなり濡れている。土に汚れることは自分は構わないのだが、服を汚すとレアに申し訳ないだろうかと彼女の方を見てみた。

すると、いつの間にか近くにいたゼルガ・ハバトが黙って何かを差し出した。大きな布地のようだ。

心得たレアがこの布地を受け取って礼を言い、リエルの足下に敷いた。それは、ゼルガのマントだった。

リエルも丁寧にお礼をしてそこに座り、改めてムルエルファスへ向いた。

『・・・八千年、余の国は平和だった。今もその平和は続いている。あの極北の土地、極寒の山々に囲まれた幻想の土地に。余を加えて十五の聖獣と、大勢の動物たちと共に』

「・・・ふぁ」

途方も無い。やはり八千年という年月は想像し難い。

『だが、それは獣の国だ。発展性など要らないが、同時に柔軟性にも欠く。余の国は完成されているとは思うが、固いのだ。そう、つまり、面白みが少ない。退屈なのだよ。春に生まれた赤子らを愛でるのが最大の娯楽なぐらいだ。その平和な退屈の中を八千年、まどろむように皆と共に生きてきた。が、そろそろ限界らしい』

「・・・どういうことです？」

クシャタラナト、アールカインも不審そうにしていた。

『何かあったのか、ムルエルファス王』

『父上・・・？』

『・・・教えておこう。余は、三年に三日という非常に短い周期で休眠するのだが』

「えっ」

何を言うのだ、と二頭の聖獣が気色ばんだ。

聖獣にとって、休眠期の長さなどを明かすのは自殺行為に等しい

のだ。

『まあ聞け。その短い周期、休眠期のために、余はこのような性格を形成するに至ったわけだな。だが、他は違う。大抵の聖獣は数百年だとか、千年単位の年月につき何年、何十年という長大な期間を眠りに必要とする。余が例外なのだよ』

「・・・・・・はい」

本題は見えてこない。だが、ムルエルファスは何か重大なことを言いそうな気配がある。

『クシヤタラナト、そして旧友アールカイン、余の臣下である聖獣、大亀ターホヤトン覚えておるかね？』

『当然だ』

『無論ですとも』

『あ奴が、死んだ』

——は？と。

あつけない物言いに、沈黙が流れた。

『眠ったまま起きることなく、心臓が止まった。治癒を試みたが、駄目だった。外傷などではない。病気でもない。ただ、死んだ』

何故、とはどちらの聖獣が漏らした声か。

ムルエルファスはリエルのために説明してくれた。

大亀ターホヤトンとは、妖精郷ユクティラにおいてムルエルファス王に次ぐ年月を生きる巨大な亀の聖獣らしい。大きさは山ほどもあり、歩くだけで地震が起こるのだとか。そして、その大亀ターホヤトンは、非常に長い休眠期を持つのも特徴だった。なんと五千年に一度、千年の眠りにつくのだ。眠っている間に体の上に植物が生え、土が乗り、動物が住み着いて本当に山と一体化してしまったこともあるという。

『休眠期には早いはずが、最初は本当に眠っていたのだ。寝息をたてているので不思議に思ったが、早めの休眠に入ったのだと思っていた。そうして一年ほど経って、あ奴の心臓の音が聞こえなくなった。まるで老衰で死ぬような、穏やかな逝き方だったよ』

老衰など無い聖獣ならば、その死に様は幸福に見えただろうか、不幸に見えただろうか。

『老いて死ぬなどあり得ぬ。だから死因を調べたが、無意味だった。本当にただ死んだのだ。それからまた少し経って、今度は麒麟馬インリユカインが眠った。これも時期が早すぎたので、皆と一緒に慌てて叩き起したのだ。当のインリユカインは気持よさそうに目を覚ましおったがな』

『なんと・・・』

『それで、ある結論に達した。ユクティラは、退屈によって滅亡する可能性がある、と。いや真面目な話だぞ』

それから注意深く観察していると、ある日ふと、ごく自然に休んでいた聖獣がいつの間にか眠っているという現象が続いたという。全て叩き起してから、これはまずいと気付いた。そして議論した。

結論の通り、確かにこの現象は長く生きた聖獣ほど顕著だった。

倦怠と退屈が、彼らから生氣を奪ったのだ。

そして彼らは賢く、直ちに対策を見つけた。

『極めて重要なお願いだ。是非考慮して欲しい。・・・このユクティラの主、ムルエルファスの名において、フィルラント王国との密な同盟関係を結びたい。もちろん、両者の交流も兼ねてという内容になる。たまにこちらに、我がユクティラの民を遊びに赴かせたいのだ。無論、それが人間の国家にとってどういう意味を持つことなのかは承知している。その上で、無理を通しての願いである。どうだろうか』

妖精郷ユクティラという楽園に辿り着くまでに、その国に住まうことになった聖獣達はどれほどの戦乱をくり抜けただろうか。奔放なる時代とムルエルファスが称した荒ぶる世界に生を受けて、過酷な戦いの果てに勝ち取った平和の国。

だが、八千年の平和は彼らから生き続ける意味を喪失させてしまった。頭で考えてもどうしようもない、本能に根ざす現象だ。遠大なる生に飽いた彼らの魂は、静かに存在意義を見失おうとしている。

そして眠り、死という穏やかな本当の平和へと旅立つ。

不死であるはずの聖獣が、唯一その不死を必要とされなくなった時に迎える現象なのだろうとムルエルファスは語った。

『ターホヤトンの声を聞いたのはいつだったかな。もう、どんな声だったのかも覚えていない。寡黙な奴だったが、相応しく温厚で優しく、偉大な聖獣であったのに。だが、それ故にあ奴だけは、真に幸福の内で逝けたと思いたい。戦を好む性格では無かった。背に動物たちが巣を作っていくのを、まどろみながら楽しむような奴だった。だから悲しくもない。ただ、せめて一度でいいから最期に言葉を交わしておきたかったくらいだ』

そう言うムルエルファスだったが、声音はしんみりと沈んでいた。リィエルは、この事態を深く受け止めて熟考する。

『最も近い国がフィルラントなのだ。かつて交流もあった。余とて、時に他にすぎることもあると思い知った。・・・国から持ち出せるものであれば、フィルラントにはいくらでも礼をしよう。ただ、余の臣下の退屈を消して欲しいのだ。それが例え一時しのぎに過ぎずとも、このままみすみす放置しているのは耐えられぬ』

「ムルエルファス様・・・」

『十五。クシャタラナトが生まれて十六。クシャタラナトが出ていてまた十五。ターホヤトンが死んで十四。共に戦乱を生き抜いた、真に愛する仲間達なのだ。あ奴らがもう生涯に飽いたと言おうとも、余はあ奴らを生かす。でなければ、ユクティラはまた消えてしまう。永遠の国が遠のいていく』

理想の国、楽園には守護者が必要だ。永遠の時を土地と共に生きて、そこに生きる全ての生命を守護する番人が。

ムルエルファスは己と、十四の仲間^{しるべ}にその使命だけを課してユクティラという国を作った。その崇高な信念を標に八千年という歳月を、確かに使命を果たし続けた。

十五の王に守護される楽園。

偉大とか、そういう簡単な言葉では言い表せない。

『このままいけば、次はクシャタラナト、お前の愛するお前の母、黒晶龍マディエリエインだ。既にまどろみは始まっていた』

『なっ・・・!』

『・・・だが、彼女はそれもいいだろうと言う。余はそんなのは嫌だ。愛する者たちと共にこれからもずっと生きていたい。故にフィラント国王陛下、どうか頼む。我らが時折立ち寄ってここで少しばかり過ごす、そのことを受け入れてくれないだろうか。そう、守護聖獣が十五匹ばかり臨時で増えるようなものと思えばいい。決してこの国の害になるようなことはしないと誓う』

この世において今や恐らく最も長く生きる聖獣の王が、十歳の少女に懇願していた。

『君たちを試したのは、悪かった。信頼に値する国か、信頼に値する王か、余も慎重になりすぎていたかな。リエル陛下、君は余にとってまったく信頼に値する、素晴らしい君主であると知った。故に、余は君に頼りたい』

武力に物を言わせ、再びこの世に戦乱を招くことは容易いだろう。十五の、混迷の世を生き抜いた地上最強の軍団が、退屈しのぎのために世界に惨劇をもたらし、暴虐の限りを尽くして生きる充足感を満たす。きつと、そうすれば再びその後にはユクティラを再建し、また八千年を平和に過ごすのだろう。

その選択肢を捨てた。だからこの王は偉大なのだと、リエルは確信した。

「お話はよくわかりました。同盟のこと、是非受け入れたく思います。妖精郷ユクティラを助けるため、できることをさせてください。微力すぎることはお思いになるでしょうけど、わたしも精一杯お手伝いしますから。だから、そんなに思いつめた顔をしないで、ムルエルファス様」

『・・・』
——— おお!! ———
『

リエルは後ろを振り向いて、自分の臣下たちの顔を見回した。皆、わかっていますと言うように頷く。

「それでよろしいですか、皆さん。この場でわたしだけで決めてしまうのは、拙速だと思います。けれど、独断でも、わたしはそうしたいと思いました。お城に戻ったら他の皆さんにもお伝えしましょう。ご理解いただけますか」

きちんと言葉に出して。言わずとも分かっていることだが、リエルは律儀だった。

「どうか陛下のお心のままに。私どもも賛成いたします」
「異論ありません」

「私입니다。陛下のご判断は間違っていないと思います」
シュナ、フォガリ、レアが賛同し、兵士たちも頷く。

ムルエルファスはそれを見て、感極まって俯いた。

『・・・ありがとう。本当に、・・・もう駄目かと思っていた。心より感謝する、フィルラント王国の民よ』

小さなニワトリが、更に小さな涙を流した。聖獣の王は泣いていたのだ。

これほどの心労をこの数日隠して。

そこに偽りは無い。策略も無い。彼ら聖獣は嘘をつかない。

聖獣は嘘をつかないからこそ聖獣とよばれるのだ。そして、嘘をついた聖獣はその瞬間から正気を失う。正気を失った聖獣は変貌し、魔獣と称される邪悪な存在へと堕する。だが、同時に彼らは不死性をも喪失するのだ。そして時間切れになるまで、悪逆を尽くす。

一万年までは覚えていると言った。それ以上生きていることになる。

一万年以上、嘘をつかないでいられる知性体。それは人間にとって絶対に到達し得ない境地である。

「共に在りましょう、ムルエルファス様。私たちが永遠と呼ぶ時間が過ぎて、あなたたちが永遠と呼ぶその時まで、私の国はあなたたちと共に。わたしはそのために尽力しようと思います」

共に永遠の国を。

ムルエルファスは改めてこの少女王の矜持に胸を打たれたか、深く静かに礼を送った。

リエルもまた頭を下げ、共栄を誓う。

聖獣の国との同盟。天体イウスィーリアにおける人類史において、前代未聞の革命はこれのようにして慎ましく成立した。

『……王、よ』

クシャタラナトが震える声で言う。

『フィルラント国王……名はリエルだったか』

「はい、クシャタラナト様」

『……では、リエル陛下』

「!……はい!」

『……今この時より私、クシャタラナトはそなたの剣であり盾であることを誓おう。東の守護者として全霊を捧げよう。今一度、この王国との契約を結びたく思う』

「はい!その申し出をありがとうございます、クシャタラナト様」

おお、と群衆から歓声が漏れ聞こえた。

リエルは、ここにきてクシャタラナトが自分を受け入れてくれたことに喜び、思わず涙をこぼしながら満面の笑みを浮かべていた。
『契約の条件はこれまで通り、湖を汚さぬこと。その理由は、既に察してくれたことと思う』

「全く依存はありません。湖の主として、国境の守護者として、この湖が澄んでいることはクシャタラナト様の誇りであると、わたしはそのように了解していますから」

素直に感謝と誠意を見せたリエルに、だがクシャタラナトは少ししかめ面をしたようだった。とはいえそこに悪意は微塵も無い。

『……王は、無邪気であらせられるな』

そう言い残してクシャタラナトは水中に消えて行った。

「はい?」

そして直後、大人たちの笑う声。シュナやフォガリは腹を押さえ

て、ムルエルファスなどは腹の底から爆笑していた。

『ぶっはあっははははは！あっ、あ奴、クシヤタラナトのやつ、照れておったわ！』

「ぶふっ……くくっ……」

「ははっ、聖獣の御仁でも照れ隠しはあるのですね」

先日の、官舎へ赴いた時のようにリエルは首を傾げた。

大人たちが何故笑うのか、彼女には理解が及ばない。

「??」

ひい、苦しい！とまで叫び笑い転げるムルエルファスはともかく、兵士たち含めリエル以外の皆がこの出来事に笑っていた。

「あう……またわかんないです」

『本当によくやったな、エリー。ムルエルファス王を下すとは、このアールカインでも少々驚いた』

小鳥が囀さえずって低い声を響かせる。多少ギャップのある状況だが、リエルはすんなりと慣れたようだった。

はい、ありがとう。と幼少からの友に笑みを送る。

そろそろ帰り支度を、という時刻になっていた。戦いの余波でも馬車はなんとか無事だったため、今は散らかった道具や皆の所持品などを探して掻き集め、馬に積んでいるらしい。

弓兵などは自分の放った矢を全て回収するまで帰れないそうだ。

そういう規則なのだから。

ムルエルファスは騎竜の所に居るようだった。シュナが連れてきたゲマトルダットは、先日からムルエルファスが宿泊する竜舎にて飼育される一頭。その内の雄である。どうやら仲良くなったそうで、子分のように扱っていると聖獣の王は痛快そうに言っていた。

リエルがアールカインと話していると、フォガリがやってきた。シュナとレアも一緒かと思ったが、彼女たちは馬車のほうで荷の積み込みなどの手伝いをしている。

「お疲れ様でした、陛下」

「はい、騎士団長さんも」

「ふふ・・・」

フォガリは赤髪を風に靡かせて、何かを想っていた。剣をぽんと叩き、ふう、と息を吐く。

「アールカイン様。宜しければこのセイル・フォガリに教えていた
だきたいことがあります」

小鳥がピーと鳴いた。

聖獣と直接対話することを、リエル以外の誰もが不慣れだと言える。そうあるものだとは認識してこれまで生きてきたのだから当然だろう。だが、ムルエルファスの来訪によってその慣習にも少々の変動が生じていた。

礼節さえ保てば、気安くはなくとも聖獣との対話はあり得る。

『いいだろう。エリー以外は、と思っていたが特別に答えてやる。

なんだね?』

ありがとうございます。と前置いてフォガリは遠くを見つめながら口を開いた。

リエルがその視線を辿ってみれば、ゲマトルダットの姿がある。ムルエルファスを見ているのだ。

「ムルエルファス様は、本来の能力を封じておられたそうで」

『そうだな。あれは力そのものを自在に操る聖獣。微細な制御すら
思いのままだ。故に、己の体内、脳の中身をも自らの力で触れるこ
とで、能力を減衰することを可能としている。とはいえ、放置すれ
ば数日で治癒してしまうらしいが』

「そうですか・・・なら、今日見せていただいた力とは、本
来のものと比べてどれほどなのです？ 相当に縮小していると察して
いるのですが、あの方の実力を私は知りません』

「そうですね。どうなのでしょう、カインさん。ムルエルファス様
とってもお強かったけど、なんとかなくなってしまいましたよ?」

アハハハとアールカインは笑った。とても愉快そうな笑い声だっ

た。

ひとしきり笑ってからアールカインは小鳥を介して話してくれる。
『まあ、そうだな。確かに今回は相当抑え込んでいたようだ。本来であればエリー、お前でも無理だ』

「やっぱりですか・・・」

「・・・具体的には？」

ふふん、と小鳥がまた笑う。

『あれに全盛期などというものは無いことだし、今も当時と変わらぬはず。ならば、本気のムルエルファスであれば・・・』

「あれば？」

『一撃でこの国を、地盤もろとも吹き飛ばして焦土どころか巨大な湾にでも変えてしまえる。それくらいかな』

沈黙が流れた。

「いつ・・・一撃で、それほど？」

「まあ。じゃあ、ものすごく抑えてくださったのね」

親しい友の前だと素のリィエルだ。幼い口調にアールカインは妙に上機嫌で、フォガリの質問にもぺらぺらと答えてくれる。

とはいえ、あまりこれ以上聞きたくなっていくのも事実だった。恐ろしく薄い氷の上を走らされていた、そんな風に考えてフォガリはぶるっと身震いをする。

『ふふ、そう恐れずともよい。あれは聖獣の中でも特別慈悲深い性格をしているからな。無意味にこの国を吹き飛ばすようなことは無いと、このアールカインが代弁しておこう。意味があってもやるまい。そういう聖獣なのだよ』

「なるほど・・・」

「へえ・・・」

納得した様子のフォガリを見て、アールカインの操る小鳥はもう一度ピィと鳴いた。

『そなたの案ずる心もわかる、騎士団長。ユクティラの民が心変わりをせぬとも限らぬからな』

「あ、いえ・・・」

『だがその時には、我らが居る。このアールカインと、ここ東の国境のクシャタラナトが。国の守護者の末席として、我らは決して契約を違えることは無いだろう』

そう言い残してアールカインの操る小鳥は飛び立った。

リエルが手を振って彼を見送り、フォガリが感謝に礼を送る。

・・・やっぱり変な感じですねえ、あのお姿だと。

陛下もそう思われますか。

などと談笑して。

帰路に着く馬車の中、リエルの腕に抱かれるムルエルファスはずっと大人しくしていた。赤く染まった空を眺めながら、時折翼の毛繕いをしてはまた黙り込む。

ぽつり、と呟いたのは王都が間近に見えた頃。

「む、そうだ」

「はい？」

「やはり駄目ではないか、リエル陛下」

「ええと、何がです？」

毛繕いの終わった翼をばさりと拵げ、自分でもしげしげとそれを眺める。

リエルとレアも、その炎のような紋様の翼を見た。何が駄目なのだろうか。

「この翼だよ。やはり余は手が欲しい」

「どうしてです？」

「これでは、愛する我が子を叱ってひっぱたいてやりたくとも無理だ。やはり手のほうが便利じゃないか」

大真面目にそんなことを言う。

レアは思わず「ぶはっ」と噴きだしてしまっていた。肩を震わせにくくくつと笑いを堪えている。

はあ、とリエルは素直に言葉を受け取った。そして即答する。

「あら、じゃあやっぱり翼のままで良かったと思いますよ」

ムルエルフアスは首を上げてリエルの顔をまじまじと見つめた。リエルはきよとんと首を傾げて、そこに他の腹積もりなどありそうにもない。

「お母さんはわたしを叱る時は、おでこをちょんつつつくの。叩かれたら痛くて泣いてしまいます」

思い出すようにそんなことを言う。

リエルの生い立ちのことは知っていた。それでも、リエルは無邪気に言う。

誰かを叱る時でも、痛かったり辛かったりするのは嫌ですね、と。
「・・・・・・・・・・・・・・・・フハハ、やはりリエル陛下には敵わぬなあ」

第二話・「シックル・レスト」

事情が事情だけに、少し考えさせて欲しいという議員は少なくなかった。だが、ムルエルファスが頭を下げ、リエルの勅命でもあるということで、結局は皆も納得したようだった。

フィルラント王国にとっても破格の条件であることは間違いない。民にも動揺はあろうが、利点を考えればやはり歓待してくれるであろう。そういう結論に至る。

ユクティラ国との同盟はフィルラント王国議会の全面的な同意を得て正式に成立した。

王国東方の国境での騒動から二日。当初こそ大騒ぎで、ムルエルファスに対し叱責めいた言葉も聞こえたが、今はそれも収まった。今日も天気恵まれ、城内には朝日が強く差し込んでいる。

「やあ、リエル陛下」

「おはようございます、ムルエルファス様」

執務室の机の向こうにちんまりと。リエルは分厚い毛糸の部屋着を何枚も重ねた姿でムルエルファスに笑顔を見せた。

ひくしつ、と可愛らしいくしゃみも付け加えて。

「むう、いや・・・すまなかったね」

「ひえ、らいじょうぶれふ」

机に何枚も重ねられた安布のハンカチから一枚、ちん、と鼻をかむ。

あれだけ体中ずぶ濡れにされてしまったのだ。よく拭いたものの、元々少し体が弱っていたリエルは、ものの見事に風邪を引いた。それでこの格好。レアも大げさだとは思いますが、実際まだ朝は寒い。来たのはムルエルファスだけらしい。どうやってドアを開けたのかと思ったが、先日見せてくれた彼の能力で戸を押したのだろう。

「どうされました？あ、朝御飯です？」

「いや、そういうわけでもないよ。ただ寄ってみたただけだな」

「はあ」

爪をちゃかちゃかと鳴らしてムルエルファスは置かれた椅子に飛び乗った。そういえばあの壁際に並んだ二つの椅子は何のために置いてあるのだろう。たまにサエラが休んで座っていたりするが、リエルが座るには少し背が高い。

すんすんと鼻を鳴らしてリエルは書類の一枚に目を通し終わり、玉印を捺した。

「順調かね？」

「はい。おかげさまで、種まきの時期までに間に合いそうです」

「それはよかった」

北部農耕地の土砂除去作業に着工したのは、クシヤタラナトからの許可が出てからすぐに翌日より。元々すぐにでも作業が始められるように資材等全て揃えており人員も待機していたので、急な決定にも関わらず作業は本当に順調だと聞いている。

目を通した書類は追加の機材や細々とした作業内容の変更などに許可を求めるもの。宰相ハンネルに任せてもよいものだったし、財務長官のペリユークの所で決定印を捺してもよいものだが、他の部署を通す必要もない簡単な決済なのでリエルが引き受けている。

「明日、視察に行こうと思うのですが、レアさんが止めてって言います。うんと暖かくしていけば大丈夫だと思うのですが・・・」

「はっはっは、まあ、気持ちはわかるが侍従長の言うことももつともだな。医者と相談して体調が良ければ、にするのがよからう。見たところリエル陛下は、成長すれば体も丈夫になるだろうが今の内は少々病弱だろうしな」

「お分かりになるのですか？」

「そういう目を持っているのでね。なに、数年の辛抱だ」

「そんなに待てないです。早く大人になりたいです」

「ふふ、子供は皆、同じように思うようだよ。自然に身をまかせておけばよい。誰であっても、いつかは必ず大人になるのだから。逆

に子供には決して戻れないのだ。今を十分に堪能したまえ」

「はぁ……」

そうとだけ言ってムルエルファスはいつものように羽の付け根をクチバシでつついていた。

時折鼻をかみながら、リエルが書類を次々に片付けていく。ムルエルファスは黙ってその様子を眺めていた。

どれくらい、そうして時間が過ぎたか。恐らく一時間ほどで事務は済んだと思われる。

リエルが書類の最後の一枚を置いたのを確認すると、やっとムルエルファスはクチバシを開いた。

「明日、帰ろうと思う。それを伝えに来た」

急な言葉にリエルは驚いて目を丸くした。

「まあ！早く言うてくたさればよろしかったのに！」

リエルは慌ててペンを置くと、ムルエルファスの目線に合わせて彼の前に膝をつく。ムルエルファスの優しい瞳が彼女を見つめた。

「もう少し居てくださっても……あ、でも……」

察してリエルは気まずそうに口を閉ざす。

ムルエルファスが何のために国を留守にしたか、それを思い出した。

「そういうことかな。ふふふ、お気遣いに感謝する、リエル陛下」

「はい……残念ですけど……」

では、とムルエルファスは続けた。

「今日のところは心残りの無いように、のんびりとこの国を見てまわろうと思う。城外は一通り見たからな、残るは城内の様子を見ておきたい。風邪を召されているところに悪いが、よろしいかね？」

「ええ、是非案内させてください。すぐがいいです？もうわたしもお仕事が終わったので一緒にできますけれど」

「いや、少し休憩をとってからでよいぞ。のんびりと、だ。お体に障ってはいかんからな」

「うふふふ、ありがとうございます」

ちやうど執務室のドアがコンコンと鳴って、レアが紅茶の載った盆を持ってきた。

昼前なので菓子はない。

さて、何と言って説得したものか。リエルは話を切り出すタイミングを模索した。

城の厨房を預かる料理長シワロ・ケジャックは、皺の入り交じった顔を歪ませて喉の奥を低く鳴らした。

「どうしましょう、料理長・・・」

「知るか。こんなに食いきれん。兵隊さんらを呼ぶしかないな」

「騎士団長と宰相様にお伝えするんですか？」

「ついでに千人長もだ。旦那のほうに手伝ってもらおう」

「もう、本当にご婦人と仲悪いんだから料理長ったら」

衛生服を着こむ料理長に気安く喋りかけるのは、同じく衛生服を着た長い黒髪の少女。厨房でコック見習いをしているベルミ・トタール・ケジャックである。料理長の親戚として同じくコックの道を目指した少女は、今では厨房の凸凹コンビという認識を城内の皆からは受けている。

料理長の方はそう言われるたびに殺気のこもった形相をするので、口に出して言う者は少ないが。

二人の目の前には、厨房の大きな調理台がある。そしてその上に置かれた大量の布包み。

ひと抱えほどもある包みは全部で十個。中身は、全てあの魚介パ
イだった。

二人がどうしようと悩んでいると、厨房にサエラが顔を出す。

「ベルミい、リエル様も魚介パイでいいんだってお弁当・・・って、どしたの二人とも、そんな怖い顔して」

包み一つにつきパイ三枚。総数三十枚の、一つでも巨大な魚介パ

イを持ってきたのはまさしくこのサエラだった。当然、運ぶために人を手伝いに使ってはいたが。

「馬鹿サエラ！どうすんのよこんなに！もう暖かいんだからすぐ腐っちゃうわよ！」

「え、ええゝゝ大丈夫だって。皆で頑張ればすぐ無くなるからさ」

「皆って誰よ！大宴会でもするつもり！？」

サエラを見つけた途端に怒り心頭のベルミである。噛み付かんばかりの勢いにサエラも慌てて弁解するが、果たしてその的外れな意見には料理長シワロも渋面を深めた。

「まあ落ち着けベルミ。それとサエラ、これは兵隊の皆さんにも分けるようにするが、次からはこっちに量なんかもキチツと断ってから持ってきてくれるかい。こんなにあっちゃ食べきるまでに時間がかかる。城仕えが暇じゃねえのはこの一週間で思い知ったんだろ？」

「あ、あのあのゝゝゝゝはい、ごめんなさいゝゝゝ」

「今回はもう気にしなくていい。お前のとこの母さんに、あんまり調子に乗るなと伝えてやってくれるか」

「ええゝ？そんなこと言ったら母さん落ち込みますよお」

「こんだけ作る元気があるなら少々落ち込むくらいが丁度いいだろゝゝとにかく、少しは加減してくれと言っておけ。いいな？」

「はあ」

呑気な返事にベルミがつかつかと詰め寄りサエラに食って掛かる。「本当にわかってんでしょね！あんたたってばいつも面倒事ばかりゝゝゝ！」

「ああ、はいはいわかってるよ。そんなに怒らなくてもいいじゃない」

「だから！そういう態度がゝゝゝっ！」

「ああゝはははゝゝゝごめんごめん」

背の高いサエラに食って掛かる背の低いベルミ嬢。歳もサエラより一、二歳下だったはずだ。城ではサエラのほうが遥かに先輩のは

ずだが、性格的にベルミはいつもこうだった。サエラの自業自得でもあるが。

ふん！と冷たく突き放してベルミはサエラを解放した。

「あんた、今時間ある？」

「は？あ、う、うん。リエル様のお昼はお弁当だし・・・まだ出発まで時間あるよ」

「ならちよつといいかしら。おじ・・・料理長、サエラに味見してもらっていいですか」

聞かれたシワロ料理長は少し考えて、にやりと笑った。

「うん、いいだろ。サエラの舌なら信用できる」

「？・・・え、なんですか？シワロさんが笑うとか少しこわ・・・」

「何か言ったか」

「いいえなんにも！」

などとやっている間にベルミが厨房の奥から何かを持って来る。

使い古されたバスケットに大量に盛られた、色とりどりのパンや菓子。

「どうしたのこんなに？」

「陛下用よ。パンやクッキーの味とか練り方から変えてみようと思つて」

「ほほー」

「あんまり食べてくだらないみたいだから、食べやすい味付けを調べたいの。あんたなら陛下と仲いいらしいし、こういう味付けが好みか大体わかるんじゃない？それで」

見れば、かなりの量があるパンや菓子は全て一つずつ種類が違ふ。よくもこれだけの量を丁寧に作ったものだと思ふ。サエラは感心してベルミを見た。

「おじ・・・料理長も一緒に作ったのよ、当然だけど」

「ははあ、なるほど。ふーん・・・食べていいの？」

「そう言っただけじゃないの。順番に食べてみてちょうだい。ちゃんと食べ比べて意見を言っつてよね」

「はいはい。なんだ、こんな用事ならいつでも大歓迎だよ」

喜んでいきなり一つつまむサエラ。これで貴族の令嬢というのだからお笑い種だとベルミは半笑いだった。

その様子を眺めてシワロは厨房の奥へ戻る。仕込みなどがあるのだろう。厨房の火というものは、基本的にほとんど消えることは無いものだ。シチューやソース作りなど、数日かけての仕込みを必要とするものもある。彼らほど休みという言葉と縁遠い職種も他に無かった。

「あ、この甘いおいしい。そっちのしょっぱいのは、ちょっとしよっぱすぎ」

「ふんふん」

「そっちの甘いのもつかいちょうだい。・・・うん、これもつと柔らかくていいんじゃないかな。皮のところカリカリだといいなあ」

「・・・うん」

「クッキーは、と・・・あー、この紅茶の葉のやつは駄目だなー。スースーする。あ、ミルクちょうだい」

「・・・サエラ？」

「もぐもぐ。んー、あー、このジャム塗ったやつすごい好きだわ。このジャムどうやって作るの？」

「ちよつと、サエラ!？」

「な、なに」

ひたすら食べ続けるサエラ。一応もぐもぐと寸評を喋っていたが、ほとんどが自分のための感想のように聞こえる。

慌ててベルミが止めさせた時にはすでに三分の一ほどもペロリとたいらげてしまっていた。

「陛下のためについて言っただでしょ! あんたちゃんと食べ比べてるの?」

「ちゃ、ちゃんとやってるってば・・・」

「嘘おっしゃい。まったく・・・それにしても、そんだけ食べて太らないの? 一口ずつでいいのに」

まだもぐもぐと口を動かしながらサエラは目を泳がせつつ、自分の腹回りあたりをさぐった。

「ひ、人よりは・・・多少太りにくいみたいだけど・・・」
腕組みをしてベルミが見下ろしてくる。視線が痛い。

「知ってるんだから、陛下がお残した料理のつまみぐいしてることとか。あんた、二の腕太くなったわよね」

「うええ！？やめて！やめてよそういうこと言うの！」

「この脇腹の上のところとか」

言いつつ、突付く。

「いひゃっ！や、ちょ、ベルミ！」

「ほらほらぶにぷにしてんじやないのほらほらあ」

更に突付く。

「やあーっ！もう、やめてよ！」

「うなじのとも・・・あーあ」

そして突付く。

年下の少女にされるがままのサエラ。だが、何故か抵抗しきれていない。性格の差による本能的なものだろうか。

レアに叱られている時と同じような表情のサエラは、涙目で悲鳴を上げ続けた。

「ほらほらほらほらあ！」

「やーめーてー！」

ベルミは実に楽しそうな顔をしていた。

「親の関係とは正反対なのね。面白いわ」

「笑い事じゃないですよレアさん。もう、私あの子苦手ですよ」

「仲が良くていいことじゃない。さ、それより早く」

「はい」

レアとサエラが昼食の入った籠やその他にも細々としたものを荷物用の馬車に積みながら、何かを話している。何の話かな、とリィ

エルも気になったが、馬車の窓がコンコンと叩かれてそちらを向いた。

「もうじき出発となります。お加減はどうですか、陛下」

シュナが馬に乗ったまま窓越しに聞いてきた。

リエルは風邪を引いたままだったが、近場の遊覧であればきちんと暖かい格好をして薬を持参して、であれば問題ないだろうというのが医者の話だった。彼女自身も自分で検診してみたが、どうやらその通りらしい。

専用の台座に座ったムルエルファスが少し心配そうに見てくる。

「辛くなれば言いなさい。余のために無理はかけさせられんからな」

「うふふ。いえ、大丈夫です。シュナさん、平気ですよ。お薬も飲んできましたから」

伝えるとシュナは微かに微笑んで頷き、手綱を軽く弾いて車列の先頭へ向かった。

それを見送り、ムルエルファスがぼつりとクチバシを開く。

「うーん、相変わらず、人馬一体とはああいいうものを言うのか。絵になる女性だな」

「はあ、そうなのですか」

「うむ。馬の乗りこなし方が実に自然体で素晴らしい。湖からこの城まで一時間で往復したと聞いたが、なるほど納得もいく。相当に馬術に習熟しているのだろう」

「早かったですものね」

「よほど幼少から馬と親しんで暮らしていたのだろう。互いに信頼しあっているのがよくわかるよ」

「へえ・・・」

おかげで助けられたなあ、とリエルは感謝を込めて心のなかでお辞儀をする。

そうこうしていると、馬車の扉が開いた。乗り込んで来たのはレアだ。いつものメイド用の黒い作業用のドレスではない。きちんと外出用の服を着ている。先日 of 国境へ赴いた時にも似たようなもの

を着ていたな、と思い出す。

ふむ、とムルエルファスが呟いた。なるほど、これはリエルにも分かる。とても似合っていて、様になっている。パリッと着こなした地味めな色合いのドレスと厚手のコートが、実はそれも侍従用の制服の一つであるにも関わらず、レアを上流階級の令嬢のようにも見せていた。実際、出自はそれなりの家だと聞いている。

「お待たせしました。さあ、出発しましょうか」

「はい」

レアが席につき、さあ出発しようかという所に、また誰かが戸を叩く音がした。

御者はもう馬に鞭を入れているため、馬車はゆっくりと走り始めている。

「あれっ、サエラ？」

慌てて窓を開けると、サエラが小走りしながら手を伸ばす。

「はいリエル様。おやつです」

「えっ！？ あ、あの」

「ちよっと、サエラ・・・」

「あははは。じゃあ行つてらっしゃーい」

小包を投げ渡し、適当に手を振って立ち止まる。

なんとも、雑な少女だ。

「・・・豪快な娘だな」

ムルエルファスでさえそう言うのなら相当なものだろう。

リエルは渡された小包を開けようとしたが、なんとなくそのままにしておいた。

「後で食べましょう」

包みを少し開いた時にいい香りがしたからだ。今ここで自分だけで食べるのではもったいないので、後で皆で食べよう。そう胸の内で決めて、開きかけた古紙の包みを元通りにした。

くすくすと嬉しそうに笑い、包みを大事そうに持つ。

「きっと美味しいものです」

「まったくあの子は・・・陛下、あんまりサエラを甘やかさないでくださいまし」

「はあい。わかりました」

和やかな空気に、ムルエルファスは体を深く沈めるように台座に座り込み、目を細めた。

「・・・ああ、よいな」

ぼつり、とクチバシを開いて。

城郭じょうかくの北から中庭を挟んで内門をくぐり、大きな広場に出る。馬や馬車、騎竜などの乗り物はこの広場から出発する。

広場の先には城のある丘陵の斜面にて螺旋を描く形の道があり、長い緩やかな坂道を作っている。途中何度か水平に戻る道は、丘陵に沿って建てられた施設などを横切り、およそ一周する頃に麓の城内町へと入る。

一度リエルが、この坂道ではなくまっすぐに斜面を下る坂道を降りられないのかと聞いた。すると、この質問を受けたハンネル宰相はこう言ったという。

「陛下はたまに、少々抜けておられますなあ」

そう言われてリエルは少し考え、あっと声を上げて赤面した。つまり、まっすぐ下る方の坂道では、人間の見た目に緩やかでも馬車の車輪がその斜面でどれだけ加速することか。少なくとも馬は大怪我をするし、馬車に乗る者も無事には済むまい。そういうわけで、この緩やかな坂道を馬車で下るのは少々面倒だが、城の立地的にも仕方のないことだと納得している。それに、ここを下りながら見る景色はなかなか悪くない。

城内町の見学といっても、ほとんど見るべき場所も無い。ただ、のんびりと走りまわるだけの遊覧だった。ぐるりと城のある丘を一周するだけなら、馬車ならば一時間強で戻ってこれる程度の距離だ。しかし、リエルとムルエルファスはこの遊覧を楽しんだ。

この城内町の雰囲気は、言うなれば「平均的」だろうか。富豪が美しい屋敷を構えているわけでもなく、かといって貧困に苦しむ人々が通る人の情けを恵んでもらうこともない。商店が立ち並ぶ一角でも、妻帯者の議員や兵士の妻や子がのんびりと買い物をしていたりする。が、城下町にあるような派手な客の呼びこみや、心地良い音色を奏でる路上の楽士が居るわけでもない。

役人の家族、あるいは本人たちのための、安定。それこそが城内町の特色と言えよう。可もなく不可もなく、穏やかに。

時々、馬車を止めて町の様子を見てみた。安穏な空気感のある町とはいえ、少々の娯楽として菓子を売る店などくらいはある。他に、これは城下町ではほとんど見られない大きな書店。聞けば古書店だとのこと。城の使い古しや、城内町の面々が読み終えた本を引きとっているとのこと。

「でも、やっぱり少しお高いんですねえ」

「ええまあ、本はそういうものですから」

ほんのりとカビの匂いのする一冊を手にとってリエルは言った。タイトルは法律全書とある。

実際、古書でも本は庶民に手の届くものではない。金貨一枚とはいかないが、銀貨単位での価格が普通である。印刷技術や製紙技術、どちらも試行錯誤は繰り返されているが、どうにも安価な書物の製造は難しい。

本が並べられた棚は丁寧に管理されており、極力本が傷まないように様々な工夫が見て取れた。その一角にて、リエルは足を止める。

「あらら・・・仕方ないですね」

リエルの腕の中でムルエルファスも苦笑した。レアは本棚を見て、やはり苦笑する。

並んでいるのは王立学院で使われる、秘術などの教本だった。本来は持ち出しの許されていない書物である。

王立学院の学習は困難を極め、落第する者は圧倒的に多い。入学

した中で修士課程を無事に通過し、学院の学芸員となる者となれば全体の二割を遥かに下回るのだ。そして除籍処分となる際、貸与していた教本は回収されることになっている。

が、どうやらそのまま持ち出してしまふ者が多数居るらしい。それはそうだろう、とかく書物とは高価なのだから。内容如何に関わらず、本というものはそれなりの金額で売れる。それがフィルラント王立学院の教本ともなれば更に。

古書店の店主は政府から許可を得て出店している者だが、確認してみるとどうやら秘術の教本については関知しているという。

「拒否はなさらないのです？」

「そうしてもよいのですが、他国に持ち出されたり廃棄されてしまうよりは良いと思ひまして」

とのこと。独断でやっているらしい。

どうやっても無断持ち出しが止まらないなら、これは最善の手と言えよう。ムルエルファスも感心していた。

レアと協議した結果、店主の判断を政府として支援することを決めた。ただし、そういう決定があったことを、次に売りに来る人に伝えてみてください、と言ひ残す。そうすれば、ちよつとは考えてくれるだろう。捨てるか、売るか、所持するか・・・復学か、返却か。学院の所持者、フィルラント王国政府はあなたの判断を見守ろう、と。

教本はどれくら在庫があるのか聞けば、時折購入する兵士や議員も居るそうだが、ほとんどは倉庫に保管してあるという。結構な量なのだろう。店主の初老の男性は朗らかに微笑んだが、同時にほんの少しだけ困ったように眉を下げていた。

「政府で引きとって再利用しましょう。王立学院のお伝えすれば分かってくれるはずです」

「本当ですか。それは助かります」

「ええ。本は、大事にしないといけませんから」

リエルが個人的に所有している本はどれも読み古されてボロボ

ロだが、それでも捨てたり売ったりなどせず大事に保管してある。今もたまに読むくらいなので中身は一切傷もなく綺麗なままだ。

南側の街並みはこの古書店のように政府から許可をもらって出店する商店を中心にしており、この出入り業者らが城下にそのまま店舗を増やして広がったのが南部の繁華街とされている。件のペリュークやウィバルといった豪商上りの議員が居るのも、こういった関係から当然といえば当然である。というより、その手の議員の方が基本的には多い。リエルの代ではやたらバランスが取れているというだけだ。

そのまま道なりに馬車は走り、西側へ。

穏やかなりに活況のあった街並みは、この辺りから急に大きく美麗な建築物が目立つようになる。住宅もあるが、政府管轄の庁舎などが数軒、それに関連する資材倉庫などが数軒、など。

西側の城下町は公共施設が多いが、ここにあるのはその中でも国民との接点が少ない庁舎ばかり。つまり、税務署などの施設は直接国民との事務的なやり取りがあるため城下にあるが、一方でこちらは外務省や法務省など国民との直接的な関わりが薄い施設が多いことになる。

「・・・派手よのう」

「そうですねえ」

「誰に見せるわけでもないでしょうに・・・」

三様に同様な意見だった。

誰が先に始めたのかは知らないが、この辺りの建物は競いあうように年々豪華になっている。湯水のように、というわけではないが、補修という名目にかこつけて税金が多く使われているのはこういった部分だろう。

先王時代までの、少々首を傾げなくなる役人たちの風習とでも言うか。

「ここでみんなお仕事してるんですね」

「ええ。城の部屋だけでは限りがありますし、専用の機材を用いる

部署も多いですからね。城下にあった公的機関とは少し趣を異にするのもその辺りでしょう」

「ほう」

西門に面する広場を貫く形で道は通っている。煉瓦の敷き詰められた広場には役人と思しき人々がそこかしこに歩いているのが見られ、皆それなりに忙しそうではあった。だが、リエルの乗る馬車に気づくと畏まって礼をする。

リエルが笑顔で手を振っていると、ふと目に止めた人物があった。

「あれ、ハンネルさんです」

「本当ですね。まだお仕事でしょうか」

「そういえば今日はお城でお姿を見てませんねえ」

ハンネルはこちらに気付かなかつたらしく、歳の割に早い歩調である建物へと入っていった。

「財務局ですね」

「あ、じゃあ今朝渡した書類の決済が終わったんでしょう。でも、ご本人が持ってきたのかしら」

「そうなるのでは？」

財務庁から上がってきた作業員の給与、資材の代金、農家への補償、その他諸々の経費の調整は、今朝までやっていた書類でほぼ片付いた。ハンネルが精査してリエルに渡したものの、リエルに直接届けられたものなど全てまとめてもう一度ハンネルの所で最終的な微調整が行われ、そしてまた財務庁を通して予算の中から特別枠を設けて支払いが行われる。

今回、北部農村地域の復興に関して財務庁の担う仕事はかなり多い。その最後の部分をまとめて、ハンネルは届けに来たのだろう。なるほど、書類を渡してしまえばハンネルもしばらく手が空く。どうせしばらく暇になるのであれば、しっかり仕事をするよう財務局に直々に釘を刺しに来たというところか。

「ご挨拶をしていきましょう。財務局も見たいです」

「余も同意だ。宰相閣下には何かと苦勞をかけた。直に礼を言いたい」

という両陛下の意向で、レアは頷く他無かった。

「わかりました」

馬車を止めさせる。先頭では急な停止にシュナが気付き、ゆつくりと引き返して来た。

「どうされました？」

「財務局の見学を。ハンネル宰相閣下をお見かけしたので、一緒にご挨拶を、と」

「了解した。では、こちらへ」

そう言ってシュナが馬車を先導し、財務局の前へ着ける。役人たちの礼に迎えられてリエル一行が馬車を降りた。

要するに、国の金庫番である。以前ペリユークもそんなことを言っていた。

財務庁というと一概に何をするのか広義的すぎる気はするが、税務、国庫管理を引き受ける部署というわけだ。

金の行き来がこの庁舎に集束するということで、数ある省庁の中でも期間を問わず、また特定の期間は更に、多忙を極める部署とも言われる。処理する書類の数は気象観測局の使用する紙の量に匹敵する。

その多忙な財務庁には、城下から許可を得て門をくぐりやって来た大勢の商人などが詰め掛け、税金等の決算を行ってもらおうと列を作る。皆必死だ。この処理を経なければ税金は規定の満額を納めることになるので、かなりの差額を損することにもつながる。控除を求める列は長い。

「ほとんどの商人は春頃に決算期を迎えますからね」

そうレアが説明し、シュナも頷いた。

先年までの国家予算、税率が決定し施行される直前がこの時期に相当する。決算書類の受領は春先の、新予算、新税率が施行される

直前までと規定されている。これを過ぎると税額控除は取り消されてしまう。

この財務庁に直接出入りして決算報告を行うのは、政府御用達の大きな取引を行う豪商や、公的に管理下に置く組織などになる。取り扱う額面が大きすぎるため報告は一度で終わらず、何度も足を運ぶそう。そしてそれ以外、中小の規模の商人は国内に点在する役所などの一部署である税務署で同様の処理を行うらしい。

「忙しそう・・・」

「これは余の国では真似したくないなあ」

あまり邪魔をしてはいけないな、と入り口の扉をくぐってすぐに隅に避けていたリエル達。だが、豪商や公的組織に属する人々といえbaumり上流階級の商人、貴族、あるいはそれに連なる家柄を持つ国民ということだ。

先日の戴冠式、教会の前で馬車を降りたリエルを、その取り囲んだ群衆の最前列に並んで目にした者が居ないわけがない。

「陛下・・・・・・・・？」

「おい、国王陛下だ」

「リエル様!？」

「王様だ!」

と、まあこんな調子になるのも無理からぬことと言えよう。

わっ、と列を作った群衆が歓声を上げた。

「人気者だな」

「あう」

これはまずい、とシュナも察したか。素早くリエルの前に立って群衆の機先を制する。ここで取り囲まれていたらこの後の行動に差し障る。

「諸君、陛下はご公務中であるため静粛に願いたい」

「諸く・・・あれ？」

よく通る落ち着いた声。シュナより先に群衆を抑えたのは、ハネル宰相だった。

長年この国を支えてきた名宰相のお出ましである。その顔は上流階級の人々にとってよく見知ったものであり、圧倒的な発言力を持つ人物として記憶されている。騒ぎは一瞬にして静まった。

シュナが役目を奪われて口をぱくぱくさせている。

「諸君らも暇ではあるまい。さあ、列に戻りたまえ」

さあ、ともう一度。商人たちはそれでもリエルのほうにお辞儀をしたり跪いて礼拝する者も居たが、ハンネル宰相の気迫に圧倒されたか皆静かに列を作り直した。

「こんにちは、ハンネルさん」

「こんにちは陛下。奇遇な所でお会いしましたな」

「ええ。ムルエルファス様と、城内の街並みを見て回っていたのです」

「ほう、それは」

その前に、とハンネルが一行を局内の奥へ案内した。さすがにロビーでムルエルファスの名前を出したりリエルを立たせたまま話すのはよろしくない判断したのだろう。向かった先は、長官室。

「財務長官、すまないがまた失礼するよ」

と、軽い調子で片手を上げ部屋の主に挨拶をする。つい先程までここに居たらしい。

「おや宰相閣下、どうして……あっ!？」

「え? あっ!？」

リエルはため息をつきそうになり、思いとどまった。そして何も言わなかった。腕の中のムルエルファスが「どうした?」と言うが、黙って両側に立つ二人の女性の動向に任せる。

「はぁ……」

「またですか、お二人とも」

シュナが深くため息を吐き、レアが甘い猫撫で声を発したのを確認して、リエルは満足そうに前に出る。「だから、どうしたんだ?」

「ごきげんよう、ペリユークさんにウィバルさん。突然来てしまっ

てごめんなさい」

財務局の奥、建物のほぼ中心に位置する部屋が、財務長官に割り当てられた執務室である。防犯のため窓に面さず、扉は重厚。壁の厚みから考えて、防火処置も施されている部屋だ。

壁には一面、膨大な量の書類を保管する棚が配置していた。長年に渡り蓄積し続ける極めて重要な数字が記されていると思しき書類束がそこには保管されており、仮にこの部屋が焼失でもすればフィラント王国は財源の三分の一を丸ごと失うことになる。残る三分の一は王城に、もう残る三分の一は各財務局支部、つまり税務署に分散保管されているらしい。

部屋の主はペリユーク・ヤカラボ財務大臣。先日リエルが官舎まで赴いて念を押したので、最近はずいぶん財務局に顔を出しているという。だが、たまたまかもしれないが現実にご覧の通り。

ウィバル・ランデミス外務長官が紅茶の入ったカップ片手に来客用の椅子に座り、目の前には例のボードゲーム、シックルがご丁寧に置かれていた。試合途中らしく駒のいくつかは移動している。

「うん？・・・ああ、ははは。なるほど」

シユナとレアが渋面を作る理由を察したらしく、ハンネルが笑った。

「さ、宰相・・・」

「まあ、こ奴らは仕方ないでしょうな。これでも昔より落ち着いた」
何の助け舟にもならぬ言葉でフォローされ、ペリユークとウィバルは当然のごとく更に慌てた。なにやらもごもごとリエルに対し弁解でもしたそうだが、言葉が出てこない。

「ええと、お仕事はちゃんとやっているのですよね？」

「う・・・は、はい。それはもちろんです」

「同じく。私はあまり多忙ではありませんが・・・」

答えるペリユークとウィバル。それはそうだろう、財務局のこの忙しい時期に仕事を放り出して遊んでいたら、内紛が起こる。一方の外務省が今はまだ仕事も少なく暇だということも聞いていた。

それにしても、仲のいい二人だ。というより、このシックルというゲームが好きすぎるのか。

「随分と熱心なことだ」

冷ややかに言うのはレアだ。

「いや、まあ、最近時間が余るものでつい・・・久々に対局してみると、やはり面白いもので」

「・・・同じく」

と、中年二人。なんとも優雅なことだ。

それまで黙っていたムルエルファスだったが、ふうん、と呟いてからクチバシを開いた。どこか楽しそうに。

「シックルか。久しぶりに見たな」

リエルが知らないのは周知となったが、ムルエルファスがこのゲームを知っているとは皆も驚いた。

「ご存知なのです？」

「ん？ うん、まあ知っているといえば知っている」

だが、次に発せられた言葉には更に驚かされた。

「余が作ったのだからな」

——は？

もう何がこのニワトリ王から出てきても驚かないと皆も思っていたが、これは予想外だった。だが、ムルエルファスはリエルの腕から降りると椅子に飛び乗り、ボード上の駒をしげしげと眺める。懐かしむように。

「直接作ったというと語弊を招くか。うむ、余が発案し、人間がそれを受けて作ったと言うほうが正確だな」

ほとんど意味が変わっていない。

駒の並びを見てムルエルファスはふむふむ、と感心するように首を振っていた。

「この遊びの起源って・・・」

「相当に古いとは知っていましたが、まさかムルエルファス様が考案されたとは」

シュナとレアが呆然と呟く。リエルはそんな二人の顔を見上げて、その凄さがよく伝わっておらず首をひねる。

見ればハンネルも固まっていた。彼までも驚愕させるほどの事実ということなのだろう。

ムルエルファスはそんな人々の驚きの表情を見て、やけに満足そうに一つ頷く。

「対局中か。そこな二人かね？」

突然声をかけられて、ペリユークとワイバルは大いに焦った。そういうえば、この二人はまだムルエルファスと直接会話したことがない。

「そ、そうでございます。私はペリユーク・ヤカラボ。財務大臣を務めさせていただいております」

「私はワイバル・ランデミス。外務大臣です。お初にお目にかかり光栄に存じます、ムルエルファス様」

「うむ」

それで、とクチバシが呟く。

「中盤、膠着しておるな。黒がやや優勢か・・・どうだ、白駒のほう、余と交代してみぬかね」

「へえっ？」

仰天して声を上げたのはペリユークだった。白駒を使っているのは彼らしい。

以前リエルが官舎で見たシックルのボードとは違って、今日のものはとても高価そうに見えた。木彫りの駒ではなく、石彫りの美しい光沢が映えるしっかりした造りの一品である。新品のようには見えず、どうやらペリユークの私物らしい。

慌てるペリユークを差し置いて、ワイバルは対局を所望されて逆に落ち着きを取り戻したようだった。

「途中から交代ですか。それでよろしいので？ 私としては、陛下と

の対局とあれば序盤から始める光榮に預かりたいところですが。よもやシツクルの創始者とは露知らず、これは是非私のほうからも対局を挑みたく存じますな」

ムルエルファスはクチバシを斜めに傾けた。ウィバルの言葉の端に何を捉えたのやら。

「ほう、言うではないか！よいな、よいぞ。貴公、外務大臣だと？」
「ええ、左様です」

何故か強気なウィバルである。シツクルというゲームに関してこれほど熱くなる性格だったとはハンネル宰相も知らず、苦笑まじりのため息を一つ吐いた。

「盤はここからだ。よいかね財務大臣殿、この対局を引き継いでも」
「は、はあ。それはもちろん、ご随意に……」

「よいかねリエル陛下。少々時間を戴くことになるが」

「ええ、是非対局を拝見させていただきます。わたしはこの遊びを知らないのです、お勉強にさせていただきます」

「なんと、シツクルを知らぬとな。ふむ、ではよく見ておくとういぞ」

やはり知らない方が少数派ということなのか。さすがにリエルもここまで皆から驚かれると、少々落ち込んだ。とはいえ、知らないものは知らない。母も教えてくれなかったし、そもそも思い出す母ミュシェはこういうゲームを好まないほうだった。

まあ、なんにせよ新しい知識に触れる機会だと気を取り直す。

「はい、よろしく願います」

そう告げて、テーブルを囲む席の一つに座る。

ウィバルも席につき、ムルエルファスと向かい合った。

「すまぬが駒を動かすのはどなたかにお願いしたい。余がやってもいいが、見たところこの道具はよいものと思える」

「……では、私めが」

申し出たのはレア。本来ならペリユークの役目かもしれないが、駒を預けた立場ということか。大人しく自分の席からこの状況を静

観していた。ハンネル宰相も興味深そうにし、椅子が足りないため立ったままだが覗き込むようにボードに注視する。シュナも同じく立ち見。

ウィバルは余裕そうというわけでもないが、寡黙な性格ながら表情は楽しげだった。この稀有な対戦相手、ムルエルファスとの対局とあっては彼も興奮を隠しきれない様子である。

ふとリエルは思う。そもそも、ムルエルファスはこういったボードゲームに堪能なのだろうか。いや、そんなはずが無い。ユクテイラには道具を使う文化が無いと、彼の口から聞いたはずだ。日常的にこういった遊戯を出来る環境そのものが彼の国には存在していない。

では、どうなるのだろう。

そんな事を思っていると、ウィバルが駒に触れた。順番は彼から。

シックルは、要するに我々の言うところのチェスである。基本的なルールも同じ。ただ、駒の形と名前が違っている。

キングは「王」、クイーンに「騎士」、ビショップが「投石機」、ナイトには「弓兵」、ルークは「聖獣」、そしてポーンに「歩兵」。動かし方も同じ。元々存在していた簡易な類似するゲームを、戦争という枠を当てて作られたため、という由来の一部はよく知られる。シックルという単語は、本来”首刈り”を意味する。そういう名前の道具が実在し、実際に斬首刑などに用いられる大型の刃物を指す。これにちなんで、相手の「王」に対し王手を仕掛ける場合には「シックル」と宣言するのが習わしとなっている。そして、相手を投了させる一手を打った場合には「シックル・レスト」と宣言することになる。「レスト」は”首”。よってシックル・レストとは”首を刈り取った”という意味。

なかなか悪趣味な名称だとリエルは思ったが、少なくともこの国では斬首刑は行われていない。シックルという道具の存在も知っているが、この国は所持していないはずだ。死刑の執行はほとんど

が絞首刑と定められている。

ウィバルの手が動き、駒の一つを動かした。

投石機を縦5、横7へ。

「黙ってやるのも面白くないな。一つ、この遊戯の発案者として^{うん}蓄^{ちく}でも喋^{ちや}ってみようか」

手を考えながら、ムルエルファスが言う。

「ほう、それは是非にもお聞きしたい」

「ふふふ、うむ、任せておけ」

ウィバルも興味深そうに耳を傾けた。

「そうだな・・・由来から話すか。この遊戯が、今はあまり行われないようだが、代理戦争の手段としても用いられることは知っているかね？」

「ええ、まあ」

頷いたのはウィバル、ハンネル。この事実を彼ら二人に限っては知っておく必要はある。他にリエル、フォガリなども。そのため、知らなかったリエルは驚いて目を丸くした。

「戦争はせねばならない、だが流血は避けたい。二国間において利害の一致を見た時に、シッケルの提案は為される。では、余の一手・・・投石機を縦3、横5だ、よろしく頼む、侍従長殿」

「はい」

レアがムルエルファスの指示に従って駒を動かした。手の良し悪しはまだ不明。

「ある、二つの国があった。両方ともがそれなりの大国であり、瞬く間に版図を広げる強力な国家であった。ただ、その二つの国は建国より以前から、王の祖先の代から終わりの見えぬ戦争を続けていたのだ。二つの部族として100年。建国してから終戦まで250年」

ムルエルファスが軽く言うので錯覚しがちだが、人間の間で行われる戦争としては破格の長さである。異常とも言っている。

ウィバルが次の手を指した。また投石機を縦6、横8に、ムルエ

ルフアスを見つめ話に聞き入りながら。

「弓兵を縦6横5に。・・・昔のものは、これと比べて盤面がずっと大きかった。大体これの倍ほどかな。あまりに煩雑なので、最初から不便だといって駒の数を減らしていたものだよ。そして・・・ああ、思い出したぞ。そうだ、ウィペシェーラ国とトルルカンティア国、そう、この二国だ。なんとも仲の悪い国同士でな、先祖代々よくもまあ飽きずにあれだけいがみ合ったものだど、逆に感心した」

当時を思い出し、ムルエルファスは笑った。

小首を傾げてリエルが問う。

「どれくらい昔の国なのですか？わたしは、聞いたことの無いお名前です・・・」

そういえば、と皆も同じように思索していた。全く聞いた覚えの無い国名だ。相当に昔の国なのは分かるが、どれほどの過去の話をしているのだろうか。

「そう、だな・・・フィルラント王国が建国およそ3200年・・・うむ、およそ6、いや7000年ほど前になるかな」

沈黙が流れた。

そして、皆の視線はシツクルのボードへ向けられる。

「そんなに歴史のある遊びだったのですねえ」

「想像を超えておったな。そこまでとは・・・」

「誰も由来を知らぬわけですな・・・」

「そんなに昔からあったのか・・・」

「実は凄いものだったのね・・・」

ウィバルだけが黙ったまま盤面を見つめる。手は投石機を縦6、

横5。ムルエルファスの弓兵が一つ落ちる。

ムルエルファスは軽い笑い声を上げた。

「なに、そんな大層なものでもあるまい。古ければよいというものでもなからうに。ただ、まあ廃れなかったのは素晴らしいことだな」
今さらではあるが、先ほどムルエルファスが言った「久しぶり」という言葉を皆は考察していた。久しぶりに見た、とは一体どれほ

どの時間の間隔を示した発言だったのだろう。

スケールが大きすぎて想像がつかない。歴史の密度が違いすぎるのだ、このニワトリは。

「その後、その・・・ウイペシェーラとトルルカンティアという国はどうなったのですかな？」

ウィバルが聞き、ムルエルファスが自分の番だと思い出して盤面に注視する。

確かに、その両方とも聞き覚えがない。つまり、現代の世には残っていない国なのだ。

「順を追って話そうか。・・・最初、余は二国の状況を見かねて仲裁を申し出たのだ。余という存在によって、戦乱は小康状態になった。その間に二国の重臣を余の面前に招集し、和睦を結ばせようとしたのだ」

翼の付け根をつつくムルエルファス。まだ手は決まらない。

「ひどいものだった。何度か開いた会合は、全てただの口喧嘩の場だった。どうにもならんので、脅迫して両国の王を呼び出したよハハ。ああ、決まった・・・歩兵でその投石機を取ろう」

「はい」

恐ろしいことを軽々と話すムルエルファスに動揺しつつ、レアが指示された通りに駒を動かす。

この時初めて、ウィバルが片眉をぴくりと動かした。

「二人の王は臣下に比べればずっと冷静だった。どうすれば戦争を終わらせられるか、真剣に模索していた。だが、先祖代々積もり積もった互いへの憎悪は、もはや取り返しのかぬほどに蓄積されてしまっていた。どうあっても、精算など出来ぬほどに。しかしそれでも二人は夜を徹して話し合いを続けていたな・・・結局、それでもどうすることもできなかったのだがね」

ウィバルが少し考え一手、歩兵を縦6、横6へと指す。

「そこで余が提案した。こういうことはより単純に解決すべきだと。例えば何か、簡単なお遊び程度の規模の勝負を行って、その勝者を

戦争の勝利者としてはどうかと。まあ、暴論と言えば暴論だ。だが、両国はこれ以上領土など必要ないほどに肥大化している国だった。勝つことの意味など、ただの感情論に過ぎぬ状況になっていたのだ」

ムルエルファスが指示を出し、投石機を縦4、横6。弓兵を一つウィバルがまた眉をひそめる。

「結局、承諾した。だが既存の勝負方法では面白みに欠けるし、民も納得すまい。そこで余と、二人の王を交えてこのシックルを作った。戦争の縮図、知略のみに重点を置いた代理戦争の手段として。

これなら、民も臣もある程度は納得できるだろう、と」

ウィバルが長考するが、次にムルエルファスがクチバシを開くまでは手が出た。縦4横6、同じく投石機で投石機を取る。

「三度の練習試合、そしてたった一度の本番。いやあ、制限時間を設けるべきであったな、あれは。開始から終局まで一週間を要した」

ムルエルファスはほとんど思考する様子を見せず次の手を指す。

歩兵を縦2、横5。歩兵を一つ落とされてウィバルは更に険しい表情になる。

「勝ったのはどちらなのです？」

のほほんとリエルが聞く。ムルエルファスはクチバシを斜めに傾け、思い出すように目を閉じた。

「トルルカンティアの王、ケルンセツテ。自ら戦陣を駆ける武勲の女王・・・彼女が勝利した」

ウィバルの次の手は返す歩兵の縦2横5。ムルエルファスの表情は全く読み辛いため、彼の内心が不明すぎてウィバルは自分の手だというのに苦しうに顔を歪めていた。最初は優勢だったはずが、高度なレベルにおいてムルエルファスが押しているということか。

ムルエルファスの回想は続く。余りにも遠大な過去の記憶を、じつくりと掘り起こして。

「それで戦争は終わった。350年に及ぶ戦乱は、このシックルが決着をつけた。両の王は帰還し、勝利と敗北をそれぞれに告げたようだった。睨み合っていた平原の兵士たちは引き上げ、周辺諸国も

安堵していた。これでやっと楽になる、と」

ざわり、とリィエルは元より部屋に居る皆が一様に何か、背筋に冷えた感覚を持った。

ムルエルファスの声。どこか、何かが妙だった。

「投石機を縦5、横4に」

「はい・・・」

次の手が指され、ムルエルファスは盤面を見つめる。

ウィバルがまた長考を始めた。

「・・・・・・・・そして、余はウィペシエーラとトルルカンティアを滅ぼした。一夜にして、二国の領土全てを焦土と変えた。これが顛末だ」

空気が、凍った。

何を言った？何と言った？

皆の表情を見もせず、ムルエルファスがクチバシを開く。

「二国の存在は既に神々の怒りをも得ていた。全く無意味に他国から搾取する二つの大国は、聖獣や神々の神殿、聖域をも踏み荒らす度し難い存在でしかなかった。そもそも、そのために余はあの場に訪れたのだ。シックルの発案は、最後の機会をくれてやったようなものだ。だが両国は全くその意味を理解していなかった。シックルの勝負の数日後、あの二つの国は性懲りも無くまた戦争を再開していたのだよ」

寂しそうでもあり、超然とした態度にも見えた。

ウィバルが震える手で次の一手を指す。聖獣を縦1、横2。相手の聖獣の駒を一つ落とす。悪い手では無い。だが、ムルエルファスは間髪入れず次の手を指示してしまった。騎士を同じ縦1横2。ウィバルが動揺に震え、椅子が音を立てる。

「王城に攻め入り玉座の前で聞いてみたよ。何故、戦争を止めなかったのか、と。・・・・・・・・二人とも、同じことを答えた」

ウィバルはまだ考えている。大丈夫だろうか、顔は真っ青で、脂汗が目立つ。

無理もないことではある。だが、今対局しているのはウィバルだし、ここには彼以上に上手いシックルの指し手が居ない。

「あれで勝負がついた気がしない、とな。・・・余は、迷わず二国を滅ぼしたよ。このまま放置して、一体どれほどの犠牲を周辺に強いるのか。周辺にあった小国はな、その王すらも奴隷に等しく扱われていたのだよ。いや、王とは名ばかりか。奴隷達のまとめ役として二国がそれぞれに指示した者というだけだったのだから。酷い、余りにも残酷な仕打ちが周囲では起こっていた。だが二つの大国に敵う者など、どこにも居なかった。そして大国であれば、それがまともな国であれば発展を望み、利益を生んだだろう。だが、二国は互いに滅ぼしあう以外には何もしようとしなかった。ただ搾取し続け、ただ戦った。余とて、これを見捨てるわけにはいかなかったのだ」

ウィバルが真っ青な顔のまま次の手を指す。駒がカチカチと音を鳴らし、ムルエルファスの「大丈夫かね」という白々しいお言葉。それでも、ウィバルの手は堅実である。騎士を縦4、横7へ。動揺はほとんど影響していない。

こんな胆力があつたとは驚きだと、リエルを除くウィバルを知る者達は少しばかりの驚きと共に対局を見ていた。ムルエルファスの放つ異様な迫力に憔悴しているようでも、ウィバルはしっかりと手を考えている。

「ふむ。・・・では騎士を縦1、横7だ。さて・・・滅びた国の後には小国が次々と建国し、その後はまあ、いつも通りだったな。興り、消える。長続きした国は無かったが、極端な滅亡に至った国も無かった。皆、あの二国を忘れずにいたためだろう。そうして平穏は戻った」

何も事情を知らない者がこの部屋に入ってきたら、余りにも異常な光景に驚くだろう。ニワトリがシックルを指している。しかも、

そのニワトリはどうやらこの国で最上のシッケルの腕前を持つ人間よりも強いらしい。

ウィバルはまた長考。だが、聖獣を縦3、横7。手は尽きていない。

「シッケルは広まったようだった。人間の間で盛んに行われるようになり、ついに最初の目的通り、国家間の代理戦争の手段として頻繁に用いられるようになっていた。とはいえ、あくまで代理戦争の一手段に過ぎぬ。どちらの国の王が戦略に長けているかを簡単に示す手段であり、実際の戦況というものは天運に左右されるところが大きい。が・・・そうだな、例えば小国の主であろうと、シッケルで強いと分かれば他の大国も容易には攻め入らない、そんな状況が生まれた。小国と侮って痛い目を見たくはないものな」

騎士を縦2、横6、とムルエルファスが指示する。ウィバルは苦しそうにその一手を見つめ、取り囲んで観戦する皆も似たようにハラハラと落ち着き無く見ているしかなかった。

「駆け引きの道具になったのだ。大国の王ならばわざと弱く見せかけることもできたし、知略を駆使して圧倒的な勝利を見せつけて出鼻を挫くことも可能だった。盤面で行われる戦争の縮図・・・人々たちの戦争はその回数を激減し、無益に流血があるのも少なくなっていた。それは、余から見ても驚きであったし、喜ばしいことだ。各国の王達も同じだっただろう。誰だって痛い思いはしたくない。民に辛い思いを強いる王などあるはずがないからな」

聖獣を縦2横7、ウィバルの一手。恐る恐るではない、確かな手つきの一手法だ。まだ彼は挫けてはいない。

「そんな状況がどれだけ続いたか・・・聖獣を縦1、横8に。”シッケル”。・・・ある小さな国が興った。シッケルが代理戦争として認知されたとはいえ乱世の中、あんな小国がそうそう生き長らえるはずもあるまいと誰もが思った。五年・・・そう、五年保てばいいほうだと思ったな。あんな規模の国家で、この乱世をどうやっても乗り越えられるはずも無し、とな。・・・だが実際は違った」

ムルエルファスの手はウィバルを追い詰めていく。堪能であるはずがない、と漠然と考えていたリエルは、様子を見てそれが完全な思い違いであったことに気づいていた。どうやら聖獣ムルエルファス王は単体としての戦闘能力は元より、シックルを始めとする知略においても地上最強を称するに相応しい存在であったらしい。

ウィバルの次の手は王を縦6、横7に。だがムルエルファスは変わらずほとんど即座に次の手を打つ。騎士を縦1横6へ。

「その小国は生き延びた。一度も他国と戦争をすることなく、だが圧倒的な戦果を上げて・・・そう、シックルだ。その国の王は、恐ろしくシックルが強かった。シックルというものはね、いいか、国家間で行われる場合、互いの戦力差を反映して最初の盤面が考察され決定される。駒落ちというやつだな。小国らしく、ほとんどの駒を持たない状態から大国の磐石^{ばんじやく}たる軍勢に挑む・・・だが、その小国はそれでも無敗を貫き続けた。いくら、どれだけの大国が挑んでもその小国をシックルで負かすことはできなかった。ただの、一度もだ」

ウィバルが震える手で次の手を指す。騎士を縦3横7に、だがやはりムルエルファスが即座に対応し騎士を縦3横6と。ウィバルが更に血の気を失い、苦しそうな息遣いが皆にも聞こえた。

ムルエルファスが語る話は、誰に向けられたものだろう。なんとなくリエルは自分に言い聞かせられているような気がしていた。

その時ムルエルファスがちらりとリエルを見た、それは偶然では無いだろう。

「あまりにもシックルが強いので、他の国はその小国へ攻め入ろうともしなかった。皆賢かったのだな。が、たまに血気盛んな者も居る。その小国に軍隊を用いて攻め入った国がただ一つあった。大軍勢・・・さしものその国も、これまでと思われた。いかにシックルが強くとも、実際に軍隊を持って行けば持ちこたえられはしないだろう、とな」

ウィバルが長考に入る。ムルエルファスはクチバシを斜めに傾け

た。

「あの国は何といったか……小国は、ほんの僅かばかりの部隊を率いる王本人によってこの大軍勢に対抗した。無謀に過ぎると誰もが断じたが、結果に誰もが恐怖した。……攻め入った国は名だたる将の全てを直接暗殺され、更に王城、玉座にまで侵入されたのだ。シックルの勝負以来、対面した二人の王。小国の王は玉座の前で何も言わず、ただ大国の王が……そう、投了するのを待ったそうだ」

ウィバルの手、騎士を縦2横6。シックルの宣言にムルエルファスは少し熟考するようだった。

「……うむ、王を縦6横1にな」

「お強い……流石と、言ってよろしいのか」

「ふふ、ふ……小国は、それ以降もシックルのみの戦争を続けた。誰も勝てず、誰にも勝たぬ……いつしか他国の王は皆、その国にシックルの勝負すら挑まなくなった。気付いたのだ。小国の王は、自分たちが足下にも及ぶ存在ではないことを。余りにも次元の違う、高みに立つ偉大なる者であることを。その尊敬が捧げられ、小国は乱世に生まれ落ちながら平和を享受し、そのまま今に至る。王の直系は存続し、栄冠は名にし負う。……3200年も昔の話だよ」

ハンネル宰相が驚いてうめき声を上げた。遅れてシュナ、レア、ペリユークも。

聖獣を縦2、横8へ。ウィバルが次の手を指し、耳に届いていた言葉をやっと理解して顔を上げた。

リエルは首を傾げる。

「賢人エリヤルク。建国の後は国号を冠してこう名乗る……エリヤルク・フィルラントと。そう、このフィルラント王国の初代王だ」

ムルエルファスは思い出しながら、クチバシを斜めに傾ける。

「聖獣を縦1、横6に」

指示を受けて、レアもまた震える指先で駒を動かした。かつん、と盤が音を立てる。

「・・・・・・・・ぐっ」

ウィバルが盤面を見て呻き声を上げた。ムルエルファスは満足げに息を吐く。

「シックル・レスト。よろしいかな」

「・・・・・・・・もはや無理ですな。投了、です」

風邪を引いて少しぼんやりしていたのだろう。リエルにしては、この一戦が意味するところを理解するのが遅れた。

シックルは代理戦争の一手段。ウィバルはこの国で最もシックルが上手い人物。

それにムルエルファスは勝利してしまった、その意味。

「見事だったぞ、外務大臣。素晴らしい腕前だ」

「いや、はは・・参りました。これほどお強いとは」

「どうだねリエル陛下、勉強になったかな？」

啞然とする一同の中、リエルはまだ少々理解がおぼつかない様子だった。無理もない、盤面が示すのはシックルの上級者にしかわからないほど複雑な戦況の結果であり、どういう状態なのか素人であるリエルには皆目見当もつかないのだ。

まだ駒は動けるが、どう足掻いてもムルエルファスの勝利は揺るぎない。だからムルエルファスがシックル・レストと宣言し、ウィバルはこれに承諾して投了を受け入れるしかなかった。

なににせよ、勝負を挑まれたウィバルがユクティラ国の主たるムルエルファスに敗れたという結果は変わるまい。

椅子に丸く座って、ムルエルファスはリエルの瞳をじっと見据えた。

「余はフィルラントという国を尊敬している。初代王エリヤルクの代から脈々と受け継がれたこの血筋を。リエル陛下、君はまさしくこの国の王に相応しい人物であった。同盟を受け入れてくれたことは本当に感謝しているよ」

「あ、はい。こちらこそ」

人間であれば、ムルエルファスはにっこりと満面の微笑みを湛^{たた}えていただろう。細めた眼差しは優しく、リエルを見守っていた。

居並ぶ面々はリエルを除き、等しく戦慄と畏怖を込めてこの聖獣の王に礼を送る。そうせずにはいられなかった。

「エリヤルクは・・・あれはまさに英傑と呼ばれるべき人物であった。万事に卓越し、志は高く。その意志は今も受け継がれていると確信したよ、リエル陛下。余はこの国に来て本当に良かったと思っている。頼らせてくれてありがとう。余の選択は間違いでは無かった」

「ムルエルファス様・・・」

「ははは、いや、うん。さあそろそろ行こう。リエル陛下のお体も心配だ。さっさと観光を済ませて城に戻ろうかのう！」

流石に照れてムルエルファスは椅子から飛び降りた。床をチャカチャカと鳴らし、扉の方へ歩いて行く。その後姿はまさにニワトリと言う他ないものだが、もう誰も、その姿を侮って見ることはない。何故、このニワトリが地上最強の聖獣と呼ばれ称されるのか。皆はそれを理解した。

遥かな高みに座して、それでも地に歩み続ける。

聖獣ムルエルファスがこの逗留中にリエルに託した最後の授業であった。

思い返せば一週間にしかない、ムルエルファスの滞在期間。だがこれほど濃密な、慌ただしかった一週間がかつてあっただろうか。リエルも自室で臣下に苦笑を見せたという。

シツクルの勝負の後の城内市街の視察はつつがなく終わり、翌日、ムルエルファスはリエル始め王城の皆に見送られて帰還していった。

シュエレー神山を越えての行程ということで、途中まで見送りを

と申し出るもやんわりの固辞し、ただ一羽、徒歩で。

姿は見せなかったが、アールカインとクシャタラナトの別れの言葉もあったのだろうか。聖獣の用いる言葉は、人間には聞こえない領域のものもあるというから。

見送るリエルは涙ぐんで別れを惜しみ、その涙が伝染したのかシユナやレア、並ぶ臣下の面々も感極まった様子だった。そしてそれはムルエルファスも同じく。親愛の涙での送別となった。

同盟の条件に従って聖獣が来るのは、当分先になるということだった。いつ頃になるかは分からないが、とはいえそれほど先でもなかろう、とムルエルファスは言い残している。

土産をきつと持たせようと言うのでリエルがお構い無くと返すと、ムルエルファスは大笑いして、そういうわけにもいくまいと言った。

黒から赤へと染め上げる一枚の羽は、リエルの部屋に飾られている。ただの羽だとムルエルファスは言っていたが、不思議なことにその後全く古くなったり痛む様子もなく、艶のある光沢を保ち続けていた。

工事は順調。川へ流れこむ土砂の量については、やはり少量は仕方なかった。だが検討を重ねた工法により、可能なかぎり少なく留めたと言えよう。見事な水路が作られ、復興は着々と進んでいる。

春は近い。

フィルラント王国の民は誰もが、その顔に精彩を帯び新しい季節を待望している。

順風満帆、王国の冬は終わった。

第二話・「戴冠式（後）」

風が吹いていた。

柔らかく、頬を撫でる気持ちの良い風が。

「お座りくださいませ」

目の前に置かれた椅子が差し出される。

招くのは絶世の美女、大天使インリユーク。

白い光と、青い空。

「…………お部屋の中に、お庭…………」

教会の壁を抜けたその先は、どこまでも広がる空と緑の平原だった。

背後には白い壁と大きな木の扉。舞台のように床があり、たった二脚の椅子だけが置かれている。

他には何も無い。

「ここが、私と陛下の共通風景。心に根ざす最初の国土です」

「最初の国土？」

インリユークは微笑み、椅子に腰掛けた。リエルも続いて座る。

「ここには何があると思いますか」

「え？ ええと…………何も…………」

何もない。が、それだけだろうか。

インリユークの微笑みは何も語らないが、リエルは何となくその答えを知っている気はしていた。

「何も…………いえ、全てが」

「そう、全てです」

無限に広がる青空と草原。そこには何もない。

だが、それ故に全てがある。

あらゆる可能性が。

「ここに、わたしは国を作るのですね。これから、国を…………」
インリユークは頷く。

広い、どこまでも広い草原。無限の空。

リエルが切り拓く、悠久の可能性。

「お聞きになりたいことがありますね？」

空を見上げるインリユークの横顔も、非現実的なまでに調和を感じさせる。

これは確かに人間ではない。ここまで整った顔形を持つ人など、居るはずがない。

聞きたいこと。そう、確かにある。

「……………ひとつだけ、聞いてよいでしょうか」

「何なりと。そのために私はここに」

これは聞いてもよいのだろうか。だがそんな迷いなどお見通しだと言うように、インリユークは変わらず柔らかく微笑んでいる。

リエルは迷って、だが心を決めた。

「わたしのお父さんは、わたしを知っていたのですか？」

母の愛は杖に。父の愛は道に。

先王シャルテは、愚王として知られた。妾を作り政務を放棄したと。

だが、リエルが居る。母ミュシェと父シャルテの間に生まれたただ一人の娘。

崇拜に近い感情を、自分の母に向けた。秘術士として、人間として。

その母が選んだのが父であれば、それは果たして皆が言う愚王なのだろうか。

そして、今がある。今この時そのものが証明する。

「はい、その通りです」

インリユークはあっさりと答えた。

そうですか、とリエルは呆然と頷く。

「それは質問ではなく、確認。そうですね、陛下」

「……………そうだと思います」

答えに予想はついていた。父、シャルテは自分という存在を知っ

ていたかどうか。

リエルが新王に即位して見えたことがある。それは、彼女の前に敷かれた道が妙にまっすぐであったこと。

臣下の悪癖を正し、国の危機に立ち向かう。それは王の義務だ。見つけるのがあまりにも簡単だった。問題は、リエルの目に容易く見出された。

女性の官が多い。先王シャルテの放蕩の一つだとされていた。

だが結果、リエルが玉座に座る、その補佐は多い。リエルの遠慮も和らいでいる。

シャルテ王は自分を知っていた。でなければ、あれほど準備が整うはずがない。

では何故、会いに来なかったのだろう。

「お父さんは、王様だったのですね・・・」

「そうですね」

王であるから。

最愛の人との間に子があることを知って、シャルテは悩んだだろう。玉座か、家族か。

だが彼は、それでも王であろうと決意した。リエルを王室に招くこともできただろうが、ミュシエが何も言わず姿を消した意味を汲んだ。その結果、彼は自分の人生を諦めたのだ。

形ばかりの結婚、形ばかりの放蕩、傷の浅い家臣の腐敗、蓄積しても回復の容易な問題の数々。

全ては、次に王位を得る娘のために。

娘が王となるための試練として、そして助けとして。

父の愛は道に。

「・・・教えてくださって、ありがとう。インリユーク様」

草原に風が吹いた。

いつの間にかインリユークとリエルは緑の草原を踏みしめ、柔らかな風の吹くその中に佇んでいた。

風に波打つ草原を眺めながら、リエルはぽつりと口を開く。

「わたしは王様になれますか」

「あなたがそう望み、そう在ろうと思えば」

「・・・わたし、まだ王様がどんなものなのか、よくわかりません。知識としてなら知っています。でも・・・」

「思うままに」

「でも・・・」

ふ、とインリユークが微笑んだ。

美しい顔がリエルに近づき、その頬を撫でる。

優しく、暖かな手のひら。

「望みはありますか？」

「え・・・？」

「欲しい物、やりたいこと、叶えたい夢、行きたい場所、知りたい事、会いたい人。そのどれでも」

「それは、どういう」

「一つだけ、私とその望みを叶えて差し上げましょう。大天使の名において」

きよとん、とリエルは傍らに立つ美しい女性の顔を見上げた。

白銀に光る慈悲に満ちた眼差し。

申し出はリエルの心をくすぐる。

「そ、それは・・・」

「私からの贈り物。我が君、リエル陛下への」

「・・・」

「・・・」

リエルは深く俯いた。

欲しい物、やりたいこと、叶えたい夢、行きたい場所、知りたい事、会いたい人。

リエルにだって、それくらいある。

無いというほうがおかしい。

誰にだって存在する望みだ。

「どう、して・・・」

震える声が喉から出てきた。

「どうして、そんなことを言うのですか。わたし、わたしは・・・」
座り込み、椅子の背もたれに深く腰掛ける。再び椅子のある場所に戻っていた。

ぐるぐると脳裏を思考が巡り、苦しさに頭をかかえる。

「・・・・このフィルラントに暮らす全ての人の、幸福。それが、わたしの望みです」

決然と言い切った。

悔しくて涙を流すのは、もう何度目だろう。

「そうですか」

インリユークはしばらく静かに押し黙り、リエルの決意を見守っていた。

たかだか十歳の少女に、その決断はどれほどの重さになるだろう。

この大天使は、それらを理解していて質問したのだ。

「・・・・意地悪なことを言ってしまったね」

「いいえ。そんなことはないです」

「ふふ・・・・そう、それでよいのです。それが、王であるということの第一歩」

民の幸福を願うということ。

「王は望まず、望みを叶える者。王が独善に走ると、民は憤るでしょう」

王の資質。

「王は望まれる者。大願の体現者。民の夢、民の希望。王の望みは、民の望み」

リエルが目指す最初の境地。

「どうか、泣かないで。あなたには私がついていきます」

「・・・・でも、とても難しいです」

「そのために、民は居ます。民のための王は、民に支えられています。そしてあなたは、私が守っています。あなたの運命、あなたの意志を、私が証明し続けましょう。決して杖を手放さず、道に迷う

ことの無いように」

リエルの手を取り、インリユークは傍らに立つ。

母の手のひらの温もりを思い出して、リエルはその手をしっかりと掴んだ。

「共に在りましょう。国王陛下、リエル・タナック・フィルラント。いつも私はあなたの傍に居ます。あなたが決して寂しくないように、いつでもあなたを見守っています。望むなら問いかけに応え、馳せ参じましょう」

「・・・それは、あなたが守護天使様だからです？」

「そうです。そして、あなたを愛する者の一人として。あなたのために生まれた者として」

「インリユーク様・・・」

インリユークの言葉は、懇願に聞こえた。

あなたと共に在ることこそ私の望み。私の希望。そう言うように。ただリエルのためだけに在る者。

王の守護者。

「これから・・・よろしくお願いします、インリユーク様」

「はい、リエル陛下」

王あつての守護天使。

王が見る最初の奇跡。

戴く王冠が輝いた。

「ありがとう、陛下」

「こちらこそです、インリユーク様」

光が満ちた。

フィルラント王国歴3191年、春。

守護者、大天使インリユークを従える新王リエル・タナック・フィルラント、ここに戴冠。

リエルは名実ともに新王と認められ、儀式は終了する。

10歳の新王、少女王リエルの誕生の日だった。

第二話・「戴冠式（後）」（後書き）

ここまですが第二話となります。

第一話から長々と間が開いてしまい、申し訳ありませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6703q/>

フィルラントの少女王

2011年4月23日17時41分発行